

京都府遺跡調査概報

第107冊

1. 大成古墳群・イリ遺跡
2. 竹野遺跡・宮遺跡
3. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡
4. 福知山城跡
5. 観音寺遺跡
6. 野条遺跡
7. 太田遺跡第14・15次
8. 長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡
9. 長岡京跡右京第750次・神足遺跡
10. 大住地区府営ほ場整備事業関係遺跡

2 0 0 3



(1)大成17号墳出土玉類



(2)調査前遠景(東から)

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために3種の刊行物を刊行しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成13・14年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、京都府農林水産部、国土交通省、京都府山城土地改良事務所の依頼を受けて行った大成古墳群・イリ遺跡、竹野遺跡・宮遺跡、大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡、福知山城跡、観音寺遺跡、野条遺跡、太田遺跡第14・15次、長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡、長岡京跡右京第750次・神足遺跡、大住地区府営ほ場整備事業関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、丹後町教育委員会、宮津市教育委員会、福知山市教育委員会、八木町教育委員会、亀岡市教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、京田辺市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1. 大成古墳群・イリ遺跡 | 2. 竹野遺跡・宮遺跡 |
| 3. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡 | |
| 4. 福知山城跡 | 5. 観音寺遺跡 |
| 6. 野条遺跡 | 7. 太田遺跡第14・15次 |
| 8. 長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡 | |
| 9. 長岡京跡右京第750次・神足遺跡 | 10. 大住地区府営ほ場整備事業関係遺跡 |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	大成古墳群・イリ遺跡	竹野郡丹後町大字 竹野小字イリ	平14. 4. 15～7. 30	京都府土木建築部	引原茂治 石崎善久
2.	竹野遺跡・宮遺跡	竹野郡丹後町大字 竹野小字古馬々ほか	平14. 10. 22～12. 20	京都府農林水産部	田代 弘
3.	大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡	宮津市大字大垣小 字大正院・池の本ほか	平14. 9. 18～12. 20	京都府土木建築部	石崎善久
4.	福知山城跡	福知山市岡ノ二町	平14. 9. 10～10. 30	京都府土木建築部	引原茂治
5.	観音寺遺跡	福知山市観音寺地内	平14. 5. 21～12. 6	国土交通省	伊野近富 黒坪一樹
6.	野条遺跡	八木町大字野条	平14. 5. 21～10. 15	京都府土木建築部	田代 弘
7.	太田遺跡第14・15次	亀岡市礪田野町太田	平13. 11. 8～平14. 2. 12 平14. 9. 20～11. 8	京都府農林水産部	小池 寛
8.	長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡	長岡京市井ノ内広海道	平14. 12. 11～平15. 2. 21	京都府土木建築部	増田孝彦
9.	長岡京跡右京第750次・神足遺跡	長岡京市神足2丁目	平14. 10. 29～12. 13	京都府土木建築部	藤井 整
10.	大住地区府営ほ場整備事業関係遺跡			京都府山城土地改良事務所	
	魚田遺跡第6次・西村遺跡・門田遺跡	京田辺市大住小松原・西村・大嘗料ほか	平14. 12. 5～平15. 2. 13		中村周平

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。
また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。
4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 大成古墳群・イリ遺跡発掘調査概要-----	1
2. 竹野遺跡・宮遺跡発掘調査概要-----	39
3. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡発掘調査概要-----	49
4. 福知山城跡発掘調査概要-----	59
5. 観音寺遺跡発掘調査概要-----	69
6. 野条遺跡発掘調査概要-----	91
7. 太田遺跡第14・15次発掘調査概要-----	97
8. 長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要-----	117
9. 長岡京跡右京第750次・神足遺跡発掘調査概要-----	125
10. 大住地区府営ほ場整備事業関係遺跡発掘調査概要-----	135

挿図目次

1. 大成古墳群・イリ遺跡

第1図	竹野遺跡表採土馬実測図-----	2
第2図	調査地位置図および周辺主要遺跡分布図-----	3
第3図	トレンチ配置図および周辺主要古墳分布図-----	4
第4図	検出遺構配置図-----	5
第5図	テラス状遺構1・2およびピット・石造物検出状況平面図(上層)-----	7
第6図	テラス状遺構1および石造物検出状況平面図(下層)-----	8
第7図	出土石造物実測図(1)-----	9
第8図	出土石造物実測図(2)-----	10
第9図	出土石造物実測図(3)-----	11
第10図	出土石造物実測図(4)-----	12
第11図	出土石造物実測図(5)-----	13
第12図	大成17号墳調査後地形測量図-----	20
第13図	大成17号墳横穴式石室実測図-----	21
第14図	大成17号墳玄室内遺物出土状況図-----	22

第15図	大成17号墳出土遺物実測図(1)-----	23
第16図	大成17号墳出土遺物実測図(2)-----	24
第17図	土坑 S K01および出土遺物実測図-----	26
第18図	掘立柱建物跡 S B01実測図-----	27
第19図	掘立柱建物跡 S B01柱穴およびテラス状遺構 4 出土遺物実測図-----	28
第20図	包含層・遺構出土遺物実測図-----	29
第21図	大成16号墳墳丘測量図(調査後)-----	30
第22図	大成18号墳墳丘測量図(調査後)-----	31
第23図	大成18号墳外護列石実測図および墳丘断面図-----	32
第24図	大成18号墳横穴式石室実測図-----	33
第25図	大成18号墳玄室内遺物出土状況図-----	34
第26図	大成18号墳出土遺物実測図-----	35

2. 竹野遺跡・宮遺跡

第27図	調査地および周辺遺跡位置図-----	40
第28図	竹野遺跡(A地区)トレンチ配置図-----	41
第29図	トレンチ土層断面図-----	41
第30図	宮遺跡(B地区)トレンチ配置図-----	42
第31図	溝(S D02)遺物出土状況図-----	42
第32図	宮遺跡重機掘削風景-----	42
第33図	宮遺跡溝 S D02掘削風景-----	42
第34図	宮遺跡(B地区)遺構平面図-----	43
第35図	土層断面図-----	43
第36図	竹野遺跡(A地区)出土遺物(1)-----	44
第37図	竹野遺跡(A地区)出土遺物(2)-----	45
第38図	被熱により変形した土器-----	45
第39図	宮遺跡(B地区)出土遺物-----	46

3. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡

第40図	調査地位置図および周辺主要遺跡等分布図-----	50
第41図	調査対象地およびトレンチ配置状況全体図-----	52
第42図	トレンチ配置図(1)-----	53
第43図	土層柱状模式図(1)-----	54
第44図	トレンチ配置図(2)-----	55
第45図	土層柱状模式図(2)-----	55
第46図	出土遺物実測図(1)-----	57
第47図	出土遺物実測図(2)-----	58

4. 福知山城跡

第48図	調査地および周辺城跡分布図	60
第49図	調査地位置図	61
第50図	調査地西壁断面図	61
第51図	調査地平面図	62
第52図	柱跡実測図	63
第53図	出土遺物実測図	65
第54図	調査地想定図	67

5. 観音寺遺跡

第55図	調査地位置図	70
第56図	A地区・試掘トレンチ配置図	71
第57図	第4～6トレンチ平面図	72
第58図	第7・8トレンチ平・断面図	73
第59図	A地区南壁(A-D)・東壁(D-E)断面図	74
第60図	A地区、第2・3トレンチ平面図	75
第61図	土坑SK42平・断面図	76
第62図	縄文土器・打製石斧実測図	76
第63図	竪穴式住居跡SH84・150平・断面図	77
第64図	竪穴式住居跡SH84出土土器実測図	78
第65図	石棒実測図	78
第66図	土坑平・断面図	79
第67図	土坑出土土器実測図	80
第68図	土坑出土石器実測図	81
第69図	溝SD87・88平・断面図および出土遺物実測図	82
第70図	竪穴式住居跡SH85・86・101平・断面図	83
第71図	竪穴式住居跡SH85出土遺物実測図	84
第72図	土製品実測図	85
第73図	土坑SK125・126平・断面図	86
第74図	土坑SK126出土土器実測図	86
第75図	竪穴式住居跡SH41実測図	87
第76図	竪穴式住居跡SH41・86出土土器実測図	87
第77図	土坑SK46・47、溝SD01平・断面図	88
第78図	各遺構出土土器実測図	88
第79図	包含層出土土器実測図	89

6. 野条遺跡

第80図	調査地および周辺遺跡位置図-----	92
第81図	トレンチ配置図-----	93
第82図	第1トレンチ遺構配置図-----	93
第83図	第4トレンチ遺構配置図-----	93
第84図	第2トレンチ遺構配置図-----	94
第85図	第3トレンチ遺構配置図-----	94
第86図	土層柱状図-----	94
第87図	第2トレンチS H01平面図-----	95
第88図	第2トレンチS H01出土遺物実測図-----	95

7. 太田遺跡第14・15次

第89図	調査地位置図-----	97
第90図	トレンチ配置図-----	98
第91図	14-1トレンチ遺構実測図-----	99
第92図	14-1トレンチ溝S D48土層断面図-----	100
第93図	14-1トレンチ溝S D60土層断面図-----	101
第94図	14-1トレンチ池沼S X 4西壁土層断面図-----	102
第95図	14-1トレンチ土坑S K29実測図-----	102
第96図	14-1トレンチ土坑S K41、ピットS P42実測図-----	102
第97図	14-1トレンチ井戸S E 3実測図-----	102
第98図	14-2トレンチ遺構実測図-----	103
第99図	14-3トレンチ遺構実測図-----	103
第100図	14-4トレンチ遺構実測図-----	103
第101図	14-3トレンチ溝S D 5東壁土層断面図-----	104
第102図	14-5トレンチ遺構実測図-----	104
第103図	14-6トレンチ遺構実測図-----	104
第104図	14-1トレンチ溝S D48出土遺物実測図(1)-----	105
第105図	14-1トレンチ溝S D48出土遺物実測図(2)-----	106
第106図	14-1トレンチ池沼S X 4、ピットS P39、溝S D60、土坑S K41 出土遺物実測図-----	107
第107図	14-1トレンチ土坑S K 1、井戸S E 2・3出土遺物実測図-----	108
第108図	14-5トレンチ溝S D98出土遺物実測図(1)-----	109
第109図	14-5トレンチ溝S D98出土遺物実測図(2)-----	110
第110図	14-5トレンチ溝S D98出土遺物実測図(3)-----	111
第111図	第1トレンチ南壁土層柱状図-----	112

第112図	15-1 トレンチ遺構実測図-----	112
第113図	15-2 トレンチ遺構実測図-----	113
第114図	15-2 トレンチ埋葬施設 S X 1 実測図-----	113
第115図	15-2 トレンチ埋葬施設 S X 2 実測図-----	114
第116図	15-2 トレンチ埋葬施設 S X 3 実測図-----	114
第117図	15-3 トレンチ遺構実測図-----	114
第118図	15-3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 4 実測図-----	114
第119図	15-3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 4 出土遺物実測図(1)-----	115
第120図	15-3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 4 出土遺物実測図(2)-----	116

8. 長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡

第121図	調査地位置図-----	117
第122図	トレンチ配置図-----	118
第123図	溝 S D01西壁土層図-----	118
第124図	遺構配置図-----	119
第125図	竪穴式住居跡 S H06、掘立柱建物跡 S B11実測図-----	120
第126図	土坑 S K04遺物出土状況図-----	121
第127図	掘立柱建物跡 S B08実測図-----	122
第128図	出土遺物実測図-----	123

9. 長岡京跡右京第750次・神足遺跡

第129図	調査地位置図-----	125
第130図	遺構配置図-----	126
第131図	堀状遺構 S D02、溝 S D25、土坑 S X01平・断面図-----	127
第132図	弥生時代遺構実測図-----	129
第133図	溝 S D05遺物出土状況図-----	130
第134図	土壙墓 S X07・木棺墓 S X08平・断面図-----	131
第135図	堀状遺構 S D02出土遺物実測図-----	132
第136図	溝 S D05・06・12、方形周溝墓 S X08出土遺物実測図-----	133

10. 大住地区府営ほ場整備事業関係遺跡

第137図	調査地周辺遺跡分布図-----	135
第138図	調査地位置図-----	136
第139図	魚田遺跡トレンチ配置図-----	137
第140図	西村・門田遺跡トレンチ配置図-----	138
第141図	魚田・西村・門田遺跡土層柱状断面図-----	139
第142図	魚田・門田・西村遺跡出土遺物実測図-----	140

付 表 目 次

1. 大成古墳群・イリ遺跡

付表 1	検出ピット一覧表-----	6
付表 2	石造物一覧表(1)-----	14
付表 3	石造物一覧表(2)-----	16
付表 4	石造物一覧表(3)-----	19
付表 5	石造物一覧表(4)-----	19
付表 6	大成17号墳出土玉類一覧表-----	25

図 版 目 次

1. 大成古墳群・イリ遺跡

図版第 1	(1)調査前全景(南西上空から)	(2)1次調査調査後全景(南西上空から)
図版第 2	(1)2次調査調査後全景(西から)	(2)大成18号墳全景(上空から、上が南)
図版第 3	(1)1次調査地作業風景近景(西から)	(2)大成17号墳調査前全景(西から)
	(3)愛宕神社基壇(北から)	
図版第 4	(1)1次調査地ピット群検出状況(南から)	
	(2)テラス2全景(北から)	
	(3)テラス1(上層)北半石造物検出状況(南から)	
図版第 5	(1)テラス1(上層)南端石造物検出状況(1)(西から)	
	(2)テラス1(上層)南端石造物検出状況(2)(西から)	
	(3)テラス1(上層)石垣状遺構2および石造物検出状況(西から)	
図版第 6	(1)テラス2石造物検出状況(東から)	
	(2)テラス1(下層)全景(北から)	
	(3)テラス1(下層)石造物検出状況(南西から)	
図版第 7	(1)大成17号墳石室全景(南から)	(2)大成17号墳奥壁(南から)
	(3)大成17号墳西側壁(東から)	
図版第 8	(1)大成17号墳西側壁(東から)	(2)大成17号墳東側壁(西から)
	(3)大成17号墳奥壁裏面の状況(北から)	

- 図版第9 (1)大成17号墳玄室内遺物検出状況(北から)
(2)大成17号墳玄室内遺物検出状況(東から)
(3)大成17号墳玄室内鉄刀・勾玉検出状況(南東から)
- 図版第10 (1)大成17号墳初葬面調査状況(南西から)
(2)大成17号墳基底石全景(南から)
(3)大成16号墳周溝、S D01・02検出状況(南から)
- 図版第11 (1)大成16号墳周溝平安遺構面(南から)
(2)土坑1 検出状況(南から)
(3)土坑1 蓋除去後全景(南から)
- 図版第12 (1)大成18号墳東側崖面精査状況(東から)
(2)大成18号墳完掘後全景(東から)
(3)大成18号墳完掘後全景(北から)
- 図版第13 (1)大成18号墳外護列石全景(西から)
(2)大成18号墳外護列石全景(北から)
(3)大成18号墳周溝内転落石検出状況(北から)
- 図版第14 (1)大成18号墳石室全景(東から) (2)大成18号墳石室全景(南から)
(3)大成18号墳墳丘内列石(西から)
- 図版第15 (1)大成18号墳玄室内遺物出土状況(東から)
(2)大成18号墳墳丘および墓壙埋土断面(南から)
(3)大成18号墳基底石裏面の状況(西から)
- 図版第16 (1)テラス4、S B01検出状況(北から)
(2)S X03検出状況(南から)
(3)西谷部、S A01・02など検出状況(北から)
- 図版第17 出土遺物(1)
- 図版第18 出土遺物(2)
- 図版第19 出土遺物(3)：外面
- 図版第20 出土遺物(3)：内面

2. 竹野遺跡・宮遺跡

- 図版第21 (1)竹野遺跡(A地区)全景(南から) (2)宮遺跡(B地区)全景(南から)
(3)宮遺跡(B地区)検出遺構(上が南東)
- 図版第22 (1)竹野遺跡第2トレンチ全景(西から)
(2)竹野遺跡第2トレンチ全景(南西から)
(3)竹野遺跡第2トレンチ全景(北西から)
- 図版第23 (1)竹野遺跡第2トレンチ全景(西から)
(2)竹野遺跡第1トレンチ礫面検出状況(南西から)

(3)竹野遺跡第1トレンチ北壁土層堆積状況(南から)

図版第24 (1)宮遺跡溝検出状況(東から) (2)宮遺跡溝検出状況(北から)
(3)遺跡溝検出状況(南から)

図版第25 (1)宮遺跡溝S D02遺物出土状況(北東から)
(2)宮遺跡溝S D02遺物出土状況(北から)
(3)宮遺跡溝S D02遺物出土状況(上が北)

図版第26 (1)宮遺跡溝S D02遺物出土状況(西から)
(2)宮遺跡溝S D02遺物出土状況(東から)
(3)宮遺跡宮遺跡土層堆積状況・北壁(南から)

3. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡

図版第27 (1)調査地遠景(北から) (2)調査地遠景(南から)
(3)調査地近景(西から)

図版第28 (1)4トレンチ南壁(北から) (2)5トレンチ北壁(南から)
(3)6トレンチ北壁(南西から)

図版第29 (1)7トレンチ西壁(東から) (2)9トレンチ近世溝群検出状況(南から)
(3)10トレンチ上層ピット群検出状況(北から)

図版第30 (1)12トレンチ南壁(北から) (2)13トレンチ北半部全景(南東から)
(3)13トレンチ木製品検出状況(南から)

図版第31 (1)14トレンチ全景(西から) (2)15トレンチ東壁(西から)
(3)15トレンチ足跡検出状況(南から)

図版第32 (1)13トレンチ作業風景(北から) (2)出土遺物 木製品

図版第33 出土遺物 土器(外面)

図版第34 出土遺物 土器(内面)

4. 福知山城跡

図版第35 (1)調査地全景(西から) (2)調査前全景(西から)

図版第36 (1)柱穴P08・09検出状況(西から) (2)柱穴P08・09検出状況(南東から)

図版第37 (1)柱穴・礎石群(北から) (2)礫敷遺構S X14(北から)

図版第38 (1)西壁断面(東から) (2)調査地完掘状況(西から)

図版第39 (1)出土遺物(土器・陶磁器、内面) (2)出土遺物(土器・陶磁器、外面)

図版第40 出土遺物(瓦・石製品)

5. 観音寺遺跡

図版第41 (1)調査前風景(西から)(北東丘陵上に私市円山古墳)

(2)第6トレンチ掘削状況(西から)

(3)第7トレンチ作業風景(南西から)

図版第42 (1)第2トレンチ遺構検出状況(西から)

- (2) 第3トレンチ溝検出状況(南西から)
 (3) 第4トレンチ集石遺構検出状況(東から)
- 図版第43 (1) 第7トレンチ全景(北から) (2) 第7トレンチ土層堆積状況(北から)
 (3) 第8トレンチB壁面土層(北西から)
- 図版第44 (1) 調査地全景(空中写真、東から) (2) A地区全景(空中写真、下が北)
- 図版第45 (1) 調査地全景(空中写真、南から)(右上に私市円山古墳)
 (2) 土坑S K42検出状況(北西から)
- 図版第46 (1) 突帯文土器・打製石斧(土坑S K42内、北東から)
 (2) 突帯文土器外面(南西から)
 (3) 突帯文土器内面(北東から)
- 図版第47 (1) 竪穴式住居跡S H84・150検出状況(空中写真、上が北)
 (2) 竪穴式住居跡S H84床面出土土器(南から)
 (3) 竪穴式住居跡S H150床面出土土器(北東から)
- 図版第48 (1) 土坑S K108(南西から) (2) 土坑S K119(西から)
 (3) 土坑S K111(西から)
- 図版第49 (1) 溝S D87(北西から)
 (2) 溝S D87内土器・石器出土状況(南東から)
 (3) 溝S D88(南西から)
- 図版第50 (1) 竪穴式住居跡S H85・86・101・41検出状況(空中写真、下が北)
 (2) 竪穴式住居跡S H85床面出土土器(南西から)
 (3) 溝S D97(東から)
- 図版第51 (1) 竪穴式住居跡S H41(北から) (2) 溝S D02・149(南東から)
 (3) 現地説明会風景(北から)
- 図版第52 土製品

6. 野条遺跡

- 図版第53 (1) 第1トレンチ全景(北から) (2) 土坑S K01検出状況(北から)
 (3) 第2トレンチ調査風景(北から)
- 図版第54 (1) 第2トレンチ全景(南から)
 (2) 竪穴式住居跡S H01検出状況(南西から)
 (3) 竪穴式住居跡S H01遺物検出状況(東から)
- 図版第55 (1) 竪穴式住居跡S H01完掘状況(北から)
 (2) 竪穴式住居跡S H01炉跡検出状況(南から)
 (3) 竪穴式住居跡S H01炉跡検出状況(西から)
- 図版第56 (1) 竪穴式住居跡S H01遺物出土状況(上が南)
 (2) 竪穴式住居跡S H01手焙り形土器出土状況(上が北)

(3) 竪穴式住居跡 S H01 炉跡検出状況(北から)

7. 太田遺跡第14・15次

- 図版第57 (1) 調査地全景(第15次調査空中写真、東から)
(2) 第14次調査地全景(上方が北)
- 図版第58 (1) 第14次1 トレンチ全景(上方が北) (2) 第14次2 トレンチ全景(上方が西)
- 図版第59 (1) 第14次3 トレンチ全景(上方が西) (2) 第14次4 トレンチ全景(上方が西)
- 図版第60 (1) 第14次5 トレンチ全景(上方が西) (2) 第14次6 トレンチ全景(上方が西)
- 図版第61 (1) 第15次調査地全景(上方が西) (2) 第15次1 トレンチ全景(上方が北)
- 図版第62 (1) 第15次2 トレンチ全景(上方が北)
(2) 第15次3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 4 全景(上方が西)
- 図版第63 (1) 第15次2 トレンチ埋葬施設 S X 1・2 検出状況(南から)
(2) 第15次2 トレンチ埋葬施設 S X 1 小口板痕跡検出状況(南から)
(3) 第15次3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 4 遺物出土状況(北東から)
- 図版第64 出土遺物(1)
- 図版第65 出土遺物(2)
- 図版第66 出土遺物(3)

8. 長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡

- 図版第67 (1) 調査前の状況(北から) (2) トレンチ全景(南東から)
- 図版第68 (1) 調査地全景(上が南) (2) 調査地全景(上が東)
- 図版第69 (1) 土坑 S K04 遺物出土状況(南から)
(2) 土坑 S K04 完掘後(北西から)
- 図版第70 (1) 竪穴式住居跡 S H06、掘立柱建物跡 S B11 検出状況(南から)
(2) 掘立柱建物跡 S B08 検出状況(北西から)
- 図版第71 (1) トレンチ近景(南から) (2) 溝 S D01 全景(東から)
- 図版第72 (1) 道路状遺構溝 S D01・05 全景(北から)
(2) 土坑 S K09 完掘後(西から)

9. 長岡京跡右京第750次・神足遺跡

- 図版第73 (1) トレンチ南半完掘状況(北から) (2) 堀状遺構 S D02(南から)
- 図版第74 (1) 調査前全景(東西から)
(2) 堀状遺構 S D02 セクション(南から)
(3) 溝 S D25 小口状溝検出状況(西から)
- 図版第75 (1) 完掘状況(北から)
(2) 土壙墓 S X07、木棺墓 S X08 検出状況(南から)
(3) 土壙墓 S X07 検出状況(南から)
- 図版第76 (1) 木棺墓 S X08 検出状況(南から)

- (2) 木棺墓 S X08 棺内完掘状況(北から)
- (3) 主体部完掘状況(南から)
- 図版第77 (1) 方形周溝墓 S X05 南溝縦断面(北から)
- (2) 方形周溝墓 S X05 遺物出土状況(北から)
- (3) 現地説明会風景(北から)
- 図版第78 (1) 方形周溝墓 S X12 北セクション(南から)
- (2) 方形周溝墓 S X12 南セクション(北から)
- (3) 方形周溝墓 S X12 遺物出土状況(東から)
- 図版第79 出土遺物(1)
- 図版第80 出土遺物(2)

10. 大住地区府営ほ場整備事業関係遺跡

魚田遺跡第6次・西村遺跡・門田遺跡

- 図版第81 (1) 魚田遺跡調査風景(東から) (2) 魚田12トレンチ全景(南から)
- (3) 魚田18トレンチ北壁噴砂検出状況(南から)
- 図版第82 (1) 魚田25トレンチ全景(南から) (2) 魚田9トレンチ実測風景(南西から)
- (3) 門田4トレンチ埋め戻し転圧作業(西から)
- 図版第83 (1) 西村3トレンチ全景(南西から)
- (2) 西村4トレンチ北東壁土層断面(南西から)
- (3) 西村9トレンチ北東壁土層断面(南西から)
- 図版第84 (1) 門田6トレンチ全景(南西から)
- (2) 門田8トレンチ北東壁土層断面(南西から)
- (3) 門田10トレンチ全景(南西から)
- 図版第85 (1) 魚田9トレンチ埋め戻し状況(北西から)
- (2) 西村13トレンチ北西壁土層断面(南東から)
- (3) 門田3トレンチ北東壁土層断面(南西から)
- 図版第86 (1) 出土遺物(1) (2) 出土遺物(2)

1. ^{おおなる}大成古墳群・イリ遺跡発掘調査概要

1. はじめに

大成古墳群・イリ遺跡は京都府竹野郡丹後町大字竹野小字イリに所在する。今回の発掘調査は、国道178号道路特殊改良1種事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査は平成13年度と、平成14年度の2次にわたって実施し、平成14年度に整理・報告業務を行うこととなった。なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

なお、遺跡名称に関して、1次調査では愛宕神社古墳として、2次調査ではイリ遺跡として現地作業を行ったが、丹後町教育委員会と京都府教育委員会の協議の結果、近接する大成古墳群の一部という認識がなされたため、整理・報告段階では古墳群名を大成古墳群、遺跡名をイリ遺跡として報告することとした。なお、遺物の注記には1次調査のものを愛宕神社古墳群(略号TAJ)、2次調査のものを古墳群関係は大成古墳群(略号TON)、イリ遺跡関係のものをイリ遺跡(略号イリ)として行っているため、遺物実見の際は注意されたい。また、本報告の石造物に関しては、京都府教育委員会・丹後町教育委員会と協議の上、現地保管としている。

現地調査は1次調査を平成13年10月23日から平成14年2月14日にかけて、調査第2課課長補佐兼第1係長水谷壽克・同調査員石崎善久が担当して実施し、2次調査を平成14年4月16日から7月30日にわたり調査第2課第1係長石井清司・同調査員石崎善久が担当して行った。1次調査では大成17号墳(旧称愛宕神社古墳)の調査と周辺部の試掘調査を実施し、2次調査では1次調査により確認された大成18号墳および、周辺の平安時代～中世遺物散布地(イリ遺跡)、大成16号墳の墳丘裾部の調査を行った。なお調査面積は1次調査約600m²、2次調査約800m²である。

今回の報告では、標高はTPを使用した。現地の遺構実測は、石崎・村上・山内・大月・小笠原が行い、遺物実測は、西脇・村上・藤村・戸根・山内・大月が実施した。本報告のトレースは、石崎・丸谷が行った。石造物に関しては、調査第2課第1係主任調査員引原茂治の指導のもと、遺物実測を藤村・戸根・小笠原・村上が実施し、引原が報告した。なお、現地調査・整理作業において多くの方々に参加していただき、また、関係諸機関からご教示・ご協力を得ることができた。記して謝意を表したい。^(註1)

(石崎善久)

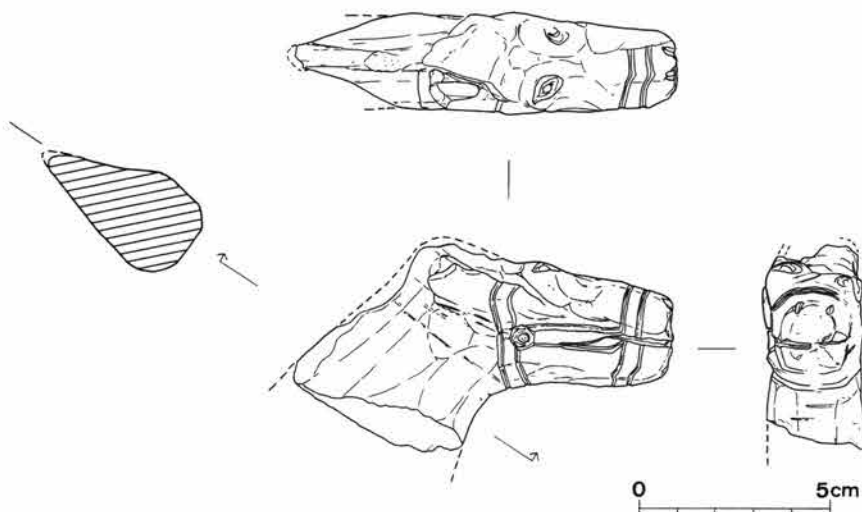
2. 位置と環境

大成古墳群・イリ遺跡は丹後半島最大の河川である竹野川河口部東岸、依遅ヶ尾山系から派生し、日本海に半島状に突出する丘陵稜線上から西緩斜面にかけて分布する。現在国道178号線がこの丘陵を分断して通っているが、かつては産土山古墳がある丘陵と連続していたことが知られ、

本来、大成古墳群と、産土山古墳、片山古墳群は同一丘陵上に分布する古墳群であったといえる。古墳群からの眺望は非常によく、竹野川河口域から、旧潟湖域、竹野遺跡を眼下に望むことができる。ここでは、大成古墳群を取り巻く歴史的環境について概観してみたい。

竹野川河口域を中心に遺跡の動向を概観することとする。縄文時代の遺跡としては、竹野遺跡出土の後期縄文土器や、宇川流域の平遺跡が知られるが、現在のところ、定住を示すような遺跡は確認されていない。弥生時代前期では、前期後半の竹野遺跡が著名である。この地域の中核的な集落跡と考えられている。中期には遺跡の数は増加し、竹野遺跡、弥栄町奈具遺跡群、峰山町途中ヶ丘遺跡など、各地域に拠点的な集落が営まれる。後期の集落の様相は定かではないが、竹野遺跡には継続的に生活の痕跡が認められ、峰山町古殿遺跡、大宮町裏陰遺跡、網野町浅後谷南遺跡など新たに出現する集落も存在する。近年の調査で丹後では弥生墳墓の調査が進展している。中期の貼石墓である弥栄町奈具遺跡、加悦町日吉ヶ丘遺跡は地域首長の墳墓とみられ、後期には、大宮町三坂神社墳墓群・左坂墳墓群、岩滝町大風呂南墳墓群、丹後町大山墳墓群など、豊富な副葬品をもつ台状墓の存在が知られてきた。後期末葉には地域最大の弥生墳墓として峰山町赤坂今井墳丘墓が築造される。これらの墳墓から出土する豊富な遺物は、日本各地や半島との交易によってもたらされたものと考えられている。

古墳時代前期前半に遡る大形墳墓は未確認であるが、弥栄町太田南2・5号墳など小規模な墳墓から舶載鏡の出土がみられる。前期後半から中期初頭にかけて大形前方後円墳が相次いで築造される。加悦町蛭子山1号墳をはじめ、網野町銚子山古墳、そして丹後町神明山古墳と200mに迫る規模を有する。中期には100mクラスの前方向後円墳である弥栄町黒部銚子山古墳の築造を最後に大形前方後円墳の築造は終焉を迎える。かわって、中・大形円墳や中・大形方墳が地域首長の墳墓に採用されたものと思われる。丹後町内では日本海を望む柵塚古墳、産土山古墳や舟形石棺を採用する願興寺古墳群などが地域を代表する古墳といえよう。後期には横穴式石室が導入され、丹後半島全体に拡散する。大きく、畿内型横穴式石室の系譜を引くものと、北部九州型横穴式石室の系譜を引くもの、竪穴系横口式石室の影響下に成立するものの3タイプが知られる。丹



第1図 竹野遺跡表採土馬実測図

後町内では畿内型横穴式石室の分布密度が高く、代表的なものとして、高山古墳群、上野古墳群、大成古墳群などが調査されている。後期末頃には横穴墓も築造を開始するが、大宮町大田鼻横穴群をはじめ、中郡に集中す

る傾向がある。古墳時代の集落としては竹野遺跡が継続的に営まれるようであり、中世まで集落として機能する。なお、第1図には竹野遺跡表採の土馬を図示した。これまでも竹野遺跡では土馬の出土が知られていたが、今回調査に参加を頂いた日下弘司氏から寄贈を受けた。土馬は土



第2図 調査位置図および周辺主要遺跡分布図(1/50,000)

(『京都府遺跡地図』〔第三版〕第1分冊 京都府教育委員会 2001より転載・一部改変)

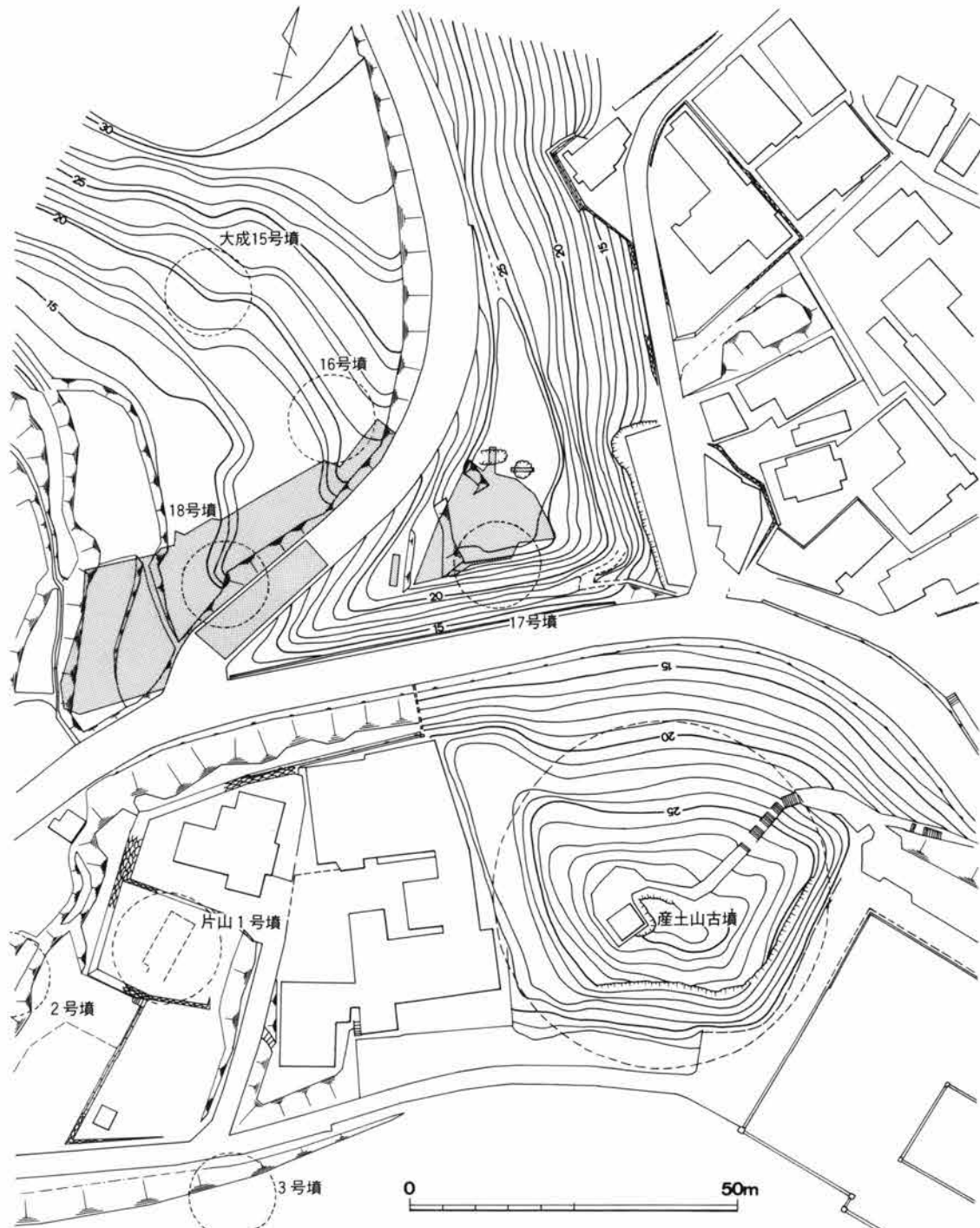
- | | | | |
|-------------------|---------------|-----------|------------|
| 4・111. 大成古墳群・イリ遺跡 | 2. 榊塚古墳 | 5. 産土山古墳 | 6. 片山古墳群 |
| 8. 竹野遺跡 | 10. 宮遺跡 | 11. 神明山古墳 | 13. 願興寺古墳群 |
| 15. 岩木遺跡 | 20. 鼻下り(切割)古墳 | 21. 大山墳墓群 | 25. 高山古墳群 |
| 28. 馬場ノ内古墳 | 34. 福蓮寺跡 | 43. 矢畑古墳群 | 104. 上野古墳群 |
| 106. 石ヶ原古墳群 | 113. 井町古墳群 | | |

師質であり、頭部のみ遺存する。非常に写實的に作られており、馬の目鼻や筋肉などを立体的に表現した後、ヘラにより轡などの馬具を表現する。頭部の全長約7cmを測る。

(石崎善久・村上計太)

3. 調査概要

今回の調査対象地は、現在、里道が敷設されている場所を谷部に、大きく二つの丘陵に分かれていたものと判断される。



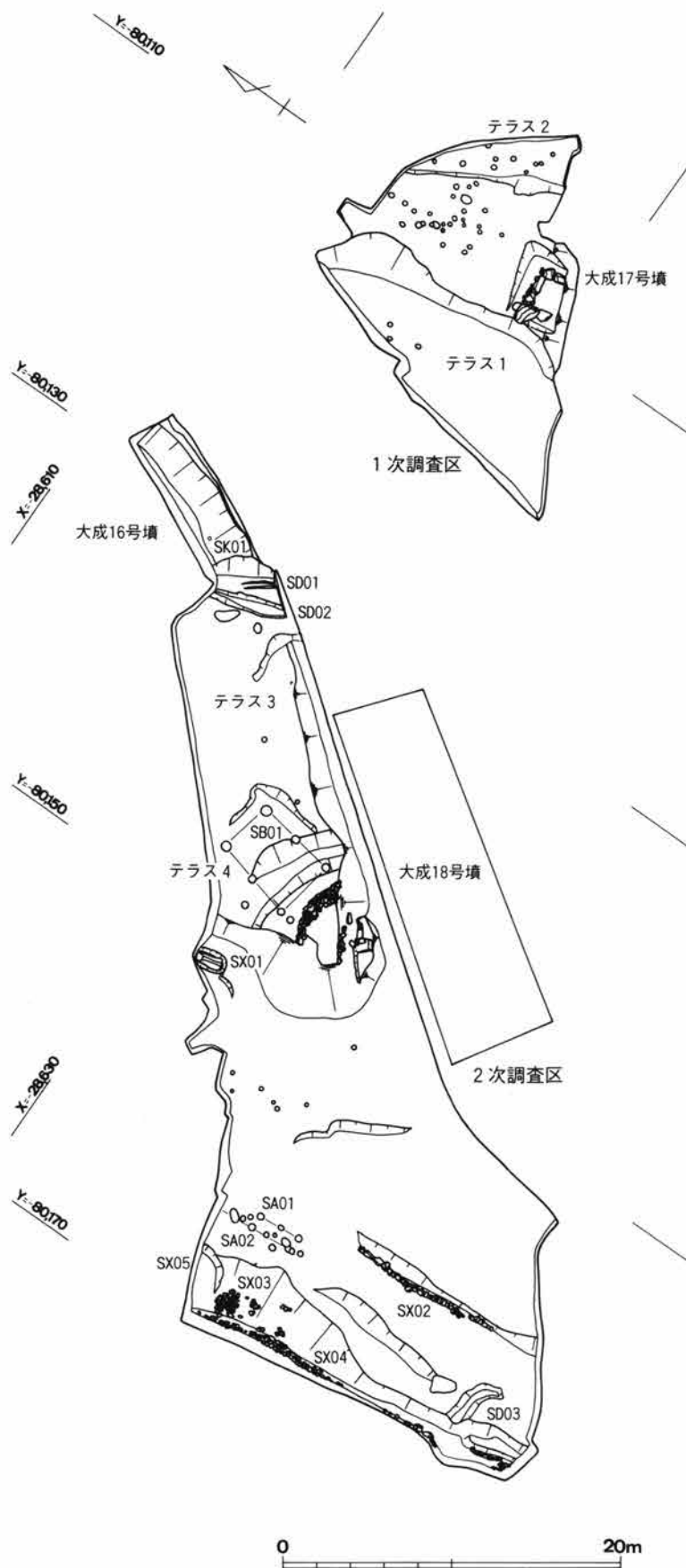
第3図 トレンチ配置図および周辺主要古墳分布図

今回の調査では、大きく分けて古墳時代後期の遺構、平安後期の遺構、中世末期から近世にかけての遺構を検出した。古墳としては、大成16～17号墳の3基を丘陵稜線上もしくは丘陵腹部で確認し、平安後期に属するテラス状の遺構や掘立柱建物跡、溝を西側の緩斜面上で確認した。中世末期から近世にかけての遺構は大成17号墳の立地する丘陵の西および、東斜面で確認した。以下、1次調査で検出した遺構・遺物、2次調査で検出した遺構・遺物の順に概観していくこととする。

a. テラス1 (第5・6図)

1次調査地の西側斜面、標高24m付近に作られたテラス状の遺構である。本来、地山を「L」字状に整形し、平坦面を確保した単純な構造であったと考えられるが、後世に盛土を施すなど改修を行っている。石仏をはじめとする石造物を安置するための造成面である。上・下層に分けて説明する。

上層では、調査着手前から複数の石仏・石製五輪塔などが露出しており、調査を開始した段階で約50点余



第4図 検出遺構配置図(1/400)

りが地元の方の手により移動させられていた。後述する大成17号墳の転落石材を除去した段階、表土を掘削した段階で大部分の石造物を検出した(第5図)。遺構は丘陵西斜面を整形し、幅約4mのテラスを構築する。テラスの平坦面と西の斜面の間には簡易な石垣状の石積みを設け区画が行われている。石垣状の遺構はこの丘陵の地山に含まれる円礫や、海岸部にみられる安山岩円礫などを2～3段に積み上げている(石垣状遺構1)。またカット面後背部斜面にも部分的に石垣状の石積みを施している(石垣状遺構2)。また、石垣状遺構1の後背部には盛土を施し平坦面を作り出している。石造物はこのテラスの南端と北端部分に集中して検出されており中央部分では密度が希薄であるが、先述した地元の方はだいたいこの中央部分に露出していた石造物を移動させられたらしく本来は中央部分にも多数の石造物が存在したものと判断される。石造物はテラス後背部のカット面にもたれさせるように並べられているものも認められるが、原位置を動いて横転してしまっている物が大部分であった。これらの石造物の安置された年代は定かではないが、表土掘削中に17世紀から近・現代に至る陶磁器類が出土していることや、最も前面に位置する石造物の下部から「ルービンリキ」と書かれたビール瓶が出土していることから見て、江戸時代から集積が行われ、昭和初期に現在の国道178号線を開削した際に出土した石造物もこのテラスに集積したものと考えられる。また、明確な遺構として認識することはできなかったが、テラス上面の盛土掘削中に火葬骨片が出土している。

下層(第6図)は地山面をカットした本来の掘形である。後背部東側に幅約40cm程度の溝を掘削する。この面からは2体の石仏(第8図5・6)を検出した。この点から見てこのテラスは本来から石造物を安置する目的で掘削されたものといえる。上層で確認した石造物群もこの地山上に置かれていたものを盛土造成などを行うごとに移動を繰り返し、最終的に現在の姿に至ったものと判断される。

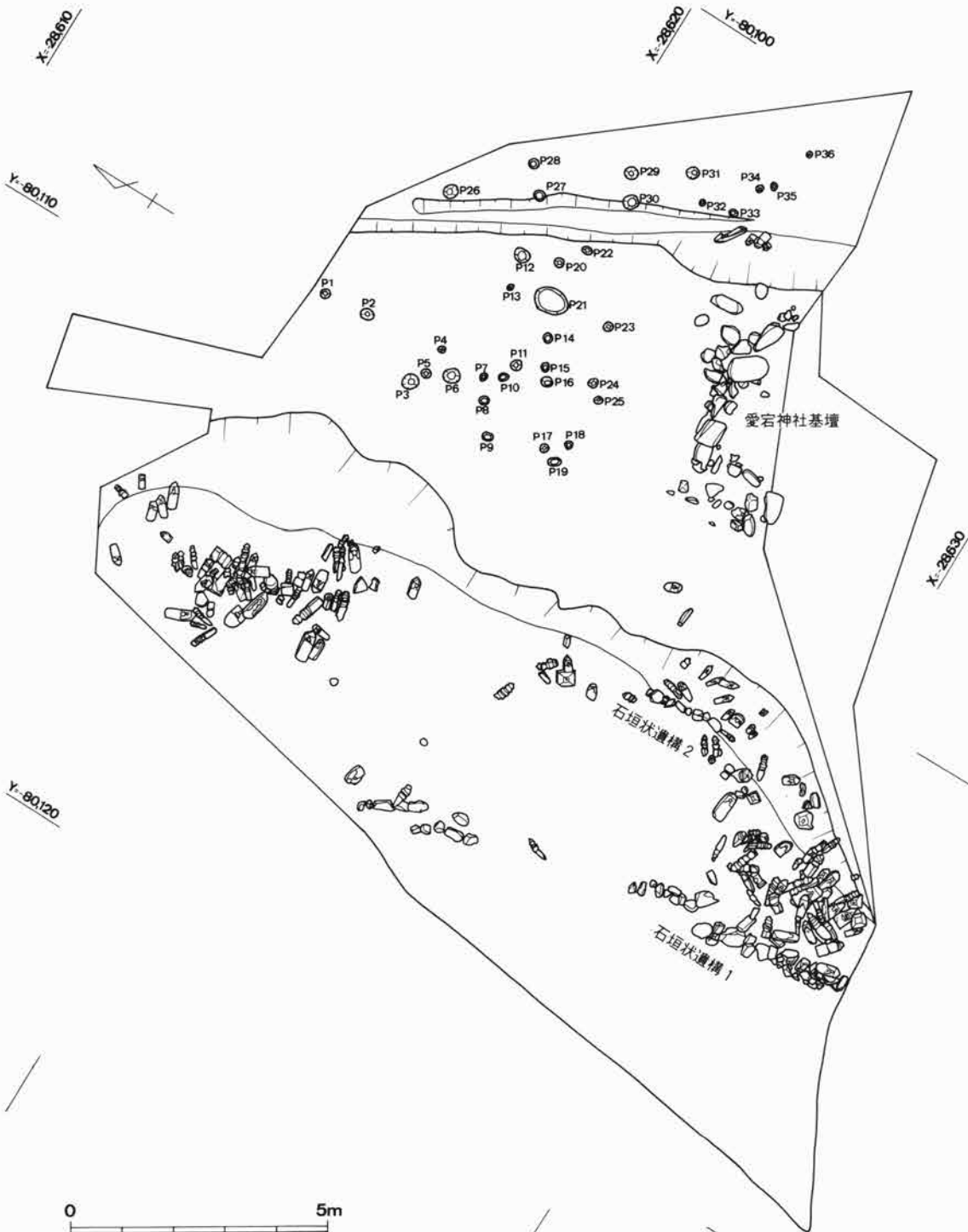
付表1 検出ピット一覧表

	直径(cm)	深さ(cm)	火葬骨
P1	20	17	
P2	21	26	
P3	32	31	有
P4	15	20	有
P5	18	22	有
P6	35	27	
P7	15	6	
P8	20	28	
P9	20	22	
P10	20	32	有
P11	21	18	有
P12	30	10	
P13	13	20	
P14	15	5	
P15	17	8	
P16	24	8	
P17	20	5	
P18	18	32	

	直径(cm)	深さ(cm)	火葬骨
P19	23	10	
P20	18	16	
P21	66	16	
P22	20	11	有
P23	18	17	
P24	20	26	有
P25	20	22	
P26	25	35	
P27	22	15	
P28	30	20	
P29	26	14	
P30	27	49	有
P31	25	38	
P32	10	7	
P33	20	36	
P34	15	17	
P35	17	38	
P36	14	18	

b. テラス2 (第6図) 1次調査区の東側斜面に作られたテラス状の遺構である。斜面を「L」字状に掘削した後、後背部に幅約50cmを測る溝を掘削する。この面でも石造物4点を検出した。

c. ピット群 (第5図) 丘陵稜線上の平坦面およびテラス2の平坦面上から検出した。総数で36基を確認した。直径約13~66cm、深さ5~49cmを測る (付表1)。埋土は、概ね暗灰色粘質土の単層であり、火葬骨片を埋土中に含むものが8基存在する。火葬骨は1~数点程度の細片であり別地点で火葬を行った後、数点の火葬骨を拾い上げ、このピット内に埋葬したものと判断される。

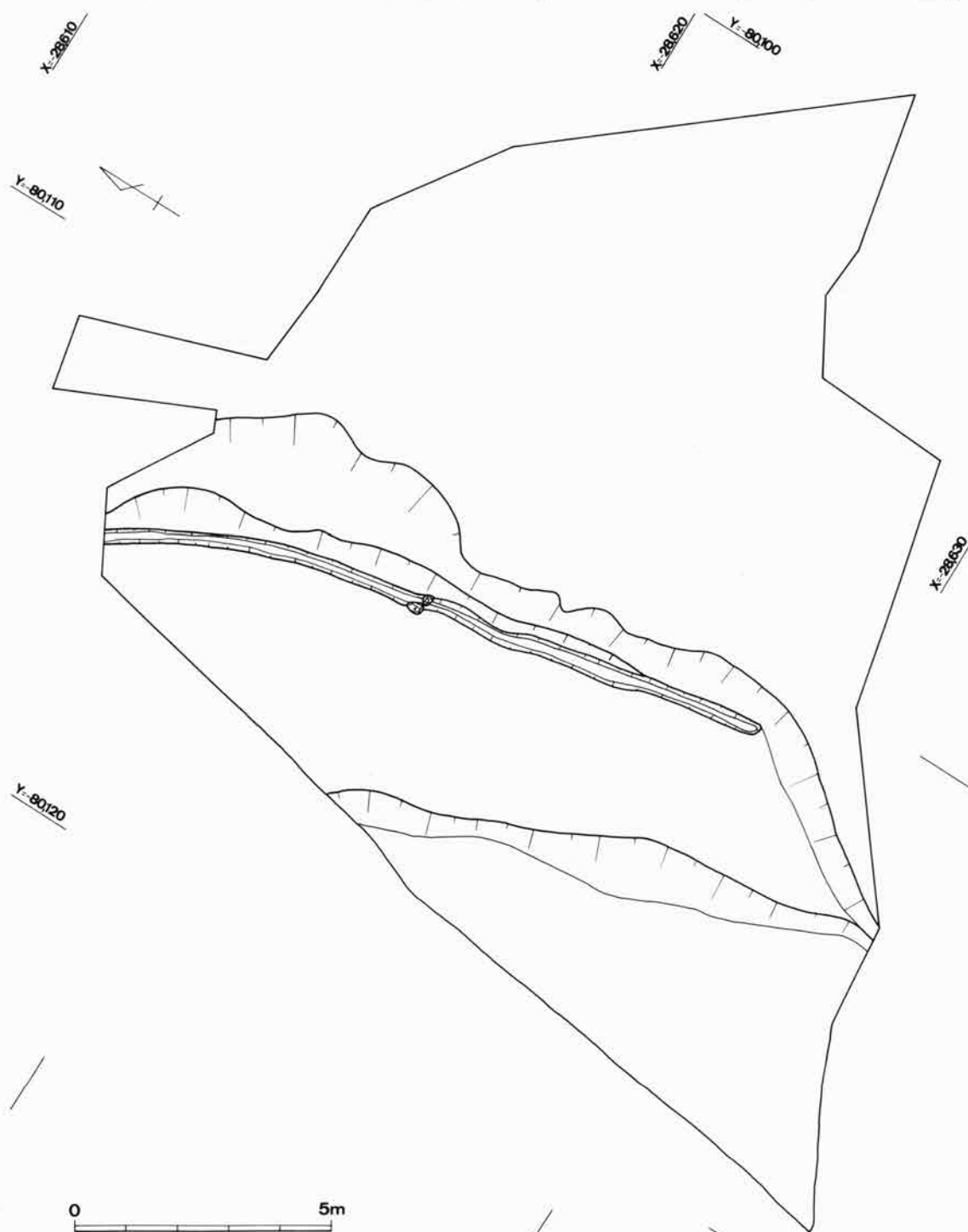


第5図 テラス状遺構1・2およびピット・石造物検出状況平面図(上層)

ピットの時期については火葬骨以外に出土遺物がないため不明ではあるが、地山面上から寛永通寶が出土していることから近世に降る可能性がある。

(石崎善久)

石造物 今回の調査では、多数の石造物が出土した。このうち、実測、略測を行ったのは306点である。ほかに、小破片が若干数ある。なお、この中には、調査前に地元の方が移動されたものも含む。内容的には、石仏と、一石・別石の五輪塔がそのほとんどを占める。ほかに、宝塔の

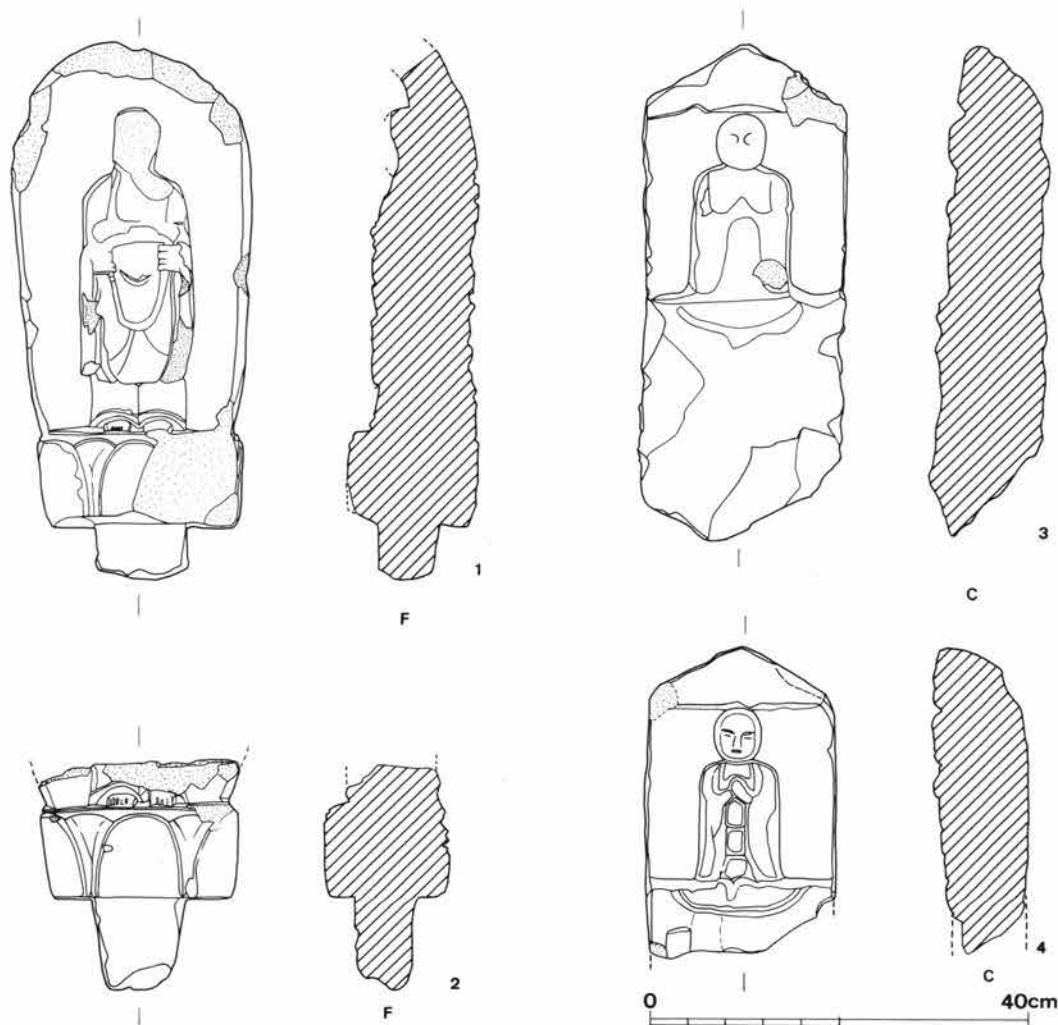


第6図 テラス状遺構1および石造物検出状況平面図(下層)

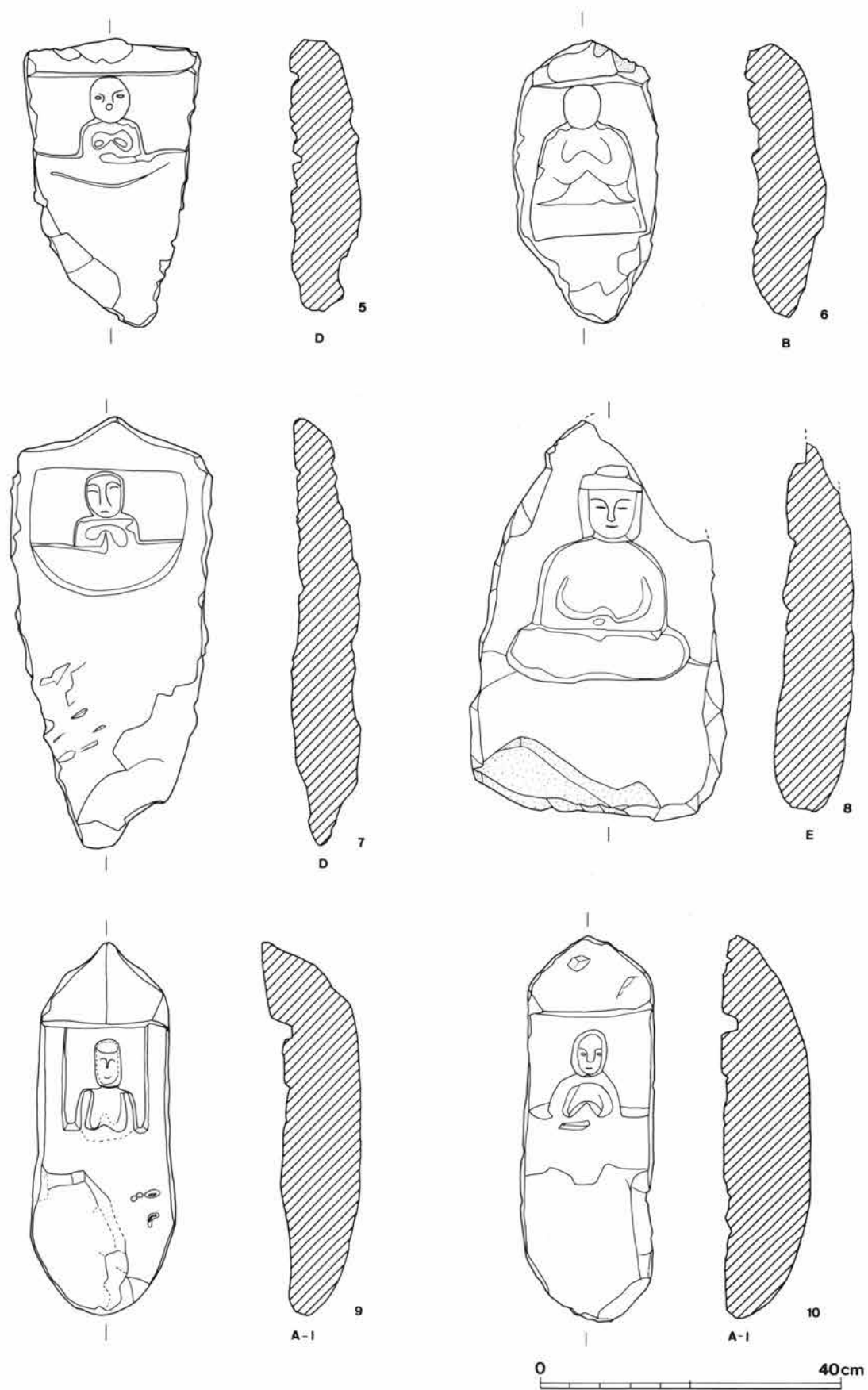
笠部もしくは層塔の最上部とみられるものや板碑、不明のものなどが少数ある。石材は、砂岩系のものが多数を占めるが、花崗岩、白色系の凝灰岩、多孔質の石材のものもある。わずかではあるが、越前産の笏谷石(淡緑灰色の凝灰岩)製と考えられるものが含まれるのが注目される。なお、今回出土の石造物で、梵字以外の刻銘のあるものは1点のみで、年紀を記したものは無い。

①石仏 石仏は総数118点を数える。板碑形のものや舟形光背形のものなどがあるが、多くは板碑形である。また、ほとんどが埋込式のもので、確実に据え置き式のものとは3点のみである。なお、板碑形の場合は、板碑として分類すべきかもしれないが、今回は石仏として分類する。

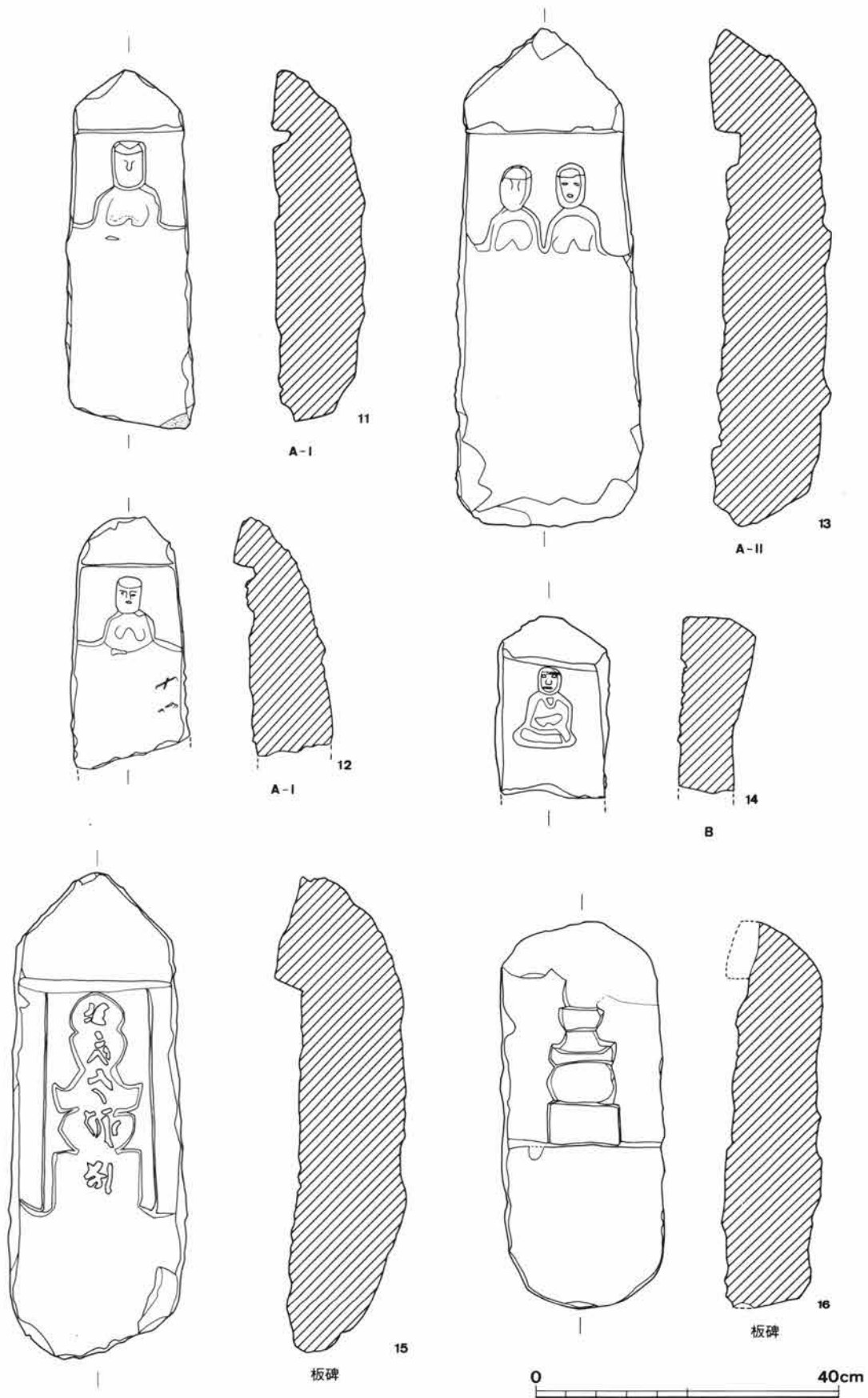
石仏A類 長目の頂部山形の圭頭板碑形で、龕部を彫り込んで仏像を浮き彫りする。96点を数える。独尊のもの(A-I類)と二仏並座のもの(A-II類)がある。ほとんどがA-I類で、A-II類は2点のみである。仏像は、上半身のみ刻出され、膝部は表現されていない。省略されたか、あるいは墨などで描いていたものと考えられる。仏像は、稚拙な彫りと風化のため明確でないものが多いが、A-I類は概ね阿弥陀如来坐像とみられる。A-II類では阿弥陀如来と地藏菩薩の並座あるいは阿弥陀如来の並座の可能性も考えられる。ともに基部は長く、地中に埋めて立てる埋込式のものである。あるいは、戒名や没年などが墨書されていたものか。石材は砂岩系である。



第7図 出土石造物実測図(1)



第8図 出土石造物実測図(2)



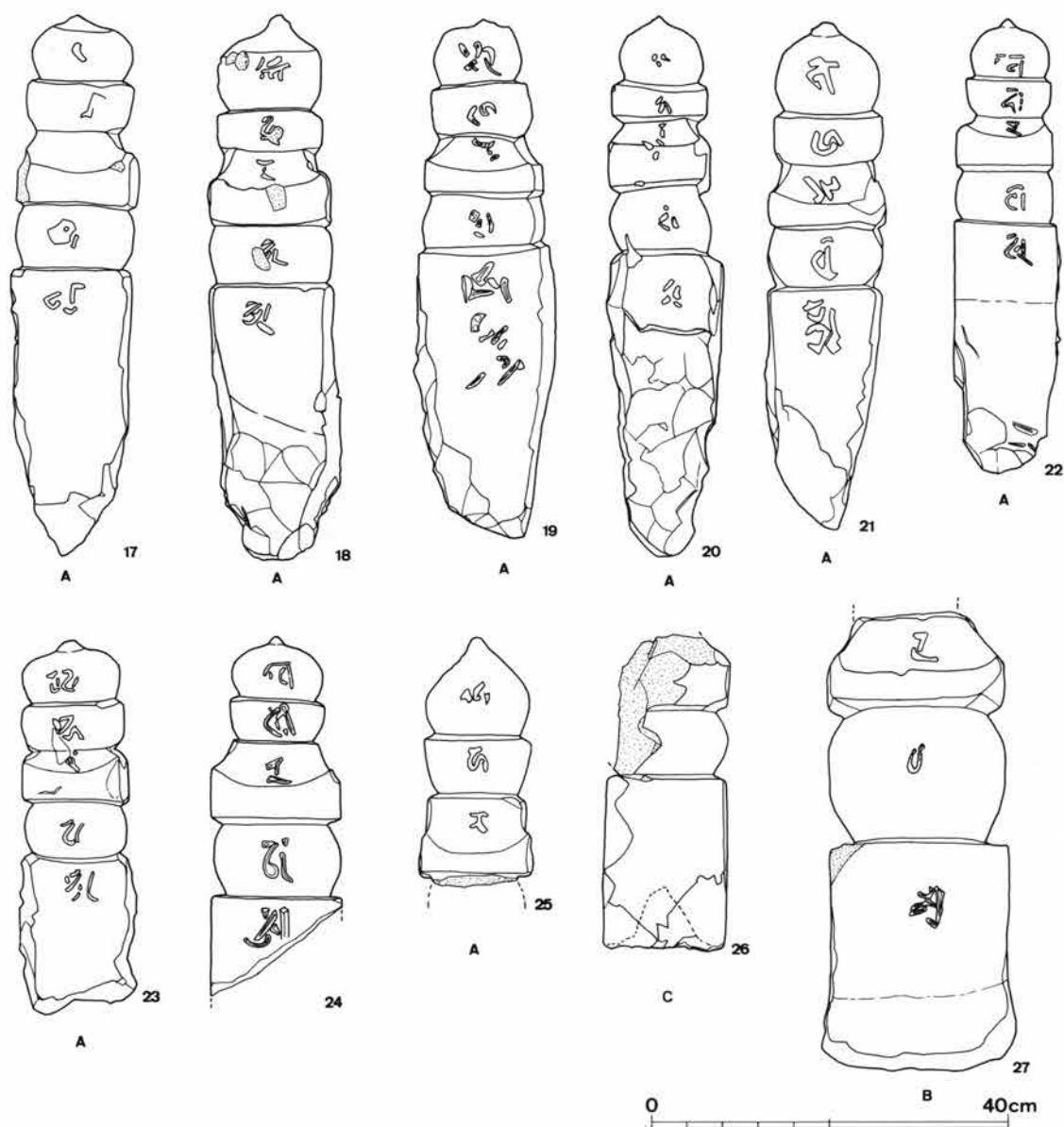
第9図 出土石造物実測図(3)

なお、A—I類で、1点のみ龕部の左右両端を縁取るものがある。

石仏B類 圭頭板碑形で、龕部を彫り込んで阿弥陀如来坐像とみられる全身像を浮き彫りする。7点を数える。埋込式である。額部の形状がやや崩れたものや、仏像の台座を表現したものもある。石材は砂岩系であるが、1点のみ多孔質の石材のものがある。

石仏C類 圭頭板碑形で、龕部を彫り込んで地藏菩薩立像と考えられる仏像を浮き彫りする。龕部下部に三日月形状の台座を線刻する。2点を数える。埋込式である。石材は多孔質のものである。

石仏D類 頂部山形の板碑形で、龕部を彫り込んで阿弥陀如来坐像とみられる全身像を浮き彫りする。5点を数える。全体的に額部から下方に幅が狭くなる裾すぼまりの形状が特徴的である。また、仏像の膝部および台座にあたる部分を三日月形状に刻出するのも特徴である。埋込式で、石材は砂岩系である。



第10図 出土石造物実測図(4)

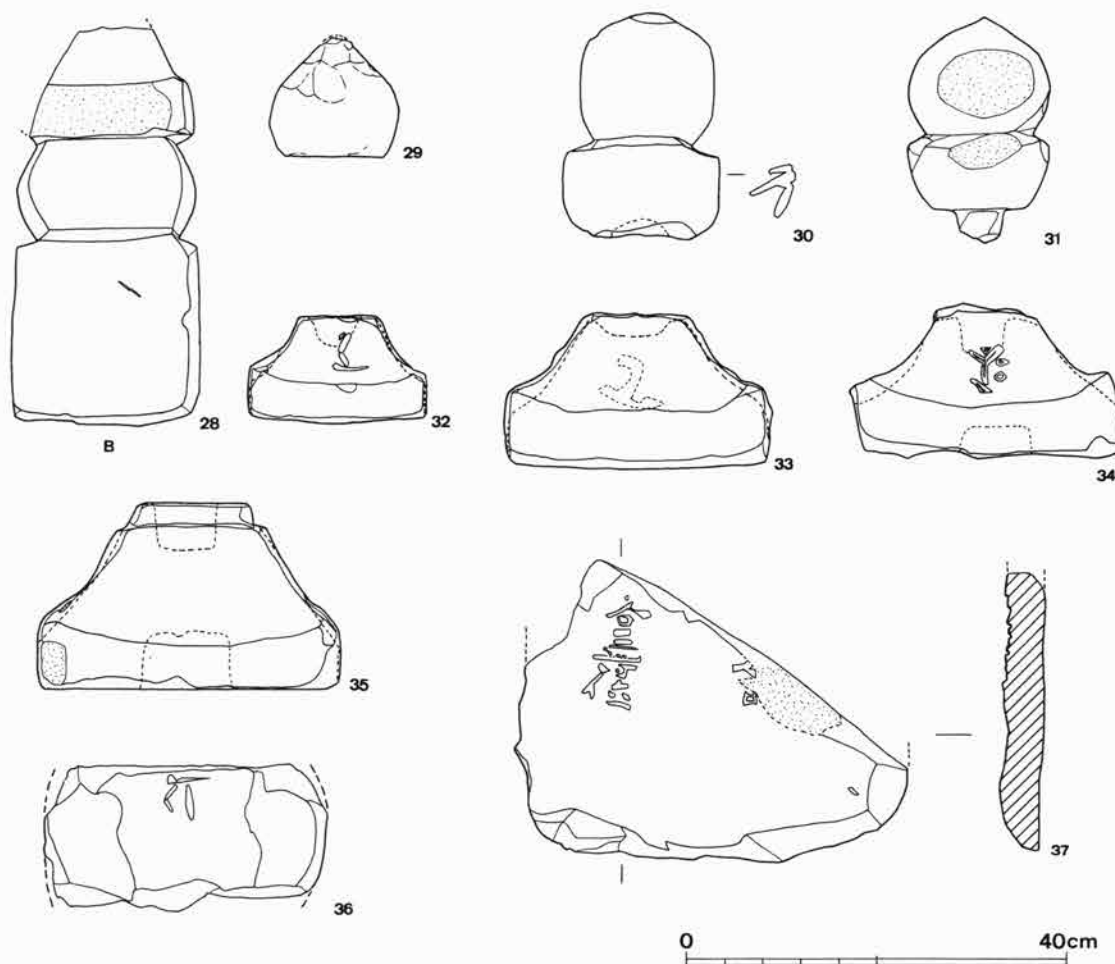
石仏E類 舟形光背形の石仏で、阿弥陀如来坐像とみられる仏像を浮き彫りする。4点を数える。埋込式で、石材は砂岩系が3点、花崗岩が1点である。

石仏F類 舟形光背形で、ほかの石仏に較べて彫りははいねいである。3点を数えるが、1点はほぼ完存しており蓮華座上に地藏菩薩立像を浮き彫りする。2点は膝下部のみの残存であるが、同様のものとみられる。下部に枳を設けており、台石に据えていたものとみられる。石材は越前産の笏谷石とみられ、像様などからみて、製品として搬入されたものと考えられる。

石仏G類 扁平な柱状のもので、長方形に彫り窪めた龕部に錫杖を持つ地藏菩薩立像を浮き彫りする。頂部は平坦気味で、枳を持つ。笠石を置いていたものとみられる。白色系凝灰岩製で、1点のみである。

②一石五輪塔 一石五輪塔は、総数144点を数える。ほとんどが埋込式のもので、確実に据置式といえるものは2点のみである。

一石五輪塔A類 地輪下に未調整の杭状の基部をもつ埋込式のもので、107点を数える。石材は、砂岩系のものが103点、多孔質石材のもの3点、白色系凝灰岩のもの1点である。砂岩系のものには、地輪の調整が4面ともなされるもの、背面を除く3面のもの、正面の1面だけのものがみられる。他の石材のものは、4面とも調整される。



第11図 出土石造物実測図(5)

付表2 石造物一覧表(1) 石仏(※は残存高・単位はcm)

番号	全長	幅	地上部高	山形部高	龕部高	像高	石材	種類	備考
1	43.0	17.0	37.0	9.5	13.5	12.0	砂岩系	A-1	
2	32.5	14.0	26.5	6.0	10.0	9.0	〃	〃	
3	37.5	16.0	37.5	8.0	12.0	10.0	〃	〃	
4	47.0	15.0	30.0	9.0	11.5	10.0	〃	〃	
5	45.5	14.5	30.0	9.5	10.0	9.0	〃	〃	
6	48.0	16.5	32.5	9.5	11.0	9.5	〃	〃	
7	44.0	16.5	31.5	9.0	13.0	11.5	〃	〃	
8	34※	17.0	20.5※	—	—	6※	〃	〃	
9	48.0	16.0	37.0	10.0	13.0	11.5	〃	〃	
10	46.0	16.5	34.0	11.5	13.5	12.0	〃	〃	
11	58.0	17.0	44.0	12.5	15.0	13.0	〃	〃	
12	63.0	20.0	50.5	14.0	15.5	15.5	〃	〃	
13	52.0	16.5	32.5	11.0	12.5	11.0	〃	〃	
14	57.5	17.0	40.0	9.0	14.5	13.5	〃	〃	
15	37※	17.0	—	10.5	17.0	16.5	〃	〃	
16	63.0	18.0	33.5	11.5	14.0	12.5	〃	〃	
17	63.0	19.0	50.0	15.0	17.0	16.0	〃	〃	
18	44.0	19.5	33.5	9.5	12.5	11.0	〃	〃	
19	47.0	16.5	34.5	9.0	14.5	13.5	〃	〃	
20	51.0	13.5	36.5	8.5	11.0	10.0	〃	〃	
21	51.0	17.0	32.5	10.5	14.0	12.0	〃	〃	
22	40.0	14.0	29.0	9.5	10.5	9.0	〃	〃	
23	46.0	16.0	34.0	8.5	12.0	11.0	〃	〃	
24	54.0	15.5	33.0	10.5	12.0	11.5	〃	〃	
25	59.0	20.0	42.0	13.5	15.5	15.5	〃	〃	
26	57.0	16.0	41.0	10.5	12.0	11.0	〃	〃	
27	53.0	19.0	37.5	12.5	14.0	14.0	〃	〃	
28	48.0	16.0	32.5	9.5	13.0	12.5	〃	〃	
29	47.0	17.0	34.0	11.0	14.0	12.5	〃	〃	
30	58.0	15.5	34.0	11.0	14.0	13.0	〃	〃	
31	46.0	17.0	33.5	10.0	13.5	12.0	〃	〃	
32	42.5	17.0	32.5	8.5	15.5	14.0	〃	〃	
33	42.0	16.0	33.0	5.5	12.0	12.0	〃	〃	
34	47.0	18.5	39.0	8.0	13.0	11.5	〃	〃	
35	56.0	16.0	36.0	11.5	11.0	10.0	〃	〃	
36	53.0	16.0	41.5	11.0	15.5	15.0	〃	〃	
37	50.0	16.5	36.0	9.5	12.0	11.5	〃	〃	
38	53.0	18.0	37.0	7.0	15.5	15.0	〃	〃	
39	56.0	16.5	40.0	11.0	14.0	12.5	〃	〃	
40	53.0	19.5	40.0	11.0	15.0	14.5	〃	〃	
41	60.0	19.0	46.5	10.5	17.0	16.0	〃	〃	
42	62.0	19.0	47.0	12.0	16.0	14.0	〃	〃	
43	55.0	17.5	35.0	12.0	14.0	13.0	〃	〃	
44	56.0	18.0	37.0	12.0	14.0	13.0	〃	〃	
45	61.5	17.0	40.0	15.0	13.0	11.0	〃	〃	
46	54.0	17.0	34.0	10.0	13.0	11.5	〃	〃	
47	67.0	15.5	43.0	13.5	13.0	12.5	〃	〃	
48	72.0	21.0	48.0	13.0	15.0	13.0	〃	〃	
49	46.0	17.0	32.5	9.5	14.0	12.5	〃	〃	
50	41.0	15.0	34.0	10.0	13.5	12.5	〃	〃	
51	44.0	16.0	34.0	7.5	13.0	12.0	〃	〃	
52	56.0	16.0	31.0	8.0	13.0	12.5	〃	〃	
53	57.0	12.5	29.5	8.0	11.5	10.5	〃	〃	
54	57.0	17.0	34.5	11.0	14.5	14.0	〃	〃	
55	45.0	15.5	34.0	8.0	12.0	11.0	〃	〃	
56	54.0	15.0	29.5	9.5	12.0	10.0	〃	〃	
57	52.0	18.0	35.5	8.5	14.0	12.0	〃	〃	
58	73.5	19.0	43.5	14.5	15.0	13.0	〃	〃	
59	55.0	17.0	33.0	11.0	12.5	12.5	〃	〃	
60	51.0	16.5	36.0	12.0	13.5	12.5	〃	〃	
61	54.0	18.0	31.5	10.5	14.0	13.5	〃	〃	

番号	全長	幅	地上部高	山形部高	竈部高	像高	石材	種類	備 考
62	53.5	16.5	31.0	10.0	12.5	12.0	〃	〃	
63	44.0	20.0	34.0	8.0	13.0	12.5	〃	〃	
64	51.0	16.0	38.5	12.0	14.0	13.0	〃	〃	
65	44.0	19.0	35.0	9.5	12.0	10.0	〃	〃	
66	53.0	16.5	39.0	11.5	13.5	11.0	〃	〃	
67	52.0	15.0	32.5	11.0	10.5	9.5	〃	〃	
68	45.0	16.0	31.0	8.0	11.5	11.5	〃	〃	
69	47.5	17.0	34.5	10.0	12.5	12.5	〃	〃	
70	46.5	17.5	34.0	11.0	13.5	12.5	〃	〃	
71	48.0	17.0	35.5	7.5	11.5	11.0	〃	〃	
72	46.5	16.0	35.0	9.0	12.0	11.0	〃	〃	
73	52.0	16.5	35.5	10.0	14.0	14.0	〃	〃	
74	51.5	16.5	34.0	9.5	12.5	11.0	〃	〃	
75	43.0	18.0	34.0	8.0	12.5	11.0	〃	〃	
76	68.5	22.0	49.5	14.5	14.5	14.0	〃	〃	
77	44.0	16.5	34.0	10.5	12.0	11.5	〃	〃	
78	64.0	16.0	39.0	13.0	14.0	13.0	〃	〃	
79	54.5	17.5	39.0	12.0	13.0	12.0	〃	〃	
80	46.0	21.5	35.0	9.0	15.5	13.5	〃	〃	
81	47.0	18.0	34.0	9.0	14.5	14.0	〃	〃	
82	59.5	19.0	41.0	12.0	13.5	13.0	〃	〃	
83	40.5	14.5	29.5	5.0	14.0	11.5	〃	〃	
84	54.0	16.5	36.0	11.0	14.5	14.0	〃	〃	
85	50.0	18.0	34.0	9.0	15.0	14.0	〃	〃	
86	41.0	15.5	30.5	8.0	11.0	11.0	〃	〃	
87	38.5	20.0	29.0	7.0	12.5	10.0	〃	〃	
88	65.5	22.0	45.5	13.0	17.0	15.5	〃	〃	
89	44.0	15.0	29.0	10.5	12.0	12.0	〃	〃	
90	37.5	20.0	31.5	7.5	12.5	12.0	〃	〃	
91	67.0	20.5	46.5	13.0	15.5	15.0	〃	〃	
92	52.5	18.0	37.5	10.0	15.0	15.0	〃	〃	
93	48.0	15.0	36.5	7.5	13.0	11.5	〃	〃	
94	49.0	17.0	37.0	11.0	14.0	12.5	〃	〃	竈部左右縁取
95	65.5	22.0	54.5	13.5	16.0	右12 左11	〃	A-II	
96	60.5	30.0	49.0	13.0	14.0	左右とも12	〃	〃	
97	42.5	20.0	—	8.0	16.5	23.0	〃	B	台座付き
98	53.5	21.0	39.0	7.0	18.5	18.5	〃	〃	
99	43.5	18.5	35.5	8.0	16.0	14.5	〃	〃	
100	41.0	15.0	26.5	5.0	13.0	12.0	〃	〃	
101	41.5	19.0	32.5	6.5	13.5	12.0	〃	〃	
102	24※	14.0	—	5.0	—	11.0	〃	〃	
103	36.0	17.0	27.0	5.0	21.0	20.0	多孔質石材	〃	
104	52.0	20.0	40.0	6.0	20.0	23(台座込)	〃	C	竈部下三日月形台座線刻
105	34※	19.0	—	5.5	19.5	22(台座込)	〃	〃	〃
106	41.0	21.0	32.0	6.0	14.0	17(台座込)	砂岩系	D	〃
107	51.5	21.5	39.0	8.5	17.5	20.5(台座込)	〃	〃	〃
108	56.5	26.0	38.5	7.0	16.0	15.5(台座込)	〃	〃	〃
109	43※	25.0	29.5※	—	—	17.5(台座込)	〃	〃	〃
110	38.5	19.5	25.5	5.0	11.5	15(台座込)	〃	〃	〃
111	55.0	24.0	—	—	—	19.0	〃	E	
112	51.0	31.0	42.5	—	—	28.0	〃	〃	
113	54.0	23.5	38.0	—	—	17.0	〃	〃	
114	44.0	19.0	32.0	—	—	21.0	花崗岩	〃	
115	23※	—	—	—	—	—	笏谷石	F	膝下部残存
116	56.5※	25.5	—	—	—	34.0	〃	〃	
117	24※	—	—	—	—	—	〃	〃	膝下部残存
118	45.0	2612.5	—	—	31.0	28.0	白色系凝灰岩	G	笠石付き

一石五輪塔B類 地輪下に未調整の平底気味の基部をもつ埋込式のもので、36点を数える。石材は、白色系凝灰岩のもの25点、砂岩系のもの8点、多孔質石材のもの3点である。A類に較べてやや大形のものが目立つ。白色系凝灰岩は、地元で産出するかなり軟質の石材である。そのた

付表3 石造物一覧表(2) 一石五輪塔

(※は残存高、幅×奥行は原則として地輪で計測。加工面は地輪で観察)

番号	全長	幅×奥行	地上部高	地輪高	水輪高	火輪高	風輪高	空輪高	梵字 (面)	加工面 (面)	石材	種類
119	56	12×12	38	9	6.5	7	5.5	10	1	4	砂岩系	A
120	66	15.5×16	47.5	11.5	9	8	7.5	11.5	1	1	〃	〃
121	67.5	16×16	42	10		8	6.5	11.5	1	1	〃	〃
122	62	13×14	43.5	11	7.5	8	6	11	1	1	〃	〃
123	65.5	13×14	37.5	11	6	7	4.5	9	1	1	〃	〃
124	65.5	13.5×12	40.5	8.5	9	8	5.5	9.5	1	1	〃	〃
125	65.5	14×13	44.5	11	8.5	8	6	11	1	4	〃	〃
126	71	15×13.5	39.5	14	6	7	4.5	8	1	1	〃	〃
127	57	12×11.5	35.5	9	7	7	5	7.5	1	1	〃	〃
128	60	11.5×10.5	34	10	7	5.5	5	6.5	1	1	〃	〃
129	54.5	13×13	36.5	10	7	7.5	4.5	7.5	1	3	〃	〃
130	55	13×12.5	37	9	8	7.5	5.5	7	1	1	〃	〃
131	50	11×11	31.5	9	6	6.5	4	6	1	1	〃	〃
132	52	12×10	30.5	7	6	5.5	5	7	1	1	〃	〃
133	51	12×13.5	36.5	9	6	8	5	8.5	1	4	〃	〃
134	52	10.5×10	33.5	9.5	7	6	5	6	1	1	〃	〃
135	45.5	10.5×11	38	12	9	8	4	5	1	4?	〃	〃
136	49	10×10.5	27	8	5	5.5	4	4.5	1	1	〃	〃
137	49.5	11×10	32	10.5	6	5.5	5	5	1	1	〃	〃
138	57※	17.5×15	29※	10	10	9	—	—	1	4	〃	〃
139	45※	13×14	13※	7	6	—	—	—	1	1	〃	〃
140	37※	13×13.5	22.5※	9	7	6.5	—	—	1	1	〃	〃
141	41※	13×12	23.5※	9	6	8.5	—	—	1	1	〃	〃
142	48※	11.5×11.5	23※	10	6.5	6.5	—	—	無	1	〃	〃
143	42.5	13×12	18※	10	8	—	—	—	1	1	〃	〃
144	42※	12×12.5	14※	7.5	6.5	—	—	—	1	1	〃	〃
145	35.5※	14×13.5	19※	11	6	2※	—	—	1	3	〃	〃
146	35※	12×12	9※	9	—	—	—	—	1	1	〃	〃
147	29※	12.5×—	20※	9	8	3※	—	—	1	1	〃	〃
148	24.5※	12×12.5	24.5※	—	1.5※	7	5.5	10.5	1	—	〃	〃
149	21.5※	11×11.5	21.5※	—	5.5	5.5	4.5	6	1	—	〃	〃
150	28※	12×—	28※	—	—	—	—	—	1	—	〃	〃
151	23※	14.5×12	23※	—	—	8	6	9	1	—	〃	〃
152	25.5※	13×12.5	25.5※	—	6※	6	5	8.5	1	—	〃	〃
153	27※	11.5×11	27※	—	7	6.5	5.5	8	1	—	〃	〃
154	20※	14×—	20※	—	2※	5.5	6	6.5	1	—	〃	〃
155	26※	12×10	26※	3.5※	8	6.5	4	4※	無	—	〃	〃
156	19.5※	12×—	19.5※	—	—	3.5※	6	10	1	—	〃	〃
157	17.5※	10×10.5	17.5※	—	—	6.5	4.5	6.5	1	—	〃	〃
158	13※	10×—	13※	—	—	1※	5	7	1	—	〃	〃
159	15※	10×—	15※	—	—	1※	4.5	9.5※	1	—	〃	〃
160	19※	11.5×11	19※	—	7	6.5	5.5	—	1	—	〃	〃
161	14※	12×11	14※	—	7.5	6.5	—	—	1	—	〃	〃
162	33※	13×13.5	13.5※	13.5	—	—	—	—	1	1	〃	〃
163	32.5※	11.5×12	11※	11	—	—	—	—	1	1	〃	〃
164	36※	12×13	8.5※	8.5	—	—	—	—	1	4	〃	〃
165	29※	10×9.5	9※	6	3※	—	—	—	1	1	〃	〃
166	41※	14.5×14.5	38.5	9	8.5	9.5	5	6.5	1	3	〃	〃
167	57	11.5×11.5	29	6.5	7	6	4	5.5	1	1	〃	〃
168	51.5	11×10.5	31.5	7	6.5	6.5	5.5	6※	1	1	〃	〃
169	57.5	11×11	32	8	6	7	4.5	6.5	1	1	〃	〃
170	45	11×11	28.5	7	5	5	4	7.5	1	3	〃	〃
171	42※	11×12	30.5	6.5	6.5	5.5	5.5	6.5	1	1	〃	〃
172	58.5	12.5×12.5	34	8.5	6.5	7.5	4.5	7	1	1	〃	〃
173	54.5	11.5×10.5	28.5	6.5	6	6	5	5	1	1	〃	〃
174	45	13×13	36.5	10.5	8.5	7.5	3.5	6.5	1	4	〃	〃
175	50※	13×12.5	23.5※	8.5	7.5	7.5	—	—	1	1	〃	〃
176	50.5※	13.5×12	23※	8	7.5	7.5	—	—	1	1	〃	〃
177	57.5	14×13	38.5	12.5	6	7	5.5	7.5	1	1	〃	〃

大成古墳群・イリ遺跡発掘調査概要

178	55	13×11	35	9	7.5	6.5	4.5	7.5	1	3	〃	〃
179	35※	12×12.5	35※		9.5	9	6.5	10	1	—	〃	〃
180	41※	14×11.5	41	10	6.5	9	6.5	9	1	4?	〃	〃
181	37※	10×10	31.5※	14	8	6.5	3	—	無	4	〃	〃
182	40.5※	14×14	15.5※	10	5.5※	—	—	—	1	1	〃	〃
183	33※	11.5×9	17※	8.5	8.5	—	—	—	1	1	〃	〃
184	43.5※	14×13.5	17.5※	9.5	8	—	—	—	無	3	〃	〃
185	25※	11×10	25※	—	8	5.5	4	7.5	1	—	〃	〃
186	25※	11×10	25※	—	7	6	5	7	1	—	〃	〃
187	27※	9.5×10	27※	—	6.5	6	6	8.5	1	—	〃	〃
188	32.5※	11×10.5	8.5※	8.5	—	—	—	—	1	1	〃	〃
189	35※	10×10	11.5※	11.5	—	—	—	—	1	1	〃	〃
190	34※	11×12	7※	7	—	—	—	—	1	1	〃	〃
191	23※	11.5×11	7.5※	7.5	—	—	—	—	1	1	〃	〃
192	26.5※	10×10	13.5※	8.5	5※	—	—	—	1	1	〃	〃
193	12※	12×—	12※	2.5※	9.5	—	—	—	1	—	〃	〃
194	47.5※	11×11	22.5※	8.5	7.5	6.5※	—	—	1	1	〃	〃
195	44※	14×14	27※	9	8	9	—	—	無	4	〃	〃
196	62	12×12	43	9.5	8	10	7	7.5	無	4	〃	〃
197	53※	14.5×14.5	30※	12.5	8	9.5※	—	—	1	1	〃	〃
198	69	14×14	47	13	8	8	6	12	無	4	〃	〃
199	59	13×13	40	12	7	6	5.5	9.5	1	1	〃	〃
200	30※	13.5×13.5	30※	1.5※	5.5	6.5	5	11.5	1	—	〃	〃
201	57	12×12	33.5	11.5	6	5.5	4	6.5	1	1	〃	〃
202	41※	12.5×12.5	37	8.5	7.5	7.5	5.5	8	1	1	〃	〃
203	40※	11×11	31.5※	10	6.5	5	5	5※	1	1	〃	〃
204	45※	10×11	31.5	10.5	5	6	4.5	5.5	1	1	〃	〃
205	30.5※	10.5×14.5	5※	5※	—	—	—	—	—	1	〃	〃
206	57	11×11	29.5	8	6.5	4	5	6	無	1	〃	〃
207	63	—×13	30.5	6.5	7	6	5	6	1	1	〃	〃
208	36※	11.5×12.5	8.5※	8.5	—	—	—	—	1	1	〃	〃
209	57	12×12	37	10	8	6	5.5	7.5	1	1	〃	〃
210	42※	12×12	24.5※	8.5	7.5	8.5※	—	—	1	4	〃	〃
211	19.5※	—	19.5※	—	—	8	5	6.5	—	—	〃	〃
212	16※ (基部のみ)	11×12	—	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃
213	29.5※ (基部のみ)	12×12.5	—	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃
214	35.5※	11×11	20.5※	13.5	7	—	—	—	1	1	〃	〃
215	41※	11.5×13	35	9	7.5	6.5	4.5	7.5	無	1	〃	〃
216	59.5	11.5×11.5	34.5	9.5	6	5.5	5.5	8	1	1	〃	〃
217	57.5	13×13	38.5	10	7	7.5	6	8	1	1	〃	〃
218	62	11.5×10.5	39	11	6.5	7	5.5	9.5	1	4	〃	〃
219	53.5	12×13	30.5	6	6	5.5	5	8	1	1	〃	〃
220	60.5	12.5×12.5	47.5	17.5	7	8.5	4.5	10	1	4	〃	〃
221	61	13×13	41	13	6.5	8	5.5	8	1	4	〃	〃
222	45※	14×14	30※	10.5	9.5	10	—	—	無	4	多孔質石材	〃
223	32※	16×15	11.5※	11.5	—	—	—	—	無	4	〃	〃
224	40.5※	15×15.5	18.5※	8.5	10	—	—	—	1	4	〃	〃
225	49※	16×16	30※	9	12.5	8.5	—	—	無	4	白色系凝灰岩	〃
226	19※	—	19※	—	—	—	9	10	4	—	〃	B
227	21※	17×17	21※	—	—	15	6	—	—	—	〃	〃
228	21※	17×17	21※	7	7	7	—	—	—	—	〃	〃
229	46※	20.5×20.5	46※	23	11	12	—	—	—	—	〃	〃
230	38.5※	18×19	38.5※	18.5	9	11	—	—	—	—	〃	〃
231	30※	16.5×16.5	30※	—	5	10	7.5	2.5	無	—	〃	〃
232	42※	21×21	42※	14	12.5	15.5	—	—	無	—	〃	〃
233	40※	20×20	35※	14	10	11	—	—	—	—	〃	〃
234	41※	21×14.5	31※	16	15	—	—	—	3	4	〃	〃
235	43.5※	16×17	43.5※	20.5	10	13	—	—	1	4?	〃	〃
236	36※	28×16	22.5※	22.5	—	—	—	—	無	4	〃	〃
237	41※	18×—	41※	19.5	9.5	12	—	—	無	4?	〃	〃
238	28※	19×12	28※	—	13	15	—	—	3	—	〃	〃

239	43※	16.5×16.5	43※	20.5	11	11.5	—	—	無	4	々	々
240	48	17×18	38.5	10	9.5	12	2.5	5.5	無	3	々	々
										(石材三角)		
241	38.5※	16×16	31.5	14	9	8.5	—	—	無	4	々	々
242	35.5※	14×14	35.5※	—	11	9	5	9.5	1	—	々	々
243	22.5※	17×12	22.5※	—	11.5	11	—	—	—	—	々	々
244	36※	26×19	36※	—	25	11	—	—	—	—	々	々
245	39.5※	12.5×13	25※	10	6	9	—	—	1	4	々	々
246	44※	23×15	44※	27	17		—	—	—	3	々	々
247	38.5※	19×12.5	38.5※	20	9	9.5	—	—	無	4	々	々
248	33※	21×10	33※	—	4※	15.5	8	5.5	—	—	々	々
249	54※	28×—	54※	22	17	15	—	—	4	4?	々	々
250	35※	24×—	35※	—	18	17	—	—	—	—	々	々
251	30※	13×13	21※	21	—	—	—	—	無	4	砂岩系	々
252	51※	19×19	43※	17	14.5	10	—	—	—	—	々	々
253	51.5※	19×19.5	44※	19	14.5	10.5	—	—	1	4	々	々
254	69.5	15.5×16	57	18	12	10	5.5	11.5	1	4	々	々
255	49.5※	15×15	40.5※	20.5	10.5	9.5	—	—	1	4	々	々
256	35.5※	11.5×12	25※	10	7.5	7.5	—	—	1	4	々	々
257	50※	15×16.5	38.5	17	12.5	9	—	—	1	4	々	々
258	23.5※	15×15	23.5※	—	12	11.5	—	—	無	—	多孔質石材	々
259	40.5※	15.5×16	33.5※	13	10	10.5	—	—	無	4	々	々
260	16.5※	13.5×12	16.5※	—	8.5	8.5	—	—	無	—	々	々
261	46	12×13	46	20.5	7.5	8	4.5	5.5	無	4	笏谷石	C
262	35※	13×12	35※	19.5	7	8.5	—	—	1	4	々	々

め風化による剥落や磨滅が著しく、埋込式、据置式の見分けが困難なものが多い。全体的に、白色系凝灰岩のものは造形が粗く、砂岩系のものは比較的ていねいである。

一石五輪塔C類 地輪底部は平坦で、底部が穿孔される。台石などに据える据置式のものである。2点を数える。石材は笏谷石で、越前から搬入されたものとみられる。

③五輪塔 完存するものは無く、各部材で出土している。ただ、地輪部は、転用し易い形態のためか、含まれていない。総数36点を数える。白色系凝灰岩製が多く、花崗岩、砂岩系が少数含まれる。

④板碑 五輪塔を浮き彫りした板碑は、圭頭碑形と舟形のものがあり、前者が3点、後者が1点を数える。砂岩系のものである。白色系凝灰岩の板碑は、小振りではあるが圭頭板碑の形態をとる。石材の質によるものか、銘文などは確認できない。板碑の一部とみられる白色系凝灰岩製の石造物には「□壽位」とその右側に「□日」の銘文が残る。年紀なども記されていたとみられるが、その部分は失われている。

⑤その他 白色系凝灰岩製砲弾型石造物は、本来的な形態は不明であるが、あるいは無縫塔の塔身部か。花崗岩製笠石は、頂部に露盤が作り出されており、宝塔笠部もしくは層塔最上層部とみられる。

⑥小結 今回出土した石造物には、その造立時期を示す年紀などがみられない。従って、絶対的な時期を知ることは困難であるが、今回、別石一石を問わず五輪塔が多く出土しているので、それに拠ることにしたい。五輪塔については大まかに、別石から一石へ、大きいものから小さいものへという時期的推移が考えられている。

今回出土した別石五輪塔は、全容を復原しても総高1mにも満たない小振りのものとみられる。また、火輪の軒先も下端が直線的で上端が反り返る形態であり、中世でもあまり古くない様相で

ある。これは、花崗岩製笠石の形態でも同様である。いわゆる室町時代でも時期的に大きく遡るものではないとみられる。

一石五輪塔では、比較的大振り調整もていねいなものがみられるB類が古く位置付けられよう。C類も、福井市一乗谷の例などから16世紀後半期頃のものと考えられる。

京北町比賀江の墓地の調査では、17世紀に一石五輪塔の造立が盛んになることが指摘されている。また、奈良市元興寺、木津町木津惣墓などでも17世紀に舟形五輪塔板碑の造立が増加することが判っている。このように17世紀に簡素な石造物の造立が盛んになる状況からみて、量的に最も多いA類もほぼその頃の造立とみられる。

石仏についても、簡略化されて量的にも多いA類は17世紀頃のものと考えられる。F類は、福井市一乗谷の例などから16世紀後半から末頃のもの

のとみられる。G類は1点しか残存していないが、形態的にほかのものより若干古くなる可能性もある。全体的に、石仏は中世末頃から近世前期にかけての造立と言えよう。

(引原茂治)

d. 大成17号墳

立地 古墳は大成古墳群の分布する丘陵稜線上、標高25m付近に立地している。この丘陵は現在国道178号線により分断されているが、本来は産土山古墳の立地する丘陵と連続していたと考

付表4 石造物一覧表(3) 五輪塔(※は残存値・単位はcm)

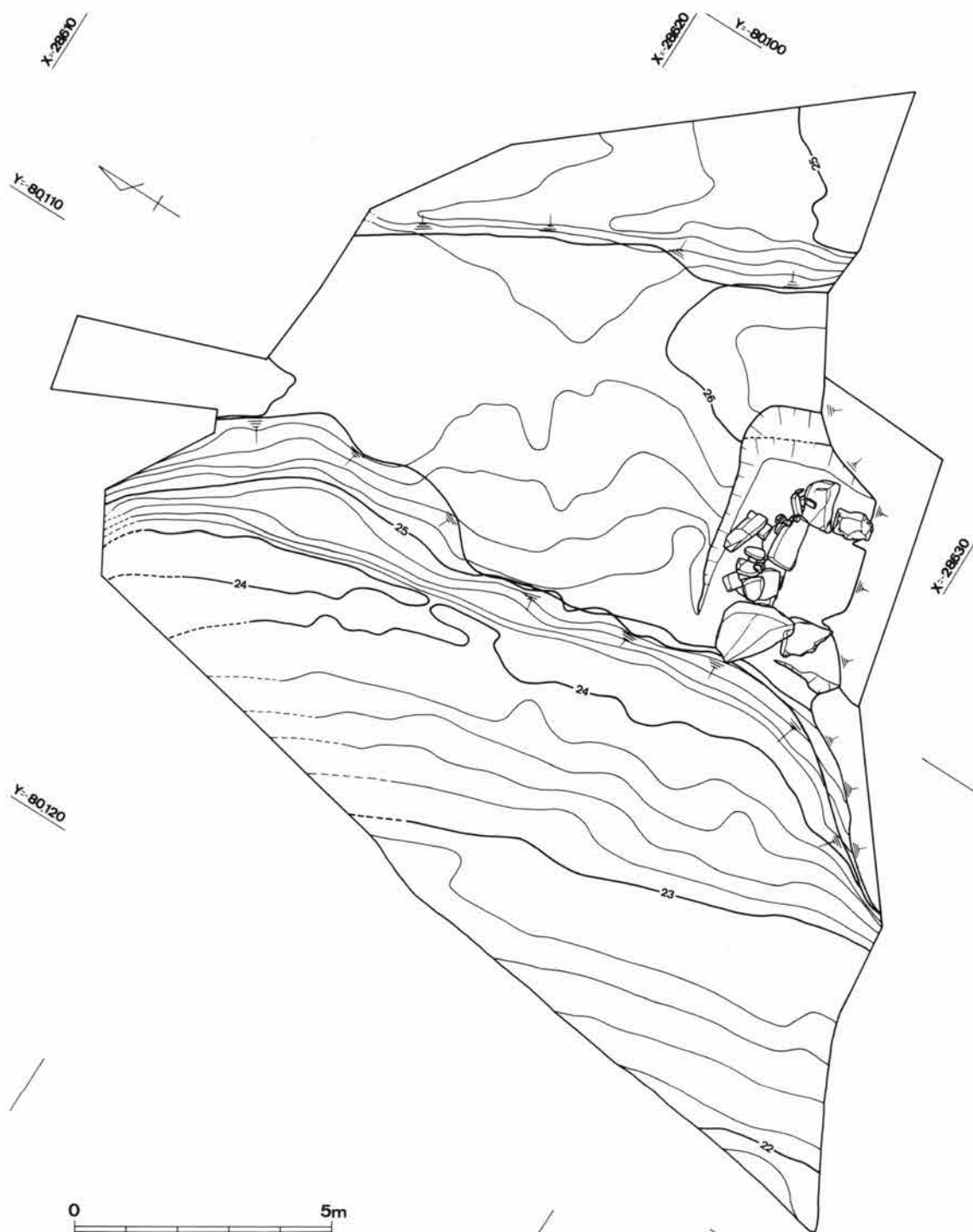
番号	部位	高	幅(径)	梵字(面)	石材	備考
263	空・風輪	21(11/10)	15	—	白色系凝灰岩	納付
264	〃	19.5(11/8.5)	14	4	〃	〃
265	〃	18.5(10.5/8)	17	4?	〃	〃
266	〃	24(13/8)	16	無	〃	〃
267	〃	26.5(12.5/10)	11	1	〃	〃
268	〃	23(14/9)	16.5	4?	〃	〃
269	〃	23(13/10)	—	—	〃	〃
270	〃	16.5(7.5/9)	14.5	1	花崗岩	〃
271	〃	24(13.5/10.5)	16.5	4	白色系凝灰岩	納孔付
272	〃	18.5(10.5/8)	12.5	—	〃	〃
273	〃	25(15.5/9.5)	19	4?	〃	〃
274	〃	23(13.5/9.5)	16	4	〃	〃
275	〃	20(12/8)	15	無	〃	〃
276	風輪	8.5	16	1	〃	納付
277	空輪	13	14	無	花崗岩	〃
278	火輪	9	19	4	白色系凝灰岩	上部納孔付
279	〃	18※	32	1	〃	〃
280	〃	—	27.5	無	花崗岩	〃
281	〃	10	18.5	1	砂岩系	〃
282	〃	17.5	27	4	白色系凝灰岩	上下納孔付
283	〃	16	28	4	〃	〃
284	〃	15	28	4	〃	〃
285	〃	16	25	無	〃	〃
286	〃	17.5	29	4	〃	〃
287	〃	15※	31	4	〃	〃
288	〃	17.5※	29.5	—	〃	下部納孔付
289	〃	12※	28	1?	〃	〃
290	〃	15	27	4?	〃	〃
291	〃	18※	30	4	〃	〃
292	〃	8※	25	—	〃	〃
293	水輪	17※	29	4?	〃	〃
294	〃	16.5※	31	4	〃	〃
295	〃	14	21	1	〃	上下納孔付
296	〃	20	28	無	〃	納付
297	〃	—	30	—	〃	〃
298	〃	14.5	20	無	砂岩系	納付

付表5 石造物一覧表(4) その他

番号	名称	高	幅(径)	石材	備考
299	板碑	44	22.5	砂岩系	圭頭c形、五輪塔浮き彫り
300	〃	67.5	21	〃	〃
301	〃	65	21	〃	〃
302	〃	51	20.5	〃?	舟形板碑形、五輪塔浮き彫り
303	〃	39	16.5	白色系凝灰岩	銘文不明、圭頭板碑形
304	板碑?	30.5※	42	〃	□壽位、□日銘
305	不明石造物	30.5	15	〃	砲弾形、無縫塔塔身か
306	笠石	19	31	花崗岩	露盤付、宝塔もしくは層塔か

えられ、現況から見れば、大成17号墳の南西側に谷地形が形成されていたものと判断される。

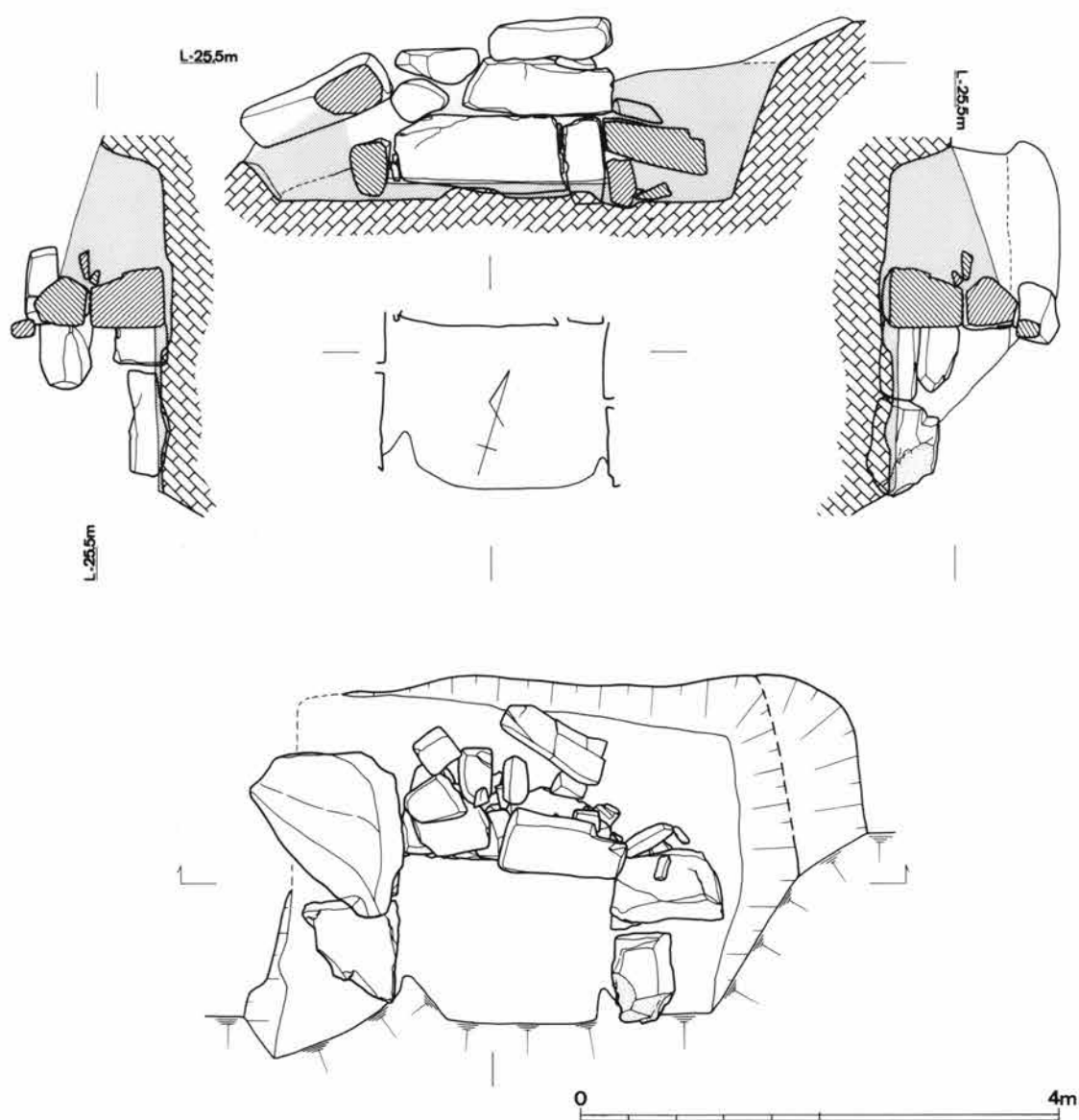
墳丘 墳丘は国道178号の開削や、中世末期から近世にかけての造墓活動、近年まで祀られていた愛宕神社の建造などにより削平され、盛土などは全て失われた状態であった。しかしながらわずかに残された墳丘の地山整形部分の形態から推測すると、概ね標高25.8m付近のコンタラインが旧状を反映しているものと判断される。このラインから復原される墳丘の形態は円墳、規模は直径約16m、高さは横穴式石室の基底から現状残されている墳丘頂部までの高さから2 m以上



第12図 大成17号墳調査後地形測量図

の規模を有していたと考える。

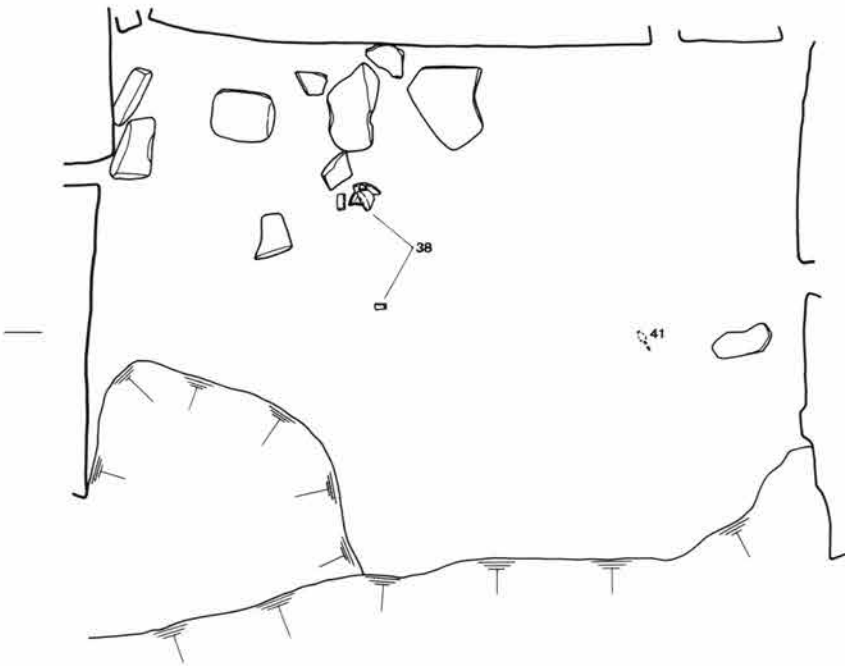
石室と墓壙 大成17号墳の内部主体はほぼ南に開口する横穴式石室である。石室の主軸はN18°Wを測る。破壊が著しく奥壁側の一部が遺存していたにすぎない。石室の石材は、古墳の所在する丘陵に産出する安山岩の露頭からの転石や、海岸部で認められるやや磨滅して角のとれた転石を用いている。石室における石材の使用法は奥壁基底部に幅約1.3mの大形石材を平積みし、その東側には小形の石材を縦積みする。また、両石材の隙間には小形の板石を詰めることにより面を整えている。2段目は基底部とは逆に東側に幅約1.2mの石材を平積みし、西側にやや小振りな石材2石を用いることにより壁面を構成する。基底石と2段目の石材の裏側には小形の板石を挟み込むことにより、石材の面の角度を調整している。また基底から2段目までの壁面はほぼ直立している。3段目は1石のみ遺存している。わずかに玄室側にせり出しており、3段目以降から持ち送られていた可能性が高い。



第13図 大成17号墳横穴式石室実測図(上：平面プランおよび立面図、下：墓壙および平面)

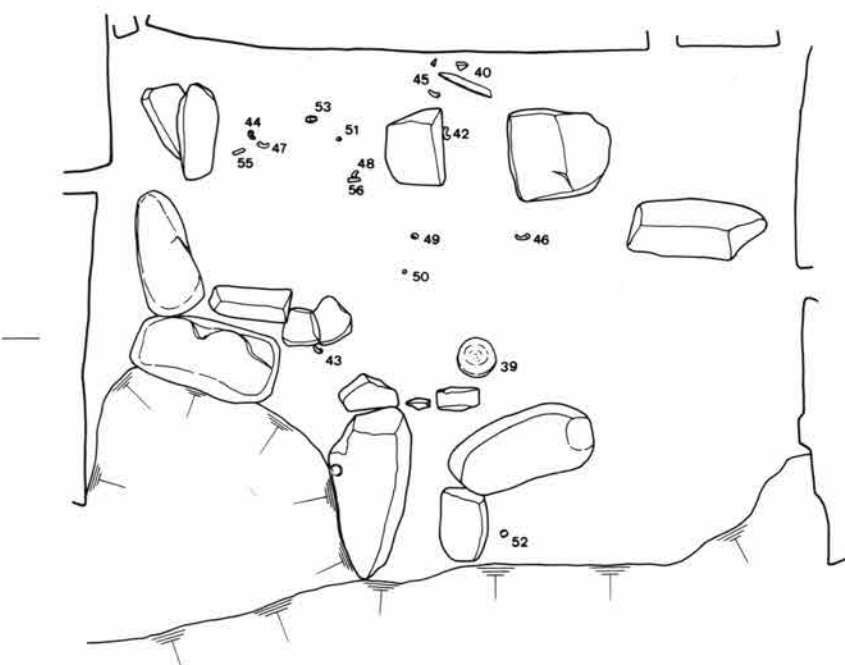
側壁基底部は奥壁を挟み込む形で構築される。やや小振りの石材を平積みして用いている。また、石材の安定を図るため、墓壙底面との隙間には小形の板石を挟み込んでいる。

西側壁最上段に残る石材は基底から3段目と考えられ、原位置からやや移動してはいるものの、

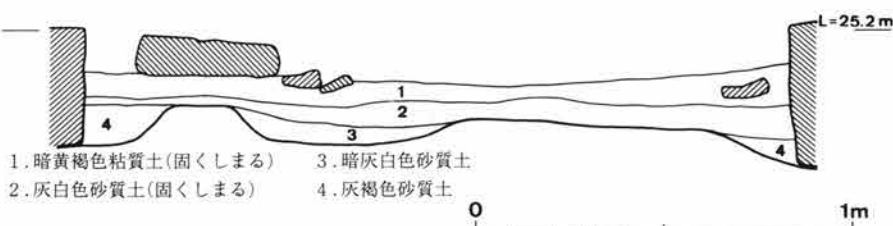


奥壁と側壁両側をまたぐように架構している。東側壁奥壁側は2段分が遺存している。

以上、残存している石室の規模は、奥壁幅1.8m、同残存高1.3m、残存玄室長1.4mを測る。



墓壙は地山面で確認した。盛土が遺存していないため実際の掘り込み面は不明である。墓壙の形態は隅丸方形であり残存部分は幅8.5m、長さ3.3m、深さ1.5mを測る。また、墓壙底面には基底石を据え付けるための掘形が設けられるが、いずれも不整形であり、各石材に併せその都度掘削されたものと判断される。また、石室掘形から実際の埋葬面までには整地土が施され(第14図第2・3層)、凹凸のある床面を平坦に仕上げている。



1. 暗黄褐色粘質土(固くしまる) 3. 暗灰白色砂質土
2. 灰白色砂質土(固くしまる) 4. 灰褐色砂質土

第14図 大成17号墳玄室内遺物出土状況図(上：初葬面、下：追葬面)

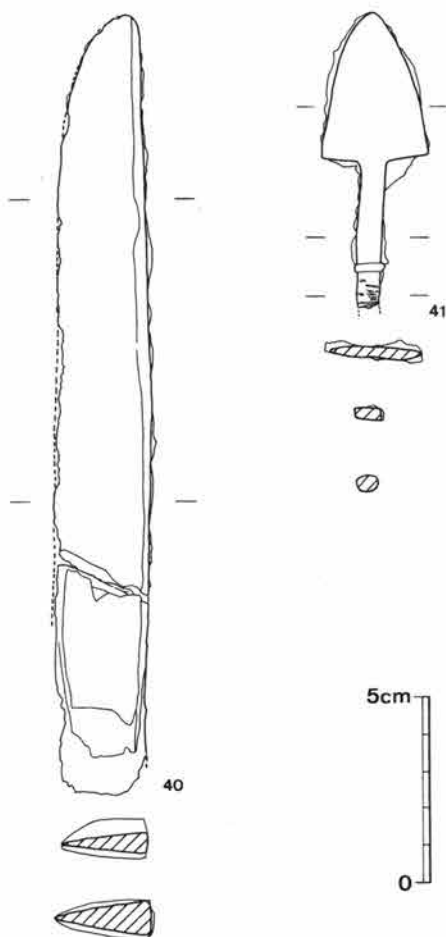
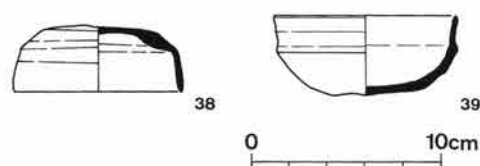
埋葬面および遺物出土状況(第14図) 17号墳では2面の埋葬面を確認した。追葬面は石室内流入土や石室内への転落石を除去した段階、第1層上面で確認した。追葬面床面は硬化面を形成しており面の把握は容易であった。床面上には扁平な石材が並べられており棺台としての機能を有していたものと考えられる。石材の配置状況や、玉類などの出土状況からみて、棺は玄室内北西隅に玄室主軸方向に併行して安置されたものとする。出土遺物には玉類、鉄刀、須恵器碗がある。玉類(42・53・55・56)は主に玄室北西部分から出土しており、一部は玄室中央付近から検出された。また、石室内掘削時の排土をふるいにかけたところ、碧玉製管玉1点(54)が確認された。鉄刀(40)は小片も含め、3片に割れた状態で検出された、茎側の部品は床面に突き刺さった状態で検出されており、抜き身の折れた鉄刀を玄室奥に立てかけて安置した可能性が高い。須恵器碗(39)は玄室中央部分から逆位で出土した。

1層を除去した段階で、花崗岩風化土主体の灰白色砂質土(第2層)を確認した。1層同様硬化面を形成しており、この面上で須恵器杯蓋1点、鉄鏃1点を検出した。追葬面と同様、扁平な石材を検出した。配置状況から棺台として復原することは困難であるが、追葬時に置土を入れ、改修を行っていることを考えると本来は棺台が存在した可能性が高い。須恵器杯蓋(38)は細片化した状態で玄室中央やや北西寄りから検出された。鉄鏃(41)は掘削作業中の不注意により原位置から動かしてしまったものの、玄室東側から出土している。

このほか、図示し得ないものの土師器小片(壺)が墓壇埋土中から出土した。

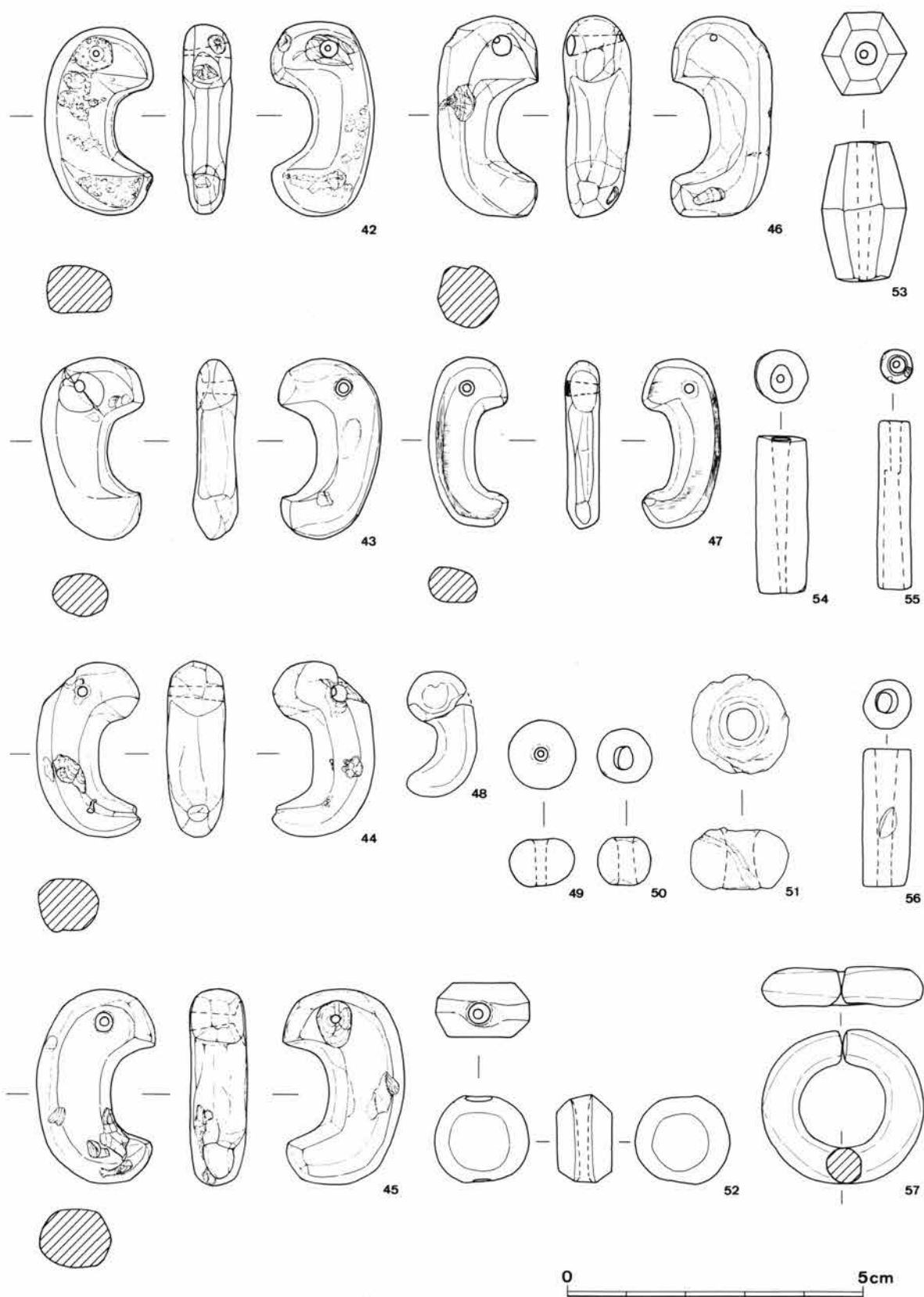
出土遺物(第15・16図) 17号墳に関連する遺物は玄室内から出土した須恵器2点、鉄製品2点、玉類15点がある。また、金環(57)は石室外墳丘上面の地山面から検出され、古墳破壊時に玄室内から持ち出されたものと判断した。

38は口径8.7cm、器高3.6cmを測る須恵器杯蓋である。扁平な天井部はヘラ切り未調整でありやや粗雑な印象を受ける。法量・調整からみてTK217型式(古段階)に併行するものと判断される。39は口径9.5cm、器高4.3cmを測る須恵器碗である。底部は平坦に整形されるが、ヘラ切り未調整である。口縁部の立ち上がり、丸みを帯びて立ち上がる体部の境目に鈍い稜を作り出している。38に比して、器壁は薄くていねいなつくりといえる。



第15図 大成17号墳出土遺物実測図(1)

40は鉄刀である。茎部がないため全長は不明である。刃部は幅2.5cm、峰幅1cmを測る。41は両丸三角形短頭鍔である。茎部には繊維状のものが巻き付けられた痕跡が確認され、矢柄に装着



第16図 大成17号墳出土遺物実測図(2)

されたものであったと考ええる。残存長7.9cm、鍔身部長4cm、同幅2.8cm、頸部長2.7cmを測る。

42～56は玉類である。ガラス製勾玉(47)は風化が著しく土とともに固めて取り上げたため、略図を掲載している。また、玉類については付表9に諸特徴を一覧としてまとめた。勾玉の計測値については勾玉頭部から背部までを幅として計測して

付表6 大成17号墳出土玉類一覧表

番号	器種	長さ (cm)	幅(直径) (cm)	材質	色調	備考
42	勾玉	3.30	1.80	瑪瑙	淡橙乳色	片面穿孔
43	勾玉	2.99	1.70	瑪瑙	淡橙白色	片面穿孔
44	勾玉	3.00	1.75	瑪瑙	橙白色	片面穿孔
45	勾玉	3.30	1.30	瑪瑙	橙白色	片面穿孔
46	勾玉	3.40	1.18	瑪瑙	暗橙白色	片面穿孔
47	勾玉	2.85	1.31	碧玉	濃緑色	片面穿孔
48	勾玉	1.65	1.20	ガラス	白色(風化)	略図
49	小玉	1.12	0.82	ガラス	白色(風化・緑色)	
50	小玉	9.00	8.50	ガラス	白色(風化・緑色)	
51	丸玉	1.65	1.00	ガラス	白色(風化・緑色)	
52	平玉	1.51	1.59	碧玉	濃緑色	片面穿孔
53	切子玉	2.35	1.44	碧玉	濃緑色	片面穿孔
54	管玉	2.63	0.89	碧玉	濃緑色	片面穿孔
55	管玉	2.81	0.59	碧玉	濃緑色	両面穿孔
56	管玉	2.45	0.82	緑色凝灰岩	淡緑灰色	片面穿孔

いる。勾玉には瑪瑙製のもの(42～46)、碧玉製(47)、ガラス製(48)の各種が認められる。瑪瑙製勾玉は「コ」の字状に近い形態のものであり、頭部下端を研磨して丸く仕上げる(42～44)ものと、研磨せずに鋭利に仕上げるもの(45・46)の2者が存在する。また、原石にはやや質の悪い部分も使用している。碧玉製勾玉(47)は、扁平な「コ」の字状を呈する。49～51はガラス製小玉・丸玉である。いずれも風化が著しく気泡の向きなど観察できないが、51は筋状のくぼみが劣化した表面に認められ、巻き付け技法による可能性が高い。52は碧玉製平玉である。基石の周囲・両面・両端を平坦に仕上げたような形態をとる。53は碧玉製切子玉である。一般に切子玉は水晶製のものが多く認められるが、この製品は形態・法量とも水晶製のものを正確に写している。54～56は管玉である。碧玉製の2点は、太身のもの(54)と細身のもの(55)がある。太身のものは片面穿孔、細身のものは両面穿孔である。緑色凝灰岩製のもの(56)は、片面穿孔である。これら玉類はその種類が多様な点が特徴であり、碧玉製切子玉・平玉は全国的にみても類例の少ない遺物である。

金環(57)は石室外の出土である。直径0.6cmの中実の銅芯をもち、わずかではあるが表面に金

e. 土坑SK01(第17図)

位置 2次調査区北側大成16号墳の東周溝内で検出した。

遺構 土坑平面形は直径約30cmの円形を呈し、検出面からの深さ約18cmを測る。土坑の検出面は大成18号墳の周溝が一定程度埋没した段階の流入土上から掘り込まれており、大成18号墳に後出するものであることは層位的な点からも明らかである。土坑埋め戻し過程で土師器碗2点(58・59)を合わせ口にして埋納する。身に転用された土師器碗(59)はほぼ水平に据えられ、蓋は口縁と口縁を間隙なく合わせている。密封するための特別の措置はなされていない。蓋をはずした状態では内部にはわずかに粘質土が確認され、周囲から染みこんだ水と微細な土壌により形成

されたものと判断された。土坑埋土、土師器内流入土とも水洗選別作業を行ったが、微細遺物などの確認はできなかった。以上のように、合わせ口であることから何らかの腐食性遺物を埋納していた可能性はあるものの性格については明確にすることはできなかった。

出土遺物 土師器碗2点がある。両者とも法量・調整技法・胎土・焼成が類似している。整形にあたってはロクロを使用したと考えられ、ヨコナデが顕著に認められる。両者とも底部は糸切り技法による。法量は58が口径14.7cm、器高4.5cm、59が口径14.7cm、器高4.8cmを各々測る。

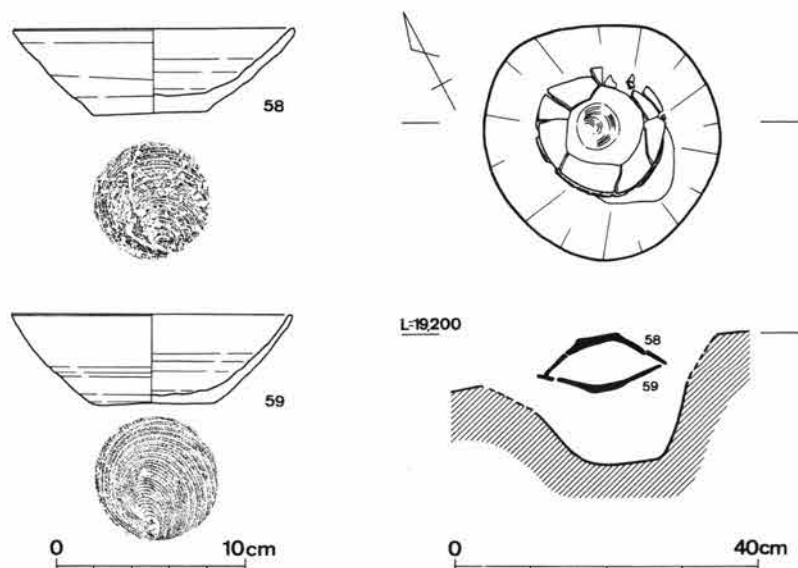
f. テラス3 (第4図) 2次調査区中央に位置する平坦面である。大成16号墳墳丘裾および周溝を「L」字状に削平して作り出され、後背部には溝S D01が掘削されている。土層観察結果や、溝S D01から黒色土器片が出土している点からみて平安後期から中世段階に造成されたテラスであると判断される。なお、溝S D02は明確な出土遺物がなく掘削時期など不明である。このほか、テラス上からは時期不明の土坑、ピットなどがわずかながら検出されたが建物に復原できるものではない。同様のテラス状の地形は、調査区外でもこの丘陵の西緩斜面に認められ中世テラスが複数存在するものと判断される。

g. テラス4および掘立柱建物跡S B01 (第18図)

位置 テラス3の下方、東に向かいゆるやかに傾斜する緩斜面上に位置する。

遺構 この遺構はテラスとテラス上の掘立柱建物跡によって構成される。テラス4はコンタインに沿って平行に掘削され、残存するコーナー部分に幅約50cmの溝をめぐらせる。テラス床面は、大成18号墳北周溝埋土の一部を削平して作られる。また、テラスの南辺は大成18号墳の墳丘および後述する外護列石により区画される。大成18号墳の調査結果から、このテラス掘削時にも外護列石はある程度露出していたものと判断される。テラスの規模は東西約5m、南北約6mを測る。

テラス上から検出した掘立柱建物跡S B01は、南北2間×東西1間の規模を有する。北側桁行3.2m、南側桁行3.8mと南側が広い。梁行は約4.8mである。柱穴はいずれも大きく深く、直径



第17図 土坑S K01および出土遺物実測図

40～60cm、深さ70cm前後を測る。建物の主軸方位はほぼテラス4と併行し、N 13° Eを測る。遺物は各柱穴埋土および、テラス埋土・テラス周溝埋土から出土している。

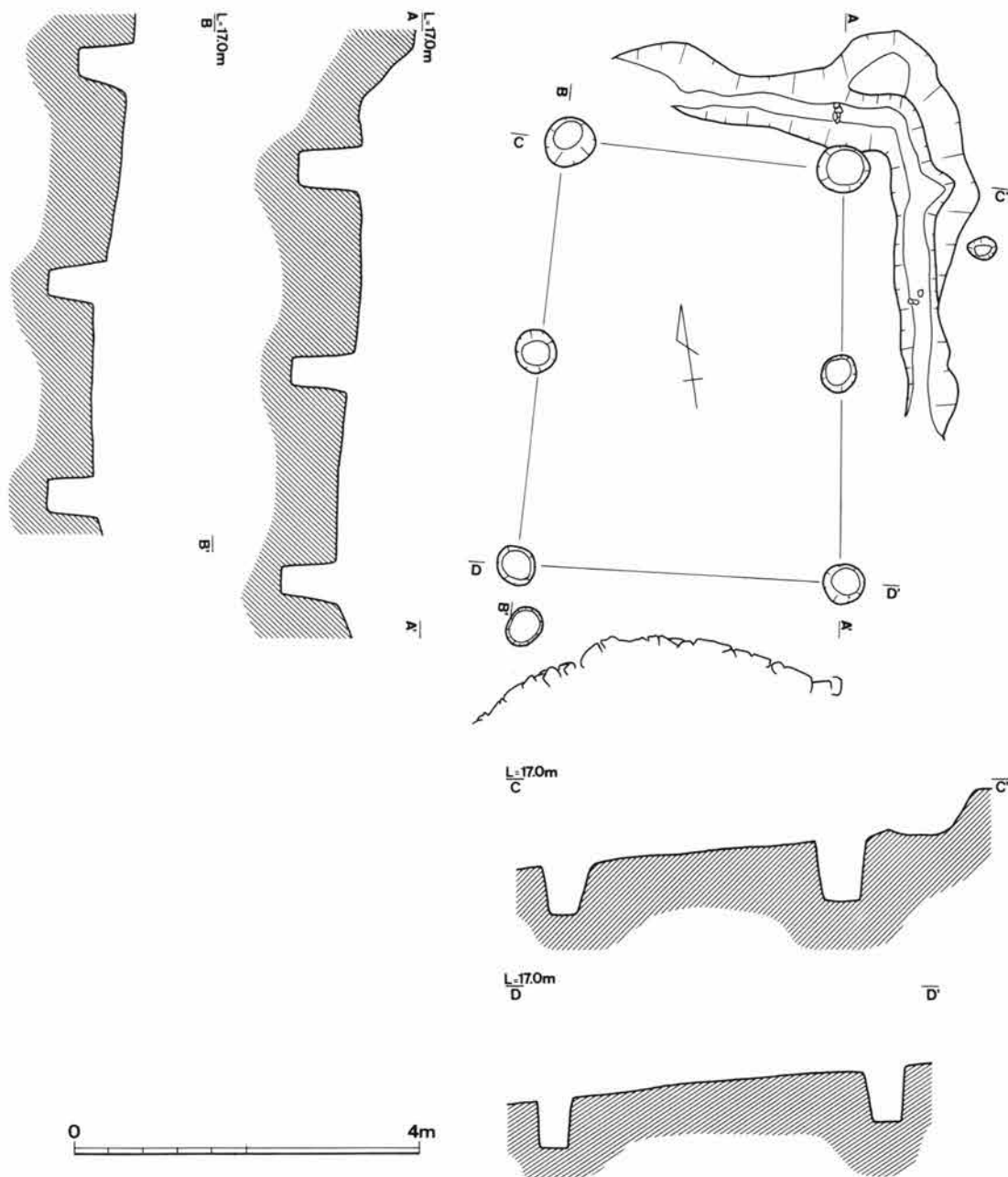
出土遺物 (第19図) テラスから出土したものおよび柱穴埋土中から出土したものを図示した。

60～63はテラス4周溝底

面から出土した。全て内面を黒色処理する黒色土器碗である。60は内外面ともミガキが認められる。また、底部は糸切り技法により、わずかに突出する平高台を有する。復原口径15.4cm、器高5.7cmを測る。61は外面が磨滅して観察できない、復原口径16cmを測る。62は磨滅が著しく調整不明。63は内面にミガキが認められる。また、磨滅しているものの底部には糸切りが観察される。

64・68は北西隅の柱穴出土である。64は土師器皿である。復原口径7.9cm、器高1.4cmを測り、底部は糸切りである。68は内面黒色処理をする黒色土器碗である。内面にミガキを施し、底部は糸切り技法による。復原口径16cm、器高5cmを測る。

67は南東隅の柱穴から出土した黒色土器碗である。内面はミガキ、底部は糸切りによる。



第18図 掘立柱建物跡 S B 01実測図

65は東梁中央柱穴から出土した土師器碗である。小片ではあるが深手のプロポーションを呈し、口縁はわずかに外反させる。復原口径15.2cmを測る。

66・69は南西隅の柱穴内から出土した。66は内面を黒色処理する黒色土器碗である。内面にヘラミガキ、底部は糸切り技法により調整を行う。69は土師器甕である。復原口径11.6cmを測る小形品であり外反する口縁を有する。

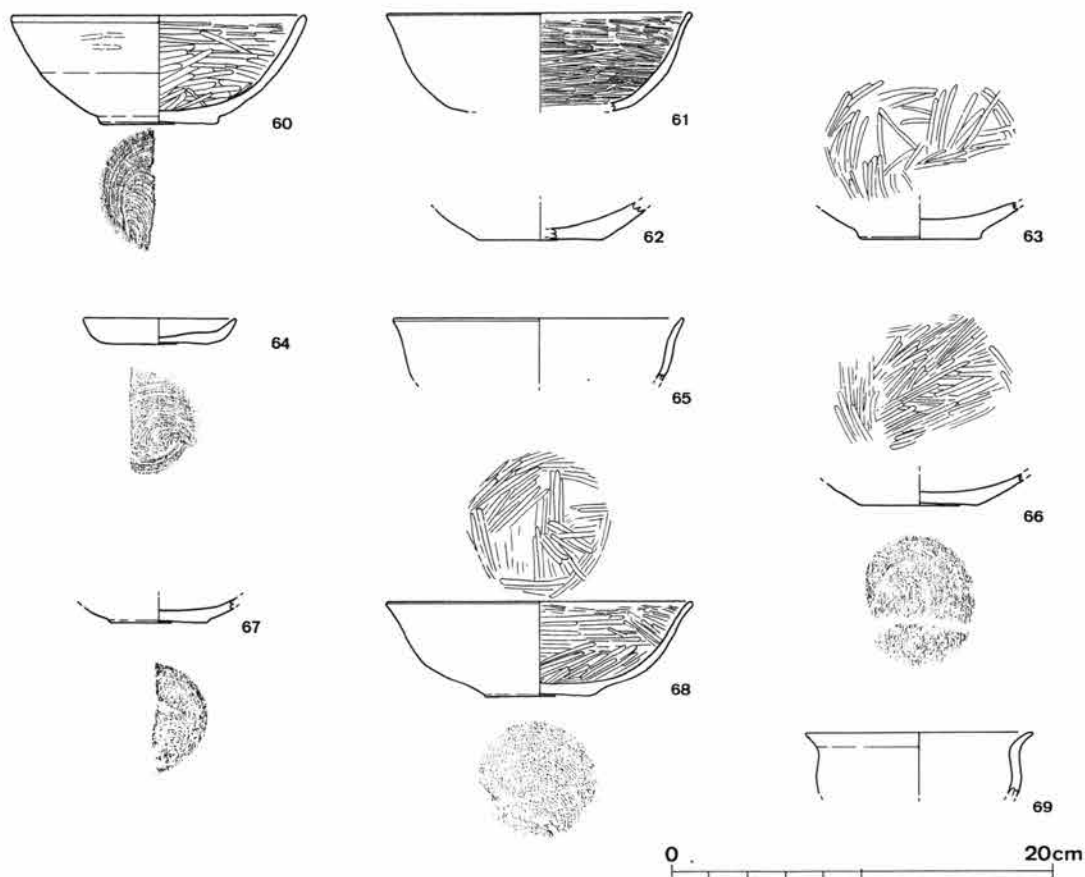
h. 柵 S A 01・02 丘陵西側に展開する谷部に面してコンタラインに併行して検出した柱穴群である。建物として復原できない点、柱穴が小規模である点から柵として復原した。柵 S A 01は2間分、柵 S A 02は3間分を確認した。

i. 溝 S D 03 2次調査区南端で確認した溝状の遺構である。埋土には風化した周辺の地山土が存在しており、水利に関連するものではないと判断した。後世の畑地に伴う石垣 S X 04により削平されている。埋土中から、須恵器片が出土した。

j. 性格不明遺構 S X 01 大成18号墳の北側で検出した土坑である。土坑には長軸1.7m、短軸0.7mを測る安山岩の巨石が据え付けられていた。耕作に邪魔になる大成18号墳の天井石を埋め込んだ可能性がある。

k. 石垣状遺構 S X 02・04 西側緩斜面を掘削し、石垣として積み上げた遺構である。戦時中にこの付近には段々畑が営まれていたとされ、畑に伴う石垣と判断される。

l. 石積み遺構 S X 03 2次調査区北西部で確認された集石遺構である。性格は不明であるが、



第19図 掘立柱建物跡 S B 01柱穴およびテラス状遺構 4 出土遺物実測図

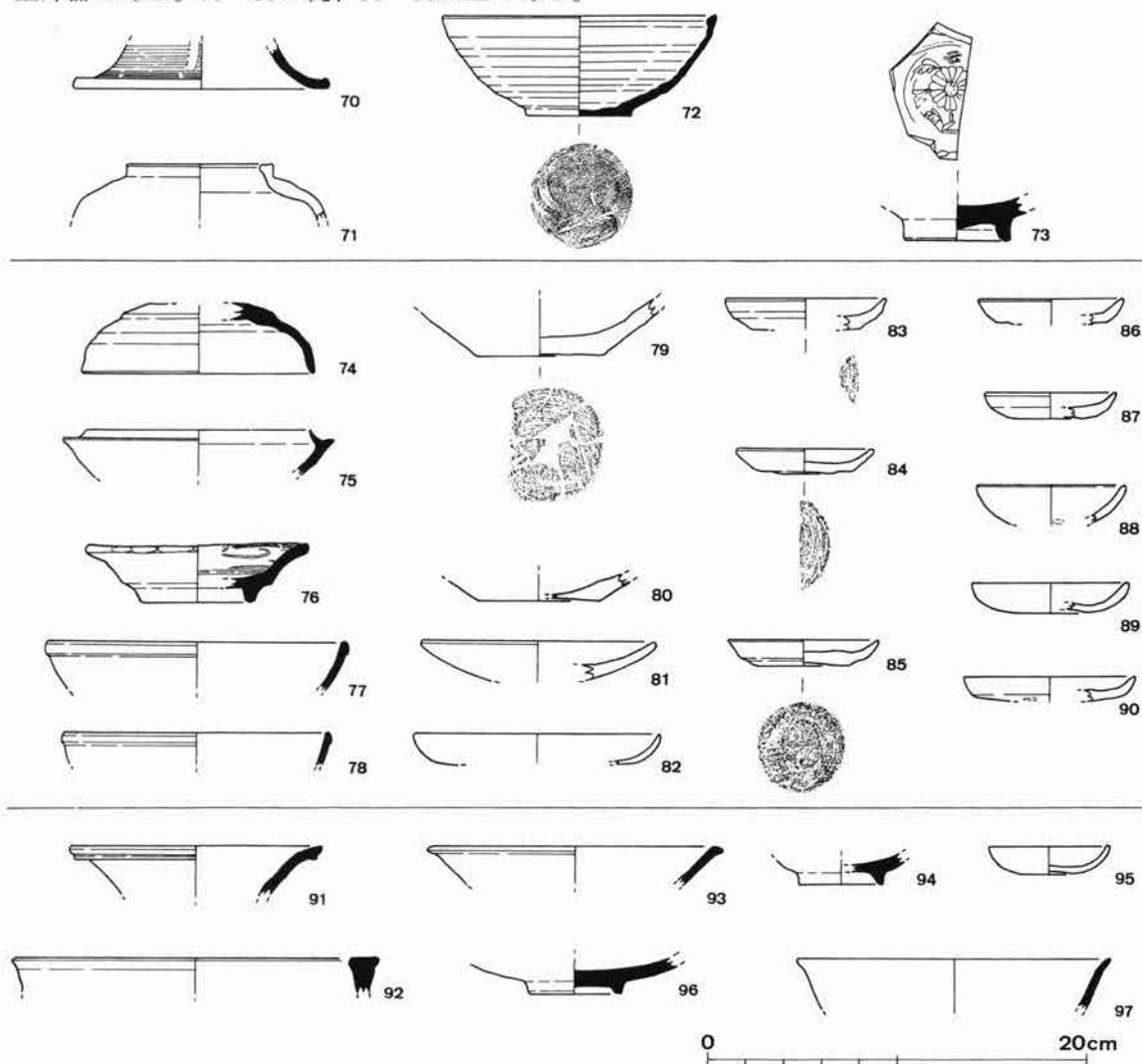
周辺から天目茶碗(94)が出土している。

m. 段状遺構 S X 05 S X 05の北側で確認されたテラス状の遺構である。青磁片 1 点が埋土から出土しているため、中世に遡りうる可能性がある。

包含層ほかの出土遺物(第20図) 第20図には包含層から出土した遺物を掲載した。

70～73は大成16号墳周溝埋土から出土した。70は須恵器高杯脚部片である。復原底径13.1cmを測る。長脚二段透かしと推定され、外面にはカキ目が施される。T K 43型式併行期のものと考えられる。71は土師器壺である。短く立ち上がる口縁をもつ。72は須恵器碗である。ロクロによるヨコナデの痕跡が顕著に残る。口縁端部は内側に肥厚し、わずかに突出する平高台には糸切りが観察される。口径14.3cm、器高5.4cmを測る。73は青磁碗底部である。底部内面には花文と「云」の字が認められる。

74～90はテラス 4 埋土から出土した。74・75は須恵器杯蓋・杯身である。大成18号墳に伴うものであろう。76は青磁皿である。口縁端部をヘラ状の工具で刻み、花卉状の形態を作り出す。復原口径11.9cm、器高5.6cmを測る。77・78は白磁碗である。薄い玉縁状の口縁をもつ。79～90は土師器である。79・80は碗、81～90は皿である。



第20図 包含層・遺構出土遺物実測図

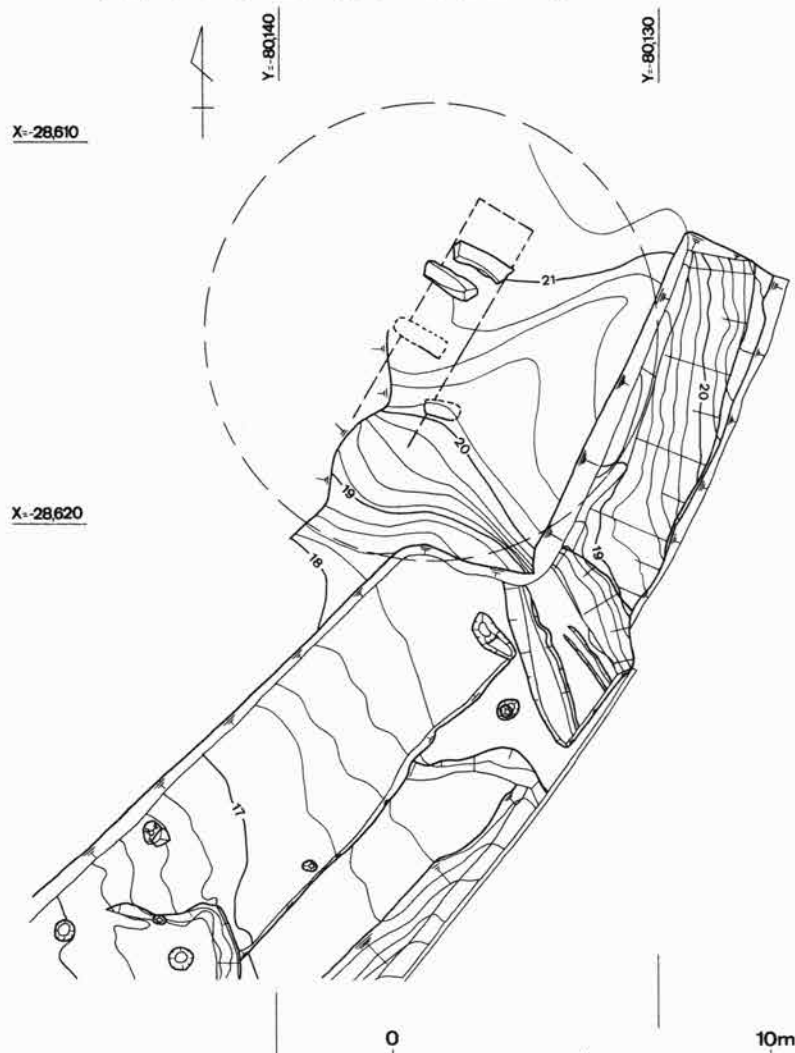
91・95は柵 S A01・02付近の包含層から出土した。91は須恵器壺の口縁、95は土師器皿である。
92～94・96は石垣状遺構 S X04周辺の包含層出土遺物である。92は須恵器鉢の口縁部である。
口縁上端はほぼ平坦に仕上げられる。93は白磁碗、96は青磁碗、94は天目茶碗である。

97は S X05床面より出土した青磁碗である。わずかに外反する口縁を有する。

n. 大成16号墳(第21図)

立地 2次調査区北西部、標高20m付近に位置する横穴式石室墳である。

墳丘 調査前の状況では、天井石が露出しており、また、墳丘西側でも側壁石材が露出しており、すでに墳丘の大部分は失われているものと判断された。石室北側には現況でも墳丘後背部のカット面が観察され、地山整形と盛土を併用していることが推測された。トレンチは石室の東側に設定することとなった。地山面に至るまでには平安後期の包含層が存在し、第20図に示した遺物が出土した。また、この層内には安山岩円礫を主体とする人頭大の石材が多数検出され、本来、16号墳に外護列石として使用されていた石材が転落した可能性が考えられる。東側の地山面は石室に対し弧を描くように整形され、また、わずかに石室側に立ち上がる面も確認した。以上の点から16号墳は少なくとも、東側は地山整形を行っていることが明らかとなった。推定される墳丘



第21図 大成16号墳墳丘測量図(調査後)(1/200)

の規模・形態は、直径約12m程度、高さ2 m以上の円墳であると考えられる。

石室 石室自体は今回の工事範囲からはずれるため調査自体行っていない。現段階で露出している石材などから推定して南南西に開口する全長約7 m前後、幅2 m前後の規模をもつ横穴式石室と思われる。直接石室から出土した遺物が存在しないため明確な築造時期は不明であるが、周溝埋土から出土している第20図70の須恵器高杯がこの

古墳に伴うものである可能性が高いため、TK43型式併行期の築造と考える。

○ 大成18号墳

立地 2次調査区のほぼ中央、標高15m付近に位置する。現在、旧しらばえ荘に続く町里道が存在し、墳丘南東部は削平されているが、本来、この里道部分には小さな谷地形が存在したことが現在の地形測量図(第3・22図)や地元の方々の話から窺うことができる。

墳丘 墳丘は後世の削平により大部分が失われており、全体の1/4程度が遺存するにすぎない。里道側の断面を精査した結果、ほぼ墳丘を縦断する形で土層を観察することができた。土層は第23図右に示すとおりであるが、崖面の見通しを作成したためやや平面図との整合性を欠くこととなった。墳丘の構築は石室を構築する過程で併行して行われたことが土層の観察結果から明らかになった。墳丘内部の施設として墳丘内列石を有する。石室と墳丘の構築過程についてはまとめにおいて詳述することとする。

また、墳丘上段には外護列石が施されている。外護列石は拳大から人頭大の安山岩角礫を用いており、2段ないし3段分が遺存する。この外護列石は掘立柱建物跡SB01が機能していた際に

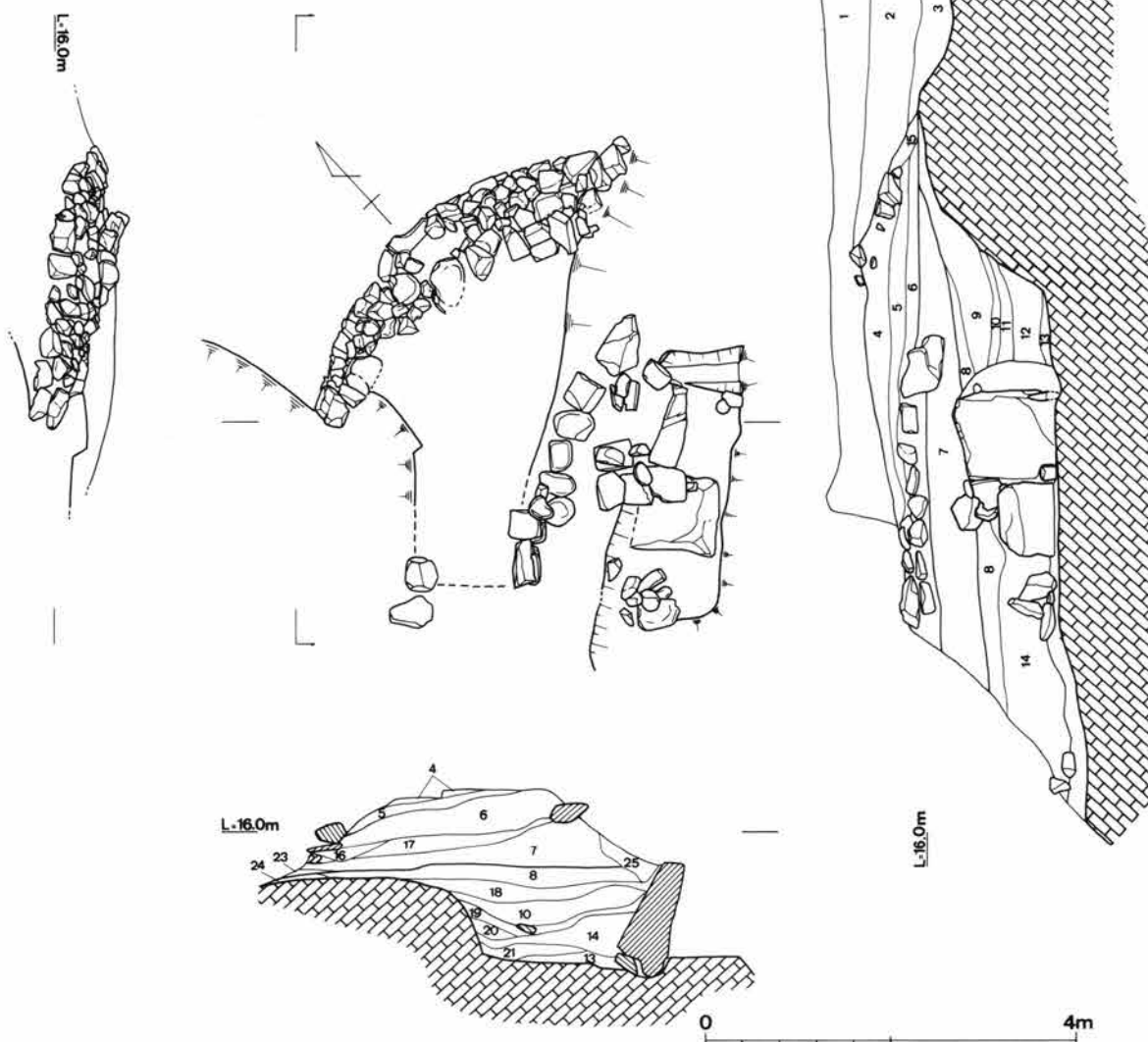


第22図 大成18号墳墳丘測量図(調査後)(1/200)

も露出していた可能性があり、調査当初は中世段階での改修の可能性も考えられたが、周溝地山面直上に安山岩角礫が多数検出されたこと、墳丘土層の検討から明らかに外護列石の構築は墳丘構築過程のなかに組み込まれていることから古墳築造当初のものであると判断する。

1. 赤褐色土層
2. 暗灰褐色中粒砂層
3. 明黄褐色極細砂層
4. 淡黄灰色土層(地山ブロック多量に含む)
5. 淡灰色土層(黒色土をブロック状に含む)
6. 暗黄褐色極細砂層(地山ブロック含む)
7. 淡黄灰色極細砂層(地山ブロック含む)
8. 黒褐色土層
9. 黒褐色土層(淡黄灰色土を含む)
10. 明黄褐色極細砂層
11. 黒褐色土層(淡黄褐色土をベルト状に含む)
12. 黒褐色土層(淡黄褐色土を含む)
13. 明黄褐色極細砂層

14. 明黄褐色極細砂層(地山ブロック含む)
15. 淡黄褐色極細砂層
16. 黄灰色土層(黒色土をブロック状に含む)
17. 黄褐色土層(黒色土を含まない)
18. 黒褐色土層
19. 淡黄褐色粘質土(地山ブロック多量に含む)
20. 暗黄灰色土層
21. 淡黄灰色土層
22. 17と同じ
23. 黒灰色土層
24. 暗黄褐色土層(黒色土を含む)
25. 暗灰色粘質土(攪乱)

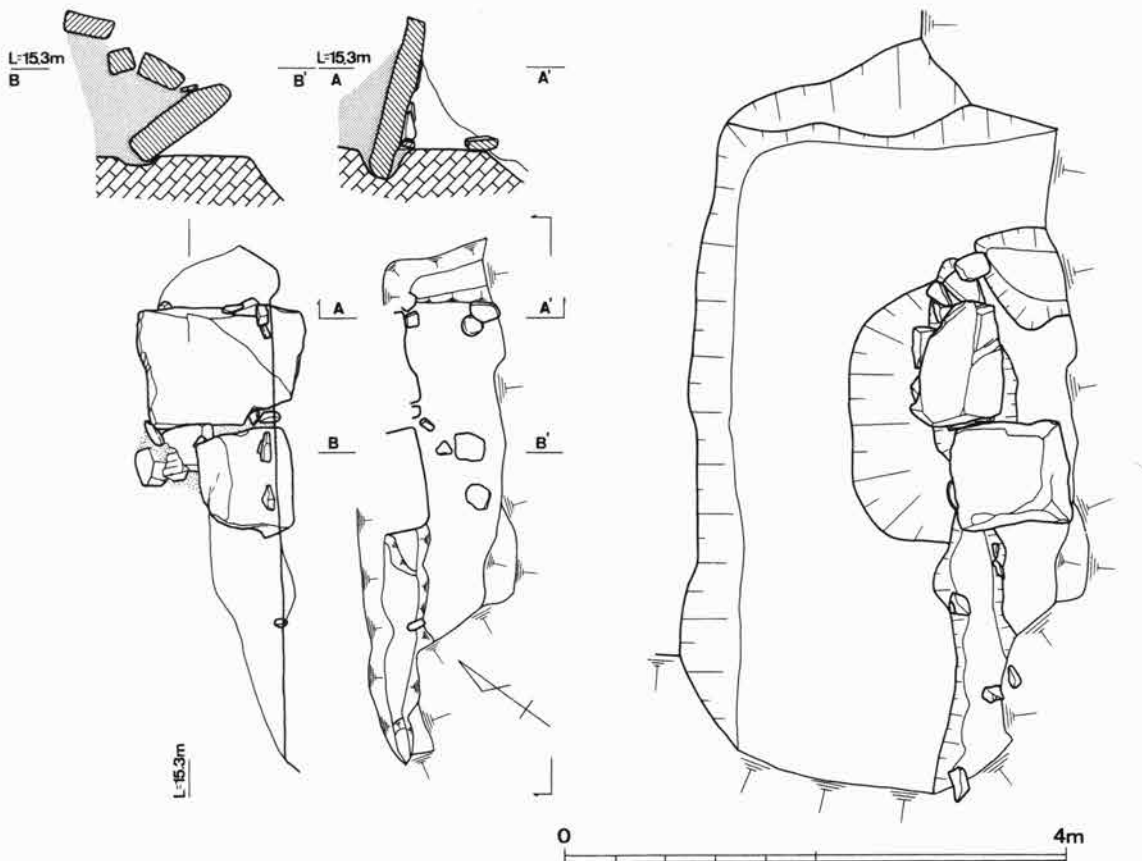


第23図 大成18号墳外護列石実測図および墳丘断面図

墳丘の形態は地山を掘削して作られた周溝、および玄室床面のレベルから復原して直径約15m前後、高さ2m以上の円墳と判断する。

周溝内および墳丘斜面上からは須恵器が出土している。おそらく、石室外での祭祀行為に伴うものと推定される。北側周溝底部からは須恵器高杯(105)および須恵器横瓶(106)が重なり合って出土した。また、この須恵器を除去した直下からピット(第22図P1)を検出した。このピットは地山面から掘り込まれており、直径約50cm、深さ約40cmを測る。柱痕などは検出されておらず性格は不明であるが、可能性のひとつとして木製樹立物が存在したことが考えられる。また、墳丘北東部周溝埋土内からは須恵器杯身(102)・壺(103)・甕(104)が出土している。第23図に図示した土層3層内から出土しており、出土状況から墳丘上からの転落が想定される。

石室および墓壙(第24図) 石室は南西に開口する横穴式石室である。石室の主軸はN55°Eを測る。石室の遺存状況は悪く、西側壁の奥壁から2石分が遺存していたにすぎない。また、羨道寄りの石材は石室内部に倒れかかった状態であった。基底に据えられた2石はいずれも板状の大形石材を使用しており、腰石状に用いており石材の長軸方向を立位に使用している。2段目以降は奥壁から2石目の基底石上段に遺存する石材から小口積みもしくは平積みしていたものと判断される。また、石材間には安山岩円礫を用い石材の安定を図っている。奥壁については石材自体が残されていないものの、石材の抜き取り痕跡から判断して残存する基底石同様、板状の大形石材を腰石状に用いていたものと判断される。羨道側の側壁に関しても石材抜き取り痕跡から基底



第24図 大成18号墳横穴式石室実測図(左：平・立面図、右：墓壙および基底石平面図)

石同様板状石材を腰石状に用いていたものと考え。また、基底部に生じた石材の隙間には小形の石材を詰めるように用い石室の壁面を整える。残存部から判断される規模は全長3.6m以上、幅0.7m以上、高さ1m以上である。また、墳丘内列石や後述する築造過程の復原から玄室高は2m程度あったものと推測できる。

墓壙は石室石材に比して大きく掘削される。墓壙は南西部に開口する「コ」の字状の平面プランをもつものと推定され、残存する規模は長軸6m、短軸3mを測る。墓壙底面における基底石と墓壙壁面の空間は幅約1.6mを測り、基底石据え付けの際の作業空間として機能したことが推測される。墓壙底面には石室基底石を据え付けるための幅約40cm、深さ20cm前後の溝が掘削されているが、不整形なものであり、石材を据え付ける段階に石材の規模・形態に合わせて掘削したものと推定される。また基底石の下部には安定を高めるため板状の安山岩が詰められていた。

玄室内遺物出土状況(第25図) 玄室内からは須恵器、土師器、鉄製品が出土した。石室内土層の観察結果や、遺物の出土状況から判断して埋葬面としては1面のみであると判断された。

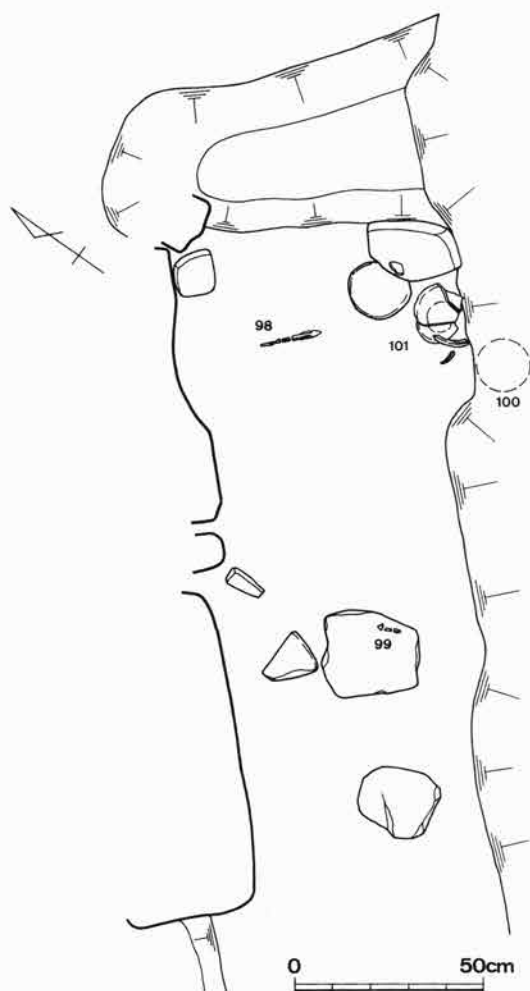
玄室奥壁側からは、残存部のほぼ中央に鉄鏃(98)が切先を南東に向け出土した。北東部からは須恵器杯身(101)が逆位で、その南側には掘削作業中に取り上げてしまったものの須恵器杯蓋(100)が正位置で検出された。また、刀子片(99)は玄室中央に位置する板石の上から3片に分離

して出土している。このほか小片ではあるが土師器碗片が杯身(101)の北に存在する板石の上から検出されている。

やや、石室の破壊が激しく不明瞭な点も多いものの、石室床面から検出された板石は棺台として使用されたものと判断される。刀子(99)や土師器小片がこれら板石の上から検出されたことも裏付けとなろう。また、現状から見て棺は玄室北隅に石室主軸と併行して安置されたものと推定される。

出土遺物(第26図) 大成18号墳出土遺物には玄室内出土の須恵器・鉄製品、墳丘あるいは周溝出土の須恵器がある。

98～101は玄室内出土遺物である。98は全長15.5cmを測る三角形長頸鏃である。茎と頸部の境には棘状突起をもつ。刃部は甘い鑄をもつ三角形を呈する。99は刀子の茎および柄金具である。刀子本体は幅1cm、残存長3cmを測る。柄金具は厚さ1mm程度の鉄製であり全長3.3cmが遺存する。断面は長軸1.6cm、短軸1.2cmの楕円形に復原され刀身との間に木質が観察される。

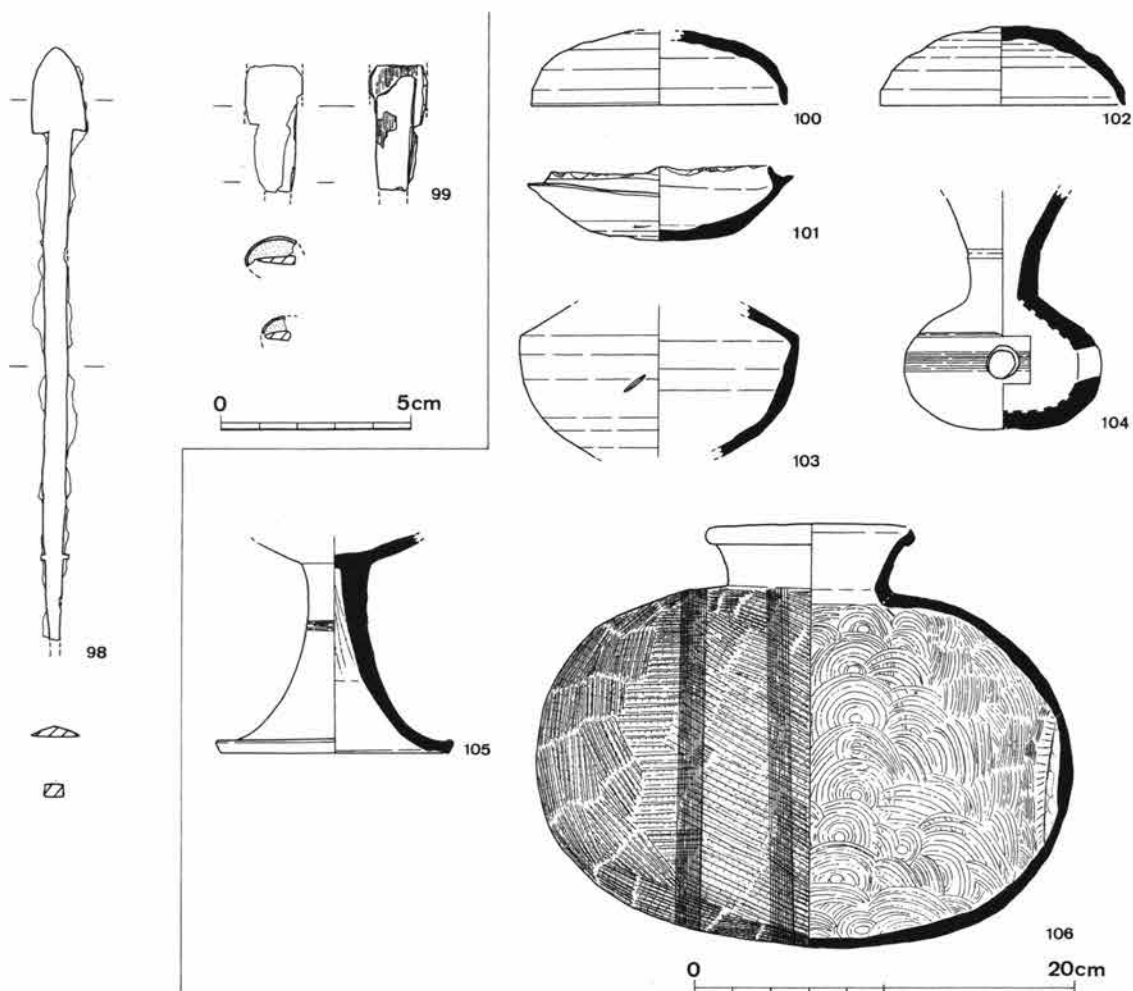


第25図 大成18号墳玄室内遺物出土状況図

100は須恵器杯蓋である。復原口径13.4cm、器高3.95cmを測る。天井部外面はヘラ切り未調整である。崖面精査時に出土したため欠けている部位がある。101は須恵器杯身である。焼け歪みが著しいが短く内傾する口縁をもつ。底部外面には回転ヘラケズリが認められる。口縁端部は打ち欠かれたように欠損しており、人為的に打ち欠かれたと判断する。時期・器種とも異なるが、加悦町嗎岡南古墳出土甕などに口縁を意図的に打ち欠いたと判断される事例が存在し、この須恵器杯身もそうした儀礼に使用されたものと考えられる。口径11.5cm、器高3.8cmを測る。

102～103は墳丘北東部第3層中から出土した。102は須恵器杯蓋である。口径12.95cm、器高4.25cmを測り、玄室内出土の杯蓋(100)に比して天井部の高いプロポーションを呈する。天井部外面はヘラ切り未調整である。103は長頸壺の体部片である鋭利な肩部を有し、復原体部最大径は14.6cmを測る。体部にヘラによる斜め方向の圧痕が見られ、ヘラ記号である可能性が考えられる。104は甕である。口縁部を欠損する。体部下半に最大径をもつプロポーションを呈し、頸部中位および肩部に各々1条の凹線を施す。また、円孔部にはカキメが認められる。

105・106は北側周溝底部、P1上面から出土した。105は須恵器長脚高杯で杯部を欠損する。中空の脚部には透かしを施さず、脚柱部中位に2条の凹線を施す。凹線は螺旋状に施文され、一部では3条あるように見える。脚端部はわずかに上方につまみ上げる。また、脚柱部内面には絞



第26図 大成18号墳出土遺物実測図

り痕が観察される。106は須恵器横瓶である。体部の一部を欠く以外は完形品である。樽形の体部は長軸28.2cm、短軸19cmを測る。口縁まで含めた全高は22.5cmである。口径10.65cmを測り、口縁端部は外面が玉縁状に肥厚し、内面にゆるい凹面をもつ。体部の整形は外面は格子状タタキののち粗いカキメを短軸方向に施す。内面は青海波紋の当て具痕が顕著に認められ、円盤状の閉塞部はユビ押さえにて固定を行っている。

4. ま と め

以上、大成古墳群・イリ遺跡の調査の概略について記してきた。今回の調査から明らかになった点、今後問題となるいくつかの点について述べ、まとめとしたい。

a. 大成18号墳の構築過程

大成18号墳では墳丘・石室とも完全に除去する調査を実施することができた。その結果、古墳の構築過程を明らかにすることができたと思われる。

古墳構築に当たって、まず、周辺部の整地が行われたものと考えられる。周溝基底部の掘削作業との前後関係は明らかではないものの、墓壙周辺を平坦に整形していることから、まず、地山を整形して平坦面を作り出したものと判断される。墓壙の掘削後、石室基底石の搬入がなされたものと考えられる。石室基底部の据え付けは墓壙底部に溝状の据え付け坑を掘削し、小形の板石で水平・垂直を調整しながら行っている。

石室基底部の据え付け後、墓壙の埋め戻し作業が行われている。墓壙は第23図8層までが大きな行程として把握できる。注目されるのはこの8層が、墳丘の盛土を兼用している点である。単に、墓壙埋め戻し過程としてではなく、墳丘端に24層をまず盛り上げていることから、この段階から意識的に墳丘の構築を併行して実施していることが窺われる。

8層まで墓壙を埋め戻した段階で側壁2段目が搬入されたものと推測される。2段目以降は基底とは異なり、平積みもしくは小口積みによって行われたと考えられる。

2段目以降をある程度積み上げた段階で、墳丘盛土および側壁の裏込め土を兼用する7層が積み上げられる。7層上端で石室基底から約2mを測り、またほぼ水平に整えられているため、おそらくこの段階で天井石の架構がなされたものと推測される。

天井石架構後、墳丘上には一定の盛土(16・17・22層)が行われ、墳丘内列石が施される。列石は石室主軸と併行して人頭大の円礫・角礫を使用し、1～2段程度が積み上げられている。列石の機能については最終的に墳丘内に埋め込まれてしまうため外部表飾的なものではない。土留めの機能を持つ可能性もあるが、現状では不明とする以外ない。

墳丘内列石の構築後、外護列石の基底部分が据え付けられる。この外護列石は、墳丘の外部表飾としての機能をもつが、同時に、墳丘盛土の土留めの機能を有すると考えられ、これ以降、墳丘盛土は角度を急にし、視覚的に高く積み上げることが可能となる。墳丘盛土の積み上げと併行して外護列石は施工され、最終的な墳丘が完成したと判断する。

b. 石室の構造

今回調査を実施した2基の石室は残存状況が悪く、その形態を明らかにすることはできなかったが、部分的に遺存する部分から両者の特徴について考えたい。

大成17号墳における石室石材の使用状況は、奥壁を1石の鏡石として用いるのではなく、玄室幅の4/5程度の大型石材と小型石材を用いる点、基底から2～3段は垂直に積み、その上段からゆるやかに持ち送りを行う点など大成8号墳の構築方法と共通する要素が多い。こうした点からみて、大成17号墳は大成8号墳の系譜上にある畿内型横穴式石室と判断する。

大成18号墳は基底部に板石を腰石状に据え付ける点が特徴的である。残念ながら大成18号墳は石室の大部分が破壊されており、その全容を把握することはできなかったが、石材抜き取り痕および、石材据え付け溝の形状から見て、右側壁および奥壁に関しては大部分が腰石を使用していたことは間違いない。こうした石材の使用方法は北部九州系の横穴式石室に認められるものと解されており、同様の石室構築法をとるのは丹後半島では、加悦町入谷A-1号墳や、野田川町霧ヶ鼻10号墳など導入期の横穴式石室に見られる技法である。こうした点から大成18号墳は北部九州系横穴式石室の影響をもつ可能性が指摘できる。

c. 周辺部の横穴式石室墳との関係

以上のように、今回新たに調査を実施した2基の石室墳を加え、大成古墳群は総数18基の古墳から構成されることが明らかとなった。また、同一丘陵内に位置する片山古墳群(3基以上)を含めると、20基を越す横穴式石室墳から構成される古墳群であるといえる。

この地域での最大規模の石室は片山1号墳である。石室は南に開口する左片袖式横穴式石室である。石室内の土砂の流入が著しく詳細は不明であるが、河口域最大の規模を有する。仮に、袖部高が大成8号墳と同一と考えた場合玄室高は大成8号墳同様約3mを測ることとなる。築造時期を決定づける遺物がないものの、左片袖式である点、大成7号墳とほぼ相似形(約1.37倍)の玄室平面プランを有すること、玄室の大型化が進行していること、現状で認められる側壁の持ち送りが弱く垂直に近いことなどから大成7号墳よりは新しく、大成8号墳よりは先行する時期、TK10型式新段階もしくはTK43型式併行期の築造と考えておきたい。また、片山2号墳は両袖の石室と見られており、1号墳に後出するものとみられる。3号墳もまた1号墳に後出する可能性が高く、これら3基の石室墳は一連の系譜のものとみられる。

大成古墳群中では、大成7号墳(TK10型式新段階)→8号墳(TK43型式)→9号墳(TK217型式)と続く一群が半島状に突き出た丘陵頂部に築造される。いずれも畿内系石室の系譜を引く。

一方、今回の調査地では大成16号墳(TK43型式)→18号墳(TK209型式)→大成17号墳(TK217型式)の順で築造されたと判断されるが、大成18号墳はその特殊な石室から同一系譜にあるものとは考えにくい。未調査ではあるが、大成15号墳などが直接の系譜にある可能性がある。

以上のように、大成古墳群周辺の後期古墳は、TK10型式新段階併行期に造墓を開始し、TK43型式併行期には少なくとも3地区において併行して古墳が造営されていたものといえる。

一方、竹野川河口域でも、高山古墳群や上野古墳群などが大成古墳群とほぼ同時期に造墓を開始し、高山古墳群では総数15基、上野古墳群では総数12基におよぶ古墳群を形成するに至る。

竹野川河口域を中心とした丹後町域は丹後半島でも横穴式石室墳の分布密度の高い地域である。そして大成18号墳を除いて畿内型石室が主体となっている点も注目されよう。これまでに確認されている北部九州系・竪穴式横口系の横穴式石室はいずれも群内に先行する木棺直葬墳が存在し、墓域の共有・継続的な造墓活動を行っている点が指摘される。一方、丹後町域の畿内型横穴式石室墳は、群内に先行する木棺直葬墳がなく新たに墓域を獲得し、造墓活動を行っている点に注意される。この2者の差は、前者が在地から発展的に横穴式石室を受容したと見られるのに対し、後者は外部的要因から横穴式石室を受容していったと考えることが可能かと思われる。大成古墳群も後者に属し新たに墓域を獲得した集団と考える。

このように、今回の調査は丹後半島の古墳時代後期社会を復原する上で貴重な資料を提示したものといえよう。

d. イリ遺跡

古墳群造営後、平安後期までこの丘陵は土地利用がなされていなかったと思われる。平安後期以降のこの丘陵は、階段状の地形が造成され、掘立柱建物跡S B01のような小規模な建物が造営されたものと思われる。また、出土遺物中に一定量の輸入陶磁器類などが含まれることは竹野遺跡と同様の傾向であり、イリ遺跡もまた竹野遺跡の一部と考えることができよう。

中世末期にはテラス1が造成され、石造物群が安置されていく。おそらくは火葬墓としての性格を帯びていたものと考えられる。テラスの方向から見て、竹野遺跡を意識している可能性は高い。近接する地点に福蓮寺という小字があることや、過去の竹野遺跡の調査においても多数の一石五輪塔や石仏が確認されていることからみて、中世段階にこの近辺に寺院が造営されていた可能性は高い。掘立柱建物跡S B01などはこれら中世寺院の前身に関連した建物である可能性がある。

江戸時代以降には2次調査区西側谷部分を中心に階段状の地形が造成され、耕作地として利用されたものとみられる。これは、現在の竹野集落内の墓碑の年号が中世に遡るものが見られず、竹野遺跡の集落としての機能停止と連動して居住地域を移した結果によるものと判断する。

(石崎善久)

注1 調査参加者は以下のとおりである(順不同・敬称略)。

調査補助員 小笠原順子・村上計太・大月直子・山内彩子 **整理員** 藤村文美・戸根説子・陸田初代・丸谷はま子・井上聡・西脇夏海・久米政代 **作業員** 小西隆・難波武夫・吉岡明男・日下弘司・大下則之・吉岡辰男・吉岡均・安田義孝・吉岡孜・尾瀬昭夫・久下保利・尾瀬二三男・角江博
また、以下の関係諸機関・個人からご協力・ご教示を得た。記して謝意を表したい。
京都府教育委員会文化財保護課・京都府立丹後郷土資料館・丹後町教育委員会・丹後町立ふるさと古代の丘資料館・細川康晴・久保和明

2. たかの竹野遺跡・みや宮遺跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、竹野川河口域で計画された府営ほ場整備事業に伴うものである。京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長石井清司、同主任調査員田代弘が担当した。概要報告は田代が執筆した。平成14年10月23日、調査に着手し、同年12月20日に終了した。調査にあたっては、京都府教育委員会・丹後町教育委員会・京都府丹後土地改良事務所など関係諸機関、地元自治会などにご協力を得た。また、作業員として参加して頂いた方々、補助員の皆さんには、雨中、降雪の悪天候の中、作業に従事して頂くなど、ご苦勞を願った。記して感謝する。調査面積は約600^(市)m²である。なお、調査経費は、全額、京都府農林水産部が負担した。

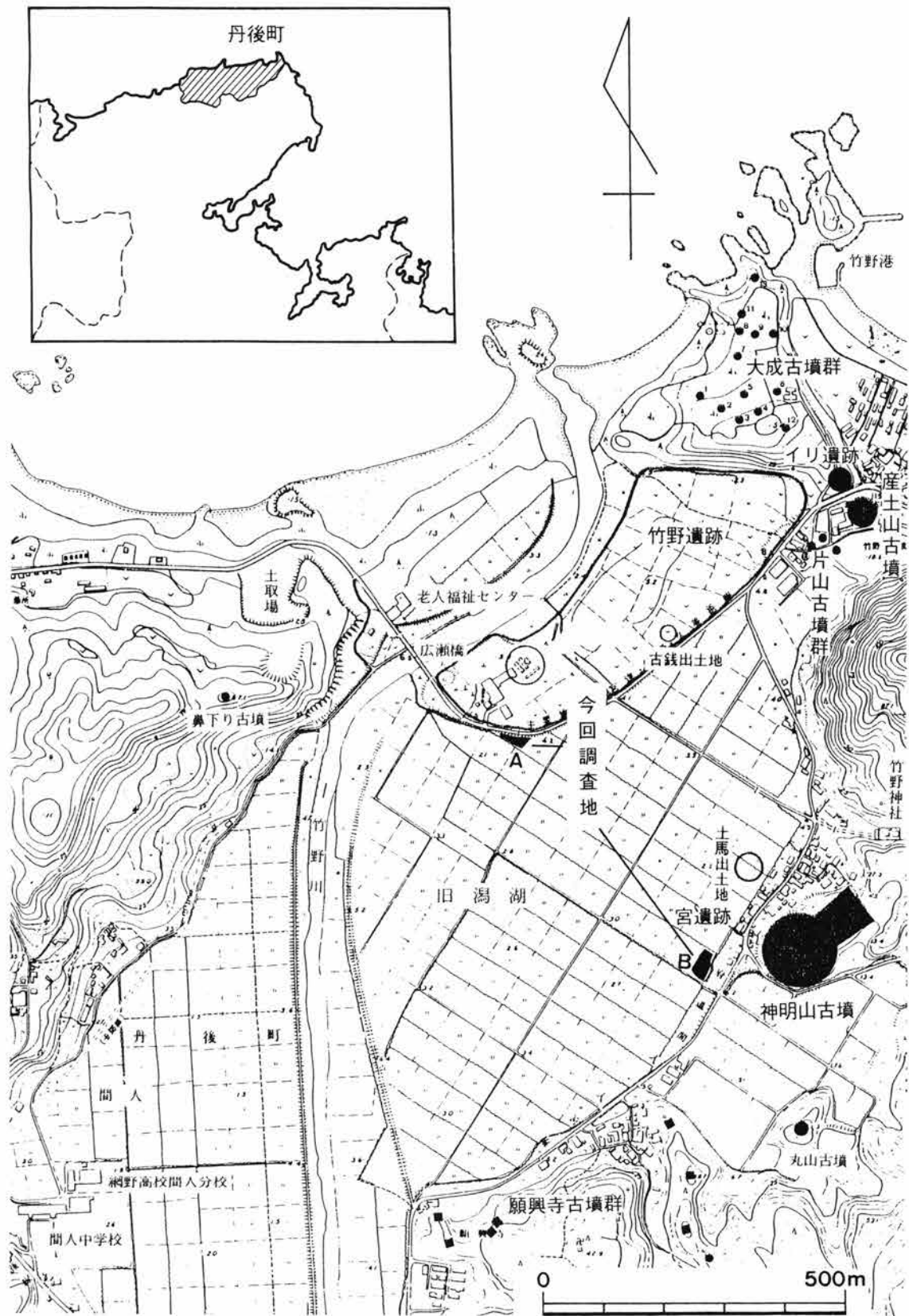
2. 遺跡の位置と歴史的環境

丹後町は、日本海に面する京都府最北端の町である。西は網野町、南は弥栄町、東は伊根町と境を接する。典型的な山陰型の気候であり、山林が町全体の64%を占める山がちな土地柄である。平野は河川流域と海岸部にわずかに展開する。海岸線は入り組んだりアス式海岸が続く、立岩、屏風岩、丹後松島など景勝地が多い。砂浜は、河川河口に形成されるのみで、あまり発達しない。町内を流れる主な河川は、竹野川、宇川、吉野川である。いずれも北流して、日本海に注ぐ。三河川の中で最も発達した沖積地がみられるのが竹野川流域である。竹野川は、丹後半島の中央を北流する全長約31km、流域面積約206m²の丹後半島最大の河川であり、流域の各所に沖積地を形成している。ここに報告する竹野遺跡・宮遺跡は、竹野川河口部の右岸地域にある。竹野遺跡は、竹野川右岸に位置する標高約3mから5mの砂丘上に営まれた遺跡である。行政区画では、竹野郡丹後町大字竹野小字古馬々・田中上・上馬々・野尻・野間上・福蓮寺にまたがる。東西約600m、南北約250mの広がりを持ち、遺跡は砂丘全域に及ぶと推定されている。

竹野遺跡は、縄文時代にはじまり、弥生時代前期から古墳時代にかけて盛期を迎える集落遺跡である。平安時代～中世にかけての遺物の散布が確認されているほか、寺院跡と推定される福蓮寺跡も遺跡の範囲内にあり、長期にわたり形成された複合遺跡といえる。

今回の調査地区は、遺跡の南端にあたる場所である。遺跡の南側を通る丹後半島一周道路と南方の水田地帯のちょうど境界に当たる。この水田地帯は、かつて潟湖があったところと推定されており、集落と潟湖の関係を明らかにする上で重要な地点である。

宮遺跡は、神明山古墳の南西に当たる地点である。奈良時代の土馬の出土地として知られる。竹野遺跡との位置関係は、潟湖推定地を挟んだ対岸にあたる。



第27図 調査地および周辺遺跡位置図

3. 調査経過

平成13年度、丹後町教育委員会は、土地改良事業対象地内で試掘調査を実施した。その結果、竹野地区と宮地区において遺物包含層、遺構などを確認した。この地点は、ほ場整備に伴う水路建設などの工事で、深部掘削による現状変更が予定されることから、発掘調査の必要が生じた。そこで、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受けて、当調査研究センターが調査を実施することとなった。

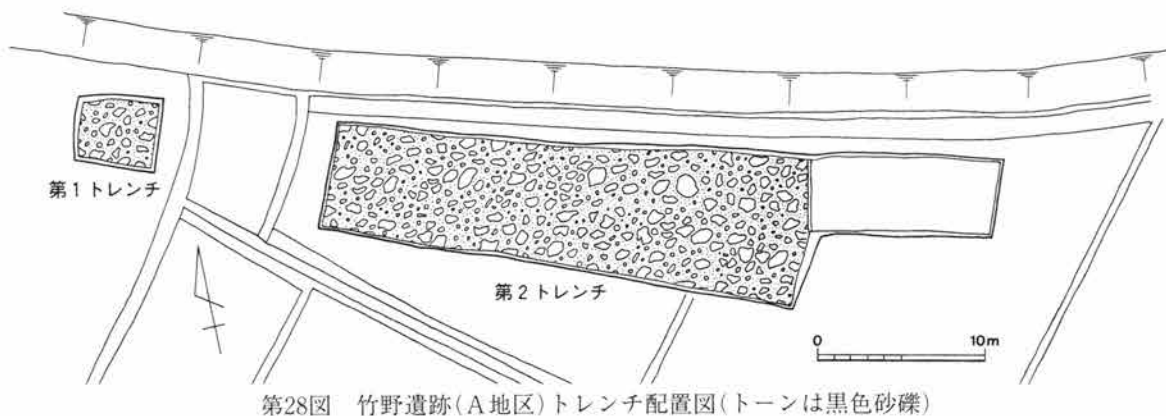
調査にあたり、竹野遺跡調査予定地区をA地区、宮遺跡調査予定地区をB地区とし、調査計画を立案した。掘削予定区画の縄張りをしたのち、重機を用いて荒掘りをした。一部を深く掘削し、各地区の掘削断面を観察し、土層堆積状況を検討した。そして、遺構面を覆う遺物包含層までを重機で除去することにし、それ以下を人力で掘削した(第32・33図)。

人力による掘削は、以下の工程で進めた。ひとつは、遺構を検出しやすくするために、機械掘削後の残土や掘り残しなどを取り除き、調査地を平滑に保つ作業、もう一つは、雨や周囲の水田から浸入する水に対処するための排水施設作りである。各トレンチにおいて以上の作業を行った後、遺構の精査に取りかかった。

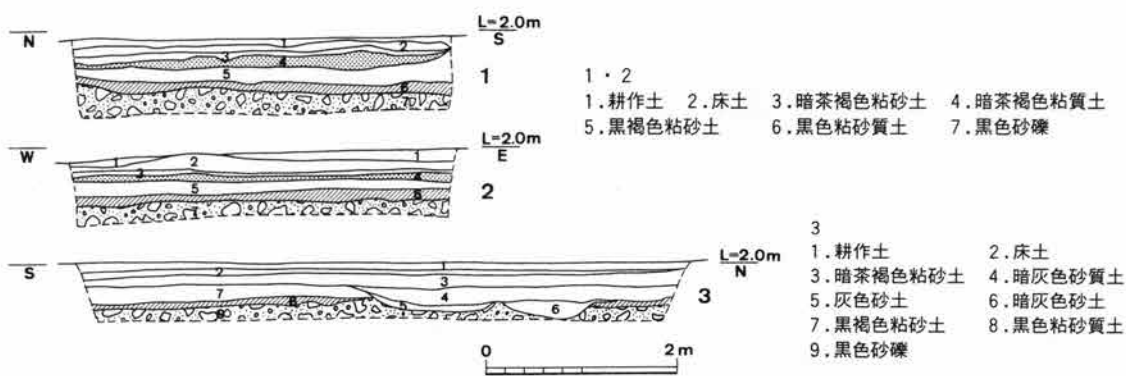
4. 調査概要

(1) 竹野遺跡(A地区)

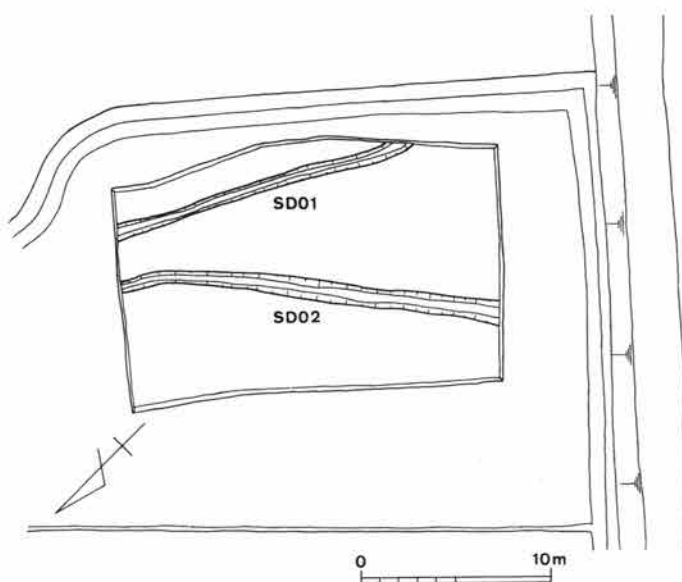
土層堆積状況 A地区の土層堆積状況(基本層序)は、以下の通りである(第29図)。上層から、



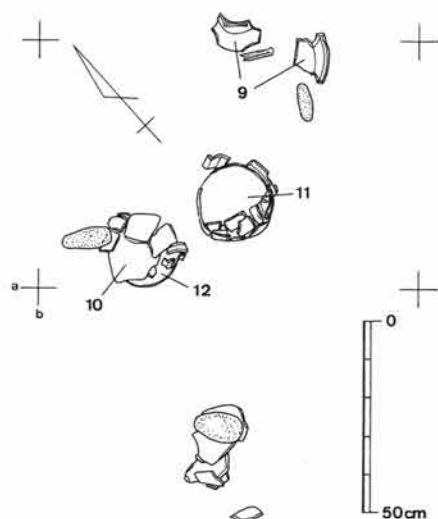
第28図 竹野遺跡(A地区)トレンチ配置図(トーンは黒色砂礫)



第29図 トレンチ土層断面図



第30図 宮遺跡(B地区)トレンチ配置図



第31図 溝SD02遺物出土状況図
(番号は第38図)

1：耕作土、2：床土、3：暗茶褐色粘砂土、4：暗茶褐色粘質土、5：黒褐色粘砂土、6：黒色粘砂質土、7：黒色砂礫である。遺物の包含が顕著であるのは、4層と6層である。4層は、弥生時代中期後半頃を最古として、古墳時代後期に至る土器が包含されていた。磨滅して細片となった資料が多い。6層は、弥生時代前期の土器包含層である。1・2点の縄文土器を含むほかは、土器は弥生時代前期後半ごろのものにほぼ限られている。7層は、拳大

から人頭大の垂円礫・円礫からなる砂礫層である。礫は安山岩・玄武岩系の黒色を呈するものが主体をなす。河川堆積ないしは海岸堆積物と考えられる。

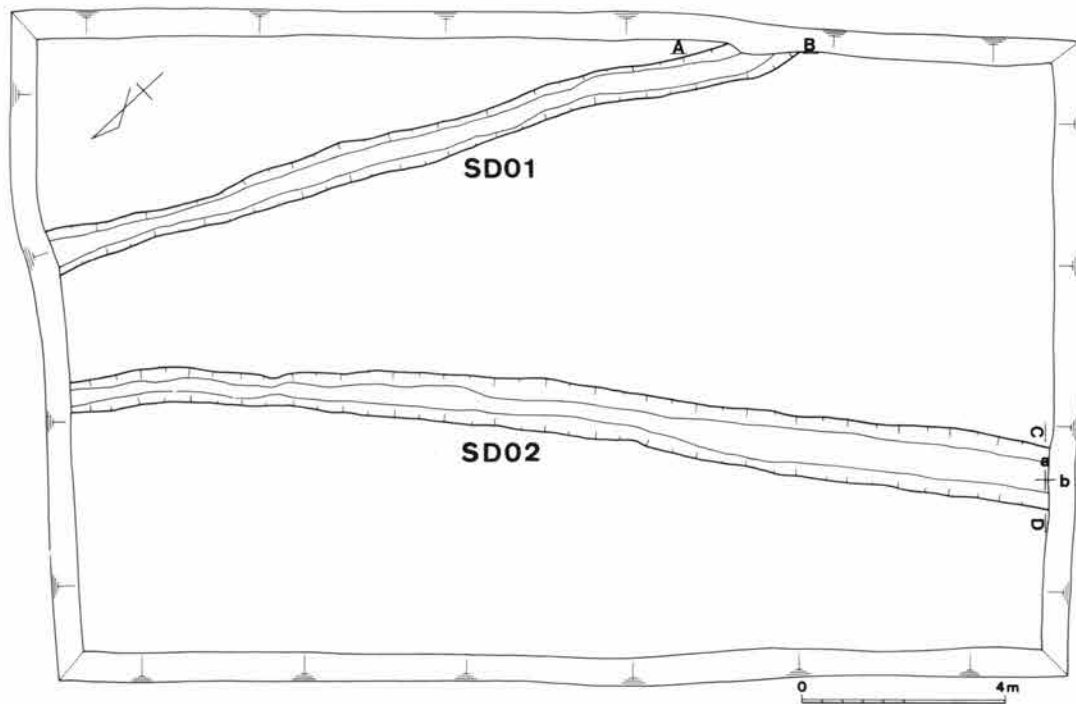
検出遺構 調査は、主に、第6層中の遺物を回収することと、第7層の性格を明らかにするための面的な検出作業に重点を置いた。その結果、この礫面は、調査地全面に及んでおり、弥生時代前期には地上に露出していたことがわかった(第28図、図版第26-3)。竹野遺跡の中心部がある砂丘縁辺に、洲浜状の礫面が広がっていた可能性が高まったのである。これは、弥生時代前期における、竹野川右岸ないし推定潟湖沿岸の一角の実情を示すものである。稲作文化導入期における竹野遺跡と周辺(竹野川河口域)



第32図 宮遺跡重機掘削風景



第33図 宮遺跡溝SD02掘削風景



第34図 宮遺跡(B地区)遺構平面図

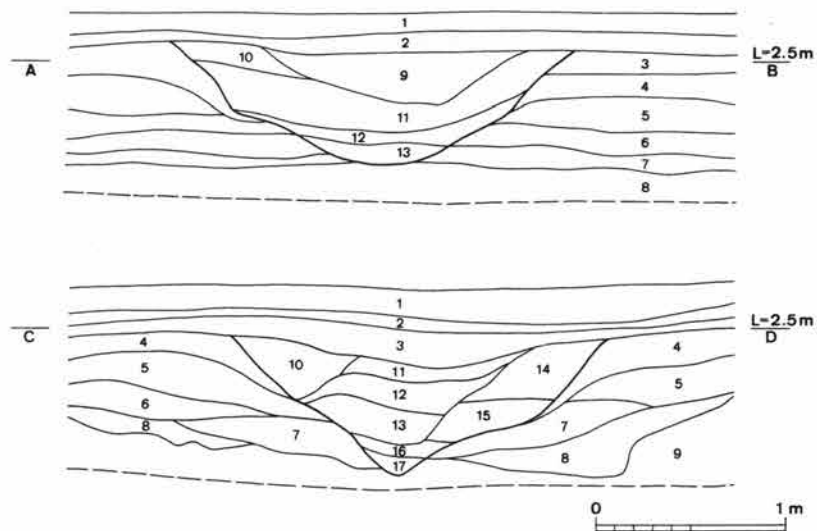
の景観復原に役立つ、意義深い成果といえる。

(2)宮遺跡(B地区)

土層堆積状況 基本層序は次の通りである。

1：耕作土・床土、2：黄色粘土、3：暗黄灰色粘土、4：黄色粘土、5：灰色粘土、6：灰褐色粘質土、7：灰色粘質土、8：黒色粘質土。8層の黒色粘質土以下は、暗灰色粘土と黒色粘質土が水平に交互に堆積している。

検出遺構 第4層の黄色粘土上面において、溝2条を検出した。東側の溝をSD01、西側の溝をSD02とした(第30・31



第35図 土層断面図

B地区SD01断面(上)

- | | | | |
|-----------------|----------|----------|-----------|
| 1：耕作土・床土 | 2：黄色粘土 | 3：暗黄灰色粘土 | 4：黄色粘土 |
| 5：黒色粘質土と灰色粘土の互層 | 6：灰褐色粘質土 | 7：灰色粘質土 | |
| 8：黒色粘質土 | 9：暗灰色粘土 | 10：暗黄灰色土 | 11：暗灰褐色粘土 |
| 12：暗灰色粘土 | 13：黄灰色粘土 | | |

B地区SD02断面(下)

- | | | | |
|------------|-------------|------------|---------|
| 1：耕作土・床土 | 2：黄色粘土 | 3：暗黄灰色粘土 | 4：黄色粘土 |
| 5：灰色粘土 | 6：灰褐色粘質土 | 7：暗灰褐色粘質土 | 8：灰色粘質土 |
| 9：黒色粘質土 | 10・11：暗灰色粘土 | 12：暗黄灰色粘質土 | |
| 13：暗茶褐色粘質土 | 14：暗黄色粘土 | 15：暗黄色粘砂質土 | |
| 16：暗灰色砂質土 | 17：黒灰色砂質土 | | |

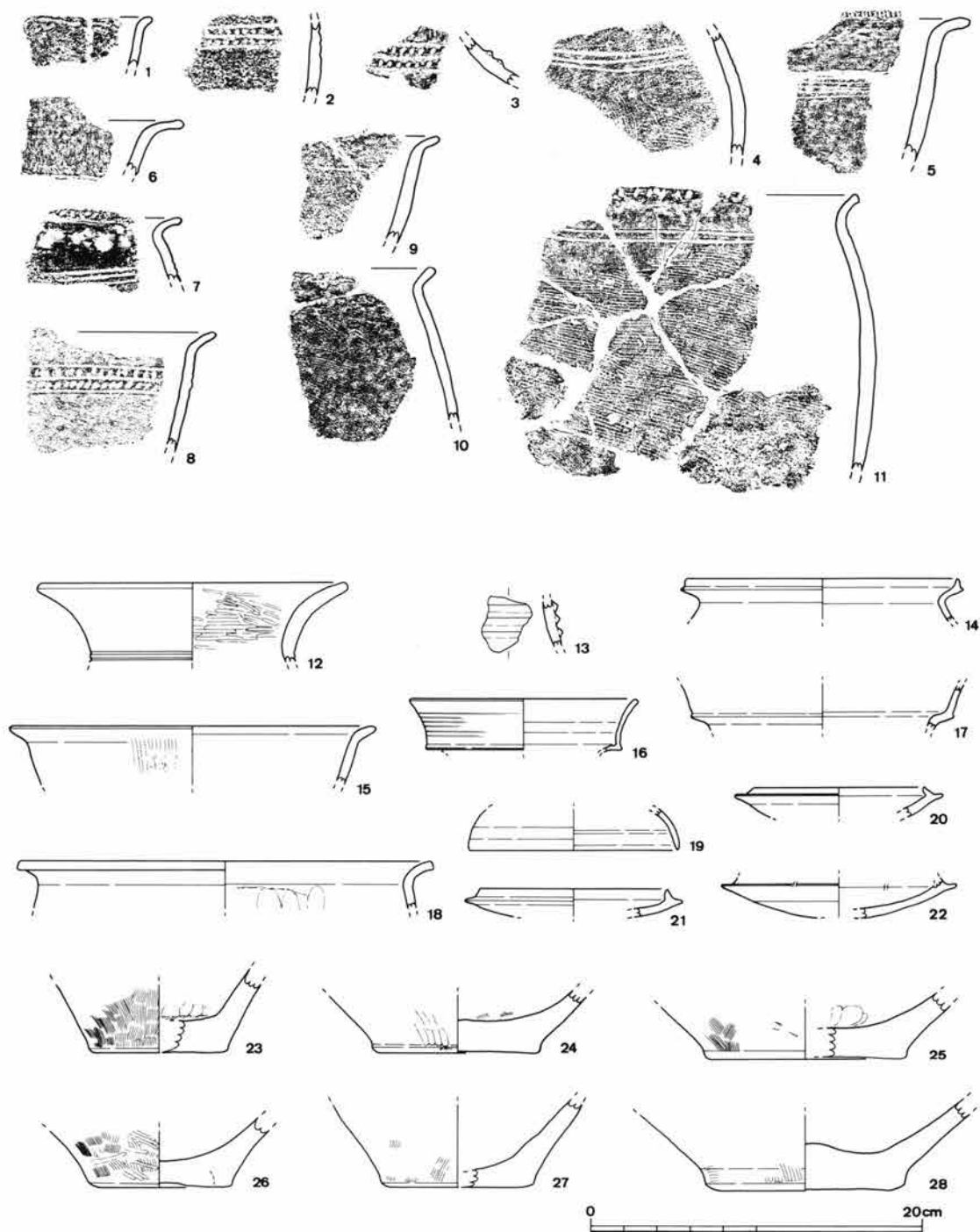
図)。土層断面図および溝埋土は第35図に示した。

S D01は、幅約2 m、深さ約0.6 m、長さ約20 mにわたって検出した。断面は、ゆるやかな「U」字形である(第35図上)。9層において土器を検出した(第38図)。

S D02は、幅約2 m、深さ約0.6 m、長さ約16 mにわたって検出した。断面は、ゆるやかな「V」字形である(第35図下)。11層と13層において土器を検出した(第38図)。

(3) 出土遺物

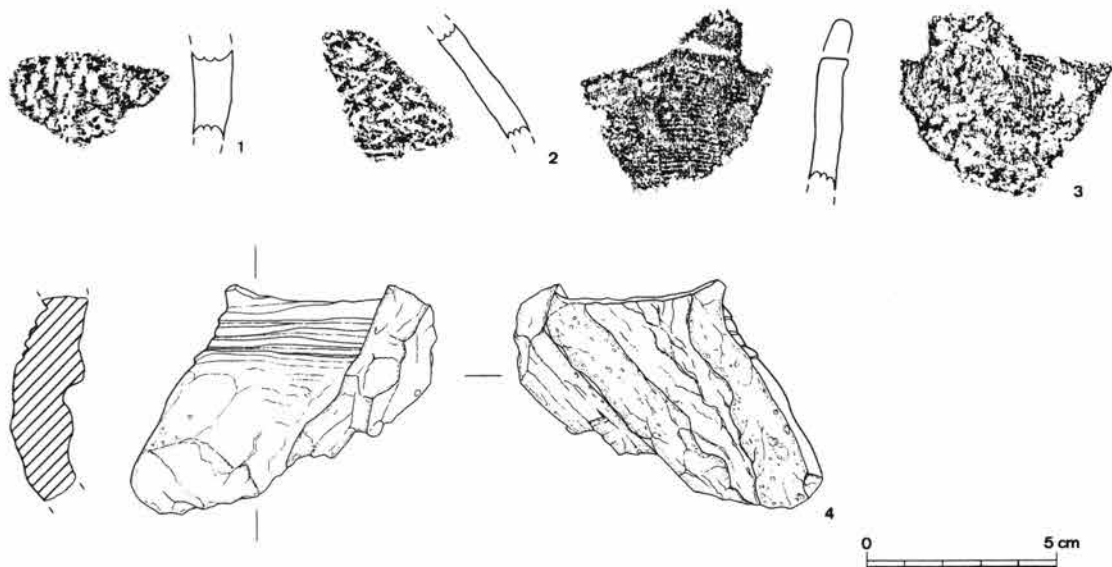
① 竹野遺跡(A地区)



第36図 竹野遺跡(A地区)出土遺物(1)

A地区では、2つのトレンチを設定して調査に当たった。それぞれ弥生時代前期から古墳時代後期にかけての遺物の出土をみた。層位が安定し、遺物の包含状況が明瞭であった第1トレンチの出土遺物を取り上げ、出土遺物の概要を記す。第1トレンチは、層位が水平で、安定した堆積状況を示していた(第29図1)。第4層(暗茶褐色土層)と第6層(黒色粘質土)に遺物の包含がまとまってみられた。第6層は弥生時代前期土器単純包含層に近い状況が見られた。土器は磨耗があまりみられず、器面の残りが良い。第4層は弥生時代中期頃から古墳時代後期にかけての土器が包含されていた。細片が多く磨耗した土器が大半を占める。

第6層出土遺物(第36図1～12・23～28、第37図1～4) 1～12・23～28は弥生時代前期に属する土器である。1・2、5～11は甕である。5～7・9・11は体部にヘラ描き直線紋が施されたものである。9は1条、11は2条、7は3条、5は6条以上と多条である。2・8は体部に3条のヘラ描き直線紋があり、直線紋の間に刺突紋を配している。甕は、体部外面をハケ調整、内面をナデ調整するものが多い。3・4・12は壺である。3は、貼り付け突帯が2条ある。突帯には刻み目紋が施されている。4は、体部に3条のヘラ描き直線紋、12は、壺の口縁部である。頸



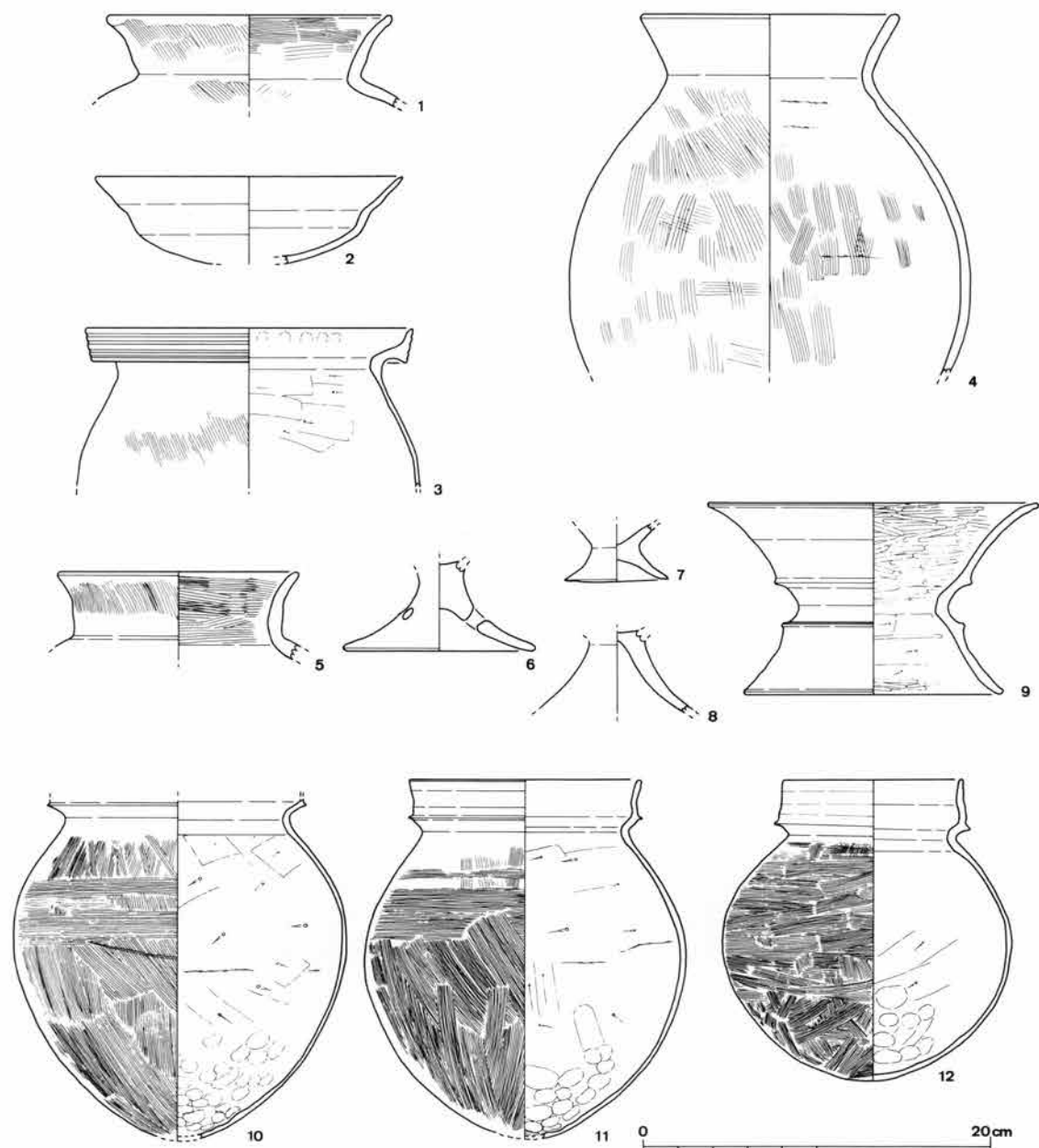
第37図 竹野遺跡(A地区)出土遺物(2)



第38図 被熱により変形した土器(第37図4)

部に2条以上のヘラ描き直線紋を施す。口縁部内外面をヘラ磨き調整する。23～28は壺の底部である。

第6層出土遺物の中で、特筆すべき遺物を第37図に示した。1と2は縄文土器とみられる土器破片、2・4は弥生土器である。1は、縄文の施された深鉢の体部破片である。3は、波条の突起があり、深鉢の口縁部とみられる。内外面ともハケ調整が施されている。2は、壺の体部破片で、ヘラ描きによる波状紋と直線紋が施されている。弥生時代前期に属するものである。4は、壺の口縁部である。頸部に4条のヘラ描き直線紋が施されており、弥生時代前期後半の土器である。この土器は、高熱を受けたとみられ、胎土が厚く膨れ上がり、スポンジ状を呈している。器体が溶解してガラス状を呈する部分があるほか、別の土器破片が器面に融着するなど、著しい変化が見受けられる。土器焼成や炊飯など日常の火力に伴う被熱では、土器に対してこれだけの変



第39図 宮遺跡(B地区)出土遺物

化を及ぼすことはあるまい。土器が溶解して気泡状を呈するに至るには、1,000度を超す高温が必要である。この土器の周辺でこのような温度を伴う作業(例えば金属加工など)が行われたのであろうか。興味深い資料である。

第4層出土遺物(第36図13~22) 13は、弥生時代前期壺の頸部である。貼り付け突帯が3条施されている。14は、端部に内傾する狭い面をもつ。弥生時代中期後半頃の甕である。15は口縁部が大きく開く鉢、18は大型の甕である。いずれも、弥生時代前期に属するものであろう。16は、弥生時代末期から古墳時代初頭頃の甕の口縁部である。6条以上の擬凹線紋が施されている。19~22は須恵器杯である。19は蓋、20~22は身である。口径は9~10cm前後を測る。古墳時代後期末期のものである。

②宮遺跡(B地区)

S D01出土遺物(第38図1・2・4) 1・4は壺である。いずれも直縁的に立ち上がる単純な形態の口縁部を有する。器体内外面をハケ調整する。古墳時代中期頃の土器であらうか。2は、二重口縁の高杯である。口縁部は外方へ大きく拡張されており、この形式のものとしては末期に位置づけられるものである。

S D02出土遺物(第38図3・5~12) 3・5~8は上層で出土したものである。5は、S D01出土土器(1)に類似するものである。6・8は高杯脚部である。6には円形の透かし孔がある。7は台付き鉢の脚部であらう。3は甕である。3は、口縁部に4条の擬凹線紋が施されている。体部外面をハケ目、内面をヘラケズリ調整する。弥生時代後期末頃の土器である。9~12は、溝底において一括出土した土器群である(第31図)。9は、鼓形器台である。口径19cm、器高11.1cm、底径14.7cmを測る。口縁部内面をていねいにヘラ磨きする。下半はヘラケズリ成形痕跡を残す。10~11は、甕である。10は口縁部が欠損するほかは、器体の残りがよい。尖底ぎみの丸底である。外面はハケ調整、肩部に横方向のハケを2・3条整然と施している。体部内面はヘラケズリ、底部付近に指頭圧痕紋が顕著に残る。11・12は、複合口縁を有する甕である。10の口縁もこのような形態をもつものと推測される。11は、器体の形が10と類似する。口径約13.3cm、器高約21.0cmである。12は、10と組み合うような状態で出土した。やや内傾しながら直立する口縁部と丸底が特徴的である。口径約10.3cm、器高約17.6cmである。10~12は、体部外面のハケ調整、内面のヘラケズリ、指頭圧痕など、製作手法上に共通点がみられる。10・11は、古墳時代前期初頭頃の山陰地域に広く分布する形式で、地元丹後で作られた土器には見られないものである。9の鼓形器台とともにこの方面から運ばれてきたもの(搬入土器)とみることができよう。

4. ま と め

今回の調査では、竹野遺跡と宮遺跡の2地区について調査を実施した。今回の調査地点は、竹野遺跡がある竹野川河口右岸の微高地と、内陸側にひろがる水田地域の境界部にあたる地点である。この水田地域は低位の沖積面であり、古代にはこの場所は潟湖であったとする意見がある。

今回検出した弥生時代前期の洲浜状の礫面は、潟湖の北岸にあたる可能性が考えられ、稲作導

入期における竹野遺跡周辺環境についての議論を深める上で重要な成果といえる。

宮遺跡で検出した溝は弥生時代後期末に遡る可能性があるが、掘削時期については明確でない。出土遺物からみて、古墳時代前期には機能していたと考えることができる。両者の関係については、第3層の観察結果から明らかである。S D01が第3層を切って掘削されていること、S D02が第3層以前に掘削されていることから、S D02が最初に掘られ、後にS D01が掘られたことがわかる。

(田代 弘)

注1 調査補助員 岩木庸成・小笠原順子 整理員 陸田初代・田中美恵子・木村悟

作業員 尾瀬昭夫・山崎義昭・難波武夫・今井重保・田中三郎・中江義延・井上初美・小西隆・吉岡辰男・中江勝彦・片山加代子・田中政利・中江知史

注2 京都府峰山高等学校史学部『竹野遺跡発掘調査報告書』 1968

京都府教育委員会『丹後大山墳墓群 京都府丹後町文化財調査報告第1集』 1983

丹後町教育委員会『丹後竹野遺跡 京都府丹後町文化財調査報告第2集』 1983

丹後町教育委員会『竹野遺跡 京都府丹後町文化財調査報告第3集』 1987

丹後町教育委員会『岩木遺跡 京都府丹後町文化財調査報告第4集』 1989

丹後古代文化研究会『竹野弥生遺跡』 1992

丹後町教育委員会『丹後町遺跡地図』 1995

柴暁彦「竹野遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

村田和弘「竹野遺跡第9次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

丹後町教育委員会『竹野遺跡発掘調査概要 京都府丹後町文化財調査報告第4集』 1996

丹後町教育委員会『史跡 産土山古墳発掘調査概報Ⅱ 京都府丹後町文化財調査報告第12集』

1997

3. ^{おおがき}大垣遺跡・^{いちのみや}一の宮遺跡・^{なんばの}難波野条里制遺跡 発掘調査概要

1. はじめに

大垣・一の宮遺跡は京都府宮津市大字大垣・難波野ほかに所在する。遺跡は景勝天橋立の北側一帯に広がる。

今回の発掘調査は、京都府土木建築部の依頼により、同部が計画・推進する国道178号府中道路新設改良事業(通称「府中バイパス」)に先行して、遺跡の実態を大まかに把握するために実施した試掘調査である。道路拡張部分および、道路新設部分に当たる総延長約2kmに対して、計15か所のトレンチを設定することとなった。現地調査は、調査第2課第1係長石井清司、同調査員石崎善久・村田和弘が担当し、本概要報告は石崎が執筆した。

調査は、平成14年9月18日に現地作業に着手し、フェンス工事・アスファルト切断工事などを行うとともに、重機掘削を開始した。重機掘削の終了とともに人力により掘削作業を行い、遺構・遺物の有無および、基本的な層位の把握を主目的として記録作業を実施した。また、調査の終了した地点については、適宜埋め戻し作業を行った。調査面積は約600㎡である。12月9日には地元の方々を対象としたスライド会を府中公民館にて行い約120名の参加者を得ることができた。平成14年12月20日には、全ての現地作業を終了し、備品などの撤収を行った。

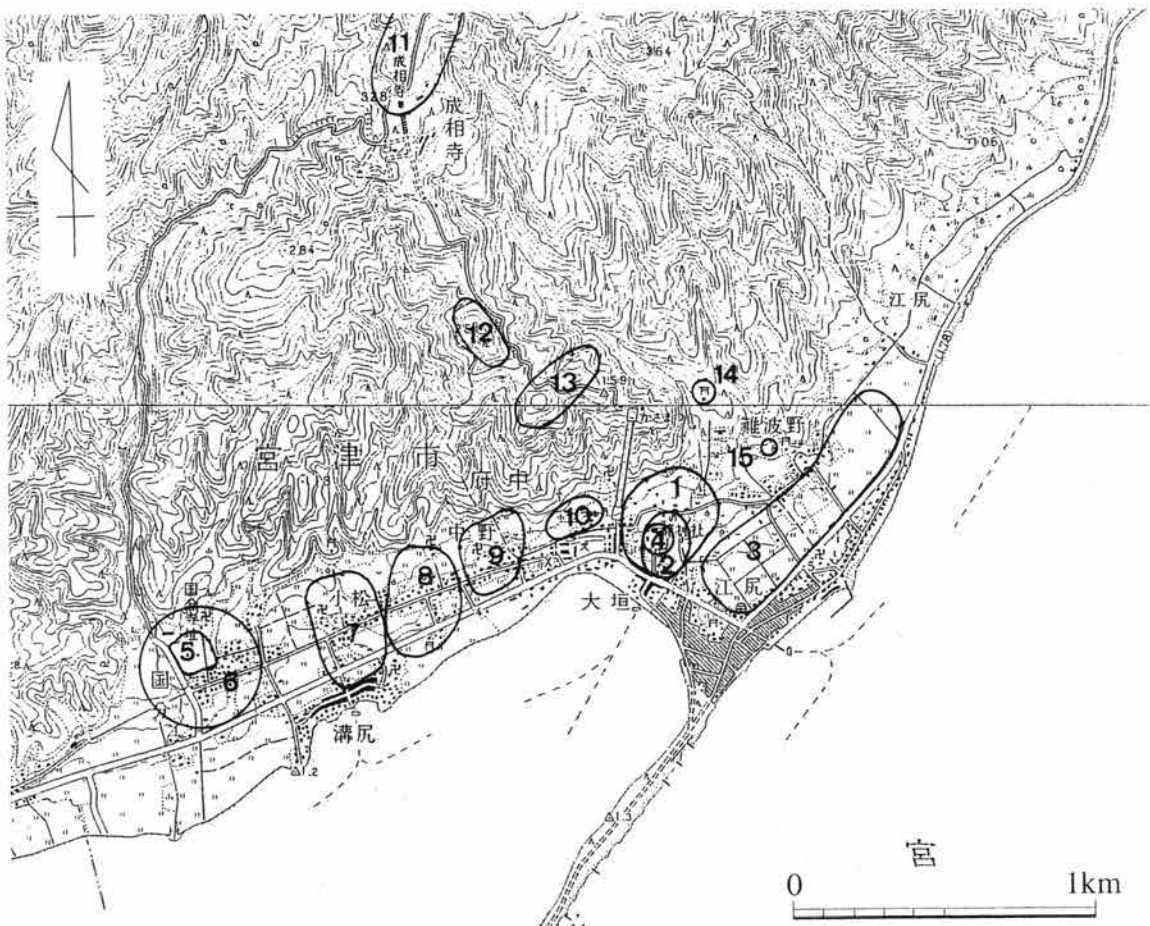
また、現地調査に関しては、関係諸機関・各個人のご協力・ご助言を得ることができた。記して謝意を表したい。^(注1)なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境

本遺跡は日本三景のひとつ天橋立の北側、成相山系と阿蘇海・宮津湾に挟まれた狭小な緩斜面上に位置している。本項ではこの遺跡を中心に、歴史的な環境を中心に概観したい。

大垣・一の宮遺跡は、丹後一宮である籠神社を中心に展開する中世集落遺跡とみられる。現状では、国道178号を中心として、土産物屋などが建ち並び、休日には各地からの観光バスで賑わうところである。難波野条里制遺跡は、国道178号をさらに伊根方面に進み、現在の江尻集落の西側で水田地帯に位置する。この一体の水田畦畔は現在でも方1町(約109m)四方の区画が認められる部分があり、条里制施行に伴う条里制地割りの可能性が指摘されてきていた。

阿蘇海沿岸域には縄文時代から室町・江戸時代にわたる遺跡・墳墓などが濃密に分布しているが、この地域が府中と呼ばれるのは丹後国府が設置されてからのことである。丹後国府の正確な位置は未だ明らかではないものの、候補地として中野遺跡があげられる。この遺跡からは奈良～室町時代にかけての多数の遺構・遺物が検出されている。中でも、輸入陶磁器類の多さは阿蘇海



第40図 調査地位置図および周辺主要遺跡等分布図(国土地理院1/25,000日置・宮津)

- | | | | |
|-----------|-------------|---------------|---------------|
| 1. 大垣遺跡 | 2. 一の宮遺跡 | 3. 難波野条里制遺跡 | 4. 籠神社(籠神社経塚) |
| 5. 丹後国分寺 | 6. 国分遺跡 | 7. 小松遺跡 | 8. 安国寺遺跡 |
| 9. 中野遺跡 | 10. 慈光寺跡 | 11. 成相寺旧境内 | 12. 阿弥陀ヶ峰城跡 |
| 13. 今熊野城跡 | 14. 真名井神社経塚 | 15. 難波野千体地藏遺跡 | |

周辺の遺跡でも群を抜いている点が注目される。しかしながら、現在でも、この遺跡を国府あるいは丹後国分尼寺とするには決め手に欠けており、今後のさらなる調査が期待されるところである。最近では小字の検討から、中野遺跡に隣接する小松地区を国府の候補地とする見解も出されている。

丹後国分寺跡は、現在岩滝町との町境付近に礎石・基壇などが残されているが、この遺構群は創建時のものではなく、『丹後国分寺再興縁起』に記される再建金堂(1326～1334年)であり、創建時の遺構については未だ確認されていない。

こうした古代律令国家により主導され、造営された遺跡を中心に、この地域は物流の拠点として繁栄してきたものとみられるが、もう一つ注目される存在として、延喜式名神大社・丹後国一宮である籠神社があげられる。籠神社には海部氏系図が伝わっているほか、境内から経塚が検出されている。経塚には銘文を有する銅製経筒が納められ、文治四(1188)年、采女秋重などが法華経を納めたことが記されている。また、同時に銅鏡2面が検出されている。経塚は籠神社経塚のほか、真名井経塚が近隣に位置する。

また、山岳寺院である成相寺は平安後期に創建されたものと伝えられ、現在も古本堂と呼ばれる地区を中心にテラス状の地形が多数見られる。このほかにも、成相山系には中世山城として、今熊野城跡、阿弥陀ヶ峰城址などが確認されている。

こうした遺跡以外にも、中世府中を知る手がかりとして注目されているのが雪舟等楊(1420～1506?年)筆『天橋立図』(1501年筆?)である。天橋立を中心に当時の府中の町並みの様子が詳細に描かれている。この絵画資料に記されている地名は、現在も小字にみることができ、今後の調査に大きな手がかりを与えるものとする。

3. 調査概要

今回は、1～15トレンチまで15か所のトレンチを設定した(第41図)。市街地を中心とした大垣地区(1～12トレンチ・第42図)と、水田耕作地を中心とした難波野地区(13～15トレンチ・第44図)の2か所に大きく分けて捉えられる。この2つの地区は現在の真名井川付近に成相山系から天橋立にむかう舌状の微高地が認められ、この微高地により地形的にも分断される。また、大垣地区は阿蘇海に、難波野地区は宮津湾にそれぞれ面しており、近接してはいるものの、地形的な差は大きい。以下、各トレンチの状況について概観する。

1 トレンチ 調査対象地西端に設定したトレンチである。重機掘削を開始した段階で、埋設管が検出されたため、部分的に掘削するに留めた。現地表から約1.3mまでは近・現代の盛土層であり、その下層に水田耕作土かと思われる暗灰色粘質土が確認された。現地表から約1.7m掘削した段階で安全上の問題もあり、掘削を断念した。

2 トレンチ 1 トレンチの東に設定したトレンチである。基本的な層位は、近・現代盛土層、水田耕作土層、暗褐色砂質土の順である。暗褐色砂質土は水性堆積土と推定され、磨滅した土師器が含まれており、中世段階の堆積層とみられる。なお、この包含層は東から西へ向けてわずかに傾斜する。

3 トレンチ 2 トレンチの東に設定したトレンチである。基本的な層位は2 トレンチと同様である。なお、暗灰褐色粘質土上で近世耕作に伴うと考えられる石垣状の遺構を確認した。

4 トレンチ 3 トレンチの東に設定したトレンチである。基本的な層位は3 トレンチと同じであるが、最下層から暗灰褐色細砂層を確認した。

5 トレンチ 4 トレンチの東に設定したトレンチで、基本的層位は3 トレンチと同様である。

6 トレンチ 5 トレンチから東へ約40mの地点に設定したトレンチである。基本的な層位は5 トレンチと同様であるが、暗褐色砂質土層の下層には、植物遺体の堆積土と考えられる暗褐色粘質土が認められ、さらにその下には、暗灰白色砂質土層が堆積していた。現地表から約2.6m掘削した段階で安全面を考え、作業を中断した。遺物は、3・4・6各層から、磨滅した土師器を主体に、貨幣、木製品、漆器などが出土した。

7 トレンチ 6 トレンチの東に設定したトレンチである。基本的な層位は6 トレンチ同様であるが、6 トレンチで見られた4層は薄く、植物遺体の含有量が少ない(4'層)。また、その下層

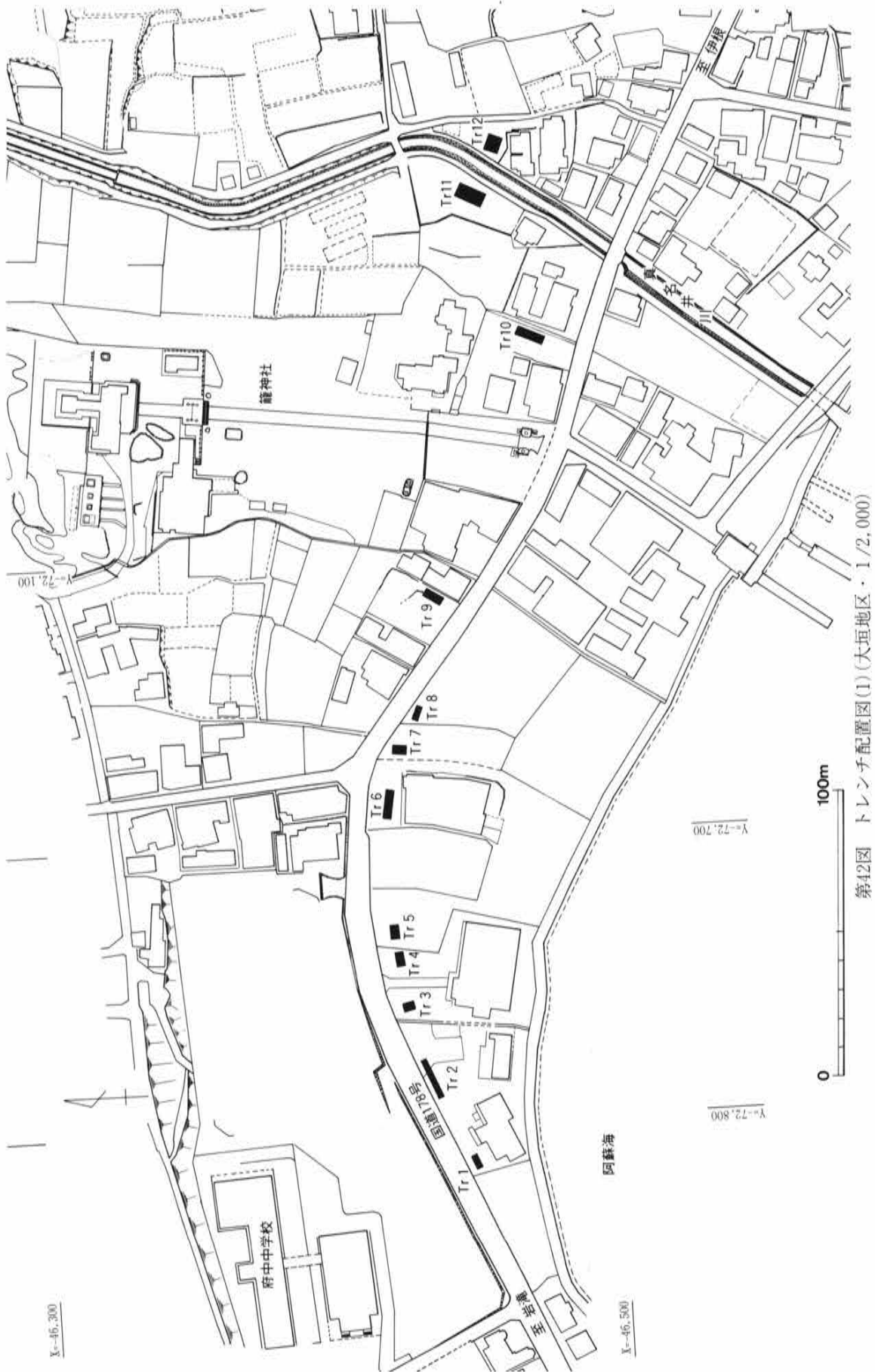


第41図 調査対象地およびトレンチ配置状況全体図
(宮津市発行 1/10,000宮津市全体図から作成)

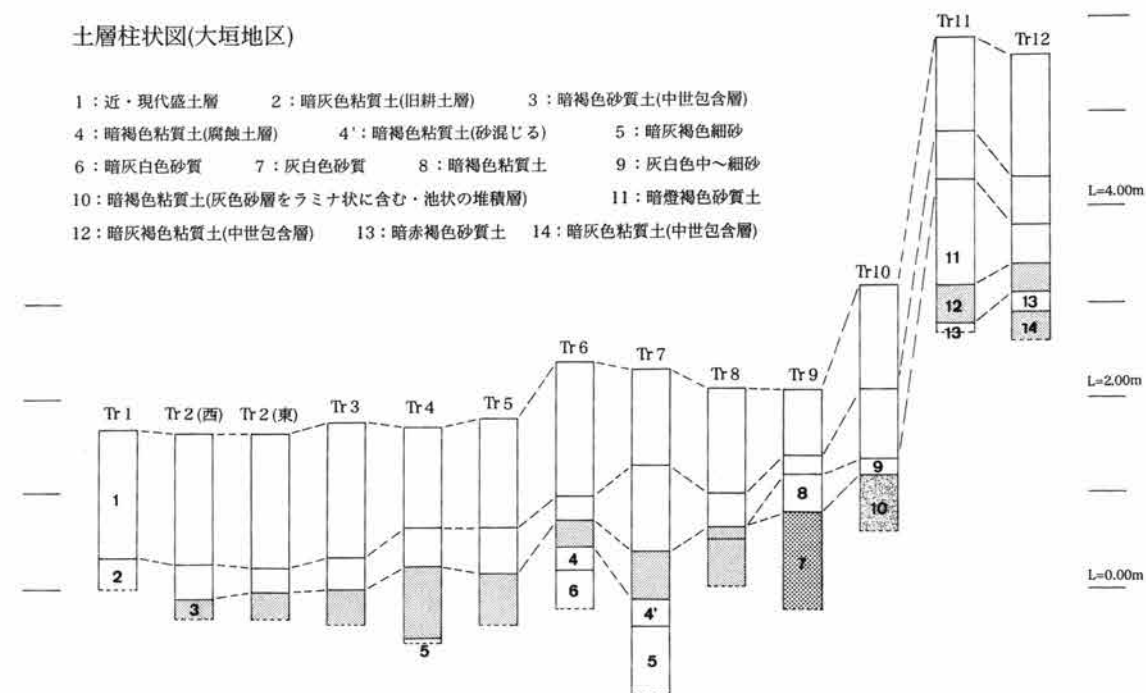
は暗灰褐色細砂層が形成されていた。遺物は3～5層の各層から出土している。特に4・5層中からは多くの漆器が出土している。また、少量ではあるが弥生時代後期の甕も出土している。

8トレンチ 7トレンチの東に設定したトレンチである。幅が狭く、また諸般の事情により重機掘削および断面観察のみに留めた。基本的な層位は2～7トレンチと同様であるが、下層については調査することができなかった。

9トレンチ 8トレンチの東、国道178号線の北側に設定したトレンチである。このトレンチでは、2層下部に暗褐色粘質土(8層)が堆積しており、この層上に南北に斜行する幅50cmの溝を3条確認した(図版29-(2))。溝の北東端が途切れていること、3条の溝が平行して掘削されていることから畑の畝に伴うものと判断される。この溝から出土した土器(第46図15・16)からみて、16世紀後半代の耕作痕と判断する。この下層は、灰白色砂質土層が堆積しており、中世段階の磨滅した土器群が含まれていた。この層に関してはその特徴から河川堆積土壌であるものと判断した。



第42図 トレンチ配置図(1)(大垣地区・1/2,000)



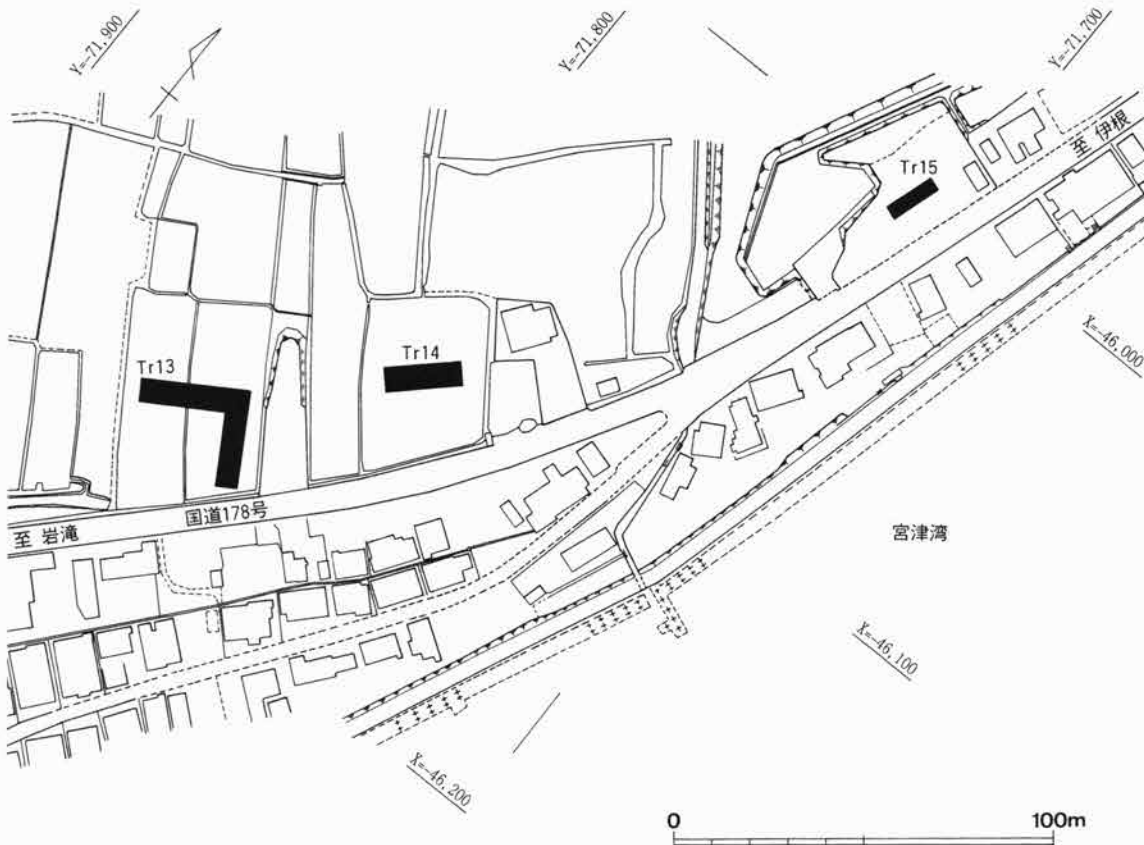
第43図 土層柱状模式図(1)(大垣地区)

10トレンチ 籠神社参道から東へ約30mの地点に設定したトレンチである。近・現代盛土層、旧耕作土層を除去した段階で、灰白色中～細粒砂(9層)を確認した。この層上からはピットおよび杭を検出した。出土遺物がないため、明確な時期については不明であるが、層序から見て9トレンチの8層に対応する可能性が高い。この下層は植物遺体を多く含む暗褐色粘質土と灰色砂層の互層(10層)が厚く堆積していた。その状況からみて、沼あるいは池状の地形に水が滞水する状況があったものと判断される。この層内からは多数の土器、木製品が出土している。また、ほかのトレンチに比べて、土器、木器とも完形に近い個体が多く、ほとんど磨滅していない点、木製品でも数百点におよび箸が出土した点が注目される。

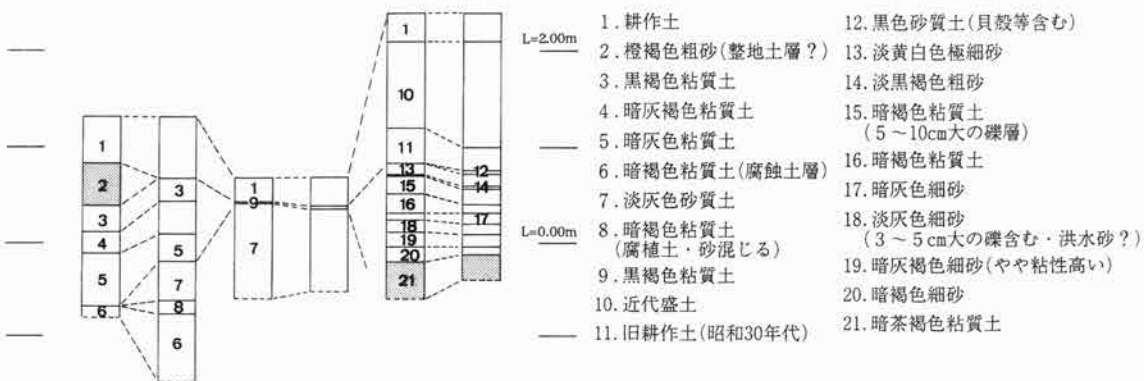
11トレンチ 10トレンチの北東、現在の真名井川の西岸に設定したトレンチである。このトレンチは近・現代の盛土層が非常に厚く、昭和前半の真名井川付け替え工事に伴うものと思われる。旧耕作土の下層には暗燈褐色砂質土が堆積しており、その下部に暗灰褐色粘質土(12層)が確認された。この層内から土師器、染付などが確認された。この遺物から見て15世紀後半～16世紀代の包含層と判断される。これ以上は安全性を考慮し、掘削を断念した。

12トレンチ 11トレンチの東、真名井川を挟んで設定したトレンチである。基本的な層位は11トレンチと同様であるが、12層の下層、暗赤褐色砂質土を介して、暗灰色粘質土(14層)が確認された。この層も遺物包含層であり、土師器皿のほか、開元通寶が出土した。

13トレンチ 基本的な層位は、第45図に示すとおりである。このうち2層内からわずかに中世の遺物が出土している。その下層である第3層上面には細い溝が平行して掘削されている部分が認められ、中世段階の耕作痕と判断した。また5層は植物性遺体の腐植土層と判断される。同層内には木製品の集積した部分があり、建築部材・杭材などがまとまって出土した(図版第30-(3))。



第44図 トレンチ配置図(2)(難波野地区・1/2,000)



第45図 土層柱状模式図(2)(難波野地区)

共伴した土器片から見て、弥生時代に遡る可能性がある。

14トレンチ このトレンチでは、現耕作土中に中世遺物が包含されていた。耕作土下部には厚さ約5cm程度の黒褐色粘質土が堆積しており、さらに下層は12トレンチで見られた淡灰色砂層(7層)が堆積していた。この7層上面で、いわゆる稲株痕跡と呼ばれる動植物の生活痕を検出した(図版第31-(1))。こうした状況から、中世段階の耕作土層自体は削平されているものと判断できる。

15トレンチ 14トレンチから約120m離れた地点に設定したトレンチであり、13・14トレンチとの層位的連続性は把握しがたい。中世の遺物は、16層および21層から出土している。また、17層は洪水砂と思われる砂質土層であり、この層を除去した段階で足跡を多数検出した(図版第31-(3))。

最下層の第21層は植物などの腐植土層とみられ中世の土師器を包含している。可能性としては13・14トレンチ同様、耕作地として土地利用がなされたものと考えられる。

3. 出土遺物(第46・47図)

今回の調査ではほぼ全てのトレンチから遺物を検出することができた。今回図示したのはその内の一部分である。

1は6トレンチ第4層から出土した土師器皿である。2～14は第7トレンチ4'層から出土したものである。8は黒色土器皿、11は丹波焼きの甕、12は土師器の脚、13は縄目タタキをもつ平瓦、14は細身の土錘、そのほかは土師器である。15・16は9トレンチ第8層上面の耕作溝から出土した。15は土師器皿、16は白磁碗である。17～45は10トレンチ第10層から出土した。17は青白磁合子、18～22は青磁碗である。なかでも21は細身の鎬蓮弁文を施している。23は口はげの白磁碗である。24～37は土師器皿である。28～30は底部に回転糸切りが認められる。38は底部回転糸切りの碗である。39・40は中空の台付土器であり、器台としての機能を想定できよう。41は台付土器の脚台部であり回転糸切りが認められる。42は須恵質の鉢、43は丹波焼きの鉢である。44は土師質羽釜、45は土錘である。46・47・51は12トレンチ第12層から出土した。46は中国製染付、47は土師器皿である。51は開元通寶である。48は14トレンチ第2層から、49は16トレンチ第21層、50は16トレンチ第16層から出土した土師器皿である。

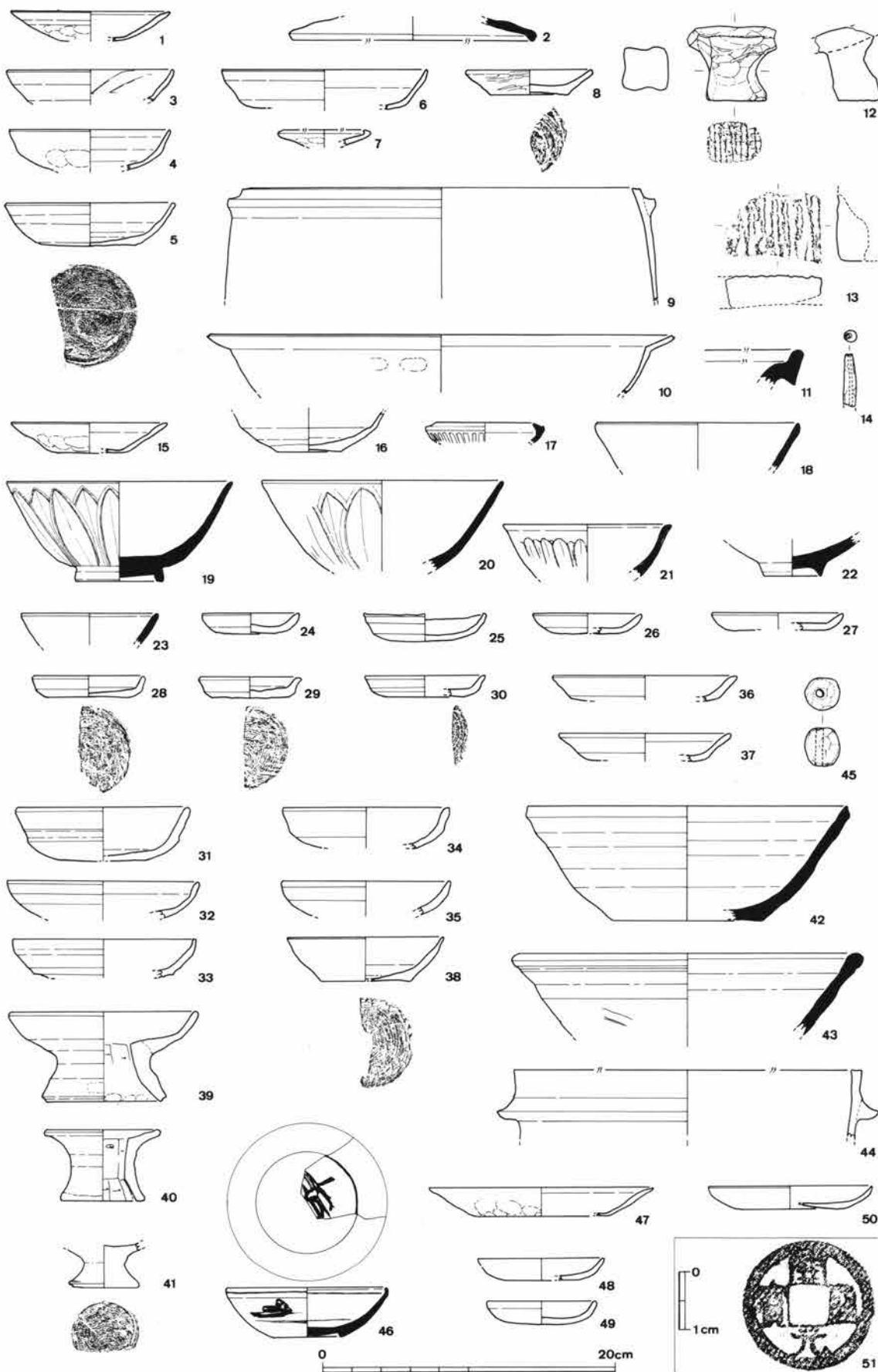
第8図には木製品を図示した。52は7トレンチ4'層から出土した草鞋の芯、53～55は7トレンチ第5層から出土したもので、53は組合式の把手、54は鳥形、55は把手状の木製品である。56～65は10トレンチ第10層から出土した。56は横櫛、57は曲物などの底材であろう。58は刀の形代と考えられるもので全長約30cmを測る。59は先端を削る棒状の部材、60～65は箸状のものを図示した。箸状木製品は数百点出土しているため全てを観察し切れていないが、両端を削る60～64のような個体のほか、65のように一端のみ削る個体も存在する。

4. ま と め

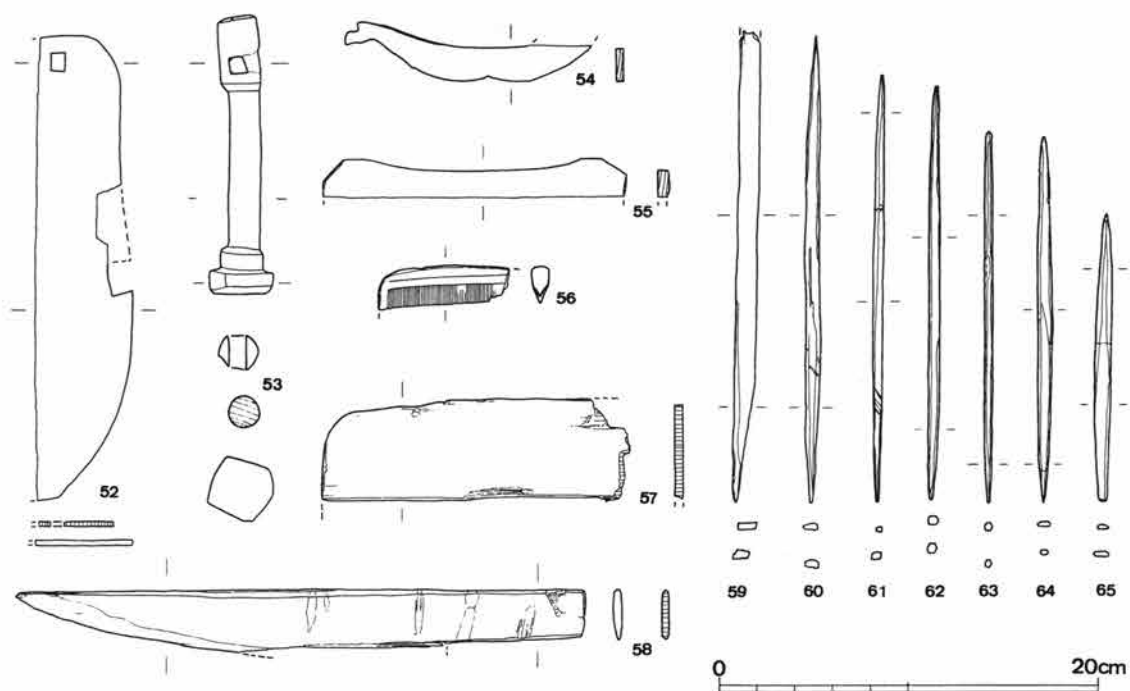
以上、今回調査を実施した各トレンチについて概略を記してきたが、明らかになった点を列記し、まとめとしたい。

大垣地区では、ほぼ全面にわたり、13～16世紀を中心とした包含層を確認することができた。

まず、大垣・一の宮における中世の包含層の面を比較すると、6トレンチ付近のみ標高0.6mとやや高くなっている点が注目される。この地区の周辺には小字「嶋堂」という地名が残されており、雪舟の『天橋立図』(1501年筆?)には半島状に突き出た地形の上に嶋堂が描かれている。また『成相寺参詣曼荼羅』(16世紀後半)にも、嶋堂は石垣に囲まれた半島上に描かれ、その東側に河川が描かれている。こうした絵画をもとに今回の調査結果を評価するならば、6トレンチは嶋堂の築かれた半島状地形に近接するものと判断され、8トレンチで確認した河道の痕跡と考えられる砂の堆積層は雪舟の絵に見られる「忘橋」と記された橋がかかる河川であると考ええる。



第46図 出土遺物実測図(1)



第47図 出土遺物実測図(2)

10トレンチで確認した沼状の堆積は、雪舟の絵や一遍上人絵伝に描かれた籠神社参道の東側に描かれた池に相当するものと考えられる。また、出土遺物には、輸入陶磁器類が比較的多く認められる点に注意される。神社もしくは大谷寺別当である大聖院に関連する遺物である可能性がある。籠神社参道の西側にも「菖蒲池」という小字が残されており参道を挟んで両側に池が存在した可能性がある。11・12トレンチでは包含層までが深く、遺構の有無については確認できなかった。

13～15トレンチでは中世段階には耕作地として土地利用がなされていたことが明らかになり、それ以前には湿地に小川が流れているような自然環境であったと判断する。中世の耕作地経営の開始後、この地区は現在に至るまで水田として利用されていたものと判断され、『丹後与謝海天橋立之図』（18世紀前半?）にもこの地区には水田が描かれている。

以上のように、限定された面積での調査ではあったが、広範囲にトレンチを設定した結果、予想以上に良好な形で、中世から近世にかけての遺構が遺存しているものと思われ、今後の面的調査に期待される場所である。

(石崎善久)

注1 調査参加者は以下のとおり(順不同・敬称略) 調査補助員 尾上忍・村上奈弥・山内彩子・大月直子
整理員 藤村文美・山本多美子・陸田初代・丸谷はま子・藤井矢壽子・久米政代・安田純子
作業員 桜井玲子・吉岡重則・平田祐子・中田由紀子・坂根宏紀・羽淵公人・岳崎巖・岡田代乃・井上喜代子

また、以下の関係諸機関・個人からご協力・ご教示を得た。記して謝意を表したい。

京都府教育委員会文化財保護課・京都府立丹後郷土資料館・宮津市教育委員会・杉原和雄・細川康晴・森正・安藤信策・伊藤太・福島孝行・中瀧陽太郎・東高志・椋平正盛・後藤幸男

4. 福^{ふく}知^ち山^{やま}城^{じょう}跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、福知山駅付近連続立体交差事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は京都府福知山市岡ノ二町に所在し、福知山市街地南東側の、J R山陰線旧切通踏切南東側に位置する。

福知山城は、塩見氏が築いた中世城郭の「横山城」の地に、明智光秀が丹波平定後に本格的な近世城郭を築城したことに始まるといわれている。その後、豊臣氏の時期には、杉原氏や小野木氏が入り、関ヶ原合戦以後の江戸時代には、有馬氏・岡部氏・稲葉氏・松平氏・朽木氏が入部して藩主となる。松平氏の時代の絵図によると、今回の調査地は「鷹部屋」と記された部分にあたるものとみられる。平成11年度には、今回の調査地の東側隣接地を調査し、「鷹部屋」の東側に記された「御泉水」の一部とみられる玉石敷遺構や板石敷遺構などを検出している。

今回の調査は、平成14年9月10日から開始した。調査面積は約130㎡である。まず、アスファルトおよび現地地表下約2mまでの盛土を場外搬出処分し、さらに遺構面までの重機掘削を行った。その後、人力により掘削精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。調査を終了したのは10月30日である。その間、10月23日に関係者説明会を実施した。なお、調査に係わる経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

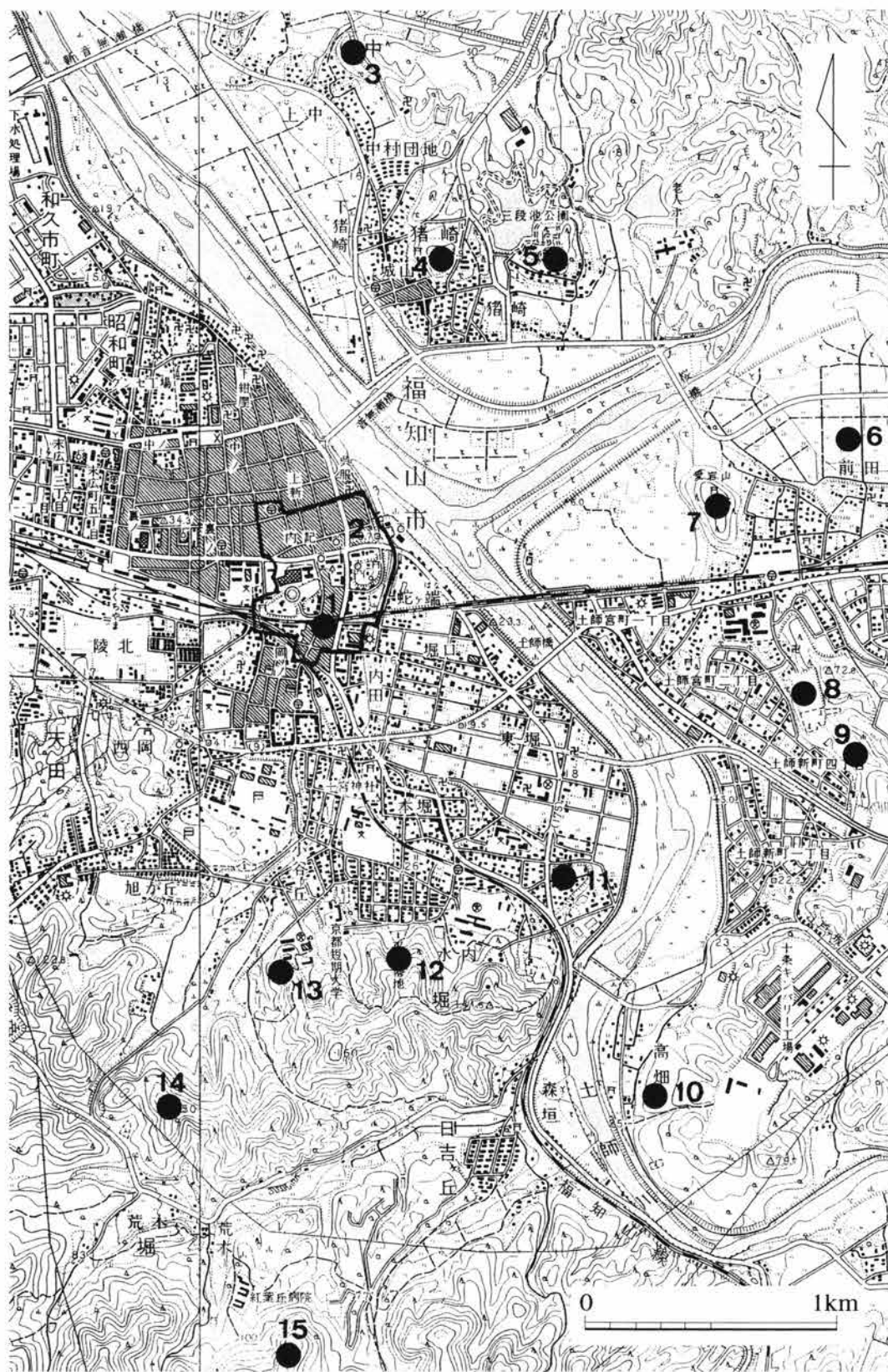
調査にあたっては、京都府教育委員会・福知山市教育委員会・地元岡ノ二町自治会、株式会社西田建設などにご協力いただいた。特に、福知山市教育委員会の八瀬正雄氏・大槻伸氏・塩見行雄氏、福知山市郷土資料館の崎山正人氏には、現地でご指導・ご教示いただいた。感謝したい。また、現地作業においては、福知山市シルバー人材センターにお世話になり、地元有志の方にご協力いただいた。あわせて感謝したい。

2. 調査概要

(1) 基本層序

今回の調査地の地表面の標高は20.3m前後である。この地表面から深さ約2.1～2.2mまでが近代以降の盛土である。この盛土中には福知山城に関連するとみられる近世瓦を含んでおり、旧陸軍関係や鉄道敷設などで削平された二ノ丸や内記丸などの排土が盛られたものとも考えられる。

この近代以降の盛土は、その中間に明治期の遺物を含む黒灰色シルトを挟んでおり、一時期その面が生活面であったことを示す。なお、今回の調査地の東側は約1.5m低くなっており、ほぼこの黒灰色シルト層の高さと一致する。ある時期、今回の調査地付近はその東側と同一の高さであったものとみられる。

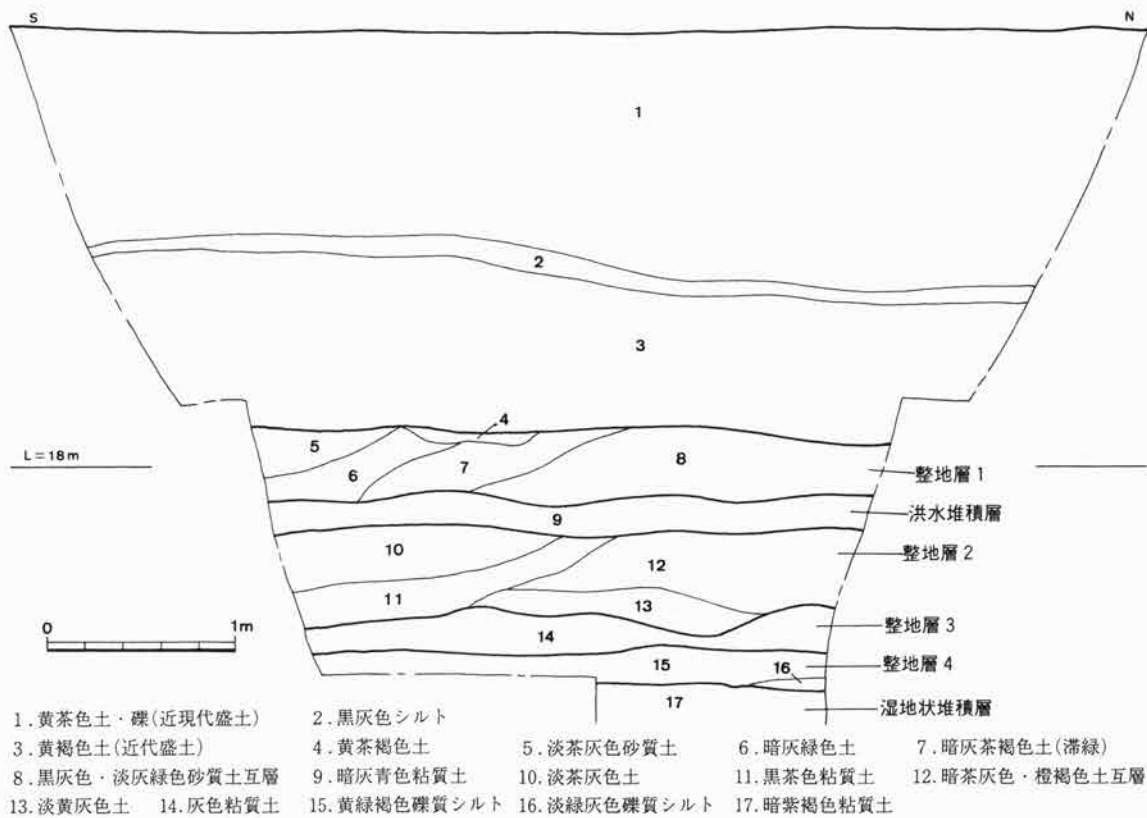


第48図 調査地および周辺城跡分布図(国土地理院 1/25,000福知山東部・福知山西部)

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 調査地 | 2. 福知山城跡 | 3. 中村城跡 | 4. 猪崎城跡 | 5. 将監遺跡 |
| 6. 前田坪内城跡 | 7. 愛宕山城跡 | 8. 土師城跡 | 9. 土師新町城跡 | 10. 高畑城跡 |
| 11. 水内城跡 | 12. 切岸山城跡 | 13. 荒神山城跡 | 14. 西山城跡 | 15. 荒木山城跡 |

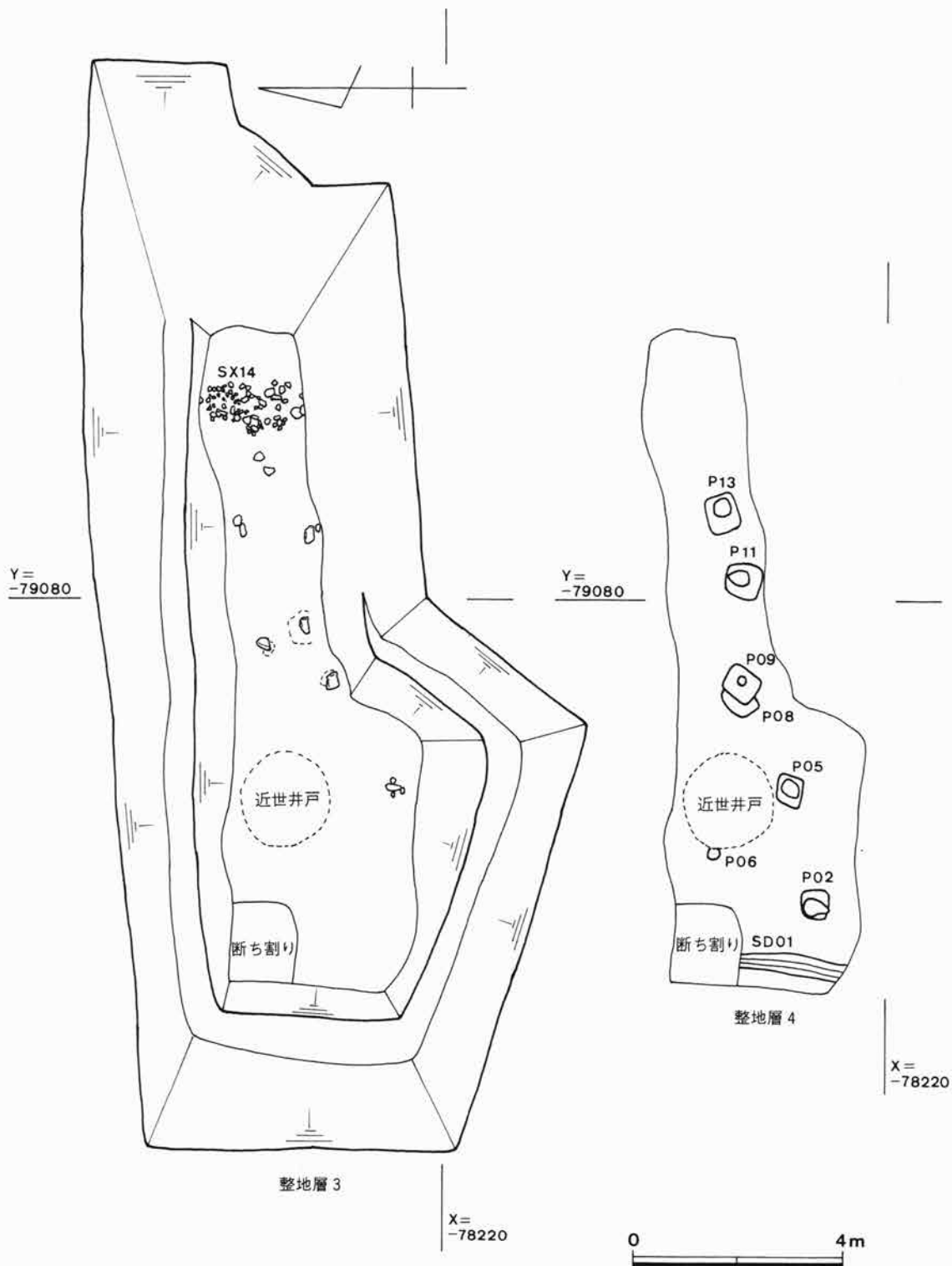


第49図 調査地位置図



第50図 調査地西壁断面図

近代以降の盛土層の下から幕末以前の4層の整地層を確認した。上層から整地層1～4とする。整地層1は層の厚さ約30～40cmで上面の標高は18.2m前後である。灰緑色系・茶灰色系の砂質土である。整地層2は層の厚さ約40～50cmで、上面の標高は17.7m前後である。茶灰色土が主である。層中から17世紀頃の遺物が出土している。この2層の整地層の間には、洪水などによるものとみられる厚さ15～20cmの暗青灰色粘質土が堆積しており、その中から18世紀後半～末頃の遺物



第51図 調査地平面図

が出土した。このことから、整地層 1 は 18 世紀末頃以後、整地層 2 は 18 世紀末頃以前のものと考えられる。この 2 層の整地層については上面で多少の地形の凹凸を確認したのみで、顕著な遺構は検出していない。整地層 3 は層の厚さ約 10～20cm で、上面の標高は 17.2m 前後である。土質は、灰色系・茶灰色系の粘質土やシルトである。上面からは、礎石とみられる石や礫敷遺構を確認した。整地層 4 は厚さ約 20cm で、上面の標高は 17m 前後である。土質は、淡緑灰色系・黄緑褐色系の礫質シルトである。この層の上面からは掘立柱の柱跡や溝を確認した。掘立柱の柱穴からは 17 世紀初頭頃の遺物が出土している。整地層 4 の下層は、湿地状の堆積とみられる暗紫褐色粘質土層で、層の厚さは 1m 以上になる。上面の標高は 16.8m 前後である。

(2) 検出遺構

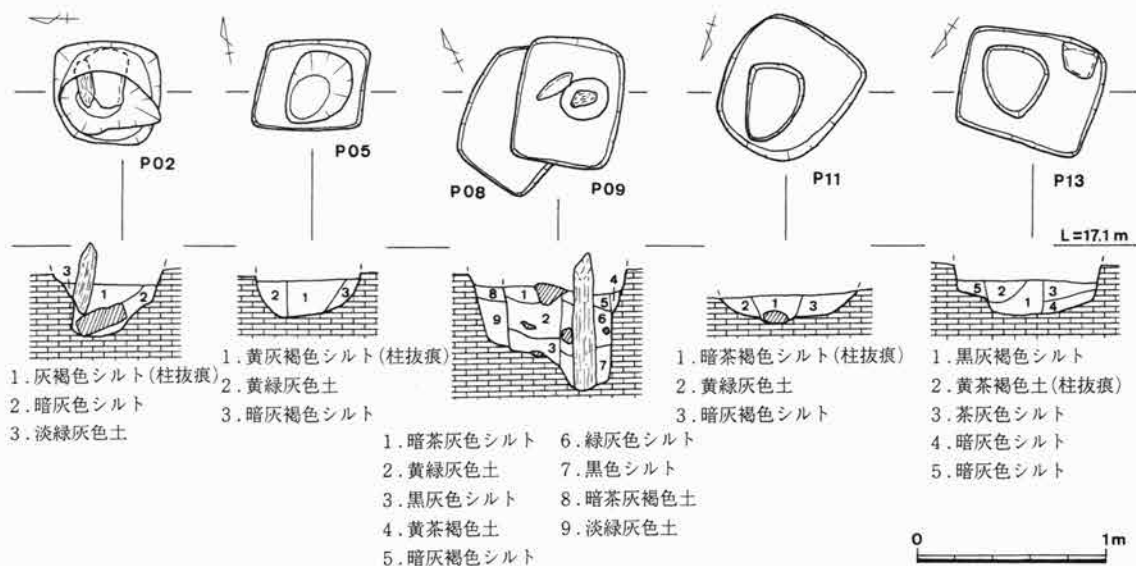
今回の調査では、整地層 3 上面と整地層 4 上面で遺構を検出した。しかし、調査地が狭く断片的な検出であり、具体的な様相を知るまでには至っていない。

整地層 3 上面検出遺構 この層からは、上記のとおり、礎石とみられる石群や礫敷遺構を検出した。これらは、調査地東半部に集中している。

礎石とみられる石は、ピット状の穴に礫を詰めて根固めした上に据えられている状況である。これらの石群が具体的にどのような構造物であったかは不明であるが、何らかの施設があったものとみられる。

礫敷遺構 S X 14 は、調査地東端部で検出した。人頭大から拳大の礫を、南北方向に幅約 70cm、高さ約 20cm に積み並べている。通路状のものの地業もしくは土塀などの基礎とも考えられる。やや屈曲しているようにもみられるので、あるいは園路のようなものか。

整地層 4 上面検出遺構 この層からは、掘立柱建物跡とみられる柱跡を、調査地壁面で確認したのもも含めて 8 か所検出した。柱跡は、一辺約 50～70cm の方形掘形であり、その中に直径 20cm 前後の柱を立てていたものとみられる。これらの柱跡の中には P 08 と P 09 のように切り合っているものがあり、建て替えがあったものと考えられる。また、P 02・05・11・13 には、柱を抜き取



第52図 柱跡実測図

った痕跡がみられる。P02では、抜き取りの際に折れ残った柱材の一部が礎盤状の石の上に乗っている様子がみられる。P09では、柱の抜き取りができなかったためか、上部を切断した柱痕が残る。これらの柱跡がどのような構造物を構成していたかは不明である。

溝 S D01 調査地西端部で検出した。南北に延びており、幅約30～40cm、深さ約18cmを測る素掘りの溝である。時期などを示す出土遺物はないが、層位的に柱跡と同時期とみられる。

3. 出土遺物

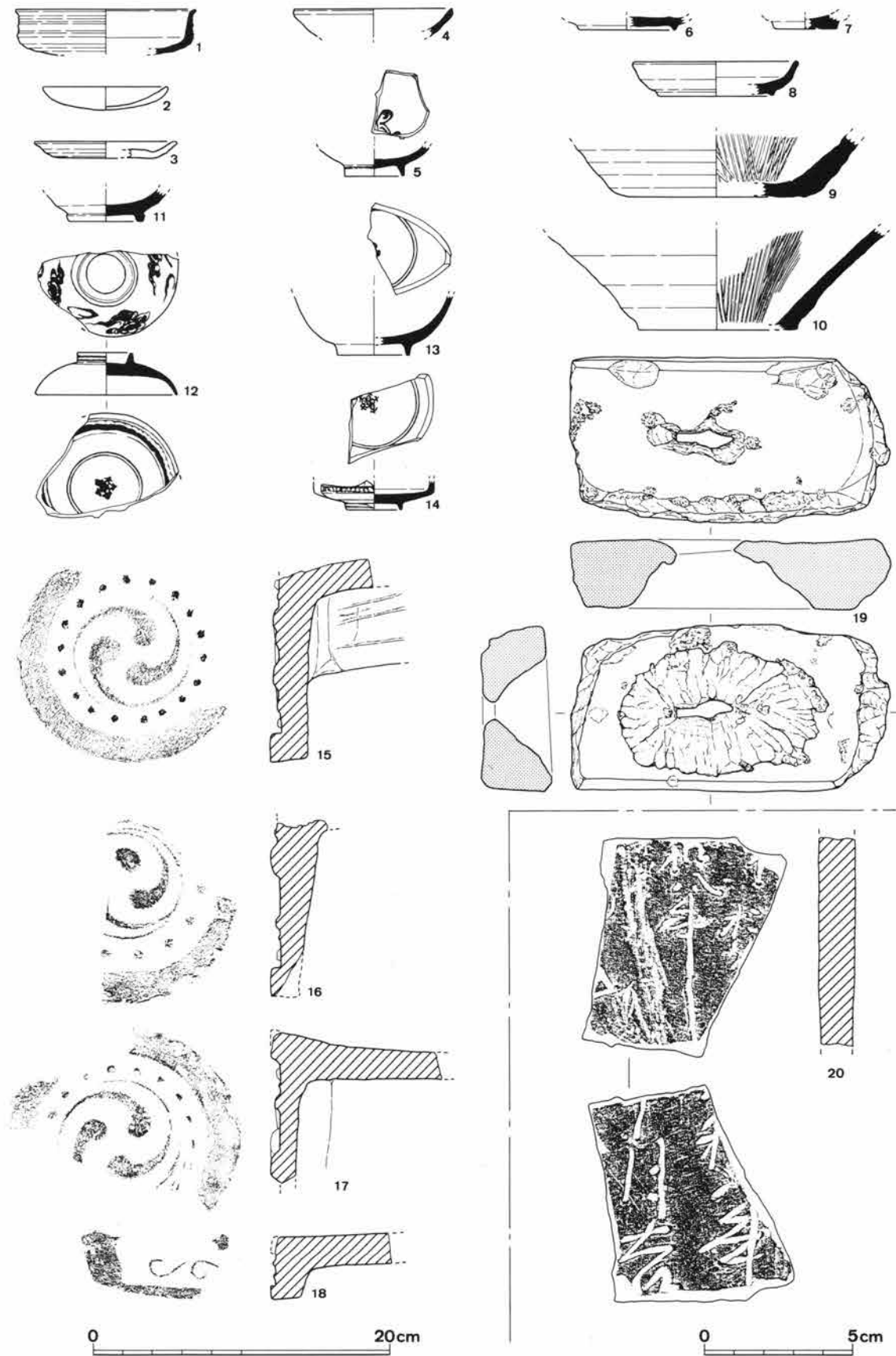
今回の調査で出土した遺物は、限られた調査地ということもあって、量的には少ない。内容は、瓦・陶磁器片が主なものである。

柱跡出土遺物 1は美濃陶器の黄瀬戸向付とみられる。体部外面に沈線文をめぐらす。底部外面は回転ヘラ削りする。口径12.2cmを測る。柱跡P02から出土した。2は手捏ねの土師器皿で、口径8.5cm、器高1.5cmを測る。柱跡P02から出土した。3は轆轤整形の土師器皿で、底部糸切りである。口径9.6cm、器高1.1cmを測る。柱跡P13から出土した。4は美濃陶器の志野丸皿とみられる。推定口径約10.6cmである。柱跡P05から出土した。5は粗製の中国製青花磁器碗で、高台径4.1cmを測る。柱跡P05から出土した。これらの柱跡出土遺物は、ほぼ17世紀初頭頃のものともみられる。

暗紫褐色粘質土層出土遺物 整地層4下層の湿地状堆積土と考えられる層の上部から出土した遺物である。6は美濃陶器の灰釉皿である。内面見込みは無釉で重ね焼きの痕跡が残る。高台内にも重ね焼きの痕跡がみられる。高台径6.6cmを測る。7は美濃陶器の天目碗である。高台は蛇の目状である。高台径4.4cmを測る。8は美濃陶器の灰釉丸皿である。口径11.0cm、器高2.4cmを測る。9は備前陶器の播鉢である。底径約12.0cmを測る。以上の遺物は、ほぼ16世紀末頃までのものとみられる。

整地層2出土遺物 10は丹波陶器の播鉢である。底径約10.8cmである。17世紀頃のものか。11は、肥前陶器の碗で高台径約5.0cmを測る。内面および外面体部に灰白色の薬灰釉を施す。17世紀初頭前後のものか。三巴文軒丸瓦(16)は、尾の長い三巴文をもつ。三巴文軒丸瓦(17)は、瓦当の復原径約15.6cmである。唐草文軒平瓦(18)は、瓦当の幅約4.5cmを測る。石製品(19)は、越前産の凝灰岩である笏谷石製と考えられる長方形の石材である。長辺に面取りがみられる。搬送時の重量を軽減するためか、底部から播鉢状に石材を削り取る。建物などの縁石として使用されたものか。瓦質塼(20)は、何らかの造作に伴う銘板とみられる。両面にヘラ書きの年紀が残る。両面とも同じ年紀とみられ、通読すると「□和八年十月吉□」とみられる。

暗灰青色粘質土出土遺物 整地層1と整地層2の間の洪水堆積とみられる層中から出土した遺物である。12は肥前磁器の碗蓋で、外面に飛雲文を描き、内面見込みにコンニャク印判の五弁花文を施す。口径9.6cm、器高2.9cmを測る。13は肥前磁器碗で、外面青磁・内面染付である。高台径4.8cmを測る。14は肥前磁器筒形碗である。内面見込みに五弁花文を描く。高台径3.2cmを測る。これらの遺物は、18世紀後半から末頃にかけてのものとみられる。



第53図 出土遺物実測図

近代盛土出土遺物 三巴文軒丸瓦(15)は、瓦当径約15cmを測る。丸瓦部内面に布目痕が残る。

4. 絵図からみた変遷

福知山城に関しては、明智光秀の築城以後、豊臣氏の時期の状況については、絵図などが残っていないため具体的な状況は不明である。慶長五(1600)年から元和六(1620)年まで在城した有馬豊氏の時期については絵図が残っている。それによると、以後に受け継がれる縄張りは、ほぼできているが、調査地周辺については書き込みがなく、空白である。調査地東側にあったとされる庭園も描かれていない。元和七(1621)年から寛永元(1624)年まで在城した岡部長盛の時期については、期間が短いためか、資料がない。

寛永元年から慶安元(1648)年まで在城した稲葉紀通の時期については絵図が残っており、調査地東側にあたる部分に「泉水」、調査地にあたる部分に「鷹へや」と記されている。慶安二(1649)年から寛文九(1669)年まで在城した松平忠房の時期については、絵図などがよく残っている。それによると、調査地に当たる部分に「鷹部屋」、東側庭園部分に「御泉水」と記される。庭園は、御泉水と敬称で記されており、藩主家関連の大名庭園である。それに隣接して記される鷹部屋も藩主家関連の鷹の飼育場のような施設であろう。

寛文九年に入部する朽木植昌以後、幕末まで朽木氏が藩主となる。朽木氏の時期の絵図では、調査地付近は「侍屋舗」と記され、庭園も描かれていない。ただ、明治2(1869)年の年紀入りの絵図には庭園が描かれている。これが幕末頃の福知山城を描いたものとすれば、いつの時期かに庭園が再度作られたのか、それとも朽木氏の時期の絵図に描かれなかっただけのことなのか不明である。朽木氏の時期には南側城郭外にあった武家屋敷を縮小して城郭内に収めている。

5. 小 結

今回の調査では、調査地付近に福知山城跡に関連する各時期の整地層が比較的良好に残存していることを確認した。これらの整地層のうち、まず整地層1は、上記のとおり18世紀末頃の洪水堆積とみられる層の上に盛土されており、それ以後の盛土とみられる。また、この層上には、廃藩以後の二ノ丸などの削平に伴う排土とみられる盛土がなされている。このような状況から整地層1は幕末頃の福知山城関連の層とみられる。

整地層2では、盛土内から「□和八年」の年紀が記された瓦質塼が出土している。江戸時代の「和」の付く元号で八年まで続くのは元和と明和である。このうち、明和八(1771)年は18世紀末近くであり、整地層2が洪水層に覆われた時期に近く、その頃には整地層2はすでに形成されていたとみるのが自然であろう。したがって、塼に記された元号は元和八(1622)年が妥当と考えられる。ほかにもこの層からは17世紀の丹波陶器擂鉢片などが出土しており、17世紀に形成された整地層とみられる。以上のことや以下の整地層の状況からみて、整地層3は、朽木氏による武家屋敷の城郭内収納に伴う整地層と考えられる。なお、元和八(1622)年は、短期間在城した岡部長盛の時期にあたる。上記の塼は何らかの造作に伴う銘板とみられ、在城期間が短いゆえに不明



第54図 調査地想定図(高橋忠久「福知山城今昔絵図」(福知山市)に加筆・転載)

な点が多い岡部氏の事績の一端を物語る資料と言えよう。

整地層4は、柱跡出土遺物から17世紀初頭頃のものと考えられる。時期的には、有馬豊氏による造作と考えられ、調査地付近はいわゆる江戸時代になってから開発されたものとみられる。整地層3は、有馬氏以後朽木氏入部以前の時期に形成されたものとみられ、検出した礎石状の石や礫敷遺構は、稲葉氏や松平氏の頃の絵図に記された鷹部屋に関連するものとみられる。また、整地層4下層の湿地状堆積層からも16世紀末頃までとみられる遺物が出土しており、あるいは付近に江戸時代以前の福知山城関連の遺構などが存在する可能性も考えられる。

(引原茂治)

注1 調査補助員 岡崎志保 整理員 陸田初代・井上聡・木村悟 作業員 赤井淳・足立美和・芦田譲祐・大槻健二・西山利夫

参考文献

高橋忠久『福知山城下町今昔絵図』 福知山市 1994

『福知山城の歴史』福知山城(福知山郷土資料館) 1998

福島孝行「福知山城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第92冊 (財)京都府埋蔵文化財調センター) 2000

森穀「秀吉期城郭出土の土器・陶磁器の編年」(『織豊城郭』第7号 織豊期城郭研究会) 2000

『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000

5. ^{かんのんじ}観音寺遺跡発掘調査概要

1. はじめに

観音寺遺跡は、福知山市観音寺地区に広がる弥生～鎌倉時代の集落跡である。大正11年に当時の中筋村観音寺から出土した磨製石剣から弥生時代の遺跡であることが知られ、これまで合計12回の発掘・試掘調査がなされた。今回の調査地は、京都府福知山市観音寺小字仲宮・大木巻地先に所在し、観音寺遺跡の範囲全体では、遺跡の北西部に当たっている(第55図)。近畿自動車道敦賀線の高架から西に約150mで、北側約250mには由良川の流れが迫っている。現代でも、大雨の際には水に浸かりやすい地勢のところで、標高は約25mを測る。

今回の調査は、国土交通省が由良川中流部改修工事の一環で実施する築堤工事に伴う事前調査で、同省の依頼を受けた試掘・発掘調査である。

調査は、まず遺構・遺物の存在する範囲を確認するための試掘調査を平成14年度5月21日から始めた。試掘トレンチは合計8か所設定した。総面積は約900㎡である。その結果、調査範囲の西端の第7・8トレンチについては、顕著な遺構・遺物は存在しなかったが、東側の第1～6トレンチ、特に、第1～3トレンチにおいては、縄文～鎌倉時代の遺構・遺物の存在が明らかになった。

この試掘調査の成果を受けて、今年度分の発掘調査を7月8日より開始した。発掘調査区は第1～3トレンチを包括するもので、これをA地区とした(第56図)。今年度はA地区の東側にあたる約1,100㎡について調査を進めた。10月24日には、福知山市立遷喬小学校の生徒30名による見学会、12月3日にラジコンヘリコプターによる空中撮影、12月5日に現地説明会(約70名参加)を実施し、12月6日にすべての現地作業を終了した。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、同主任調査員竹原一彦、調査第1係専門調査員石尾政信、調査第2係専門調査員黒坪一樹が担当した。

調査期間は、平成14年5月21日から同年12月6日までである。調査面積は、試掘トレンチと本格調査のA調査区をあわせ、約2,000㎡である。

なお、調査に係る費用は、全額、国土交通省が負担した。

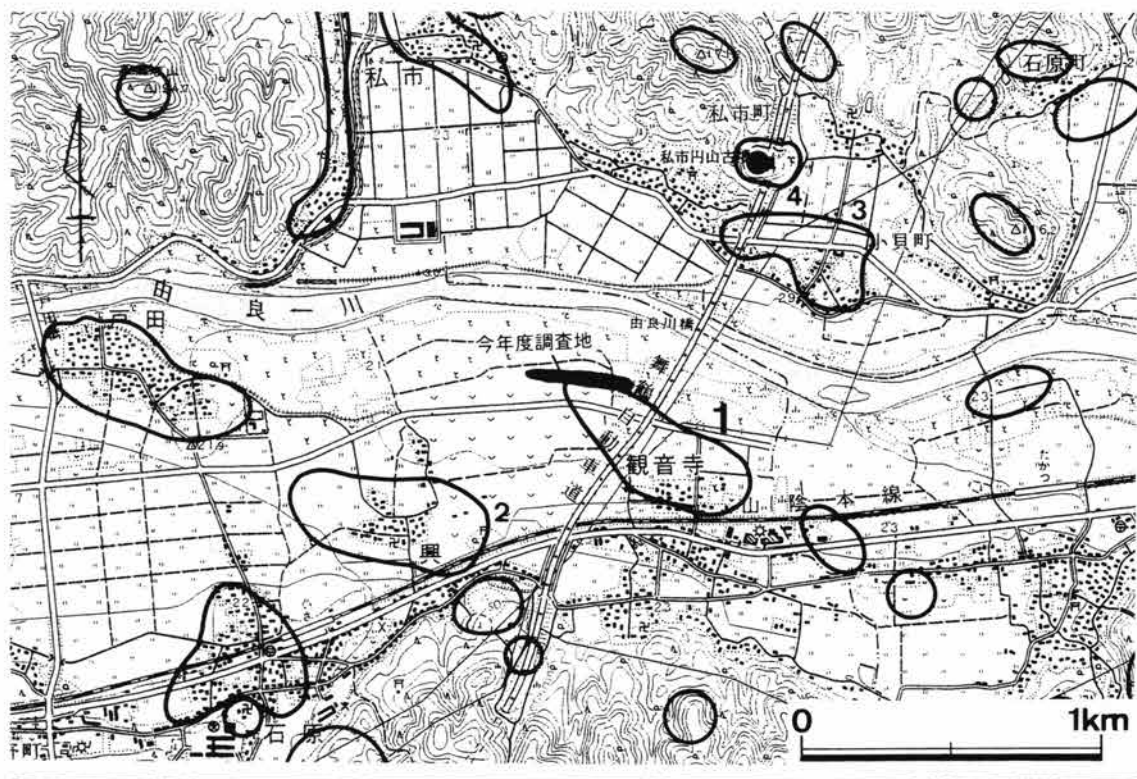
調査期間中は、国土交通省・福知山市教育委員会をはじめ、京都府教育委員会・綾部市教育委員会などの関係諸機関から御教示・御協力を頂いた。

また、現地に参加された方々には、猛暑や酷寒のなか、作業に参加していただきお世話になった。さらに、整理にあたっては整理員の協力があつた。以上の方々に心よりお礼申し上げたい。

なお、本文の執筆は、伊野・黒坪が行った。

2. 位置と環境

観音寺遺跡は、福知山市と綾部市にまたがる福知山盆地の沖積平野に位置し、由良川本流や多くの支流が運んできた土砂によって形成された自然堤防上にひろがっている。そのため沖積層(約10,000年前)より古い洪積層の露出がなく、旧石器(岩宿)時代の遺跡は見つかっていない。次の縄文時代には土器や石器は出土しているが、明確な遺構の発見はなかった。舞鶴市に入った由



第55図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000福知山東部)および弥生遺跡ほか分布図(下)
1. 観音寺遺跡 2. 興遺跡 3. 小貝遺跡 4. 私市円山古墳

良川下流の自然堤防上には桑飼下遺跡・志高遺跡などの著名な集落遺跡があるが、観音寺遺跡周辺ではこれまでのところ遺構の発見例はない。

由良川の流れが綾部市域から福知山市域に入ったこのあたりは、段丘面が特に広くなり、まとまった平野が形成されている。由良川を擁するこの平野部は農耕の発達する弥生時代に多大の恵みをもたらし、中期には人口の増加とあいまって興遺跡・観音寺遺跡(興・観音寺遺跡群)という大きな集落が出現する。それは、約2,000年前のできごとである。この時期、第55図下のように由良川の本流はもとより犀川・土師川などの支流にも複数の遺跡が存在している^(注3)。これらの遺跡群はあたかもネットワークのように川の道で結ばれ、ひとつの大きな地域社会を形成していたと考えられている。

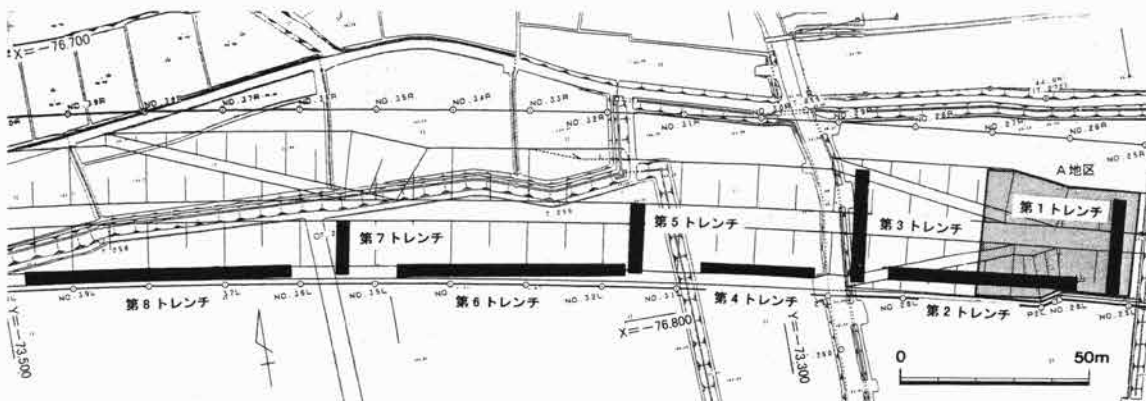
3世紀末から7世紀初めの古墳時代、古墳は、北東方向に遺跡公園として保存されている綾部市私市円山古墳(5世紀)や、より西側の丘陵上(福知山市)にも稲葉山10号墳(6世紀)、八ヶ谷古墳(5世紀)をはじめ多くの古墳が存在している。一方、集落跡については、これまで土師器・須恵器の出土はみられたが、竪穴式住居跡などの遺構は見つかっていない。しかし、当地域の古墳文化は、弥生時代中期から後期以来の、丹後地方や畿内からの大きな勢力の影響下で成立していると考えられているので、古墳時代集落は今後とも発見されてくるものとみられる。

奈良・平安時代さらに鎌倉時代の遺跡は、平成6年度における京都府教育委員会の調査で中世の建物跡や大きな溝などが見つかっている^(注4)。また地域を広げると、何鹿郡衙に推定されている青野南遺跡(綾部市)や、和久寺廃寺・多保市廃寺(以上福知山市)などの古代寺院、さらに荘園(六人部新荘)などが栄えた。これら古代の伝統は、中世の鎌倉時代になっても受け継がれ、観音寺集落の繁栄をみたことは、おびただしい柱穴や溝から出土する遺物(13世紀)が証明している。

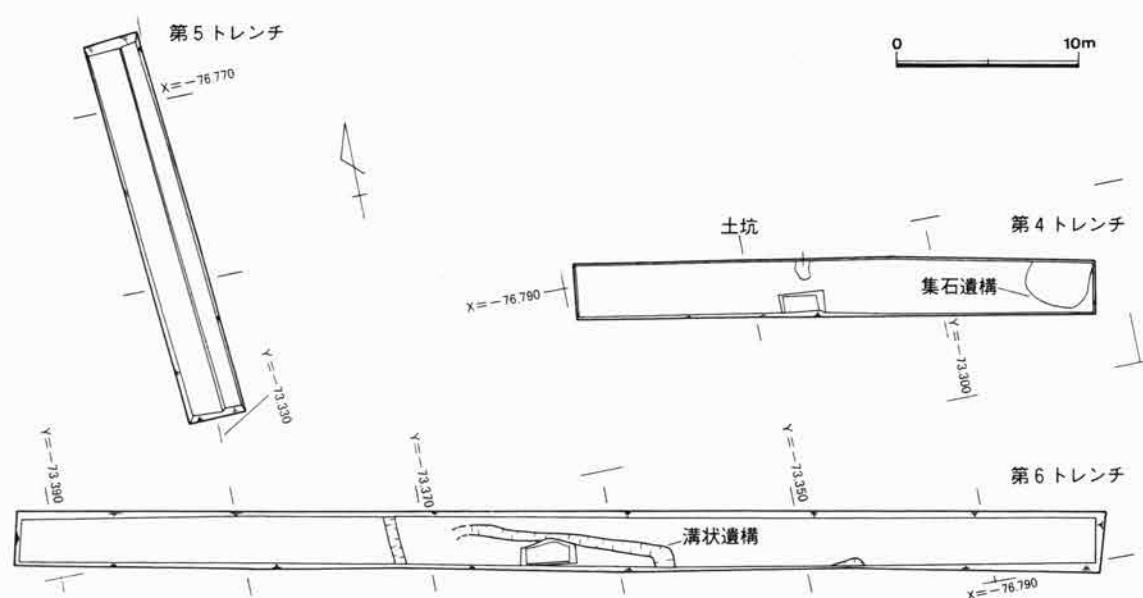
3. 調査概要

(1) 試掘調査の成果

およそ5,000㎡の調査対象地に、幅3mのトレンチを合計8か所(900㎡)設定し(第56図)、遺跡の広がりや深さを調査した。各トレンチでの掘削作業は、重機を用いて掘り下げ、遺構の有無を確認するにとどめ、各遺構の掘削はしていない。以下、各トレンチの調査結果を記述するが、第1・2



第56図 A地区・試掘トレンチ配置図



第57図 第4～6トレンチ平面図

トレンチについてはA地区に含まれるので割愛する。

第3トレンチ 表土下約30cmで、古墳時代の須恵器・土師器の入った東西方向の溝、弥生時代の土坑(断面にて確認)、鎌倉時代の柱穴などを確認した(第60図)。この溝は後述するA地区の溝SD149の続きである。各時期の遺構・遺物が見られ、集落の広がりが見えられた。遺物は弥生土器・土師器・瓦器などが出土した。

第4トレンチ 表土下約30cmで、鎌倉時代の集石遺構と平安時代の土坑を確認した(第57図)。集石遺構は一辺が3mを超える隅丸方形の掘り込みの中に、約20cm大から人頭大の自然石を多量に詰め込んでいる(図版第42-(3))。集石遺構の多くの部分は北側のトレンチ外に広がるものと思われる、全体形や用途については不明である。鎌倉時代の瓦質の羽釜、中国製陶磁器などの断片が出土している。また、平安時代の土坑は楕円形のもので、上面から土師器皿の断片が出土した。

第5トレンチ ここでは古墳時代後期の須恵器杯・土師器などの土器が、表土下約30～40cmで出土したのみで、明瞭な遺構の存在は確認できなかった(第57図)。また、これより下層に洪水などの河川堆積による粗砂礫層がみられた。この粗砂礫層の下層を重機で深く(表土下約1.4m)掘り下げたが、遺構・遺物の存在は確認できなかった。

第6トレンチ 表土下約80～100cmで、暗茶褐色粘質土を埋土とする溝など、複数の遺構を確認した。溝の幅は約40～50cmで、1か所ではほぼ直角に屈曲するコーナー部分を確認した(第57図)。同一面で弥生土器片も出土していることから、方形周溝墓である可能性がある。観音寺遺跡の墓域が広がっているとすれば、非常に重要な区域といえる。なおトレンチ西1/3ほどは、暗灰褐色粗砂礫・細砂面(洪水堆積層)で、遺構は皆無であった。

第7トレンチ 下層遺構の有無を調査するため、深く重機で掘り下げたため、トレンチの幅を3mより広くした。表土下約80cmの濁橙褐色粘質土(4層)中に、炭化物・焼土の小範囲な集積を確認したが、土器などの出土遺物はなく、かつ安定した土層の堆積もないことから、これらの集

積は河川によって運ばれてきたものと判断した。念のためさらに下層を表土下約2.8mまで掘削したが、下層は粘土と粗砂・細砂の互層となり、遺構面はもとより1点の遺物も確認できなかった(第58図)。

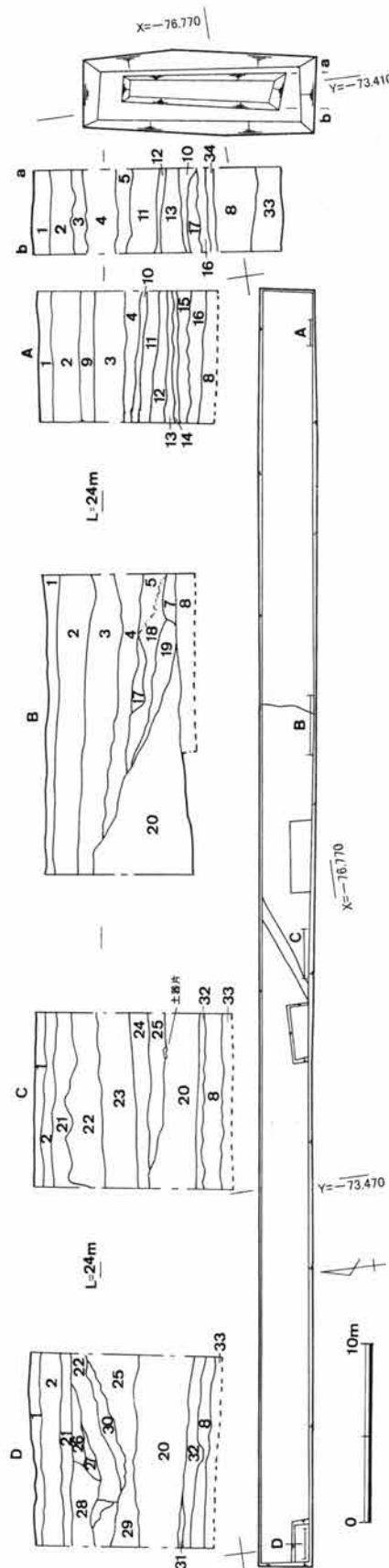
第8トレンチ 表土下約1.6mまで掘り下げた。東側は、粘質土・粘土・砂の互層で、第7トレンチと同様の層が現れている(第58図)。西側では河川の氾濫によりもたらされた粗砂礫層が凹凸をもって断続的に確認された。この粗砂礫層の下に暗青灰色粘土面(33層)を確認した。弥生時代の水田遺構面と想定し、精査したが明瞭な証拠(畦畔状の盛り上がりや稲株痕跡など)を確認することはできなかった。湧水による壁面の崩落が始まり危険となったので、第7トレンチとともに埋め戻した。結論として、第7・8トレンチは明瞭な遺構がなく、出土遺物も僅少であることから、集落内からは外れた区域であることが判明した。

(2) A地区調査の成果

A地区で検出した遺構は第60図のとおりである。縄文～鎌倉時代の遺構をすべて記載している。以下、基本的な層位から時代ごとの遺構・遺物を順に説明していきたい。

①層位

基本的に4つの層に分けて、遺構の存在状況を説明することが可能である(第59図)。すなわち第1層：灰褐色粘質土(表土・水田耕作土)、第2層：暗茶褐色粘質土(土器や炭化物を含む有



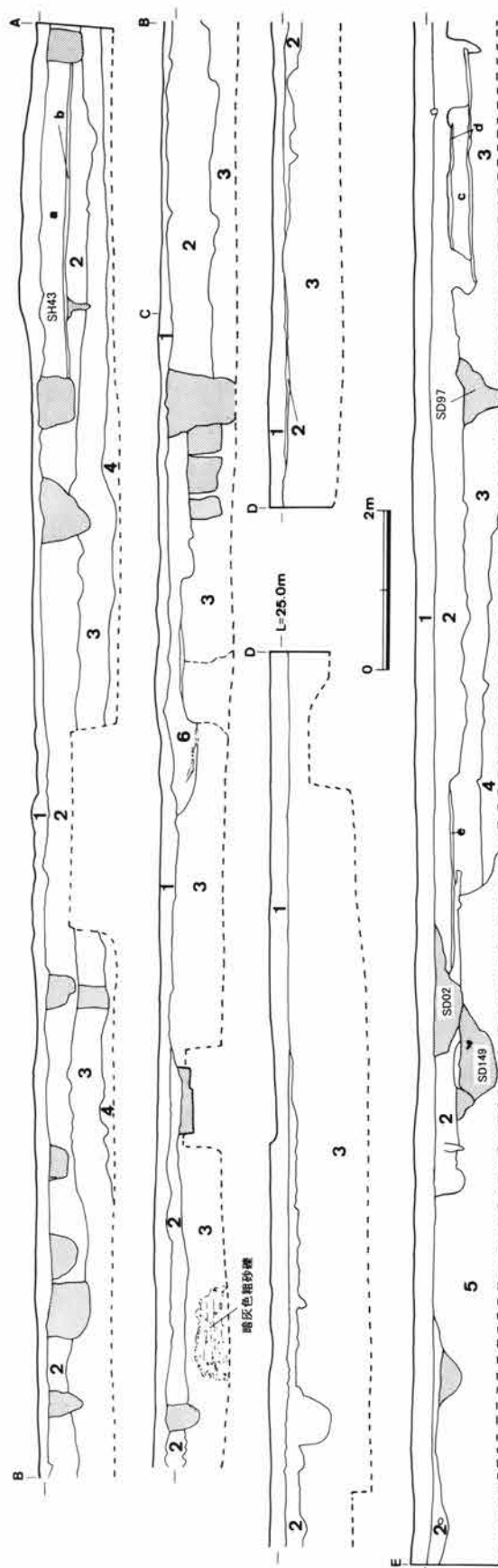
第58図 第7・8トレンチ平・断面図(断面図は1/80。大・小文字アルファベットは断面位置を示す)

- | | | | | | | |
|-------------|---------------------|------------|--------------|-------------|------------|------------|
| 1. 灰褐色土(水田) | 2. 暗黄灰色(近現代水田床土) | 3. 橙黄褐色粘質土 | 4. 濁橙褐色粘質土 | 5. 橙灰色粘質土 | 6. 暗灰色細砂 | 7. 淡灰色粘質土 |
| 8. 濁黄灰色粘土 | 9. 淡灰褐色粘質土 | 10. 暗灰色粗砂 | 11. 橙灰褐色粗砂 | 12. 橙黄褐色細砂 | 13. 暗灰褐色細砂 | 14. 濁橙黄色細砂 |
| 15. 暗茶褐色粘質土 | 16. 暗灰褐色粗砂 | 17. 暗灰色粗砂 | 18. 濁暗灰褐色砂質土 | 19. 濁灰褐色粘質土 | 20. 暗灰色粗砂礫 | 21. 暗茶褐色細砂 |
| 22. 暗茶褐色極細砂 | 23. 暗茶褐色粗砂混じり粘質土 | 24. 暗褐色砂質土 | 25. 暗灰褐色粘質土 | 26. 暗橙褐色粘質土 | 27. 暗褐色粘質土 | 28. 濁橙褐色細砂 |
| 29. 暗茶褐色土 | 30. 淡黒褐色細砂(マンガン粒含む) | 31. 淡橙褐色粗砂 | 32. 明橙褐色細砂 | 33. 暗青灰色粘土 | 34. 暗橙褐色粘土 | |

機質の多い層)、第3層：暗黄褐色粘質土(微量の炭化物をふくむ。土器の出土なし)、第4層：濁暗黄褐色細砂質土(若干の鉄分・マンガンを含む。土器・炭化物なし)である。基本的に第3・4層は無遺物層で、第3層が当調査区では下層遺構のベースを形成している。第4層は厚く堆積するが、所々に河川の洪水を示す粗砂礫がブロック状にはさまっている。

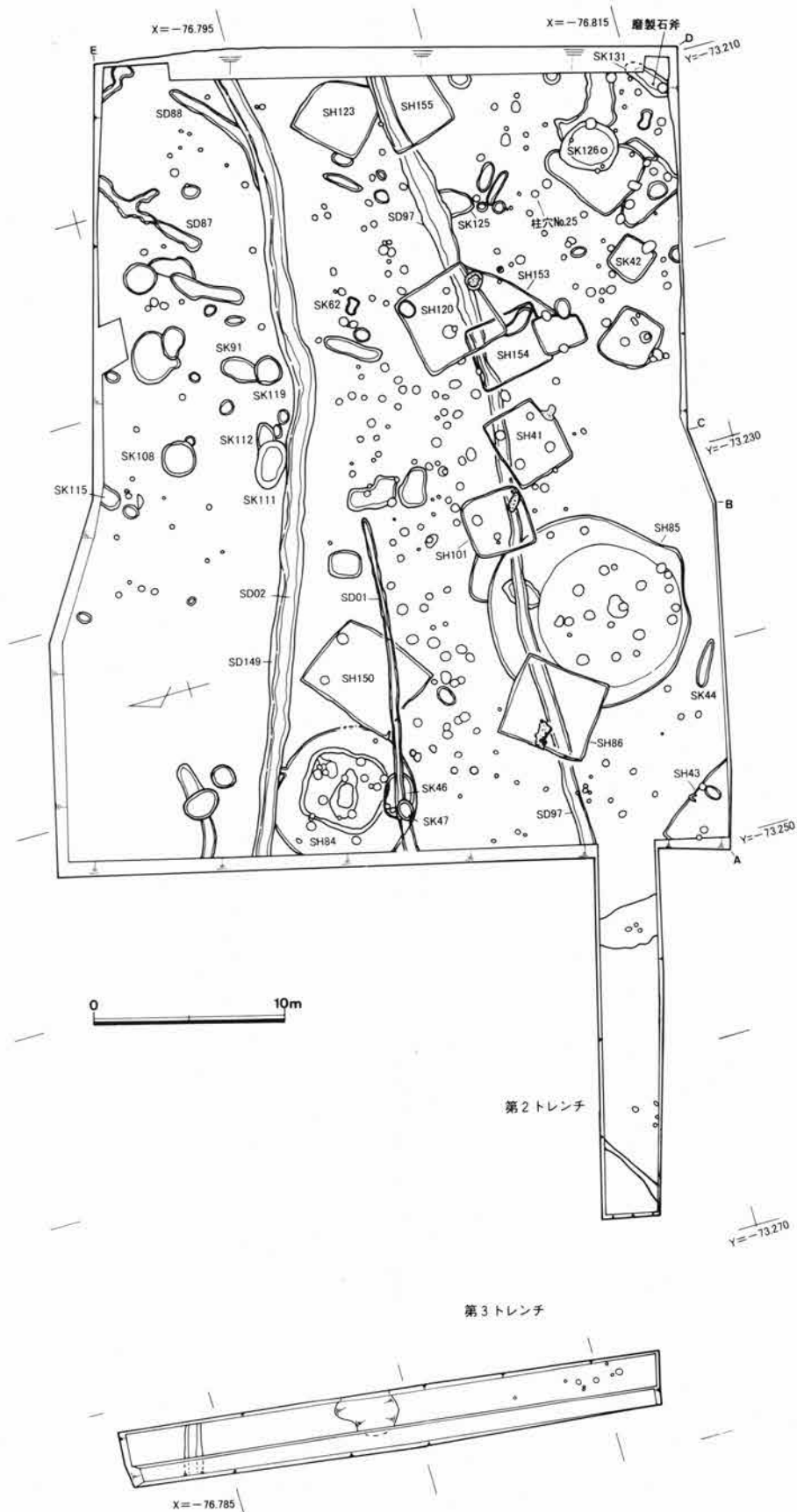
縄文～鎌倉時代のすべての遺構は、第2層と3層の上面で確認された。A地区東壁断面(第59図下)で竪穴式住居跡の底面が重層して観察されたため、当初より遺構面は少なくとも2面あると判断することができた。しかしながら、堆積層の残りは薄く、層ごとに細かく時代を確定することはできない状態である。

重機による掘削を遺物が多量に出土する第2層の中間で止め、精査を繰り返したが中世の柱穴以外の遺構は明瞭に確認できなかった。その理由は、弥生時代の遺構の埋土が第2層と酷似しているため、第2層中の遺構検出が容易でな

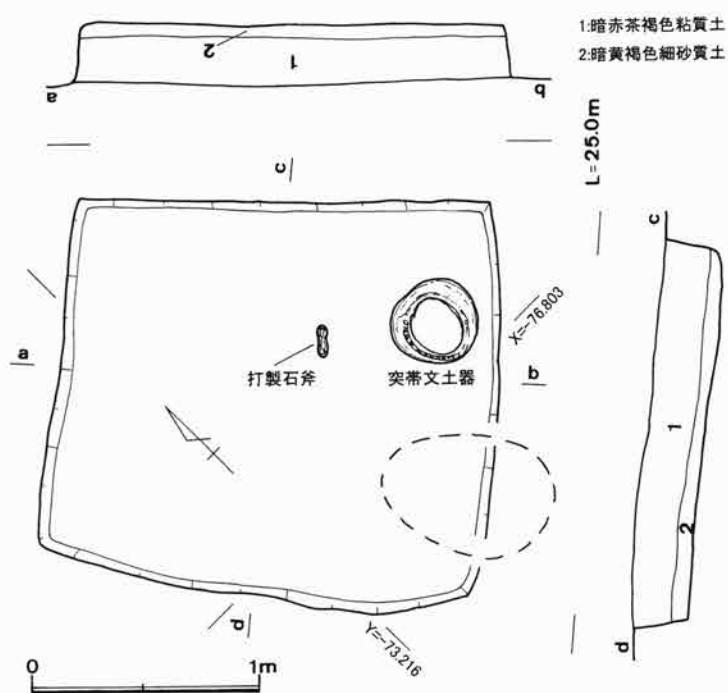


第59図 A地区南壁(A-D)・東壁(D-E)断面図(断面位置を示すA～Eは第60図に対応)

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1. 灰褐色粘質土(表土・水田耕作土) | 3. 暗黄褐色粘質土(炭化物若干含む) |
| 4. 濁暗黄褐色細砂質土(土器・炭化物なし) | 6. 濃暗茶褐色粘質土 |
| a. 暗茶灰褐色粘質土(竪穴式住居跡SH43埋土) | c. 暗茶灰褐色細砂質土(竪穴式住居跡埋土) |
| d. 淡黄灰褐色粘質土(竪穴式住居跡床面) | トーン部は柱穴・溝・土坑を示す。 |



第60図 A地区、第2・3トレンチ平面図



第61図 土坑 S K 42 平・断面図

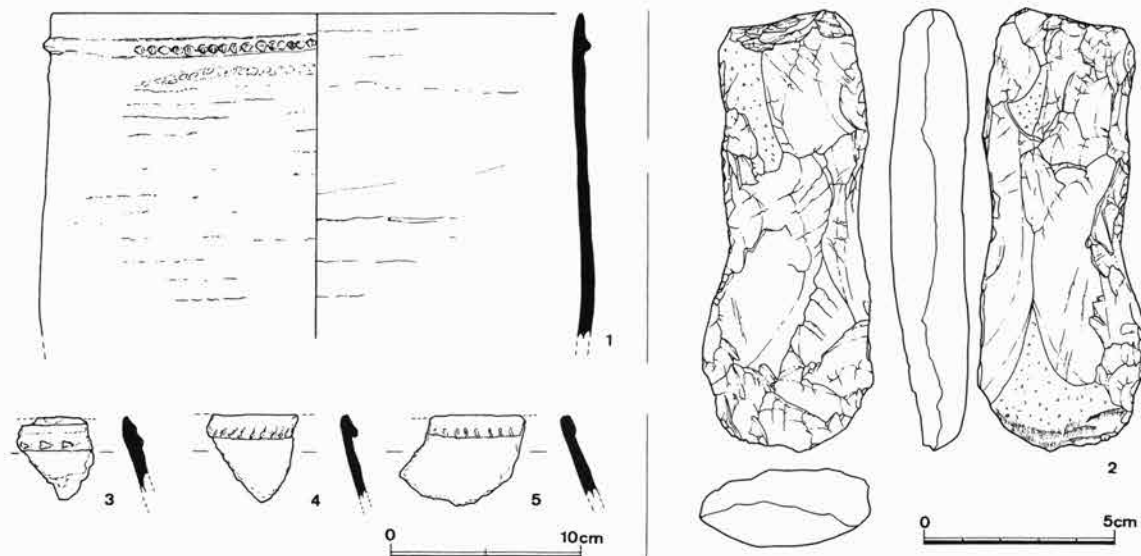
く、色調の違う第3層面で揃えることによって初めて遺構ラインの認識が可能となったことによる。あわせて各時代の堆積層・遺構の残りがよくないのは、度重なる洪水や人為的な開墾による土砂の流出、削平によるものと思われる。なお、第5層は調査区北東部の狭い範囲で認められる。第3層に色調・土質とも似る。遺物・炭化物の含有はない。第6層は第2層に似るが、粘土分が非常に多い。

②各時代の遺構と遺物

A. 縄文時代晩期

遺構としては調査区南東で土坑1基を検出したのみである(第61図)。一辺約2mの正方形で、深さ約50cmを測る。暗赤茶褐色粘質土と暗黄褐色細砂質土の埋土である。底面は平坦に掘られている。炭化物や焼土の含有はみられない。

出土遺物は、東壁の中央部に近接して突帯文土器(深鉢)1個体と、打製石斧1点が入っていた(第62図1・2)。突帯文土器は、ほぼ完全な残存状態であった。傾いてはいるが、ほぼ口縁部を上にして立った状態で見つかった。全体形は砲弾型で底部は丸い。刻目を施した1条の突帯が、口縁端部から少し下に付けられている。また突帯のすぐ下位に平行して、微妙で不規則な刺突痕がめぐっている。ケズリ調整された内面は、こげなどの付着物はなく、比較的きれいな状態を保



第62図 縄文土器・打製石斧実測図(1・2. 土坑 S K 42 3～5. 包含層)

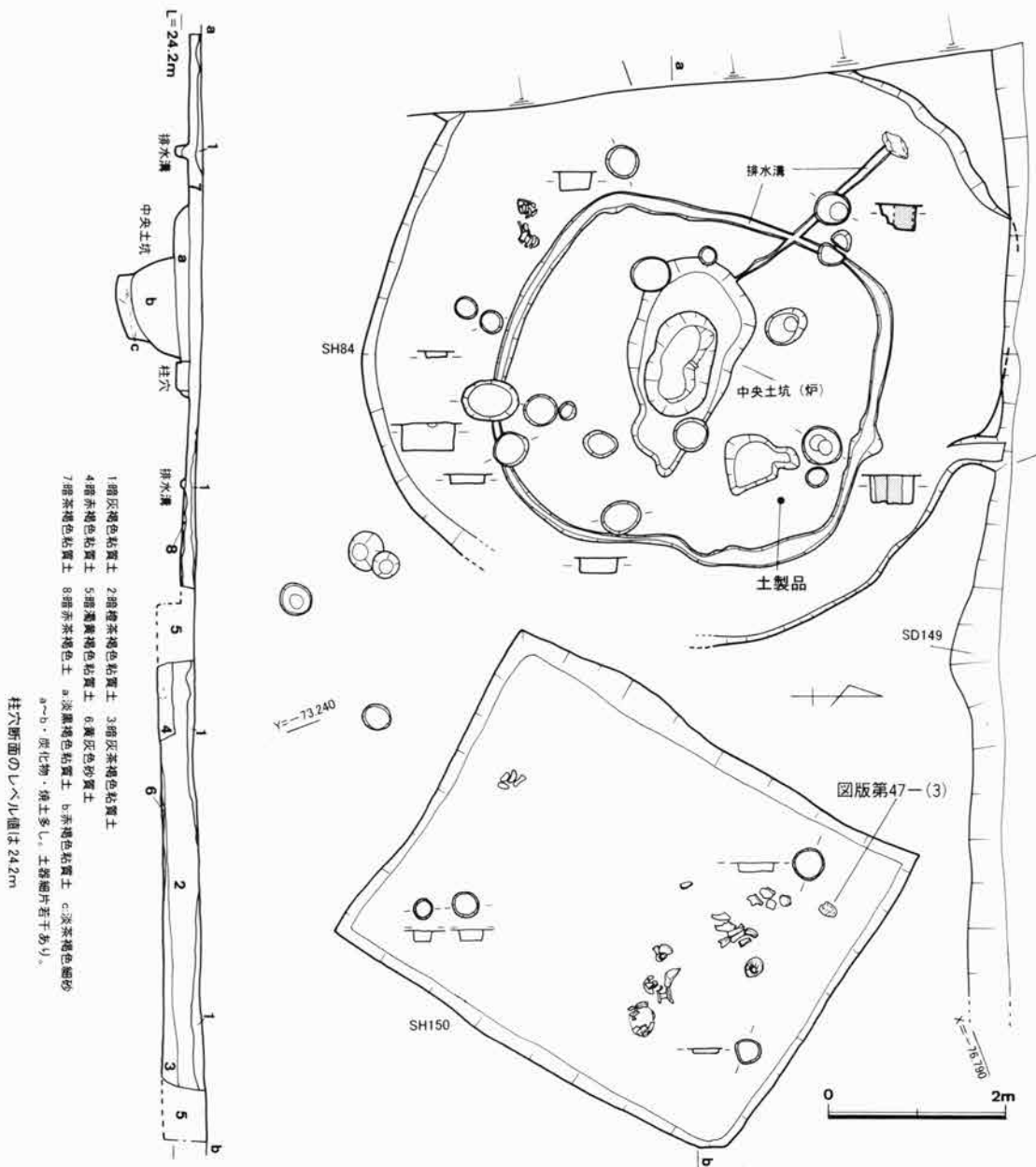
っている(図版第46-(3))。時期は滋賀里Ⅳ期のなかで捉えられるものといえる。^(注5) 打製石斧は両面加工の短冊形で、安山岩製である。裏面の先端(刃部)に、使用による磨滅痕が認められる。重さは120gを測る。ヤマノイモ・ユリネなどの根菜類を掘るための石器である。

なお、遺構に伴わないが、調査区西側および中央部からも突帯文土器の断片が出土している。一部を図化したのが第62図3～5で、口縁端部を折り返すことにより突帯が形成されるものである。細片のため全体形・法量は明確にし得ない。第62図1よりも古い様相のものであろう。

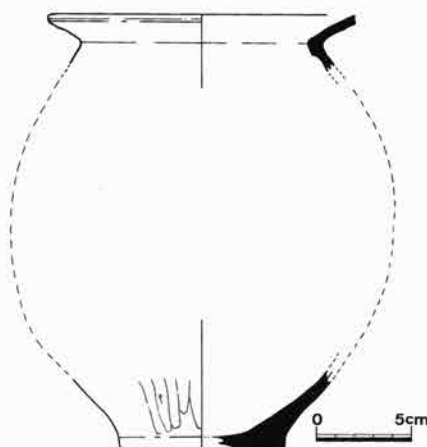
B. 弥生時代中期

竪穴式住居跡1基(SH84)と、多数の土坑(SK)、溝状遺構(SD87・88)がある。

竪穴式住居跡SH84は円形で、直径約7.6m、残存の深さ約20cmを測る。内側に深さ4～12cmの排水溝がめぐり、中央に炉などを使用されたとみられる深い土坑がある。排水溝は内側にやや



第63図 竪穴式住居跡SH84・150平・断面図



第64図 竪穴式住居跡S H84
出土土器実測図

隅丸方形にめぐり、部分的に放射状に延びる箇所が確認できた。中央の土坑内には比較的多量の炭化物や焼土が入っていた。掘削した底は濁暗黄褐色細砂質土の面で、当時の生活面に近いところと思われる。主柱穴は7～8基がほぼ円形にめぐるものである。

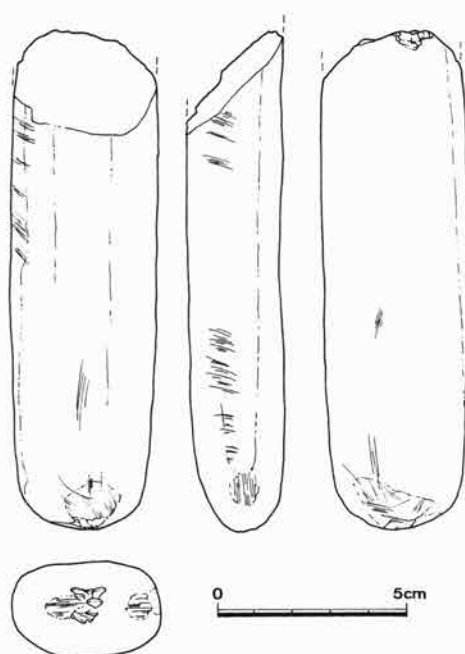
出土遺物の土器について、第64図は甕である。口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部は小さく面をもっている。内外面とも無文である。また、口縁端部外面にヘラ状工具で刻目を施した壺がほぼ床面から出土している(図版第47-(2))。ともに畿内第Ⅳ様式併行期のものである。さらに土器と共伴して、昆虫の蟬を表現したとみられる土製品が1

点出土した(第72図1)。第65図は本住居跡内の埋土中から出土した暗灰緑色頁岩製の石棒断片である。先端部を欠く。重量は230 g。これも中期の所産であろう。

土坑は、円形・楕円形のものが多く、底部からの立ち上がりも急傾斜で比較的深く残存しているものが多い(第66図)。それぞれの埋土の堆積状況を見ると、下半部から底にかけて炭化物の多い暗黒褐色粘質土が流れ込むように入っている点に共通性がある。大量の破損土器が混入していることから廃棄土坑とみられるが、その前段階において貯蔵穴として機能していた可能性は高い。

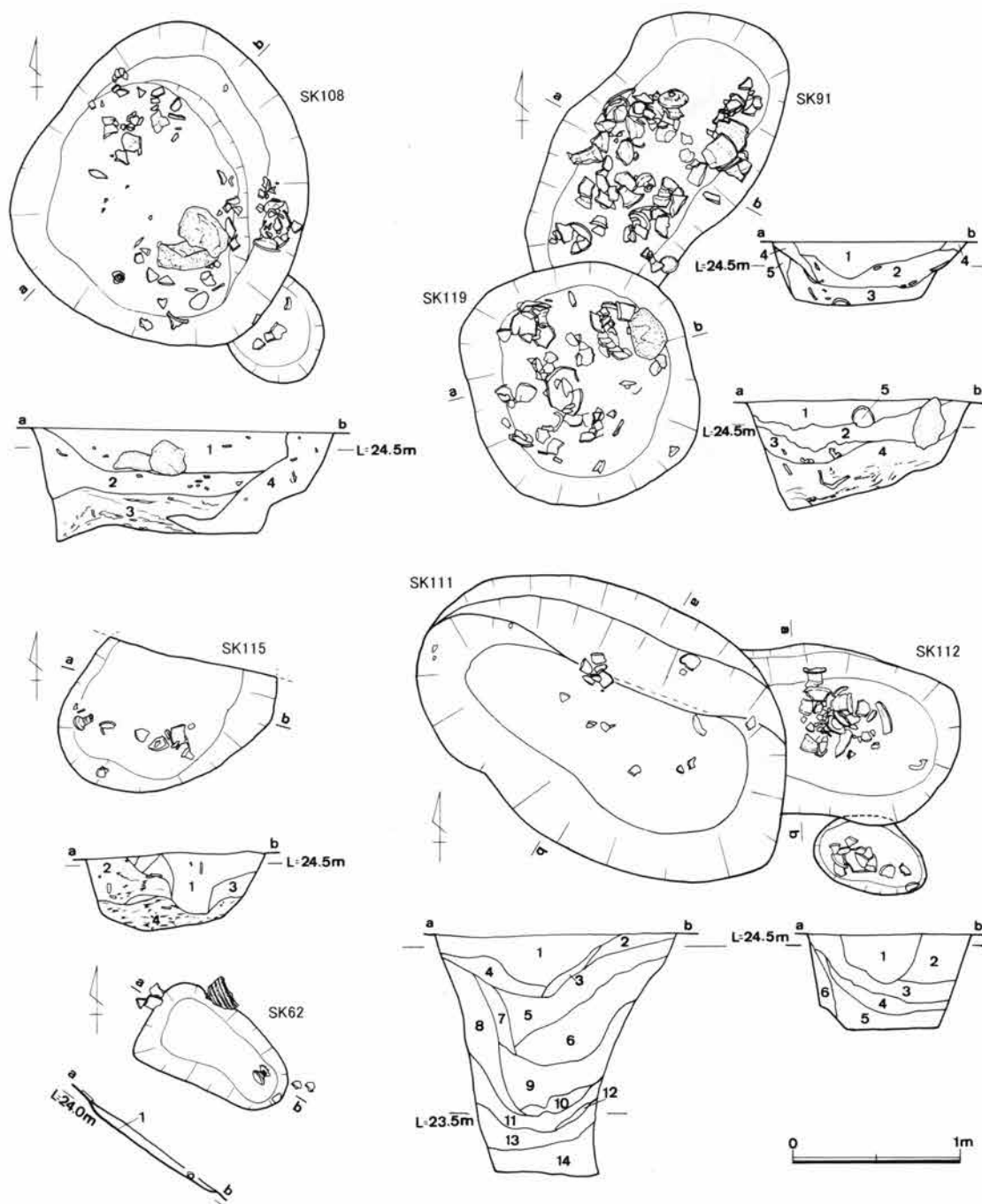
特に土坑S K111は1.4mを超える深さで、断面形は袋状を呈する。底部からも多量の弥生土器の出土が認められる。これだけ深いものとなると、単に廃棄土坑とするには無理があり、貯蔵穴のような性格をもつものとする。土坑S K91・108・119などについても深い資料例で、貯蔵穴であろう。そのほか、残存の深さが比較的浅いものもある。土坑S K44・62・131などであるが

いずれも底からの立ち上がりは急である。土坑S K44・131からは、土器のほかに敲石や片刃磨製石斧が出土している。



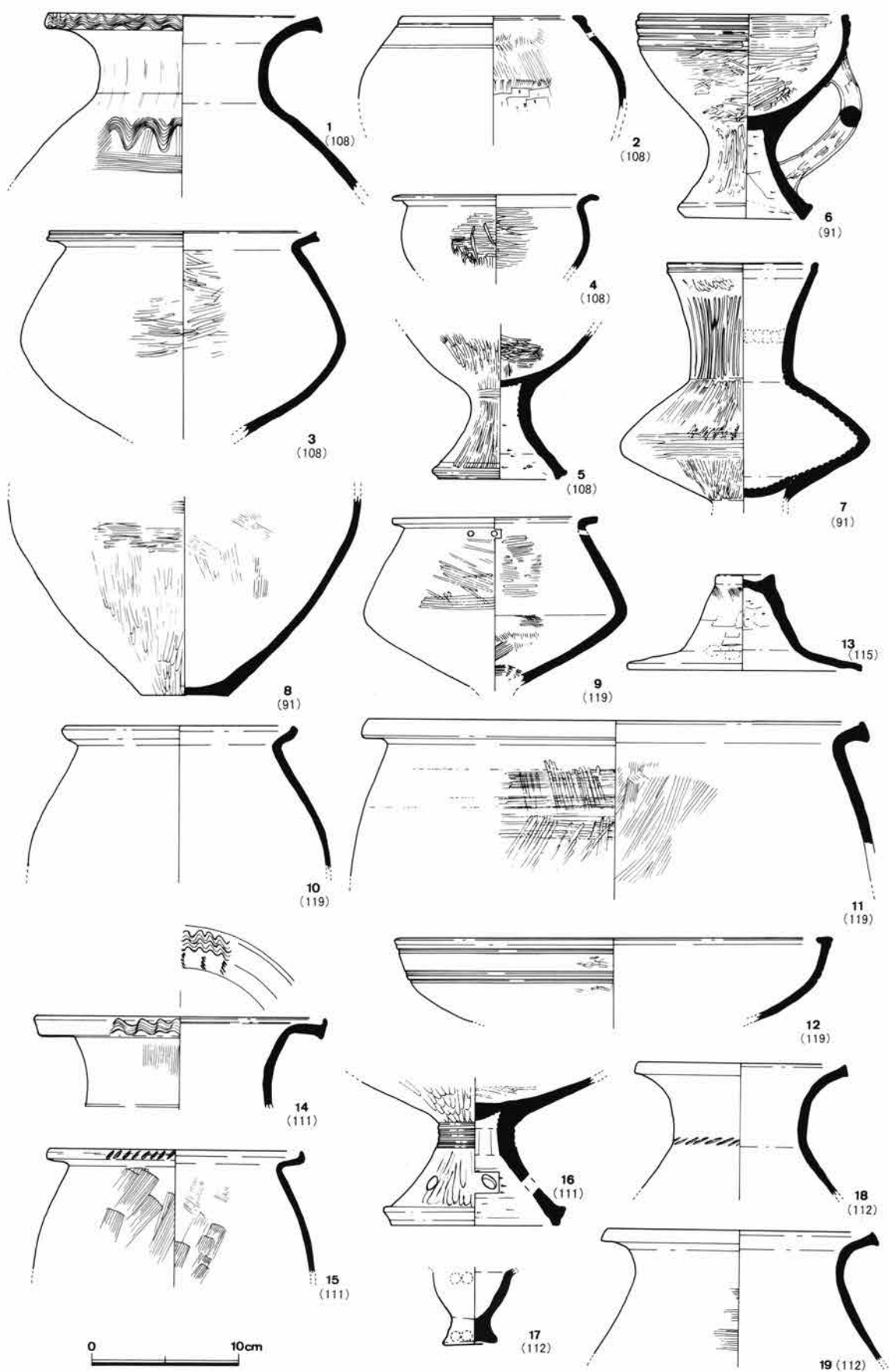
第65図 石棒実測図(S H84埋土中)

出土土器のうち第67図1～5は土坑S K108からの出土である。1は広口壺である。口縁端部と体部外面に櫛描波状文および直線文が施されている。2は鉢である。体部上半に2条の凹線文がある。3は体部の中間部に最大径がくる偏球形の鉢である。内外面をヘラミガキ調整する。4は球形に近い体部の甕である。5は高杯である。6～8は土坑S K91から出土した。6は把手付高杯あるいは台付鉢である。口縁端部から体部上半に4条の凹線文がある。7は台付長頸壺である。口縁端部に凹線文、外面のヘラミガキ調整は精緻である。暗赤色の焼成である。8

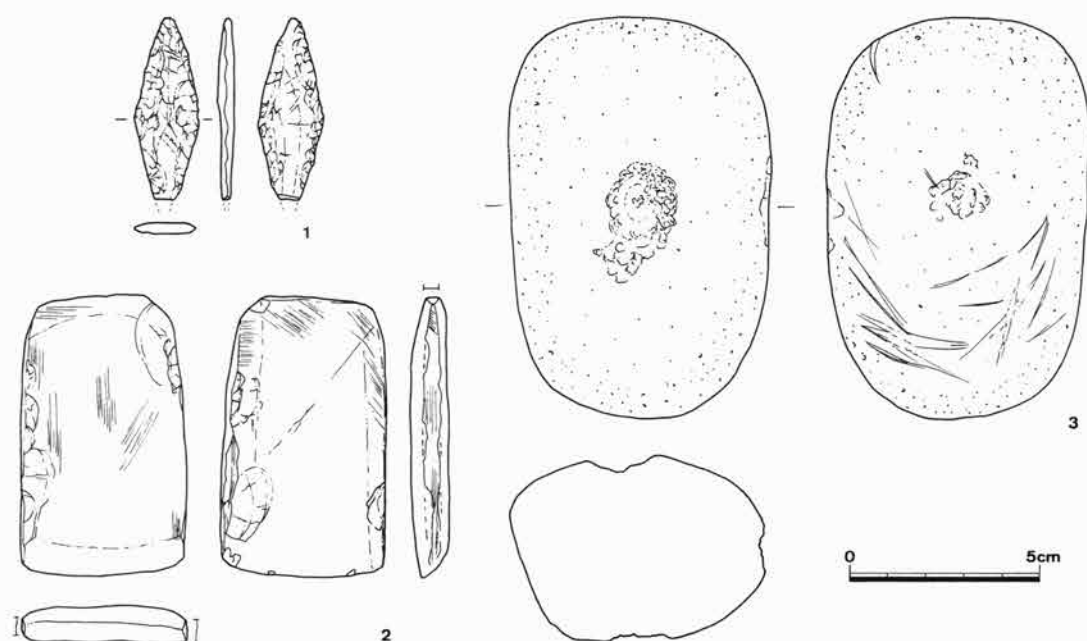


第66図 土坑平・断面図

土坑SK108：1. 暗褐色粘質土 2. 暗赤褐色粘質土 3. 暗赤褐色粘質土 4. 暗橙褐色粘質土 土坑SK91：1. 暗褐色粘質土 2. 暗黒褐色粘質土 3. 濃褐色粘質土 4. 暗灰褐色細砂質土 5. 濁黄褐色粘質土 土坑SK119：1. 濁黄褐色粘質土 2. 暗茶褐色粘質土 3. 暗橙褐色粘質土(灰黄色粘土塊含む) 4. 暗橙茶褐色粘質土(大型土器片・灰色粗砂・炭・焼土含む) 5. 青灰色粘土塊 土坑SK115：1. 暗灰褐色粘質土 2. 暗黒褐色粘質土 3. 暗褐色粘質土 4. 暗黒褐色細砂(2・4層土器、炭化物多量) 土坑SK111：1. 暗褐色粘質土 2. 濃赤褐色粘質土 3. 橙黄褐色粘質土 4. 暗茶褐色粘質土 5. 暗赤褐色粘質土 6. 暗黄褐色粘質土 7. 暗灰色細砂 8. 暗黄灰色細砂質土 9. 濁灰黄褐色粘質土 10. 暗黄褐色粘質土 11. 灰褐色粗砂(炭化物多い) 12. 暗赤褐色粘土 13. 暗橙褐色粘質土 14. 黒褐色粗砂礫混じり粘質土 土坑SK112：1. 暗茶褐色粘質土 2. 淡褐色粘質土 3. 暗褐色粘質土 4. 黒褐色粘質土(炭化物多い) 5. 褐色粘質土(炭若干、土器出土) 6. 暗橙褐色粘質土 土坑SK62：1. 暗茶褐色粘質土



第67図 土坑出土土器実測図(()内は土坑番号)



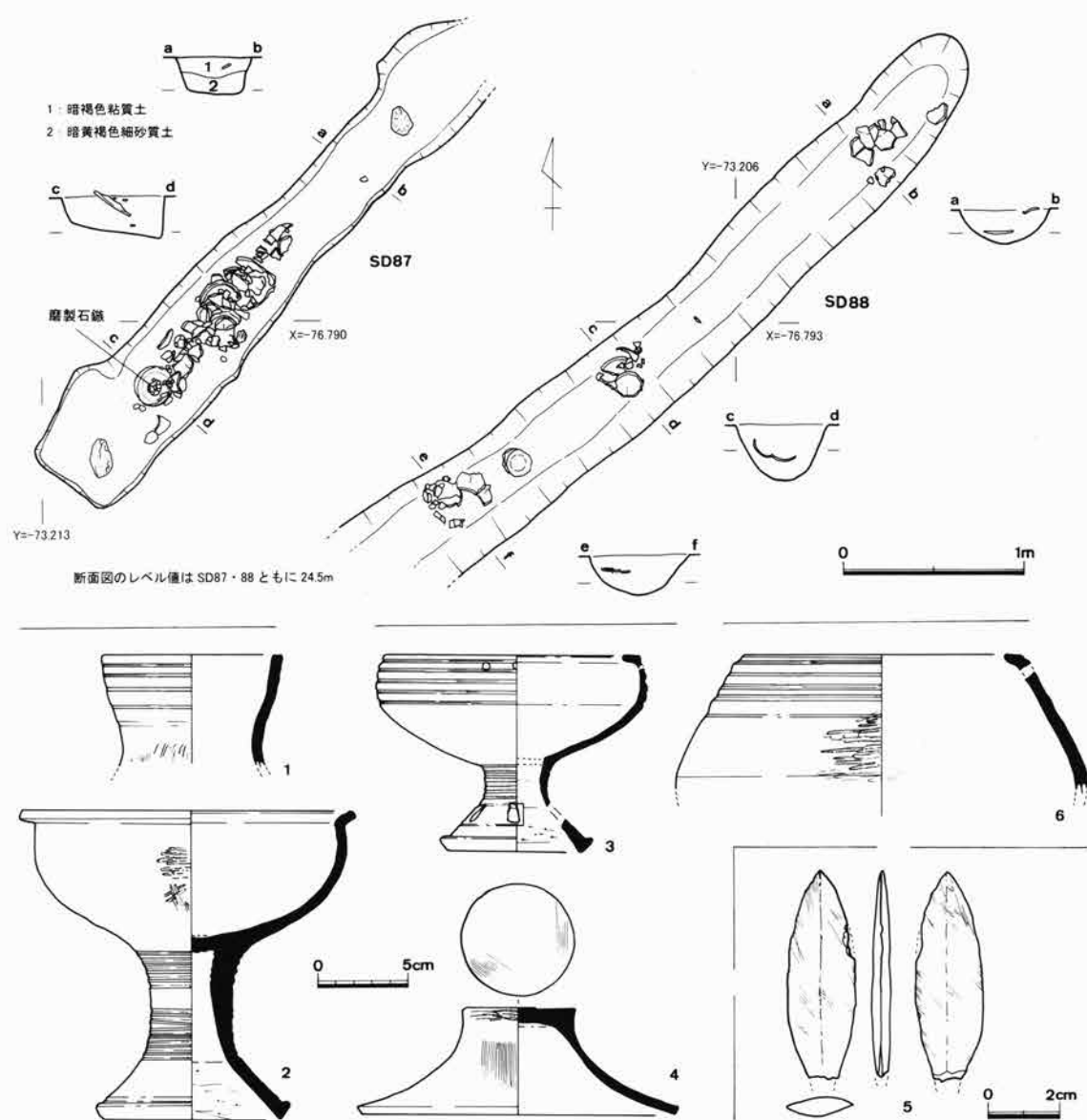
第68図 土坑出土石器実測図(1. 土坑S K 111 2. 土坑S K 131 3. 土坑S K 44)

はおそらく壺の体部下半である。9～12は土坑S K 119より出土した。9は台付鉢である。ヨコナデの利いた短い口縁部をもち、体部は横方向にヘラミガキ調整する。10・11は甕である。10は「く」字形に外反する口縁をもち、端部は丸くおさめる。11は、回転をつけたうえで指によるヨコナデを施した口縁部、板状工具によるタタキシメの後に縦方向にヘラミガキ調整された体部外面を特徴とする。12は椀状杯部をもつ高杯で、口縁端部と体部中間部に凹線文を施す。13は土坑S K 115から出土した。蓋である。14～16は土坑S K 111からの出土である。14は広口壺である。筒状の頸部をもち、口縁端部に櫛描波状文がみられる。15は甕である。口縁端部を上方に短くつまみあげる。16は高杯である。杯部と脚の境に4条の凹線文がある。17～19は土坑S K 112から出土した。17は端部を欠損しているが小形の鉢である。18・19は広口壺である。

土坑内出土の石器についてみる(第68図)。1はS K 111から出土した打製石鏃である。重さ6gで安山岩製である。2は土坑S K 131から出土した片刃磨製石斧である。重さ60gで緑灰色凝灰岩製である。3は土坑S K 44出土の敲石(凹石)である。厚みのある楕円形礫の表裏面と、右側縁の一部にアバタ状のタタキ痕や、裏面の下半部に細く深い線状痕をとどめる。凹みの縁辺部に赤色顔料の付着が認められる。重さ545gの砂岩製である。

溝については、今回の調査区内からは、中期の大規模な溝は見つからなかった。溝S D 87および溝S D 88はともに幅50～60cm、深さ20cm前後を測り、小規模ながらしっかりと掘られた溝である。溝S D 88は距離をおいて点々と土器を遺棄したようで、溝S D 87は集中的に多量の土器を遺棄している。ともに底から急傾斜に立ち上がる断面形が特徴的である。

溝から出土した土器の器種としては、溝S D 88では壺・鉢、溝S D 87では壺・高杯などがある。溝S D 87・88とも凹線文の使用が顕著に認められ、畿内第Ⅳ様式のものである。第69図1は長頸壺である。2・3はともに椀状の杯部をもつ高杯である。2は口縁端部を短く外反させるもの、



第69図 溝SD87・88平・断面図および出土遺物実測図

1～5. 溝SD87 6. 溝SD88

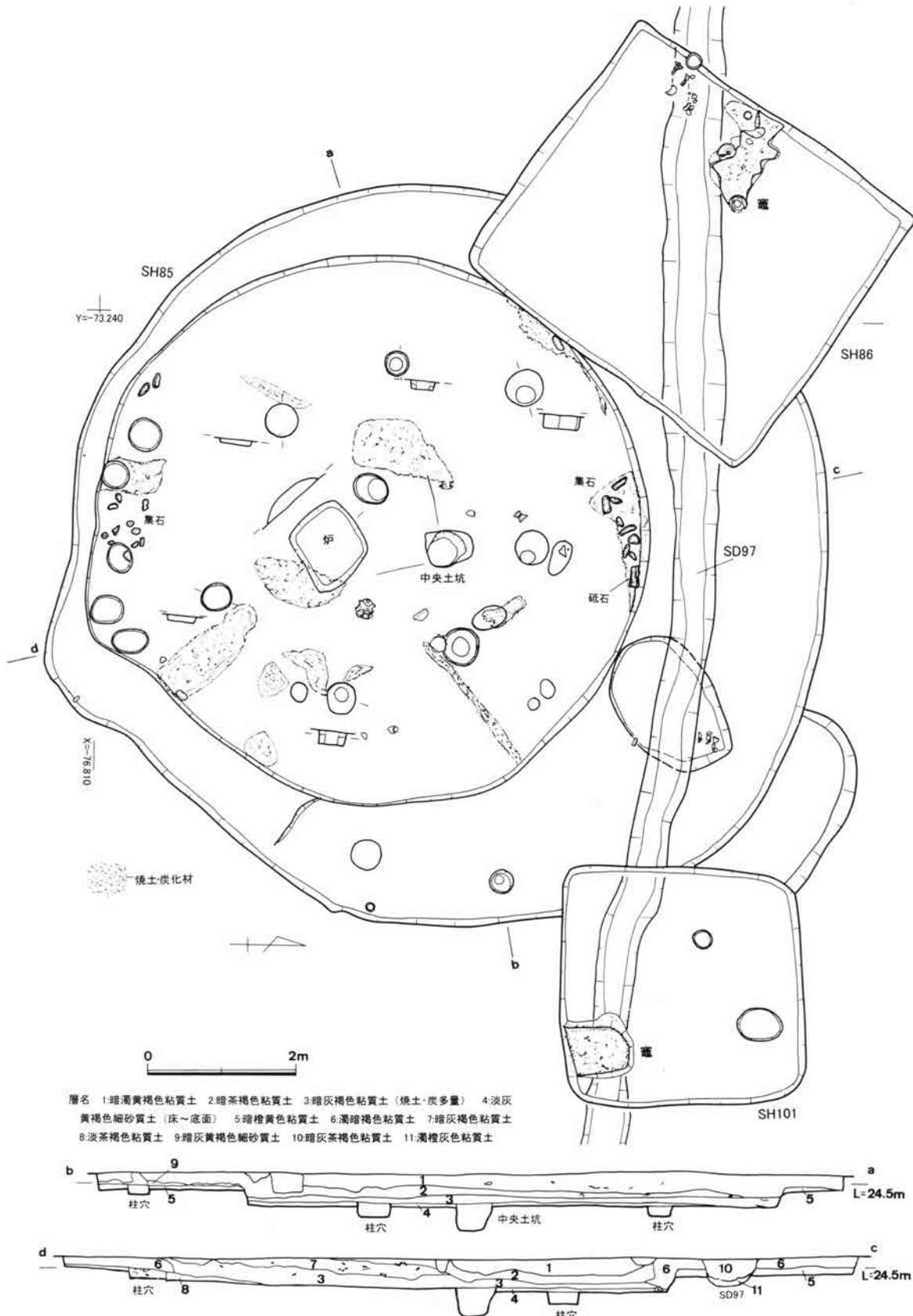
3は内湾させている。4は上面を平坦にした蓋である。5は磨製石鏃である。頁岩ないし粘板岩製で、滑らかに全面研磨している。基部を欠く。重さは6.5g。6は鉢である。6のみ溝SD88からの出土である。そのほかは溝SD87からのものである。

C. 弥生時代後期末

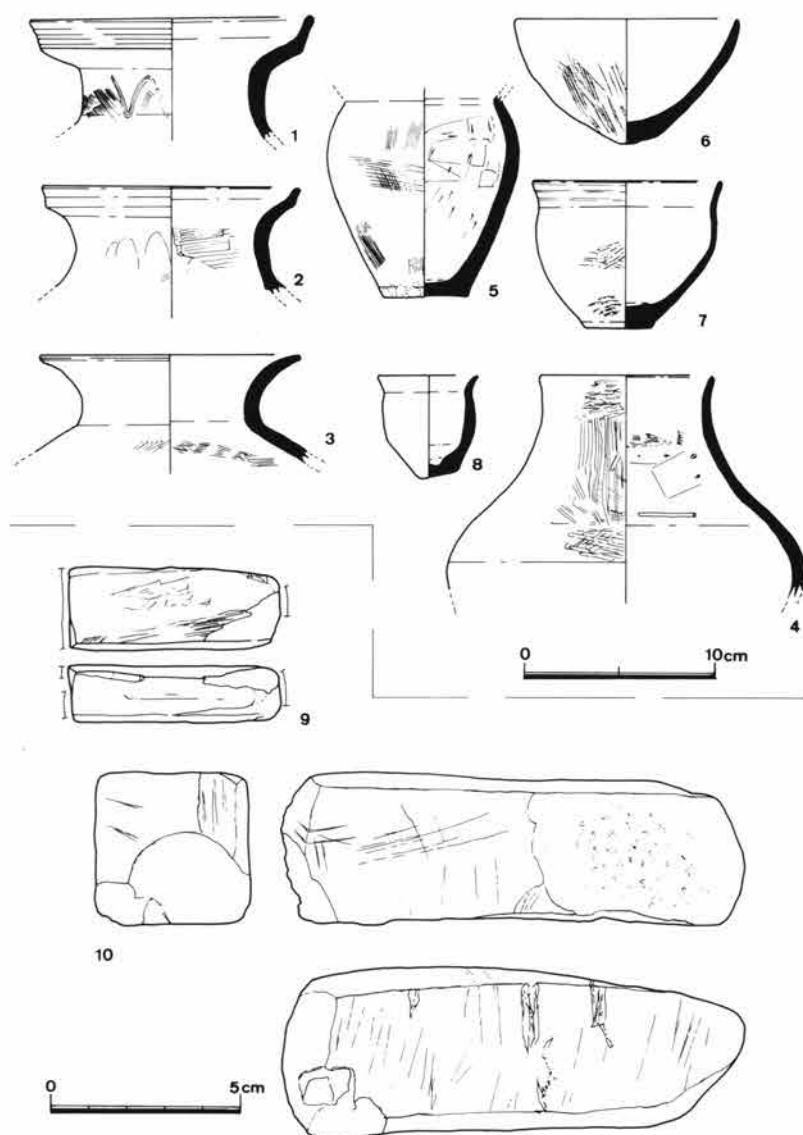
竪穴式住居跡(S H85・150)、土坑(S K125)、溝(S D97)などがある。土坑についてはほかにも2・3基ある。いずれも浅いものが多い。

竪穴式住居跡S H85は、円形で、直径約10mである(第70図)。特徴的なことは、内側が直径約7mの円形に一段くぼむ構造で、周囲は若干掘り残されてベッド状遺構が設けられていることである。残存の深さは内側で約30cm、ベッド状遺構のところ約25cmを測る。主柱穴は円形にめぐるものなど、合計8基確認された。排水溝は掘られていない。中央に一辺約45×60cm、深さ40cm

の方形土坑と、南側に近接して皿状に浅くくぼめた一辺約90cmの隅丸方形土坑が1基見つかった。ともに炭化物・焼土が多く含まれ、炉跡に関する遺構であることを示している。またベッド状遺



第70図 竪穴式住居跡 S H85・86・101平・断面図



第71図 竪穴式住居跡 S H85出土遺物実測図

構も含めた全体に焼土や炭化材の散乱が著しく、火事による焼失家屋と考えられる。

出土土器のうち第71図1～4は壺である。1・2は複合口縁化したもので、1は端部に擬凹線文が施される。4は体部をていねいなヘラミガキ調整で仕上げられる。底部に長い脚部がつくものである。5は甕の体部である。6～8は鉢である。平底の底部はごく小さい。9・10は大小の砥石である。使用面は非常に滑らかである。10は鋭利な金属器の刃を砥いだような深い線状痕が部分的に観察される。9は重さ35gで粘板岩製、10は重さ300gで凝灰岩製である。

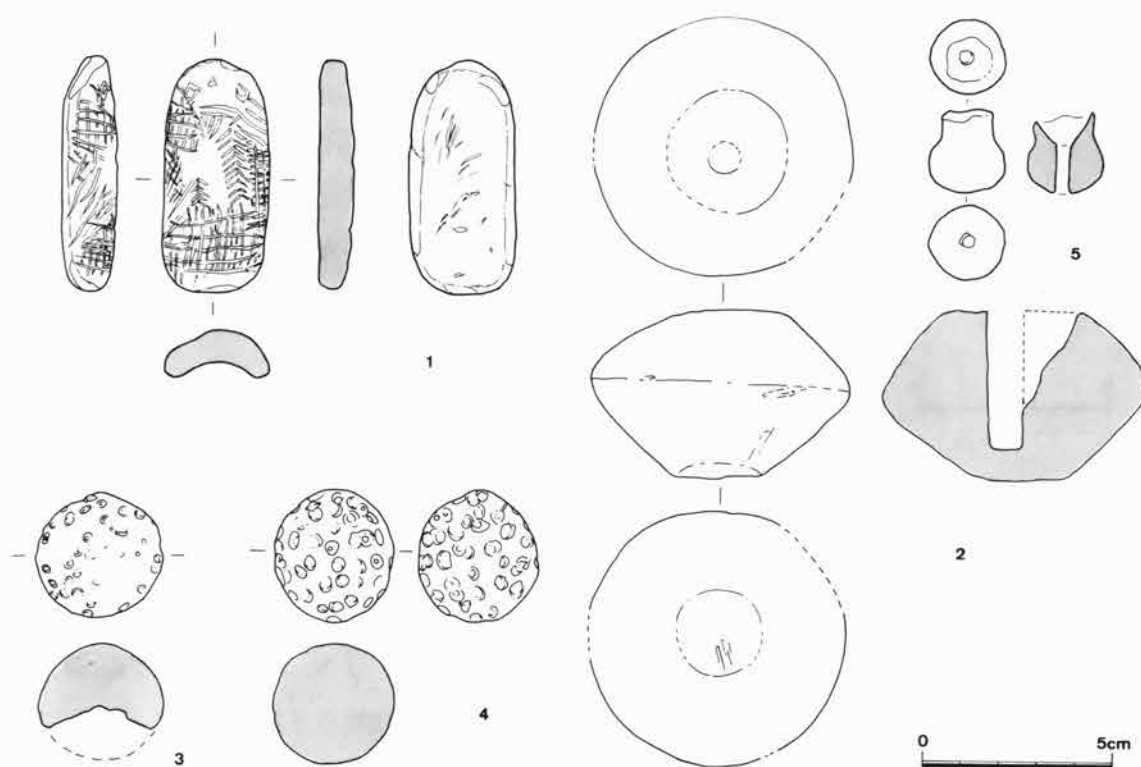
竪穴式住居跡 S H150は方形で、一辺4×5m、残

存の深さは約50cmを測る(第63図)。柱穴は3基確認されたのみである。炭化物・焼土のまとまりはなかった。床面からはタタキ痕を有する甕(図版第47-(3))や鉢などが出土している。

土坑 S K125は不定形ともいえる方形で、北側は溝 S D97で壊されている(第73図上)。残りは非常に浅く、底からのラインは皿状である。土器は壺などの断片がある。

溝 S D97は調査区を東西方向に走る(第60・70図)。集落内を画するものであろう。残りは非常に浅く、平均30cmほどの深さである。埋土は上半に暗灰茶褐色粘質土、底から約15cmの厚さに暗青灰色極細砂が斑紋状に入り、水の流れや溜まりがあったことがわかる。竪穴式住居跡 S H85との時間的前後関係は、床面の焼土や壁を壊しているためより新しいものといえる。土器の出土は僅少で、図化し得るものはない。後期末の複合口縁の壺などが出土している。

ここで弥生時代の土製品についてみておく。出土点数は合計5点ある(第72図)。1はおそらく昆虫の蟬を表現した土製品である。管状の細い棒の刺突で目が、直線文や綾杉文などの線刻で左



第72図 土製品実測図

1. 竪穴式住居跡 S H84 2. 溝 S D149 3. 竪穴式住居跡 S H85 4. 包含層 5. 溝 S D87

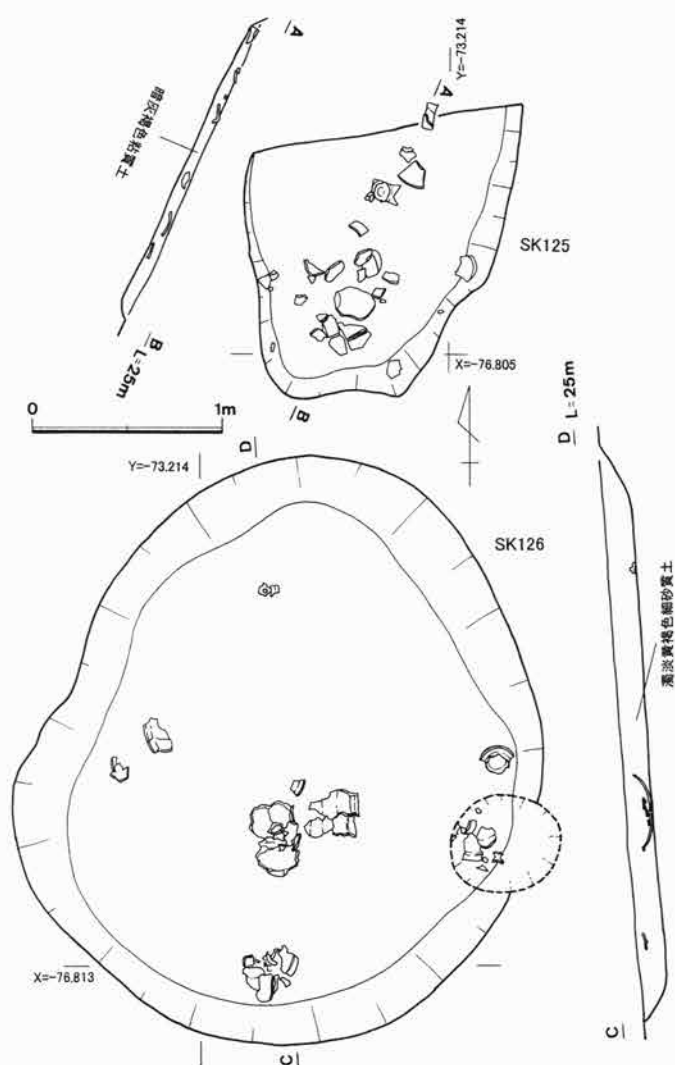
右の羽や腹部などが繊細に表現されている。裏面は中央を弧状に大きく凹ませている。中期の竪穴式住居跡 S H84からの出土である。3・4は小さな刺突痕を全体に施し、胡桃または桃核を表現した球形のものである。3は竪穴式住居跡 S H85から、4は調査区北壁中間の断ち割り作業中に出土した。5は直径約6.7cm、厚さ約4.5cmの算盤玉のような形で、中軸に穴があげられているが、貫通はしていない。溝 S D149内からの出土ではあるが、胎土・焼成、更に若干のこるミガキ痕などは弥生土器そのものの仕上がりである。把頭飾として報告されている大阪府茨木市東奈良遺跡(弥生時代中期)や大阪府寝屋川市楠遺跡などに出土例がある。^(注6) 5は穿孔をもつ土器に似せた玉状のものである。中期の溝 S D87からの出土である。

D. 古墳時代

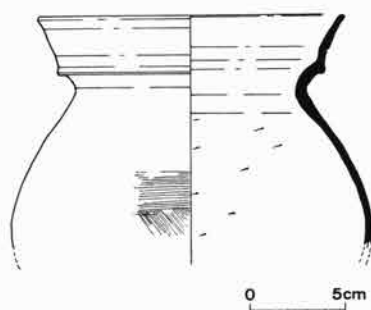
前期から後期末までのものがある。方形竪穴式住居跡(S H41・43・86・101・120・123・153～155)、土坑(S K125・126)、溝(S D149)などがある。

土坑 S K125はほぼ円形で、長軸3m、短軸2.7m、深さは約20cmを測る(第73図下)。濁淡黄褐色細砂質土の埋土である。古墳時代前期の複合(2段)口縁部をもつ土師器の甕(第74図)などが出土した。

竪穴式住居跡 S H41は一辺4×3.5m、残存の深さは約30cmを測る(第75図)。支柱穴は4基確認できた。南東部コーナーの一部を掘り残して竈が設けられるいわゆる青野型住居跡である。竈は燃烧部・煙道部が残存していた。



第73図 土坑SK125・126平・断面図

第74図 土坑SK126
出土土器実測図

竪穴式住居跡SH43は調査区南西隅で、一部しか確認できなかった(第60図)。約5mを測る一辺の中間部に竈が造り付けられている。南壁断面でみると、底面に濁黄灰色細砂質土が約3cmの厚さで堆積しており、検出時の指標となった(第59図)。

竪穴式住居跡SH86は一辺4.2×4.6mの長方形である。残存の深さは約20cmである。埋土は暗褐色粘質土で、柱穴は確認できなかった。竈を西壁中央部で確認した。ほとんど全壊状態であったが、炭化物や多量の焼土などが残存していた。

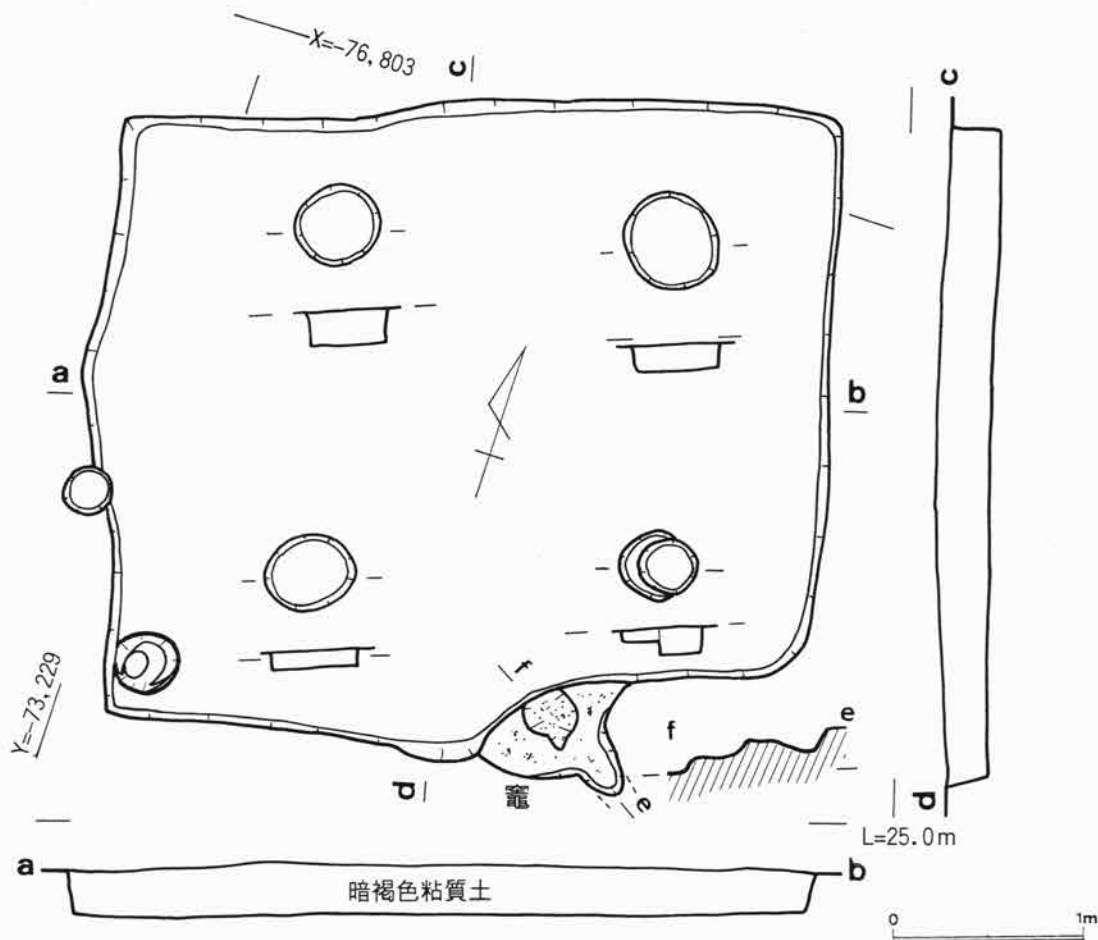
竪穴式住居跡SH101は約3.5mの隅丸正方形である(第70図)。残存の深さは約25cm、埋土は暗茶褐色粘質土である。柱穴は部分的に見つかっているが、不明瞭なものである。竈は南東隅で確認した。

竪穴式住居跡SH120は約4.5mの正方形である(第60図)。残存深さは約30cm、埋土は暗褐色粘質土である。主柱穴は明瞭ではない。竈は南東隅で確認した。焼土が厚く堆積していたが、壊れているため構造は不明である。このほかの4基の竪穴式住居跡SH123・153～155は、切り合いや削平が著しく残存状態は悪かった。

以上、住居跡内からの出土土器は僅少で、特に床面・底面からの遺物は皆無の状況である。それでも竈内やその周辺から出土した土師器・須恵器の年代から概ね6世紀後半から7世紀初頭のものといえる。第76図1は竪穴式住居跡SH41の埋土内から出た須恵器杯である。陶邑編年のTK209型式段階で、7世紀前半であろう。2はSH86の竈脇から出土した土師器甕である。7世紀のものである。

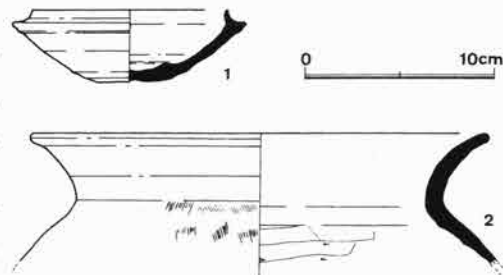
(黒坪一樹)

溝SD149は調査区のほぼ中央を東西に掘られている(第60図)。断面形は「U」字形や逆台形



第75図 竪穴式住居跡 S H 41 実測図 (柱穴・竈の断面レベルは24.5m)

で、深さは平均約50cmの残存状況である。埋土に砂礫を若干含むが、あまり流れはなかったようである。時期は7世紀代で、古墳時代最終末のものといえる。当該期の住居跡などはすべて本溝より南に存在しているので、集落の外縁部にめぐらされた溝であろう。出土遺物は須恵器を中心に非常に多い。第78図9～12は須恵器杯身である。いずれも胎土は粗く、焼成は良好である。色調は灰色である。11がもっとも遺存度が高く、約5割である。口径11cm、器高3.5cmである。



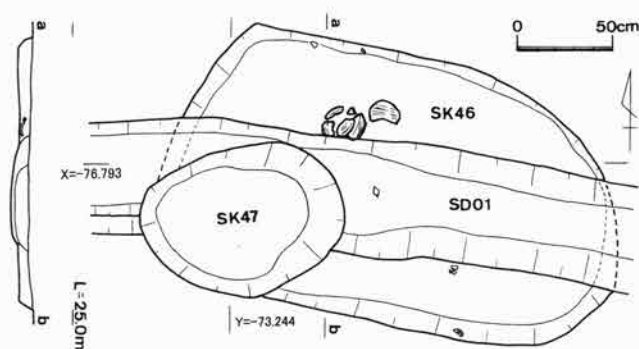
第76図 竪穴式住居跡 S H 41 · 86
出土土器実測図

(伊野近富・黒坪一樹)

E. 奈良～鎌倉時代

土師器皿や瓦器碗・皿などが入った土坑(S K 46・47)・柱穴・溝(S D 01・02)などがある(第77図)。

土坑 S K 47 はほぼ楕円形である。溝 S D 01 によって壊されている。暗灰色粘質土の埋土で、瓦器碗が完形で2個体(第78図1・2)出土した。1は口径14.7cm、器高5.3cmである。胎土は精良



第77図 土坑SK46・47、溝SD01平・断面図

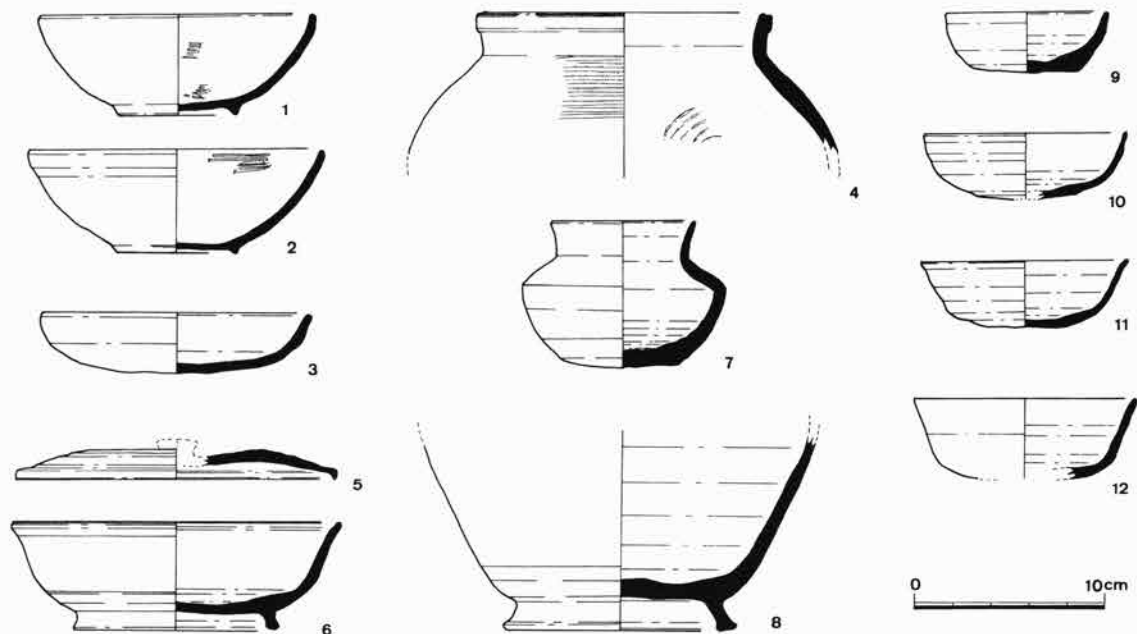
で焼成は軟である。色調は濃灰色である。内外面とも磨滅しているが、内面の一部に密なミガキが認められる。2は口径15.7cm、器高5.5cmである。胎土はかは1と同様である。瓦器碗の年代から平安時代後期に掘られたものである。

柱穴は、直径は20cm前後のもので、調査区南半から数10基を検出した。多くは

暗黄灰色粘質土や暗灰褐色粘質土の埋土をもつ。深さは10cm前後のもので、削平が進んでいる状況が見て取れる。掘立柱建物跡の抽出・復原はできなかった。出土した土器では、柱穴No25から出土した完形の土師器皿がある(第78図3)。口径14.2cm、器高3.1cmである。胎土は良で焼成は軟である。色調は淡褐色である。内外面とも磨滅している。口縁部には一段ナデを施す。平安時代後期である。柱穴内からは、このほかに瓦器碗・皿の断片(平安時代後期～鎌倉時代)が出土している。

溝SD02は古墳時代末の溝SD149の上層にはほぼ重なって検出された(第59・60図)。断面形は丸底の浅い皿状である。淡灰褐色粘質土を埋土とし、鉄分やマンガンの沈着が縁辺部に顕著である。

出土土器についてみる。第78図4は須恵器壺である。口径15.8cm、器高は7.5cm以上である。胎土は精良である。色調は淡褐色で、焼成は軟質である。内面にタタキ目が遺存している。5は須恵器杯蓋である。口径17.2cmである。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は濃褐色である。内外面ともロクロナデを施す。6は須恵器杯身である。口径17.6cm、器高5.7cmである。胎土は精良で、焼成も良好である。色調は濃灰色である。内外面ともロクロナデを施す。7は須恵器壺

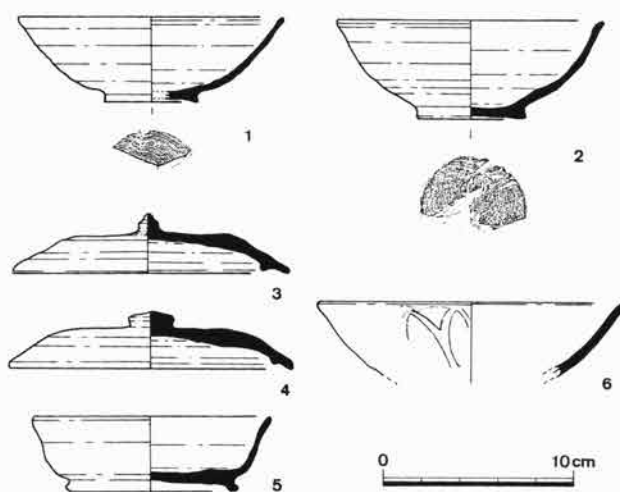


第78図 各遺構出土土器実測図

1・2. 土坑SK46 3. 柱穴No25 5～8. 溝SD02 9～12. 溝SD149

である。口径7.8cm、器高7.5cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は淡灰色である。内外面ともロクロナデで、体部下半はヘラケズリ、底部は未調整である。8は須恵器壺である。底径は12.4cmである。胎土はやや粗く、焼成は軟質である。色調は濃青灰色である。内外面ともロクロナデを施す。

溝S D01は幅約30cmで、長さ約16m分検出した(第60図)。深さは約5cmの残りである。暗灰褐色粘質土を埋土とする。13世紀代の瓦器碗断片が出土した。



第79図 包含層出土土器実測図

最後に包含層中のものについては、第79図1～6がある。1・2は須恵器碗である。1は口径14cm、器高4.5cmである。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は濃灰色である。内外面ともロクロナデを施す。平安時代中期の篠窯産である。2は胎土に砂粒を多く含む。同時期の篠窯産である。いずれも底部は糸切りである。3・4は須恵器杯蓋である。5は須恵器杯身である。口径12.7cm、器高3.8cmである。内外面ともロクロナデを施す。貼り付け高台である。6は中国製青磁碗である。口径は16.2cm、器高は4cm以上である。胎土は密で、焼成は良好である。色調は乳褐色で、外面に蓮弁文を施す。

(伊野近富・黒坪一樹)

4. まとめ

今回の調査成果は以下のとおりである。

①試掘調査の結果、住居跡や土坑が濃密に分布する集落の中心地(第1～4トレンチ)や、墓域(第5・6トレンチ)、そして集落から外れた区域(第7・8トレンチ)を明らかにすることができた。

②縄文時代晩期の遺構・遺物が確認され、確実にこの地で生業を営んでいたことが判明した。突帯文土器の残りも良好で、貴重な資料となろう。また調査地全体から出土した突帯文土器は、それらの形態から時間幅もあり、点数もかなりの数になることから、縄文時代集落の存在も視野に入れて、今後は調査をすすめる必要があろう。

③弥生時代中期における集落跡の広がりをここでも確実に捉えることができた。円形竪穴式住居跡1基と、多数の深い土坑・溝が見つかった。竪穴式住居跡S H84は円形にめぐる支柱穴や排水溝、深く大きな中央土坑などの施設をもつ。多量の弥生土器のほか、昆虫の蟬をあしらった珍しい土製品が1点出土した。中国では墓の遺骸に副葬される玉製の蟬が知られているが、土製とはいえ、集落内の竪穴式住居跡内から出土するのは非常に珍しい事例といえる。

土器群は出土点数も膨大で、住居跡内・土坑・溝内から出土し、コンテナ整理箱にして数10箱

にもなる。各遺構の性格を含めた集落全体における当地点の役割や、地域間の交流を研究するための貴重な資料が得られた。

④弥生時代後期についても直径10mの大型竪穴式住居跡をはじめ土坑・溝などが見つかり、非常に長期にわたる集落活動の一端を明らかにすることができた。

直径10mという竪穴式住居跡S H85の規模は、平均的なものからすれば格段に大きい。出土土器の量も多く、集落内における有力者のものか、あるいは集会所的は用途に使われたものと考えられる。

また、後期末の方形竪穴式住居跡S H150も見つかった。古墳時代前期の土坑S K126なども出ていることから、弥生～古墳時代の過渡期の状況についても理解する手がかりが得られた。

⑤古墳時代後期末の竪穴式住居跡が多数見つかった。竪穴式住居跡S H41は、壁面の南東隅を掘り残して竈を造り付けるいわゆる「青野型住居」と呼べるものである。由良川中流域の自然堤防上における生業活動が、青野遺跡(綾部市)などと同様に、盛行していたことを示す極めて重要な発見といえる。

⑥奈良～鎌倉時代についても多数の柱穴や集落を画する溝が見つかった。柱穴から掘立柱建物などを推定復原することはできなかったが、多量の須恵器・土師器・瓦器碗などから、特に平安時代後期から鎌倉時代(13世紀代)に集落が営まれていたことが判明した。

(黒坪一樹)

注1 梅原末治「天田郡 第二十六 西中筋村石剣発見ノ遺跡」(『京都府史蹟勝地調査会報告 第三冊』京都府) 1922

注2 調査参加者(順不同・敬称略)

調査補助員 石橋達郎・岩田典子・大槻治・岡崎志保・小島健之介・小滝悠平・鈴木達也・八瀬由香里

整理員 村井裕香・四方博子・野崎素子・堀くみ子・堀直子・稲田令子・岩田典子・八瀬由香里

作業員(社団法人福知山シルバー人材センター) 安達久治・西村司朗・片岡澄夫・荻野秀夫・熊谷義憲・加藤益美・高橋保治・池田孝夫・公手勤・足立章・豊嶋健司・井尻隆夫・高橋正・落合敏夫・大槻孝一・坪倉英一・桐村正巳・赤井淳・稲葉五三男・岡田達男・黒木敏満・福家義明・黒田勤・竹市春雄・酒井義明・水巻一・芦田光二・向山義直

注3 第55図下の分布図は「綾部の歴史と文化―母なる由良川―」『綾部市資料館常設展示図録 1992』から第6頁の図をもとに加筆・作成した。

注4 森正「1. 観音寺遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1995)』 京都府教育委員会) 1995

注5 加藤修・丹羽祐一「(4)遺物の検討 A. 土器」(『湖西線関係調査報告書』 湖西線関係遺跡調査団) 1973

突帯文土器および文献など、当調査研究センター調査員柴暁彦の教示を受けた。

注6 (財)大阪府文化財センター編『摂河泉発掘資料精選Ⅱ』 2002

注7 田辺昭三・平安学園考古学クラブ(『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園高校編) 1966

6. ^{のじょう}野条遺跡発掘調査概要

1. はじめに

野条遺跡は、京都府教育委員会・八木町教育委員会による分布調査や試掘調査で存在が明らかにされ、周知された遺跡である。このたび、野条遺跡推定範囲内において亀岡園部線緊急道路整備事業が計画されたことから、事前に工事対象地区における遺構の有無や分布状況などを確かめることを目的として試掘調査を実施した。

調査にあたっては、京都府教育委員会・八木町教育委員会など関係諸機関、地元自治会などにご協力を得た。また、作業員として参加して頂いた方々、補助員の皆さんには炎天下のもと、あるいは雨中、作業に従事して頂いた。記し、謝意を表します。

調査は、当調査研究センター調査第1係長石井清司、同主任調査員田代弘が担当した。調査は、平成14年5月21日に着手し、同年10月15日に終了した。調査面積は約450㎡である。なお、調査経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 遺跡の位置と環境

野条遺跡は、八木町大字野条に所在する。園部町を南流してきた大堰川は、八木町に至り流域面積を拡大し始め、沖積地を著しく発達させながら亀岡盆地へと流入する。野条地区が位置するのは、こうした場所である。亀岡盆地の北端、交通の要衝である。

野条遺跡は、集落遺跡である。大堰川東岸に位置し、筏森山の東に広がる平地に営まれている。

当遺跡の周辺には、第80図に示したようにたくさんの遺跡が分布している。当遺跡の歴史的⁽¹⁾⁽²⁾位置を知るために、主な遺跡について簡単にみておくことにしたい。

野条遺跡の南方にある池上遺跡(58)は、後期旧石器時代のナイフ型石器が出土しており、町内で最も古い時代の遺跡である。また、数次にわたる発掘調査で、弥生時代中期から中世にかけての建物跡などの遺構群が多数発見され、この地域で中心的な集落遺跡であることが明らかにされた。調査では多くの成果があがっているが、弥生時代・古墳時代・奈良時代に特筆すべきものがある。弥生時代中期営まれた集落と墳墓群である方形周溝墓からは、多数の土器が一括して出土しており、この地域の標識的な資料として注目を集めている。整然と配置された古墳時代後期の竪穴式住居跡群は大規模な計画村落と推定されている。奈良時代においては、官衙的様相を帯びた大型掘立柱建物群が発見されており、この地域の律令期の歴史的様相を理解する手がかりになるものと期待⁽¹⁾⁽³⁾される。

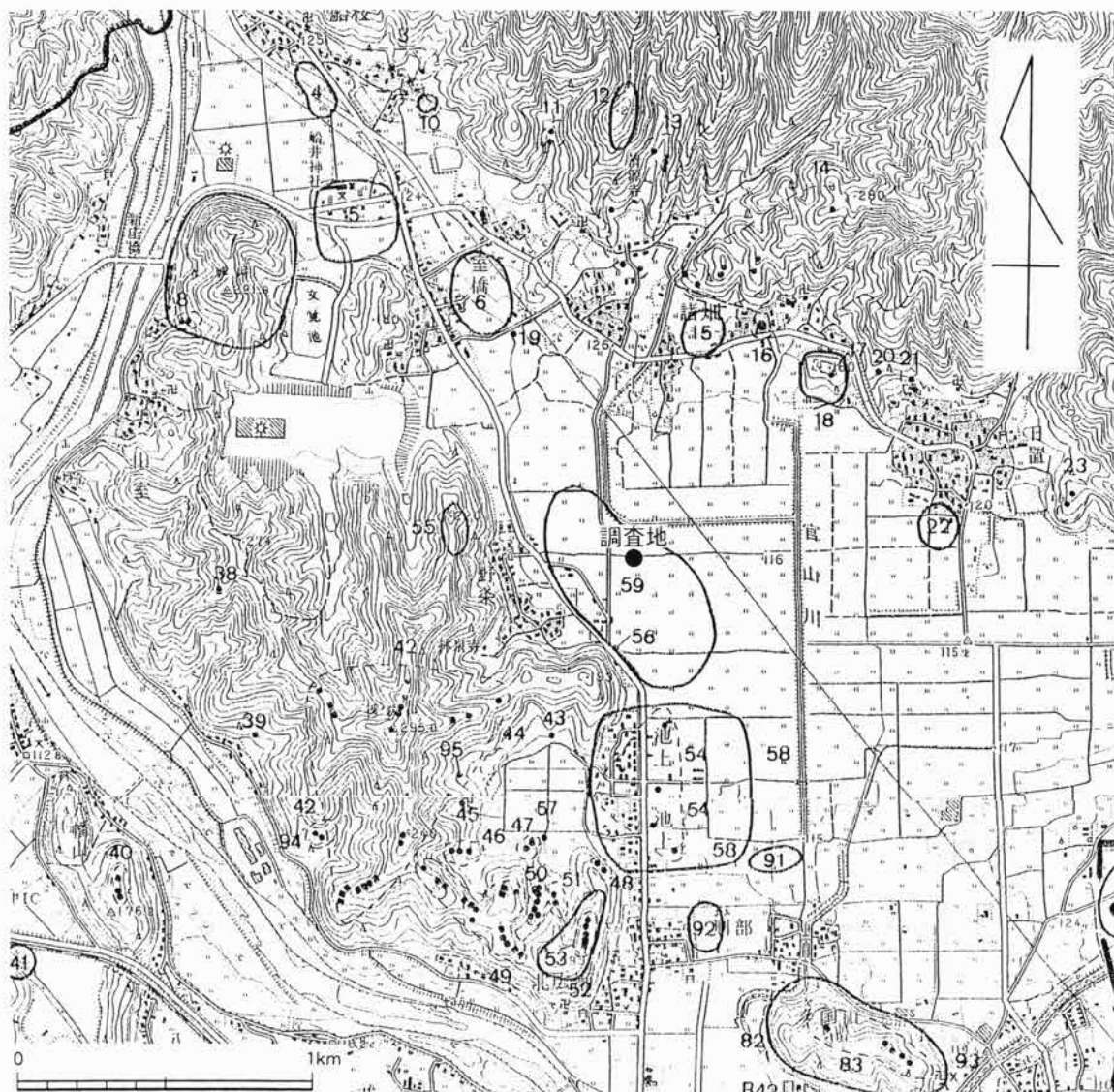
北側の山裾でも、古代に遡るとみられる集落遺跡がたくさん確認されている。船枝遺跡(4)、新庄遺跡(7)、室橋遺跡(6)、諸畑遺跡(15)、八木田遺跡(18)、日置遺跡(22)などである。

古墳も多く、遺跡の西に位置する筏森山で、筏森山古墳群(42)、北広瀬城古墳群(53)、寺内古墳群(47)などが、南に位置する多国山上で、多国山古墳群(83)が確認されている。

また、畑中城跡(12)、北広瀬城跡(52)、野条城跡(55)、刑部城跡(82)など、戦国期に営まれたと推定される山城跡も数多い。

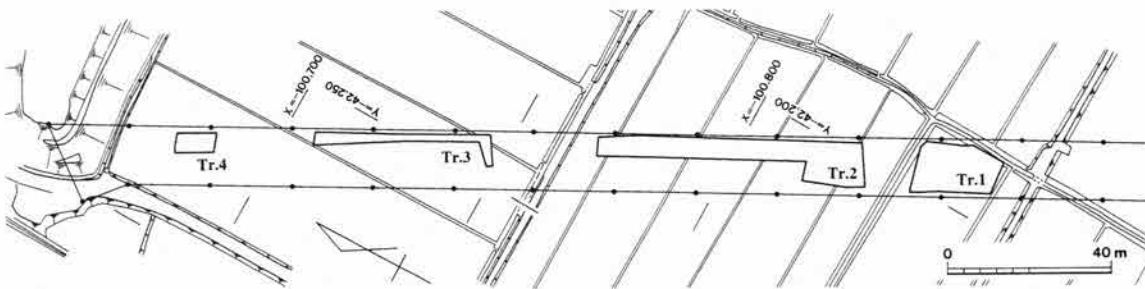
3. 調査の経過と概要

(1) 調査経過



第80図 調査地および周辺遺跡位置図(京都府遺跡地図〔第3版〕第2分冊1/25,000)

- | | | | | |
|------------|-----------|-------------|------------|------------|
| 3. 清谷古墳群 | 4. 船枝遺跡 | 5. 新庄遺跡 | 6. 室橋遺跡 | 7. 新庄城跡 |
| 8. 山室古墳群 | 10. 舟枝館跡 | 11. 美津谷古墳群 | 12. 畑中城跡 | 13. 大谷口古墳群 |
| 14. 松本古墳群 | 15. 諸畑遺跡 | 16. 福本古墳群 | 18. 八木田遺跡 | 21. 西上里古墳群 |
| 22. 日置遺跡 | 23. 東山古墳群 | 40. 八幡山古墳群 | 41. 沢ノ谷遺跡 | 42. 筏森山古墳群 |
| 46. 寺内西古墳群 | 47. 寺内古墳群 | 48. 寺内東古墳群 | 49. 南尾西古墳群 | 50. 南尾古墳群 |
| 51. 南尾東古墳群 | 52. 北広瀬城跡 | 53. 北広瀬城古墳群 | 54. 狐塚古墳群 | 55. 野条城跡 |
| 58. 池上遺跡 | 59. 野条遺跡 | 82. 刑部城跡 | 83. 多国山古墳群 | 91. 池上古里遺跡 |
| 92. 西里遺跡 | | | | |



第81図 トレンチ配置図

調査着手に当たり、まず、調査区の設定を行った。調査対象地内に試掘トレンチを4か所(南から第1～4トレンチと呼称)を設定した(第81図)。そして、バックホーを用いて、一部を深部まで掘削した。掘削断面を観察し、土層体積状況を検討した。その結果、最上層に耕作土層であるグライ土壌と床土に当たる黄褐色の2層があり、次に上部に遺物を含む黒色土、そして礫を含む黄色粘土層があることがわかった(第86図)。遺構は、黒色土層上、あるいは、黒色土中から掘削されたと判断した。迅速に遺構を検出するためには、第3層上面付近までバックホーで土層を水平に除去することが妥当と判断した。

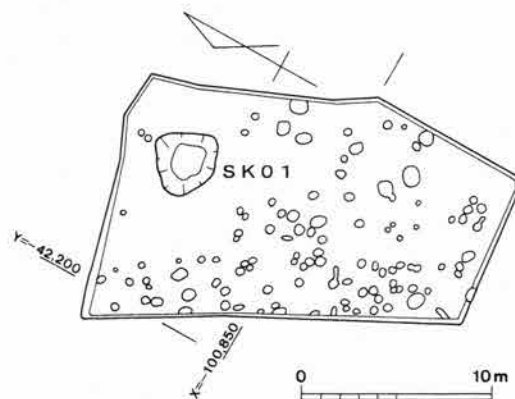
以上の観察を踏まえ、調査地区全体について、黒色土層と黄色粘土層の漸移層までバックホーを用いて土層を除去することとした。

土層除去後、人力を投入し、調査準備を行った。遺構を検出しやすくするために機械掘削後の残土や掘り残しなどを取り除き、調査地を平滑に保つ作業と、雨や周囲の水田から浸入する水に対処するための排水施設作りである。各トレンチにおいて以上の作業を行った後、遺構の精査にとりかかった。地山である黄色粘土層上面において遺構の検出を目指し、精査を繰り返した。地山面を平滑に整え、土色の違いに留意して遺構検出に努めた。その結果、竪穴式住居跡をはじめ、溝、土坑、多数のピット群などの遺構群を検出することができた。各トレンチの遺構の状況は、以下の通りである。

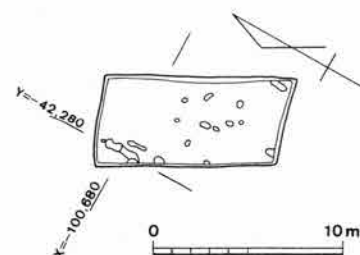
(2) 調査成果

第1トレンチ(第82図)

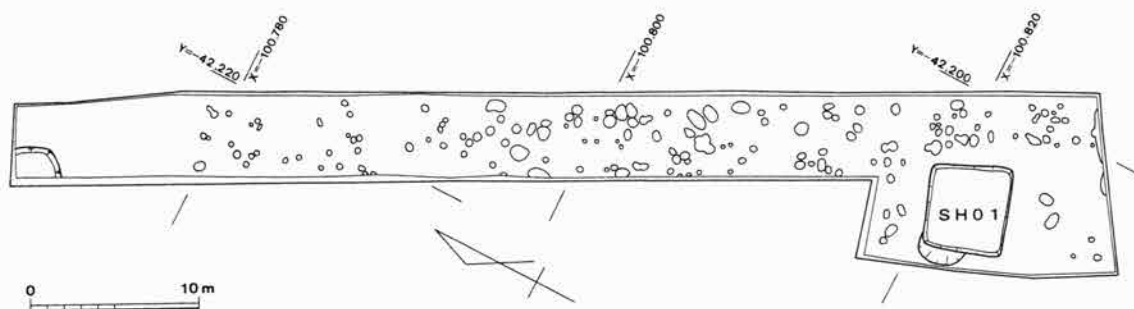
当初、約100㎡を調査し、その後拡張して最終的に約240㎡を調査した。大型の土坑、ピット多数を検出した。土坑は直径約3m、深さ約60cmの楕円形である。時期は明らかでない。第2トレンチで検出した竪穴式住居跡と同様、黒色土を埋土としており、古代に遡る遺構であると判断している。遺構に伴う遺物はないが、精査中に、弥生時代後期、古墳時代のものとみられる土器細片を少



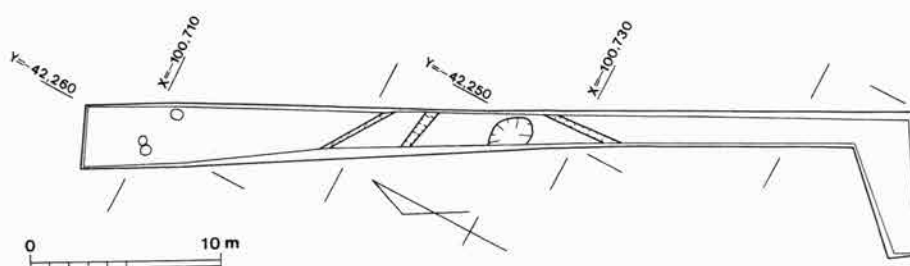
第82図 第1トレンチ遺構配置図



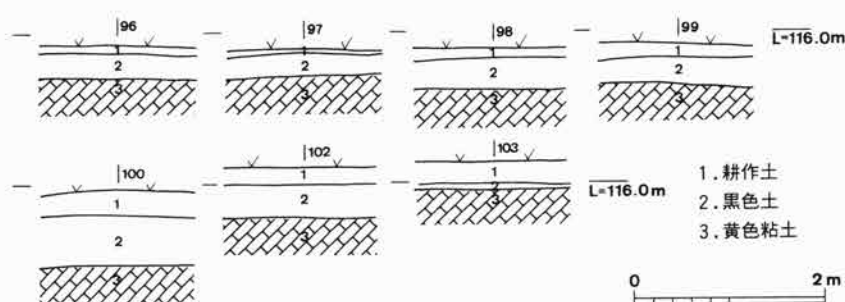
第83図 第4トレンチ遺構配置図



第84図 第2トレンチ遺構配置図



第85図 第3トレンチ遺構配置図



第86図 土層柱状図

量検出した。

第2トレンチ(第84図)

竪穴式住居跡、溝、土坑、ピット多数を検出した。竪穴式住居跡SH01は、一辺が約5mの方形である(第87図)。赤く変色した埋土に覆われ、床

面付近からは垂木や柱、屋根材の一部とみられる炭化物が多量に出土した。炭化物の出土状況、埋土の状況などから、火災家屋と考えられる(図版第54-(3))。

この住居跡は、炉跡に特徴がみられる。中央に炉跡を設け、周囲に約5～10cmほど土を盛り上げて堰堤状の遺構をこしらえている。堰堤状の遺構は、住居南壁中央に掘られた土坑に向かって「ハ」の字状に延長されている。中央炉と土坑は、堰堤状の遺構により結ばれ、一体として設置された構造となっているのである(図版第55-(2)、図版第56-(3))。壁際の土坑底には、火災によるものとは異なる炭・灰の堆積がみられた。土坑は、中央炉との連結構造からみて、ただの貯蔵用土坑ではなく、炉跡からでた炭灰などを貯蔵するような機能をもたされたものであり、炉の一部として理解できるものかもしれない。

出土遺物は、炭・灰の直下、床面上でまとまって出土している。土器をはじめ、鉄鏃とみられる鉄器、台石、砥石などがある。土器は、弥生時代後期末期に属するもので、壺・甕・高杯・器台・鉢などの各器種が一括して出土している(第88図1～40)。在地産の土器とともに、北陸、近江などの遠隔地から搬入されたとみられる土器が含まれている。

溝は、幅、深さとも約1m前後を測る。竪穴式住居跡と同時期の土器が出土しており、関連のある遺構とみられる。

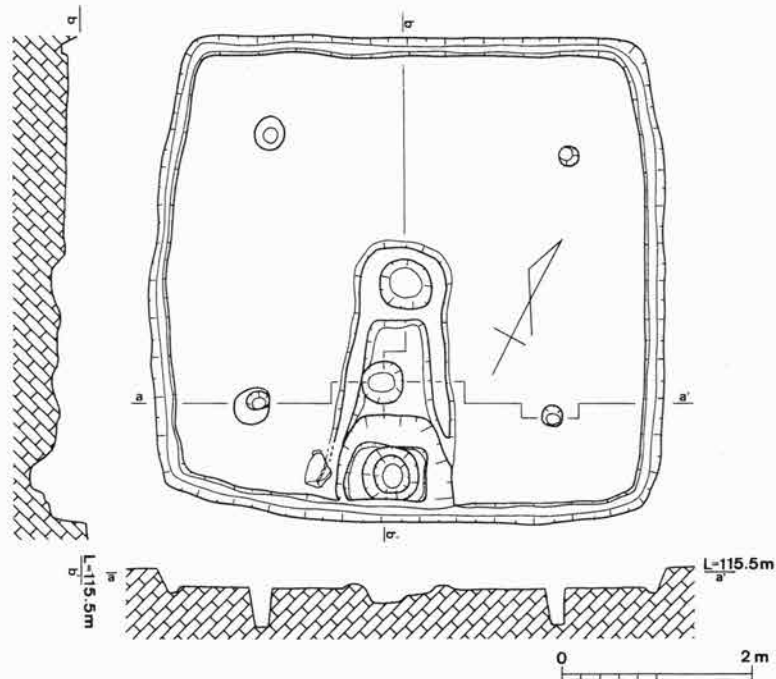
第3トレンチ(第85図)

約100㎡を調査した。黄色粘土上面において、溝、土坑ピットなどを検出した。

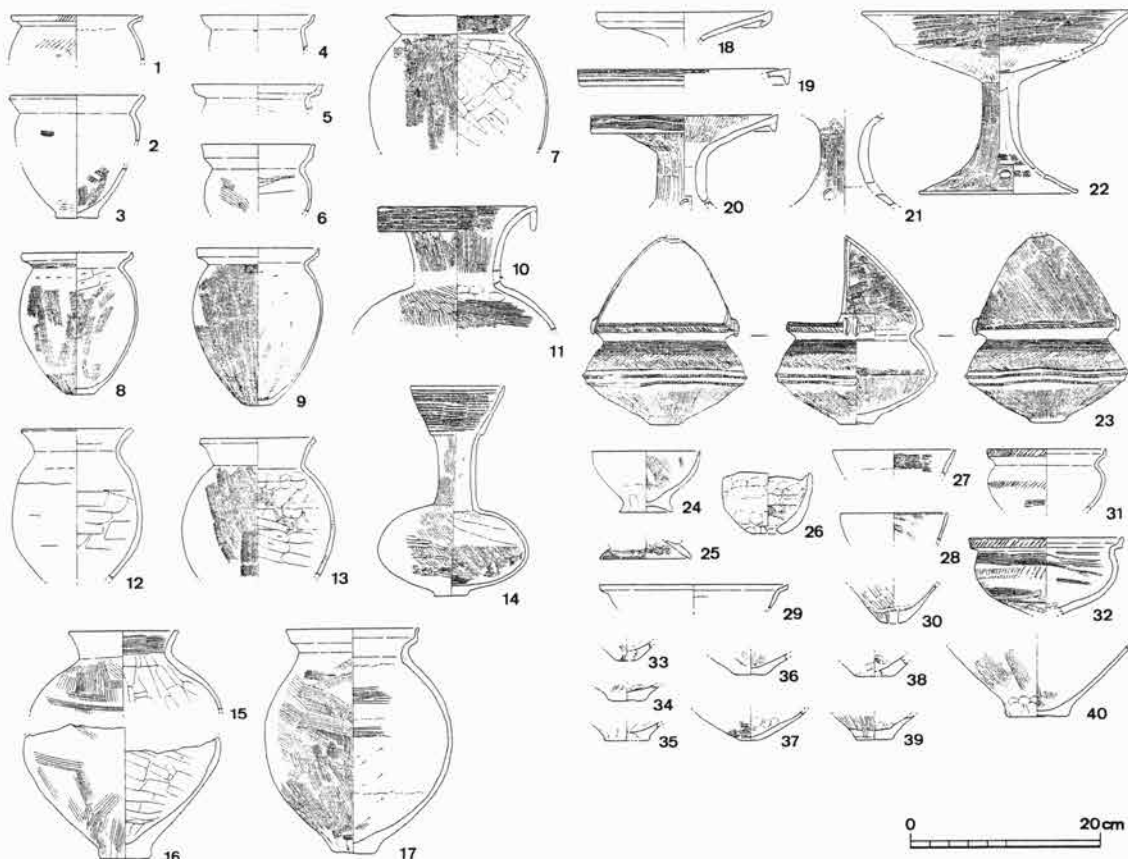
土坑は、幅が約60cmほどの隅丸方形である。黒色粘土を埋土とし、弥生時代以前に遡るものと推測した。溝は、土坑と同じ埋土を持つものがあり、土坑と関連するものと思われる。

第4トレンチ(第83図)

約50㎡を調査した。土坑の一部、ピット多数を検出した。土坑には弥生時代のものとみ



第87図 第2トレンチ S H01平面図



第88図 第2トレンチ S H01出土遺物実測図

られる土器細片が含まれていた。

4. ま と め

今回の試掘調査では、以上のような各種の遺構が検出された。遺構密度はあまり高くはないが、調査地全体にわたって古代の生活の跡が刻まれていることが判明した。

竪穴式住居跡が検出されたことにより、野条遺跡が弥生時代後期に遡る集落遺跡であることが確かめられ、周囲に関連遺構が広がる可能性が高まった。

竪穴式住居跡で検出した弥生時代後期末の遺物群に混じって、弥生時代中期に特徴的な形式を有する磨製石鏃なども出土しているので、時期が明らかでない遺構のなかには、弥生時代中期に遡るものがある可能性を考えておきたい。

住居出土土器群は、火災による家屋倒壊時の一括資料として貴重なものである。遺存率が高いうえ、在地土器と搬入土器の同時性を裏付けることのできる資料であり、この地域の標識的資料としうるものである。今後、整理作業の進展をまって、出土状況の詳細などを報告する予定である。

(田代 弘)

注1 作業員 滝口来吉・松本安治・橋本宇平・竹井笑子・松本喜代子・松本敏子・山本千代子・西垣久江

調査補助員 天池佐栄子・宅間のり子

整理員 陸田初代・荻野富紗子・内藤チエ・西脇夏海・木村悟

注2 第80図は、以下の文献を転載加工したものである。遺跡番号は遺跡地図に示された遺跡番号である。
京都府教育委員会『京都府遺跡地図第3版 第2冊』 2002

注3 谷口悌『池上遺跡発掘調査概要 第2次調査』八木町教育委員会 1998
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京埋セ現地説明会資料―池上遺跡第13次―』
2002.11.27

7. ^{おおた}太田遺跡第14・15次発掘調査概要

1. はじめに

太田遺跡第14・15次の発掘調査は、京都府農林水産部が施工する府営ほ場整備事業に伴う事前調査である。本書は、平成11年度に京都府教育委員会が試掘調査を実施し、その成果をもとに2か年にわたって実施した発掘調査の概要である。遺跡の所在地は、亀岡市萩田野町太田である。

平成13年度に実施した第14次調査では、第1トレンチにおいて面的調査を行い、また、遺跡の広がりを確認するために第2～6トレンチにおいて確認調査を行った。第14次調査は、合計6か所の調査区で約1,200㎡の調査を実施した。調査期間は、平成13年11月8日から平成14年2月12日であり、期間中、調査地に隣接する亀岡市立南桑中学校生約200名を対象に現地見学会を開催した。発掘調査は、調査第2課調査第2係長伊野近富、同主任調査員小池寛、同専門調査員黒坪一樹が担当した。

一方、平成14年度の第15次調査では、第1トレンチにおいて面的調査を行うとともに、ほかに2か所のトレンチを設定し、遺構と遺物の拡がりを確認した。第15次調査は、合計3か所の調査区において約500㎡の発掘調査を実施した。調査期間は、平成14年9月20日から同11月8日であり、伊野・小池が担当した。なお、関係者説明会を11月6日に実施した。

本概要作成に係わる整理作業および執筆は、小池が行った。なお、酷暑、酷寒のなか、現地調査に従事していただいた方々、および、多くのご協力を得た南丹土地改良事務所・京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・亀岡市立南桑中学校をはじめとする関係機関の方々にお礼を申し述べたい。

なお、今回の調査に係わる経費は、全額、京都府農林水産部が負担した。



第89図 調査地位置図
(亀岡市史付図1/25,000に加筆)

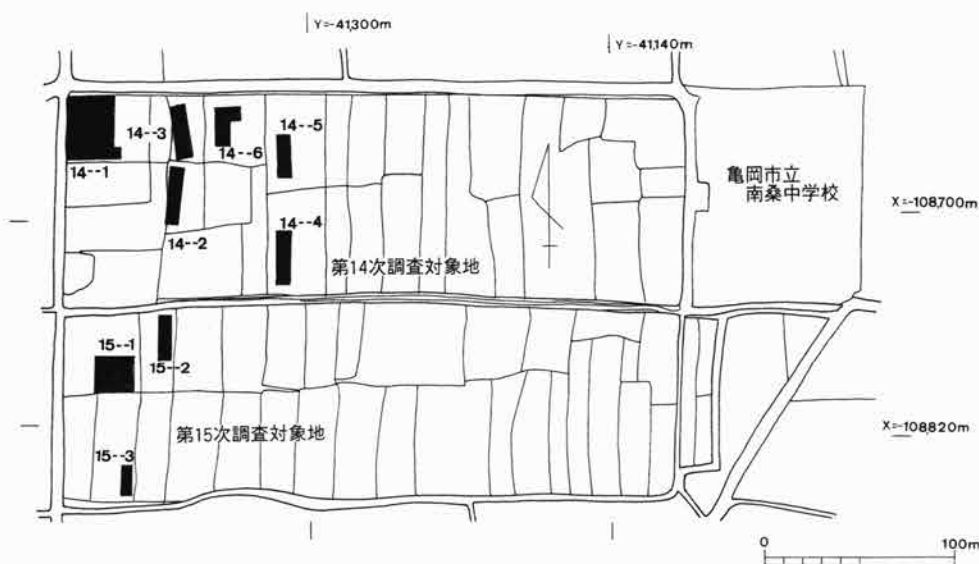
2. 太田遺跡の歴史的環境(第89図)

太田遺跡は、縄文～江戸時代に至る遺跡であり、亀岡盆地を代表する複合遺跡である。既往の発掘調査では、京都縦貫自動車道建設地において弥生時代前期の遺構や遺物が良好な状態で確認された。それらの調査成果は、当該地域における農耕文化の受容の具体的様相を理解するうえで基礎資料を提供したばかりでなく、朝鮮系無文土器の出土をはじめ、他地域の土器の出土から地域間交流を考察するうえで基礎となる多くの資料を提示した。また、太田遺跡地内における弥生時代後期から古墳時代前期の遺構や遺物の確認は、当該時期における土器の編年的研究の基礎的資料を提供したばかりでなく、広域な遺跡地内における土地利用の変遷を明らかにしてきた。

一方、平安時代後期から鎌倉時代の集落遺構の検出や一括遺物の出土は、中世土器研究の基礎的資料を提示したばかりでなく、室町時代の集落解体に伴う遺跡地内の耕地化は、千代川遺跡をはじめとする亀岡盆地一帯に共通する歴史的変化の典型的事例として認識されるに至っている。

3. 調査の概要(図版第57-(1))

第14次調査地は、亀岡市立南桑中学校西方約300mに位置しており、弥生時代後期の溝やピットなどの集落関連遺構や当時の地理的環境を知るうえで基礎資料となる池沼などを検出した。また、平安時代後期から鎌倉時代前期の井戸やピットなどの集落関連遺構は、太田遺跡地内で今まで確認されてきた同時期の遺構との比較により、土地利用の変遷を考えるうえでの基礎資料となるばかりでなく、集落自体の移り変わりを考えるうえでの基礎資料を得ることができた。一方、第15次調査では、弥生時代後期の集落遺構の検出とともに、同時期の埋葬施設を検出しており、遺跡地内における土地利用の推移を明らかにし得た。なお、本概要では第14次調査の6か所に設定したトレンチごとの遺構・遺物を報告し、次に第15次調査の3か所に設定したトレンチごとの遺構・遺物について記述する。また、図面上では、各トレンチの呼称は、まず、次数を冠した後、にトレンチ名を記載し、統一した(第90図)。

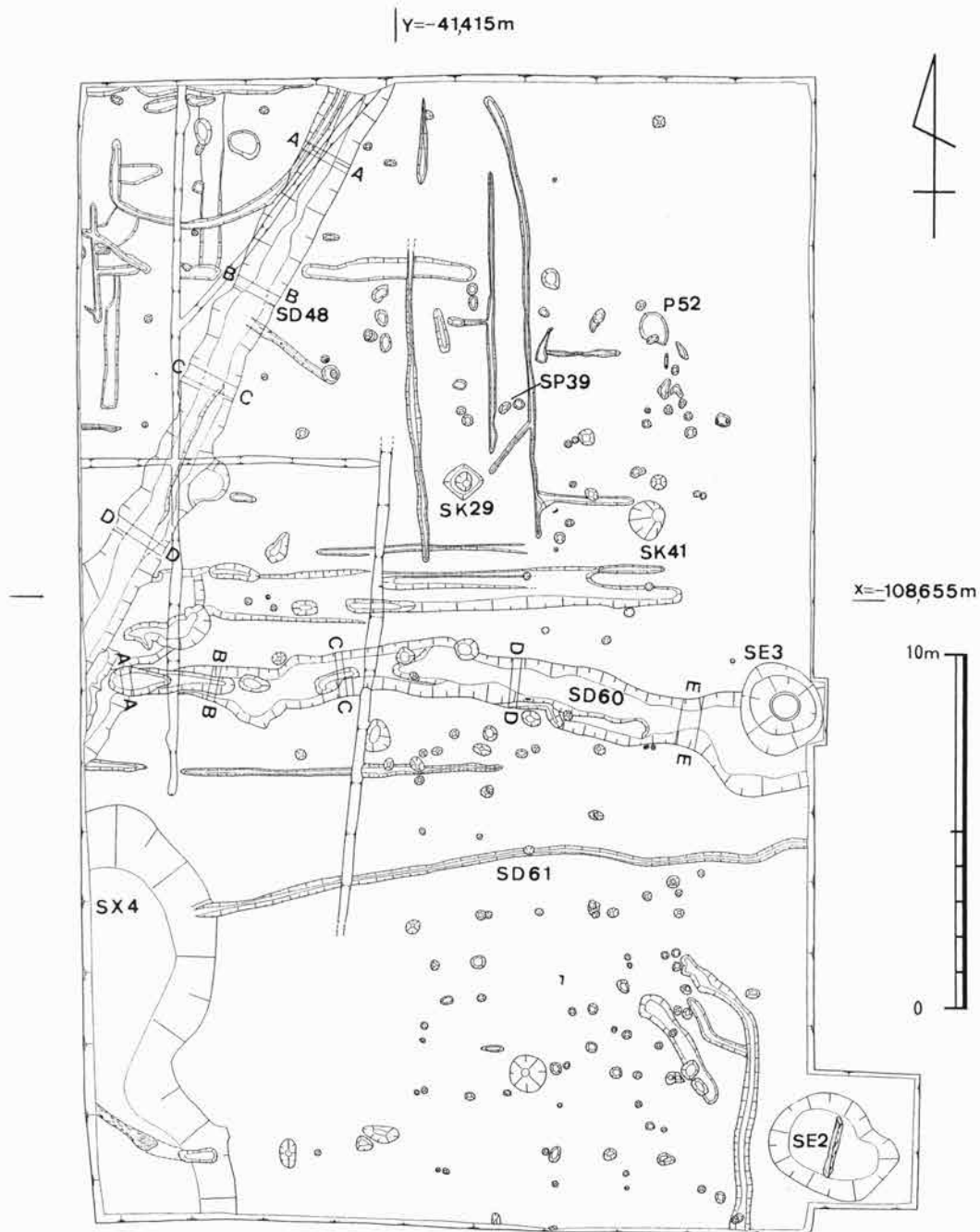


第90図 トレンチ配置図

(1) 第14次調査検出遺構(図版第57-(2))

①第14次第1トレンチ(第91図、図版第58-(1)) 遺構検出面の標高は、概ね100.8mを測り、わずかではあるが南西方向に傾斜している。基本的な層位は、耕作土と床土下に黄褐色粘質土が広がっており、この層が遺構検出面である。しかし、池沼S X 4直上には濁黄褐色土が堆積しており、ほかとは堆積状況が異なっている。

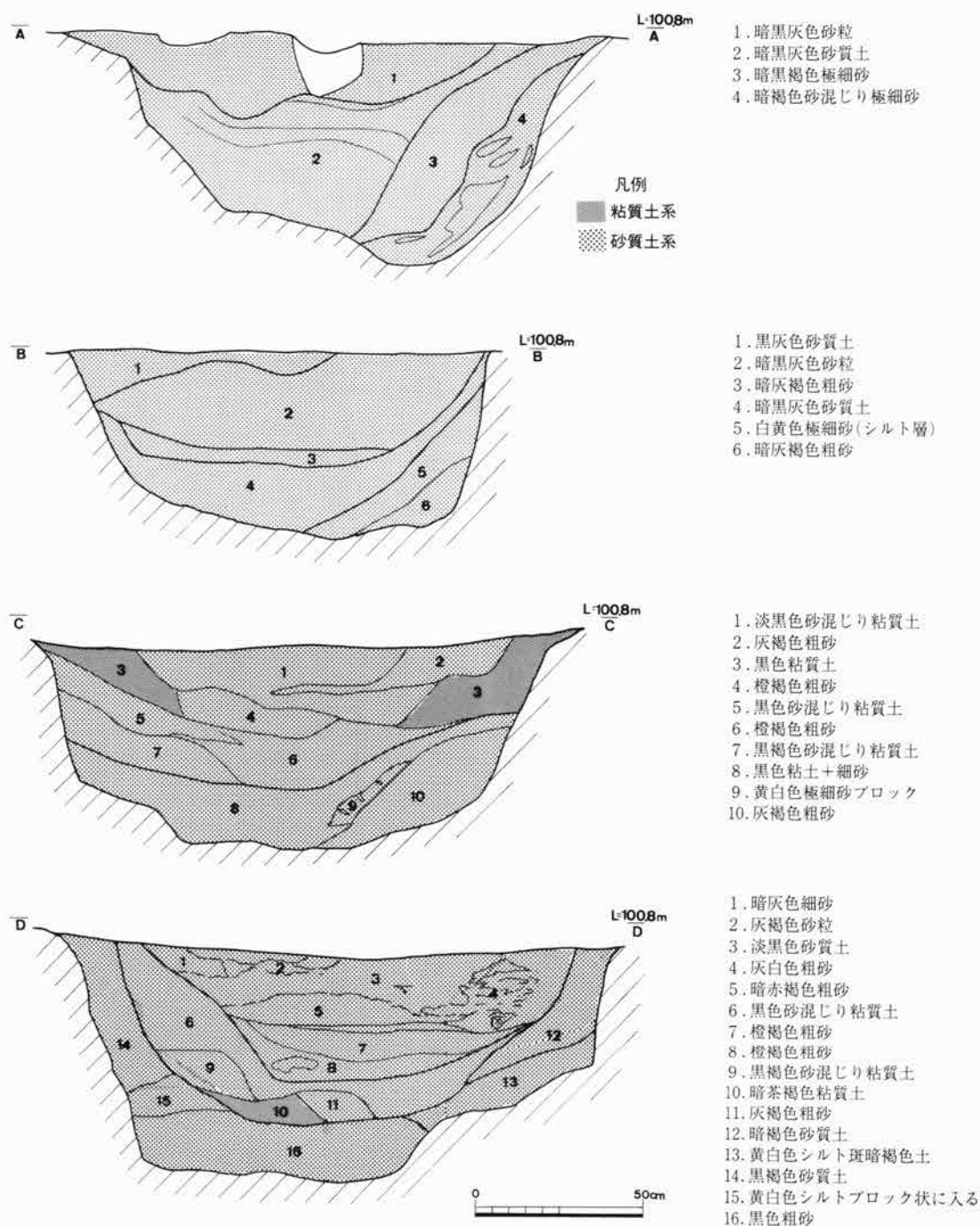
弥生時代の遺構として、北東から南西方向に直線的に流れる溝SD48と、溝SD48が流れ込むと考えられる池沼S X 4、そして、ほぼ東西方向にやや蛇行して西流する溝SD60などがあり、また、溝SD48と溝SD60に挟まれた狭小な平坦部には、同時期の土坑や柱穴群がある。一方、



第91図 14-1 トレンチ遺構実測図

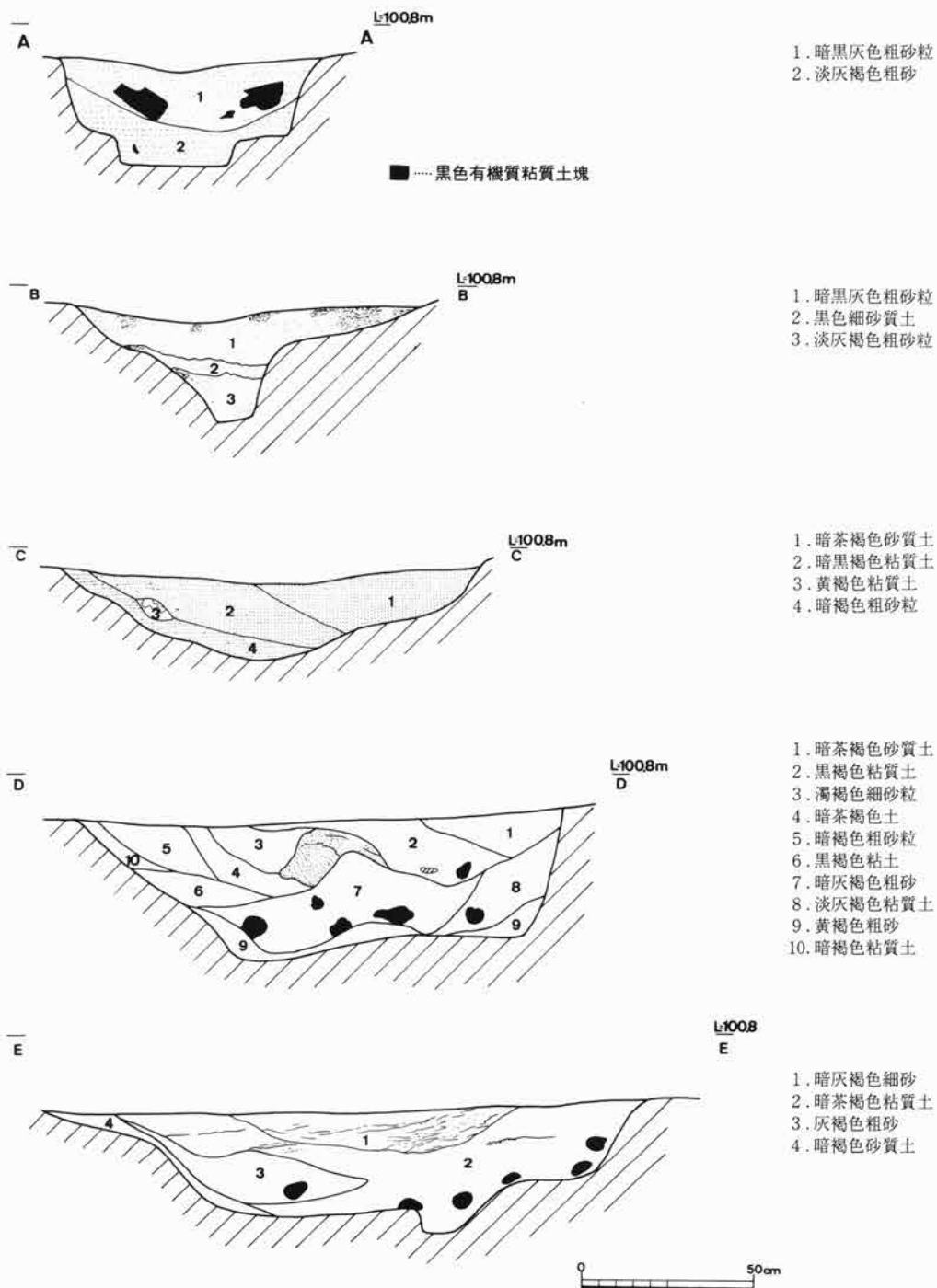
平安時代後期の井戸 S E 2 や鎌倉時代前半に比定できる井戸 S E 3、そして、井戸と併存したと考えられる柱穴群を検出することができた。

溝 S D 48 (第92図) は、幅 1.3~1.6m、最も深い部分での深さは 0.7m を測る。部分的に黒色粘土が観察できるものの、基本的には砂層が厚く堆積している。各砂層間での複雑な切り合いが観察できることから、一時的な流水によって埋没した過程を想定することができる。なお、溝内から第 104・105 図 1~22 に図示した土器が多量に出土した。溝 S D 60 (第93図) は、幅が 0.7~1.7m であり、平均的な深さは 0.4m である。ほぼ東西方向に主軸をもち、西流する。堆積層の多くは

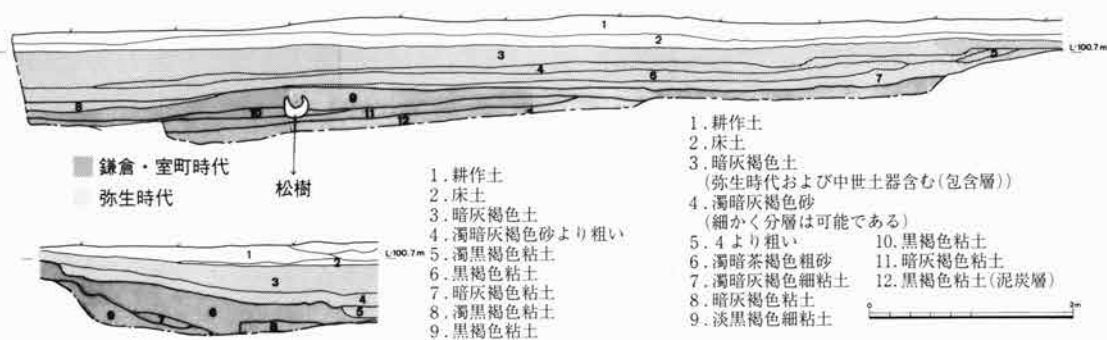


第92図 14-1 トレンチ溝 S D 48 土層断面図

砂層であるが、部分的に黒色粘土ブロックが混入していることから溝S D48と同じく一時的な流水による埋没を想定することができる。池沼S X 4 (第94図)は、その大半がトレンチ外に位置するため、全体の規模や深さについては不明であるが、池沼縁辺部の形状は、なだらかに傾斜している。なお、現行道路直下での検出であったため池沼底部の確認はし得なかったが、粘性が非常に強い黒色粘土が厚く堆積しており、また、倒れ込んだ松樹や多くの木葉、湿地帯の植生を示す花粉を多く検出していることから、集落内に存在する比較的小規模な池沼であった可能性がある。また、池沼S X 4は、弥生時代に大半が埋没したと考えられるが、瓦器片を含む3～8層が弥生



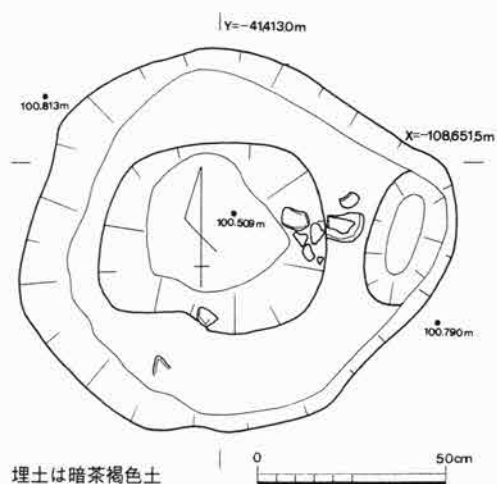
第93図 14-1 トレンチ溝S D60土層断面図



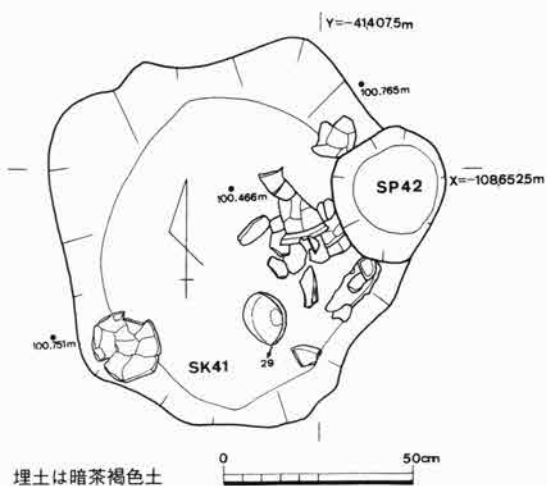
第94図 14-1 トレンチ池沼 S X 4 西壁土層断面図

時代堆積層上に堆積していることから、中世まで窪地として存在した可能性がある。なお、図示し得た土器は第106図23～26であるが、ほかにも大量の土器片が出土している。土坑 S K 29(第95図)は、直径約1mの不整円形を呈しており、二段に掘り込まれている。また、土坑 S K 41(第96図)は、一辺約0.9mの不整形土坑であり、第106図29に図示した弥生土器が出土している。これ

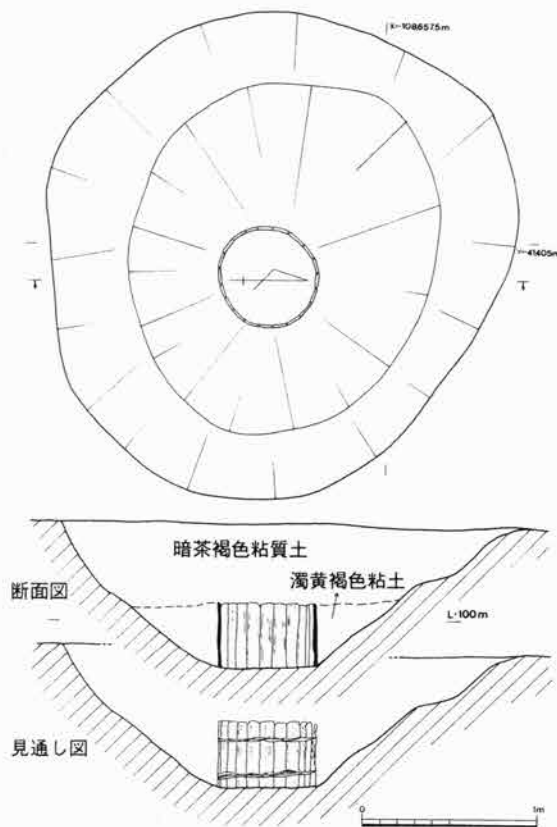
らの土坑群の用途については不明であるが、破片化した土器が土坑底部から出土していることから、生活廃棄物を投棄したと考えられる。弥生時代の主要遺構は以上であるが、竪穴式住居跡の検出もないことから当該地一帯が集落の中



第95図 14-1 トレンチ土坑 S K 29実測図



第96図 14-1 トレンチ土坑 S K 41、ピット S P 42実測図

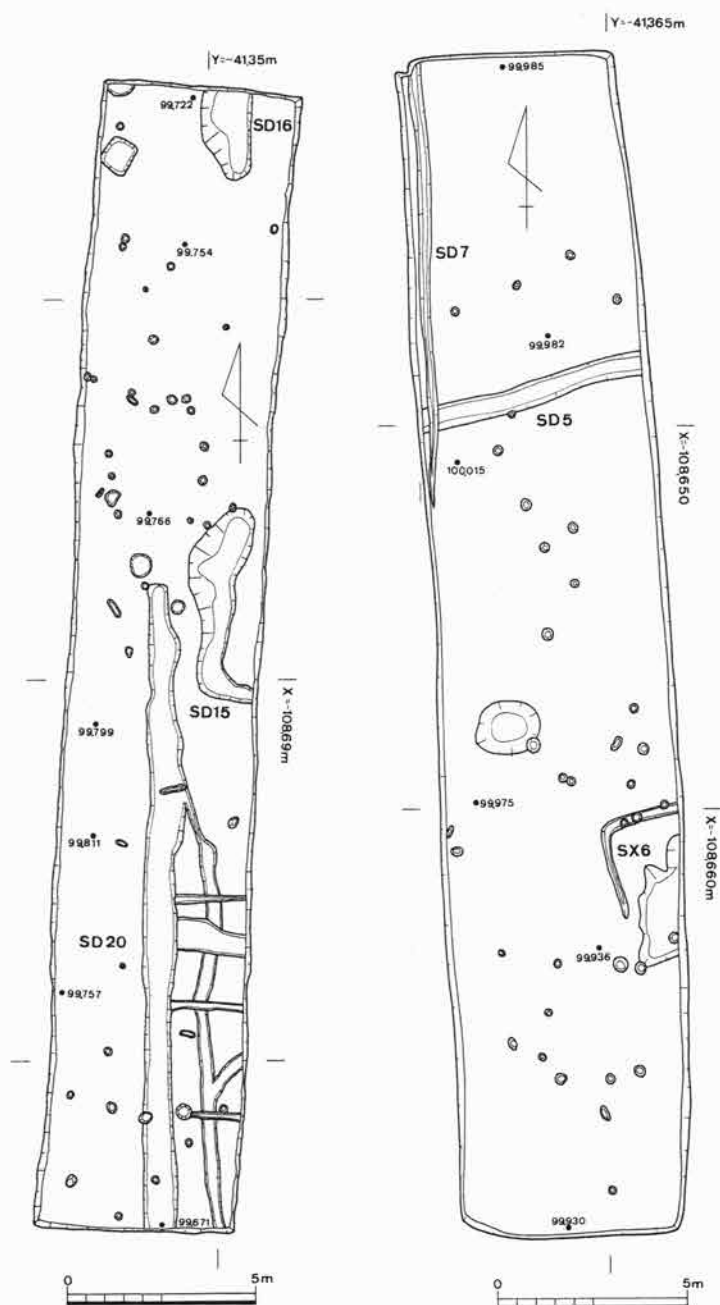


第97図 14-1 トレンチ井戸 S E 3 実測図

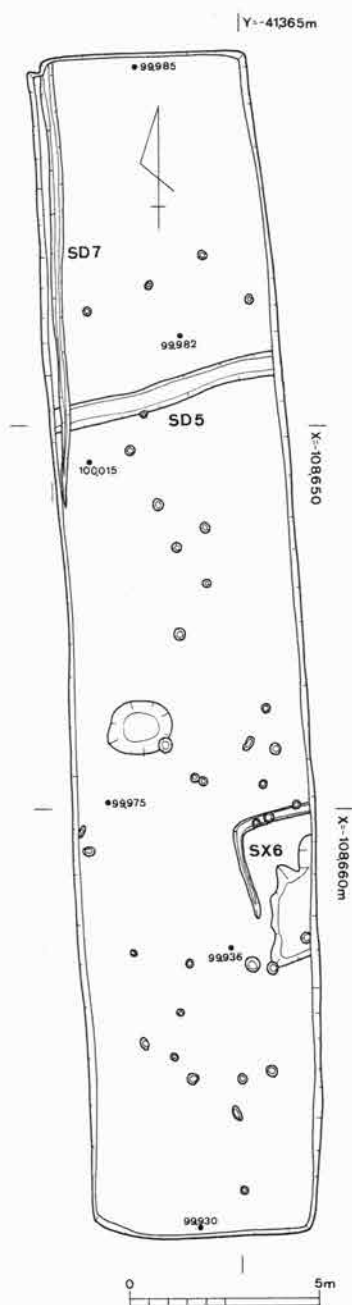
核部ではなく、集落の縁辺部に位置する可能性が高い。地理的条件から当該調査地より北西方向に集落の中核部が所在する可能性を指摘できる。

平安時代後期に比定できる井戸 S E 2 (第91図)は、長軸3.6m、短軸2.8mの不整円形の平面プランを有し、井戸底面までの深さは0.8mを測る。井戸枠や井筒は抜き取られていたが、抜き取り坑から第107図45～47にみられる土器が多量に出土した。また、鎌倉時代前期に比定できる井戸 S E 3 (第97図)は、不整な円形を呈しており、平均直径は2.6mである。井戸中央部には、直径0.56mを測る桶の転用井筒が据えられており、桶の外面2か所には竹材の組物が良好に残存している。井戸内から第107図53～55の遺物が出土している。

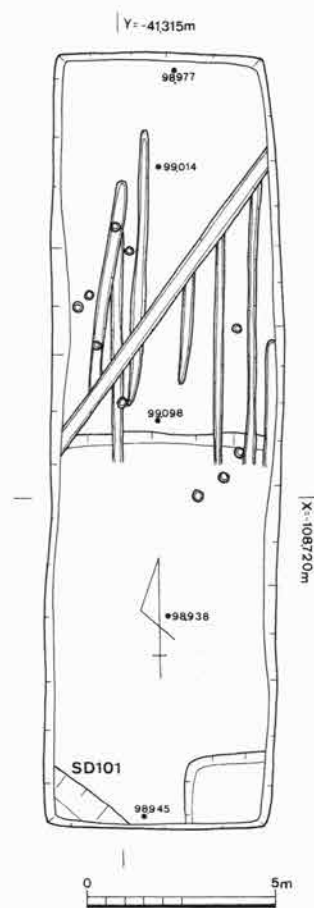
②第14次第2トレンチ(第98図、図版第58-(2)) 基本的な層位は、耕作土と床土直下に遺構検出面が広がっている。第2トレンチでは、淡黒褐色土が堆積する溝 S D 15と溝 S D 16、そして、時期不詳のピット群と耕作に伴う溝を



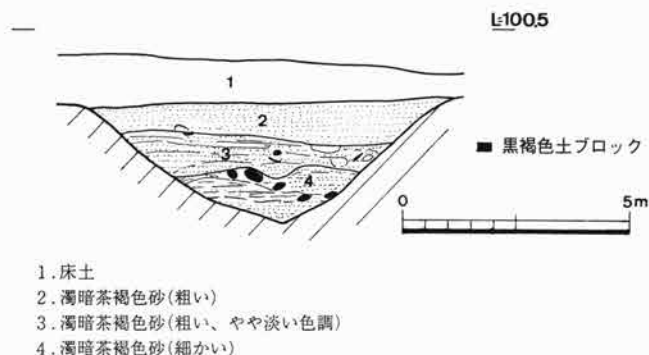
第98図 14-2 トレンチ
遺構実測図



第99図 14-3 トレンチ
遺構実測図



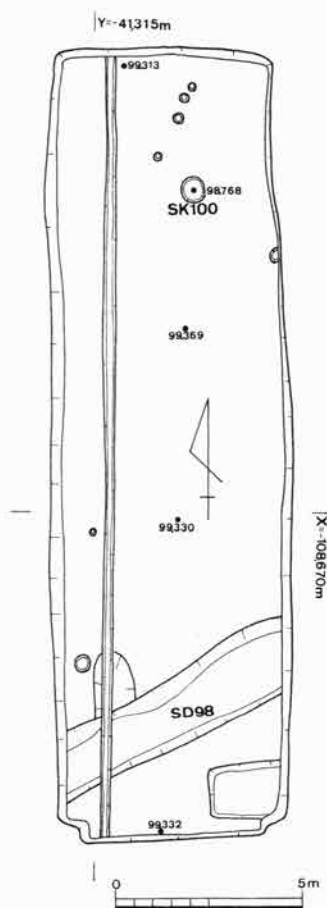
第100図 14-4 トレンチ
遺構実測図



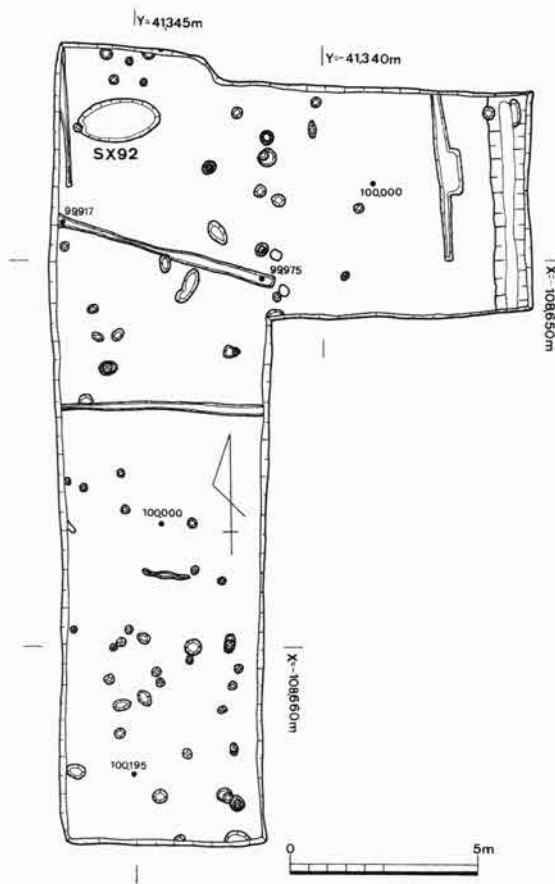
第101図 14-3 トレンチ溝 S D 5 東壁土層断面図

面が広がっている。溝 S D 5 の基本的な堆積層は砂層であり、黒褐色土ブロックが部分的に観察できる(第101図)。溝の幅や深さは著しく異なるが、堆積層は第1トレンチ溝 S D 48 や溝 S D 60 と酷似しており、同時期に機能していたと考えられる。一方、「L」字形に屈曲する溝と、その溝で囲まれた内部に黒褐色土が堆積する遺構 S X 6 は、竪穴式住居跡の周壁溝状を呈している。しかし、周辺域では竪穴式住居跡は確認していないことから、明確な根拠をもって竪穴式住居跡として認識できないのが現況である。

④第14次第4 トレンチ(第100図、図版第59-(2)) 基本的な層位は、耕作土と床土直下に遺構



第102図 14-5 トレンチ遺構実測図

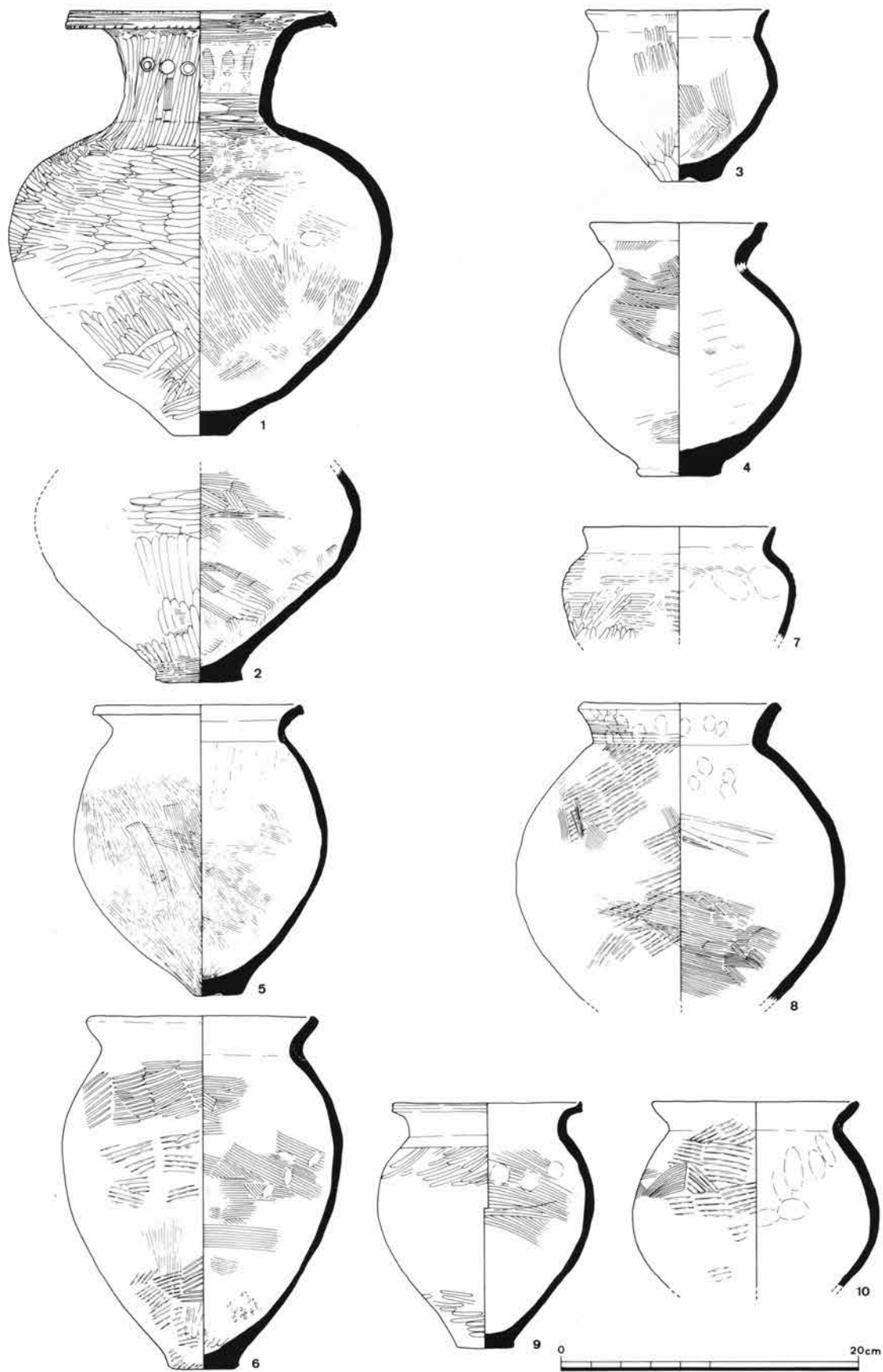


第103図 14-6 トレンチ遺構実測図

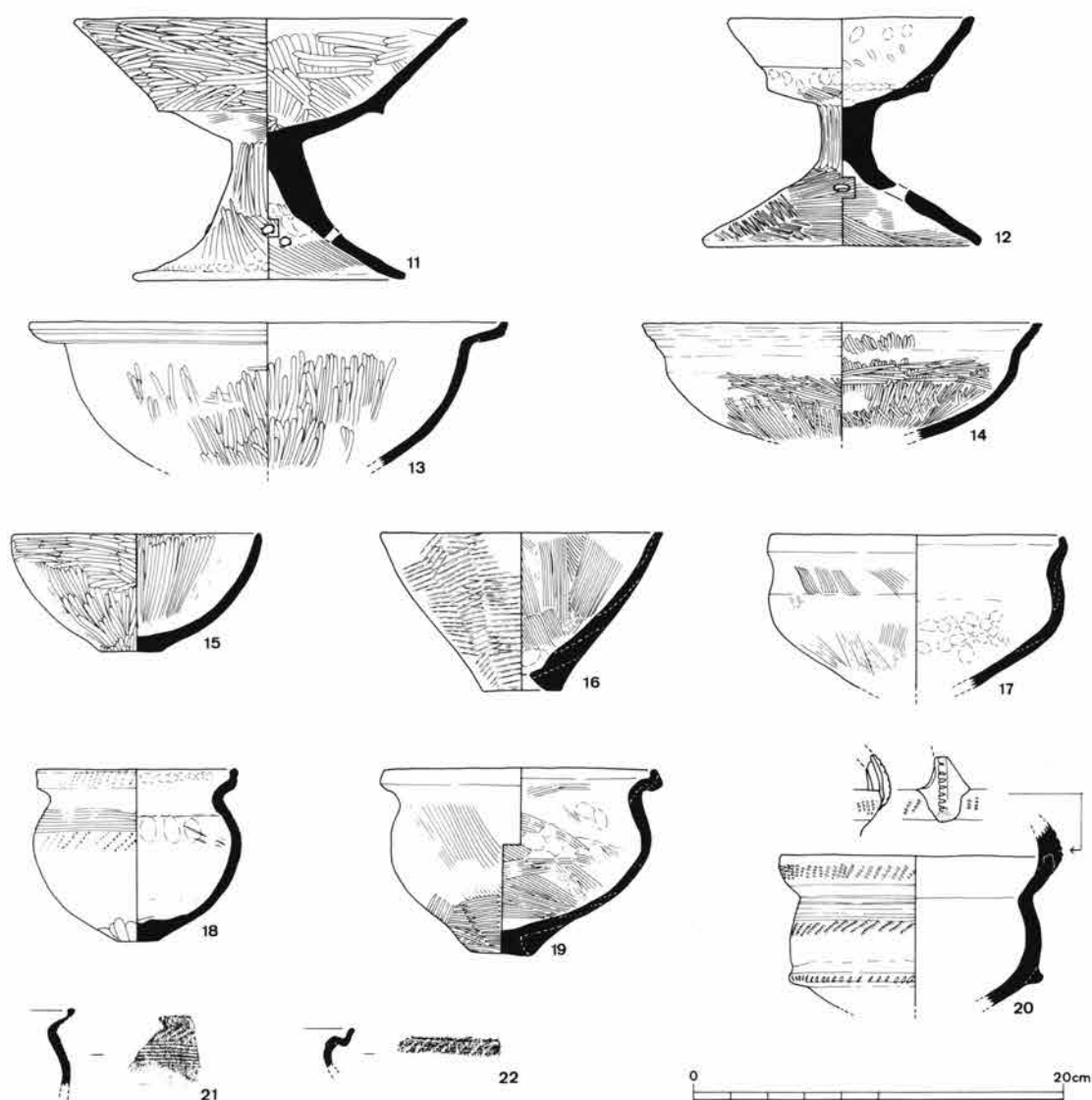
検出した。特に、溝 S D 15 と溝 S D 16 の埋土は、第1トレンチで検出した弥生時代の土坑の埋土に酷似しており、弥生時代後期に比定できる。しかし、その用途については不明である。

③第14次第3 トレンチ(第99

図、図版第59-(1)) 基本的には耕作土と床土直下に遺構検出



第104図 14-1 トレンチ溝 S D48出土遺物実測図(1)

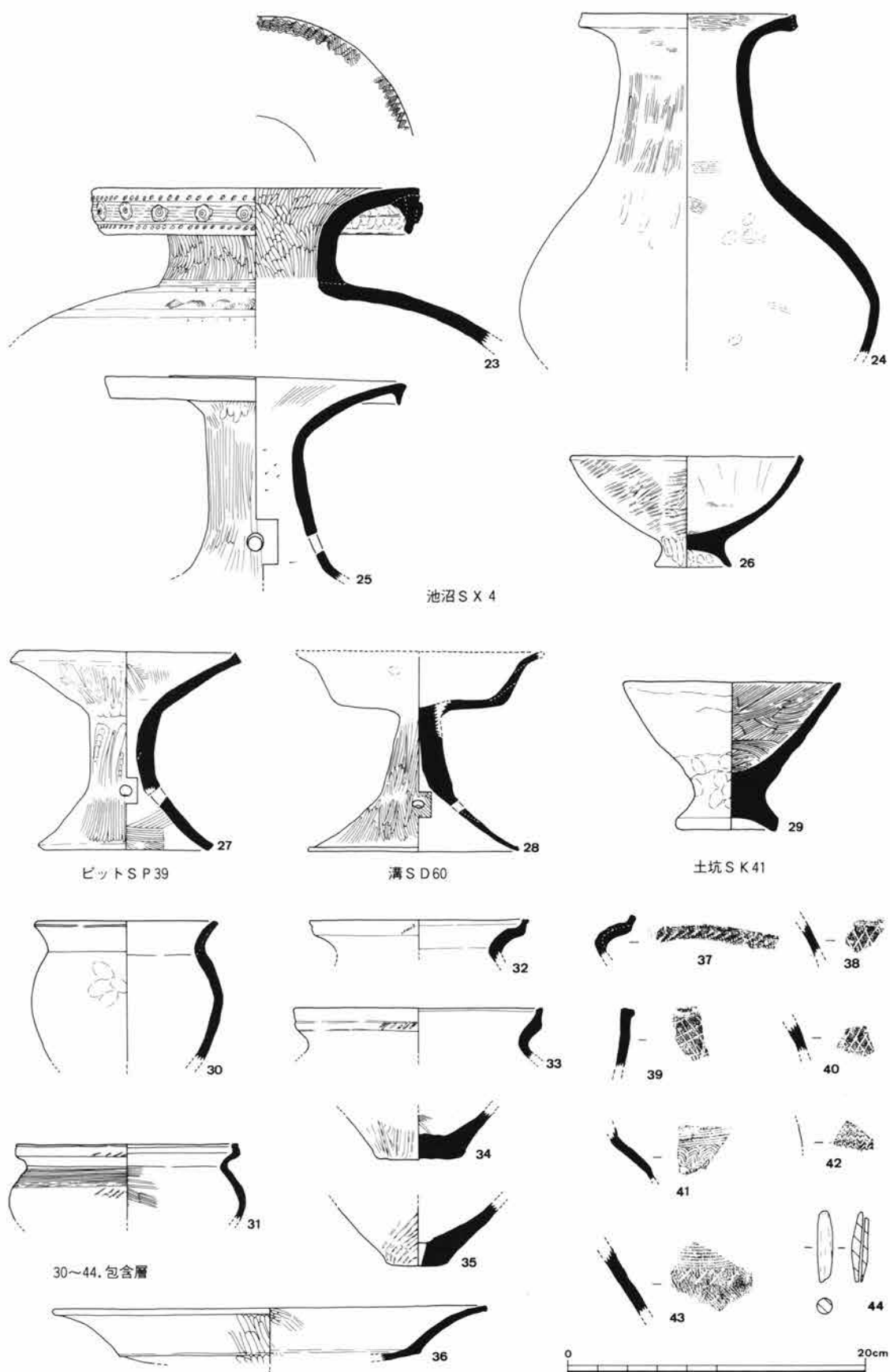


第105図 14-1 トレンチ溝 S D48出土遺物実測図(2)

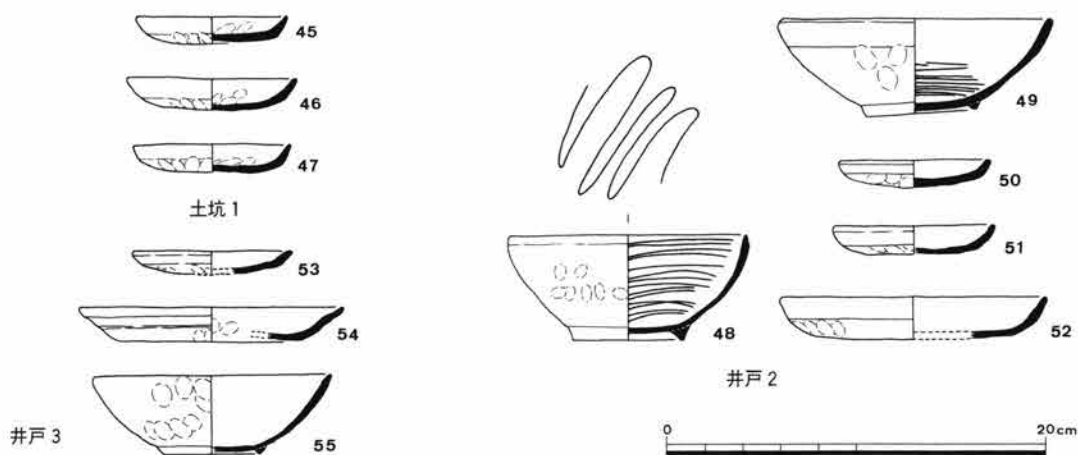
検出面が広がっている。トレンチ南半は一段下がっており、北半で検出した耕作溝は、南半部では消失している。トレンチ内では、時期不詳のピットを10基程度検出したが、掘立柱建物跡には復原し得なかった。トレンチ南端では、弥生時代後期の土器を含む落ち込みの肩部を検出した。土坑および溝の可能性はあるが、堆積土が淡黒褐色粘土の単一層であり、検出長が2.5mを測り、また、直線的な輪郭であることから、溝 S D101として認識した。

⑤第14次第5 トレンチ(第102図、図版第60-(1)) 基本的な層位は、耕作土と床土直下に遺構検出面が広がっている。弥生時代後期に比定できる土器群が出土した溝 S D98、時期不詳の土坑 S K100および耕作に伴う溝を検出した。溝 S D98は、幅2m、深さ0.7mの規模を有し、基本的には淡黒褐色粘土が1層堆積している。また、最下層に多量の土器が集積しており、一括して投棄された状況を呈している。

⑥第14次第6 トレンチ(第103図、図版第60-(2)) 基本的な層位は、耕作土と床土直下に遺構検出面が広がっている。時期不詳の土坑 S K92とピット群および耕作溝を検出した。包含層から



第106図 14-1 トレンチ池沼S X 4、ビットS P 39、溝S D 60、土坑S K 41出土遺物実測図



第107図 14-1 トレンチ土坑SK1、井戸SE2・3出土遺物実測図

は弥生時代の土器片がわずかに出土するが、図示し得る個体の出土はみられない。

(2) 第14次調査出土遺物

① 第14次第1 トレンチ出土遺物

溝SD48出土遺物(第104・105図) 溝SD48からは壺(1・2)・甕(3~10)・高杯(11~14)・鉢(15~19)・手焙り形土器(20)などの弥生土器が多量に出土している。1は、口径17.2cm、器高28.8cmを測る壺であり、頸部に3か所の竹管刺突文を施す。外表面ともていねいなヘラミガキが観察できる。3は、頸部外面にヘラミガキを施す小型の甕であり、6は、外面をタタキによって成形する平底の甕である。一方、11および12は、杯部屈曲部外面に稜を有する高杯である。16は、底部中央部が穿孔された鉢であり、18は、口縁部の形状や肩部の施文から近江系の鉢である。20は、天井部の大半が消失しているが、凸帯上に刻み目を施し、列点文で加飾した手焙り形土器である。これらの土器資料群は、溝内出土ではあるが、一括性の高い一群である。

池沼SK4出土遺物(第106図) 池沼SK4からは壺(23・24)・器台(25・27)・鉢(26・29)・高杯(28)などの弥生土器とともに、図示し得なかったが、倒木や流木・木葉などの自然遺物が出土している。23は、ていねいにヘラミガキを施し、口縁部外面に円形浮文を付す壺である。口縁部上端には波状文がめぐっている。胎土・焼成・色調および器壁の厚みから在地の土器であるが、肩部に稚拙な波状文を施文していることなどから、他地域の壺の製作技法の影響がみられる。

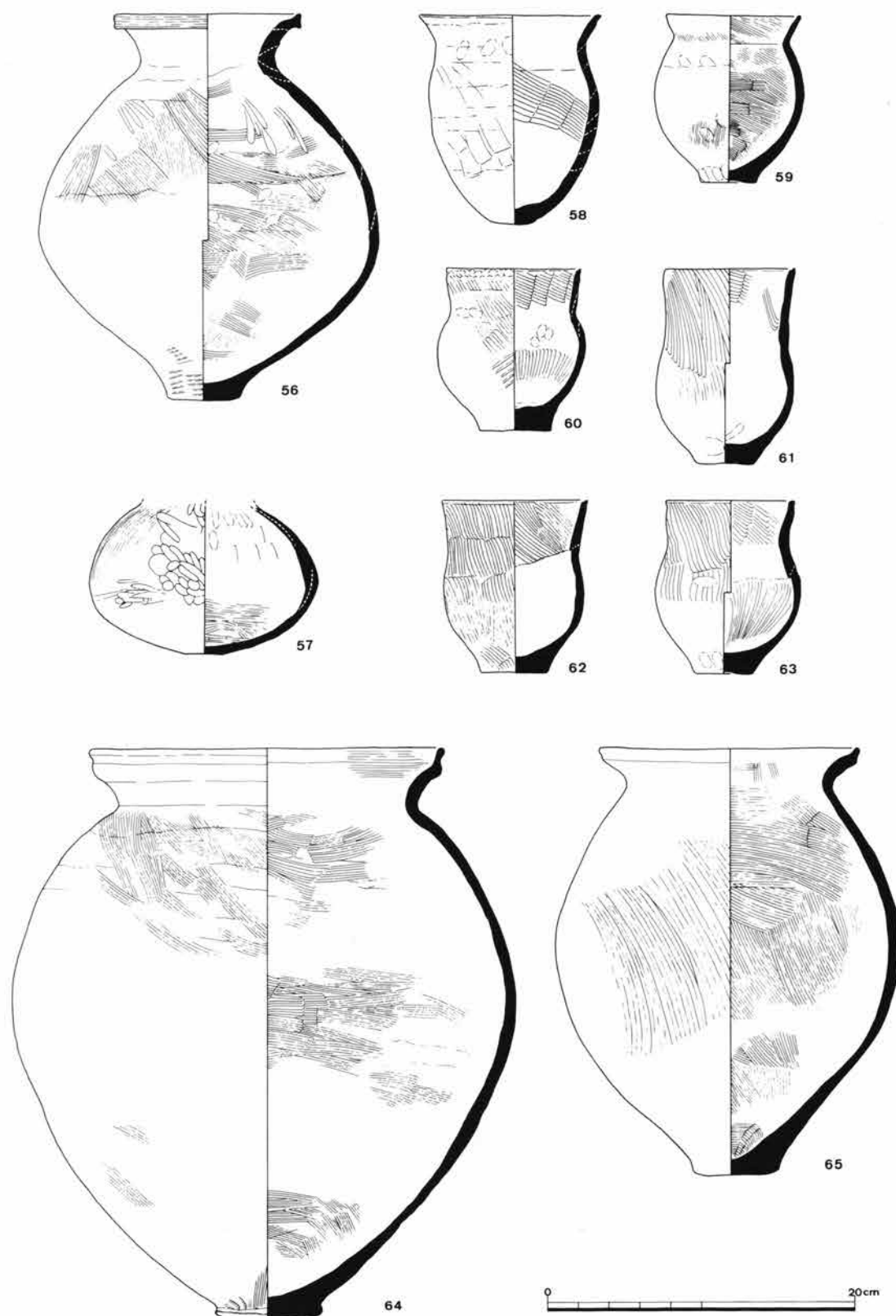
井戸SE2出土遺物(第107図) 井戸SE2からは瓦器・土師器や中世須恵器などが出土しており、図示した土器群から平安時代後期に比定できる。

井戸SE3出土遺物(第107図) 井戸SE3からは、瓦器・土師器や中世須恵器などが出土しており、図示した土器群から鎌倉時代前期に比定できる。瓦器碗の55は、器表面の残存状況が不良で、ミガキなどはほとんど観察できないが、貼り付け高台の断面形態から、井戸SE2出土瓦器碗よりは後出する要素を有している。

② 第14次第5 トレンチ出土遺物

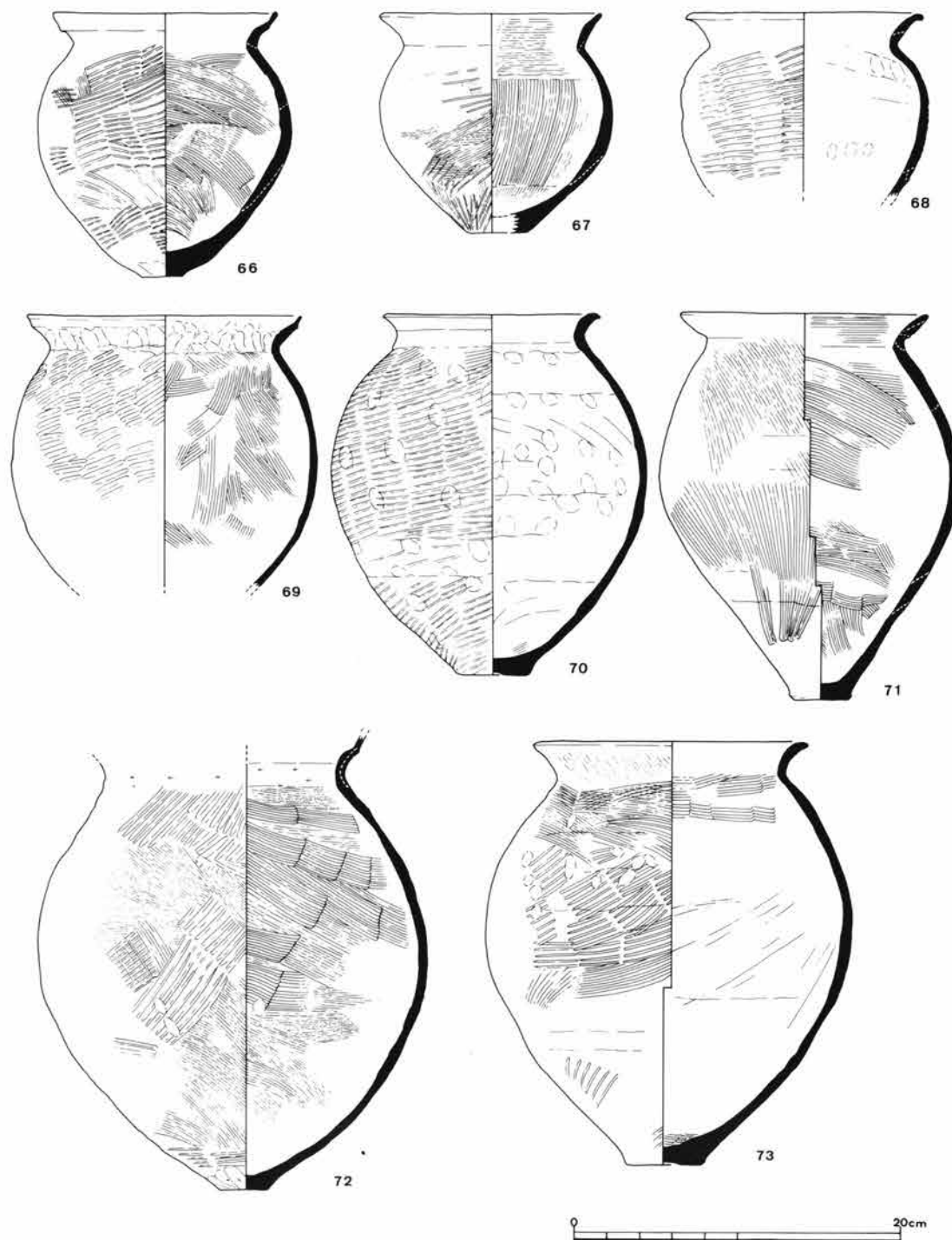
溝SD98出土遺物(第108~110図) 溝SD98からは壺(56~63・83)・甕(64~73)・高杯(74~76)・器台(78~80)・鉢(81・82・84~87)などの弥生土器とともに、88~90にみられる土鍾や砥

石(91)などが出土している。出土土器の総量は多量であるが、各器形ごとに特徴的な個体のみ図化した。壺56は、口径12cm、器高24.4cmを測り、底部外面にわずかなタタキ痕が観察できる。57は、長頸壺の体部であり、外面をていねいに磨いている。58～63は小型の壺であるが、特に、



第108図 14-5トレンチ溝S D98出土遺物実測図(1)

60～63は外面をハケにより器面調整しており、共通の手法が観察できる。一方、64は甕で、口径22.8cm、器高37.2cmを測る大型土器である。後にみる66～73の甕とは手法などの点において異なる要素を有している。66～70・72・73は、タタキ技法により成形しているが、71についてはタタキはみられず、ハケメによる調整である。直線的に外反する口縁部にも顕著な個体差があらわれている。74は、口径18.8cm、器高15.5cmを測る高杯である。胎土は緻密であり、焼成は堅緻である。80は器台で、口径19.6cm、器高18cmを測る。口縁端部外面がわずかに屈曲する。84～87は、

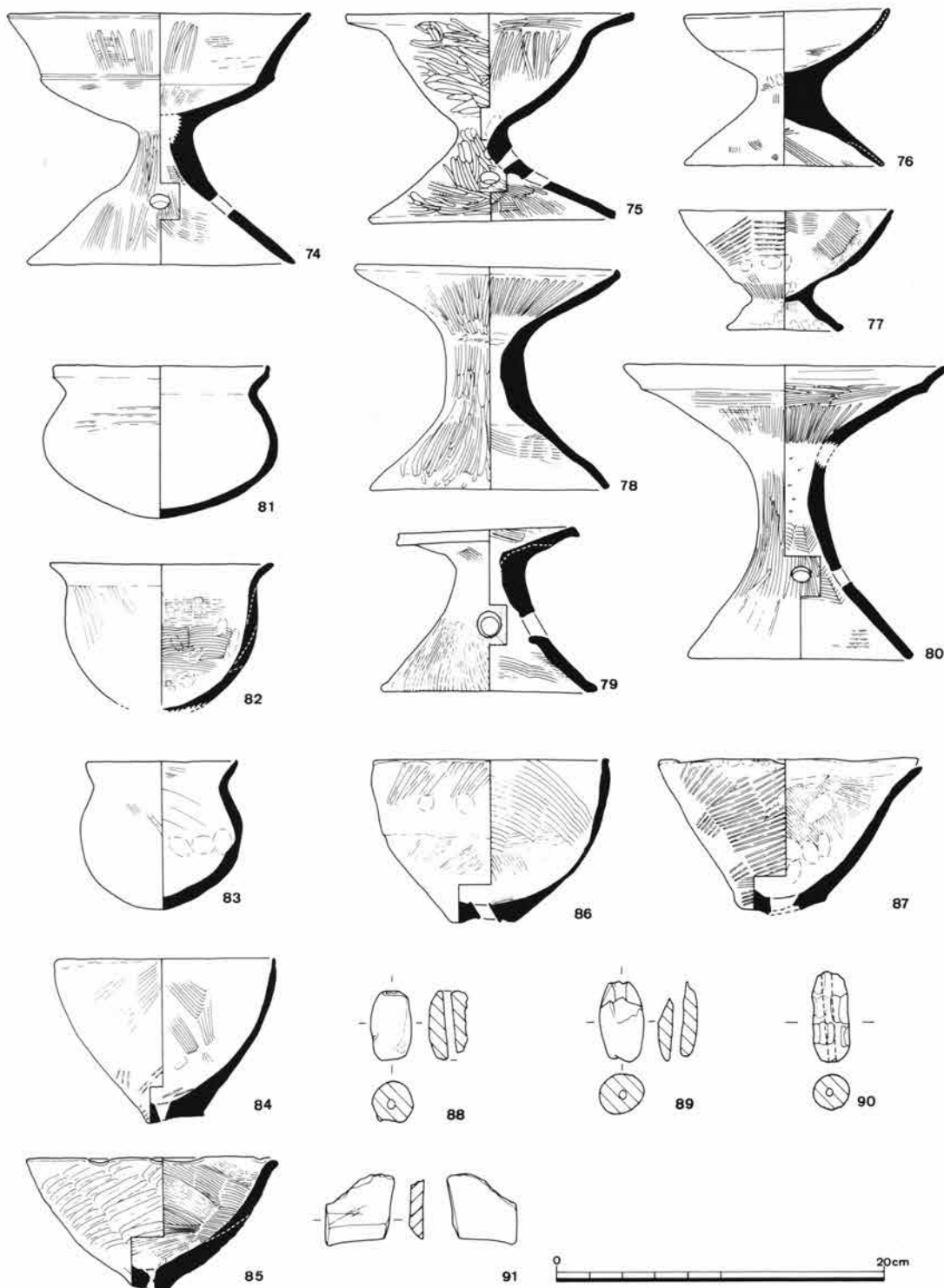


第109図 14-5 トレンチ溝 S D98出土遺物実測図(2)

底部に穿孔部をもつ鉢である。88・89は棗玉様の土鍾である。90は、成形時の握り痕が顕著に残存する土鍾である。91は、湾曲部をもつ砥石である。

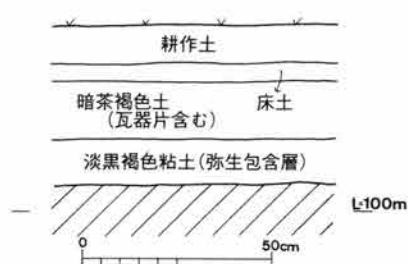
(3) 第15次調査検出遺構

第15次調査は、先に述べた第14次調査地域の南方に位置しており、先に述べた調査成果と関連する遺構および遺物の検出が予想された(第90図、図版第61-(2))。



第110図 14-5 トレンチ溝 S D98 出土遺物実測図(3)

①第15次第1トレンチ(第111・112図、図版第57-(2)) トレンチ北西地点の標高は概ね100.6mを測り、南東地点の標高は100.2mを測る。比高差0.4mのわずかな傾斜がみられる。トレンチ南壁での堆積状況は、耕作土および床土下に瓦器片を包含する暗茶褐色土が約0.3m堆積しており、その下層に弥生土器を包含する淡黒褐色粘土が約0.2m堆積している。検出遺構には、竪穴式住居跡SH5や溝SD6・7などがある。竪穴式住居跡SH5は、直角に曲がる溝と住居跡内の貯蔵穴と思われる土坑SK8のみの検出であるため、明確な根拠をもって竪穴式住居跡として認識できる状況ではないが、直角に曲がる溝の内側には、濁淡黒褐色土と弥生土器細片が混入していることから、竪穴式住居跡である可能性が指摘できる。溝SD7は、幅0.3m、深さ0.3mを測り、17mにわたり隅丸方形にゆるやかに屈曲している。溝内の堆積土は、淡黒褐色土の単一層であり、弥生時代後期の土器片が出土している。溝の用途については、不明である。溝SD6は、幅0.4m、深さ0.5mを測り、北西から南東方向に流れている。溝内には淡茶褐色粗砂層と淡黒褐色

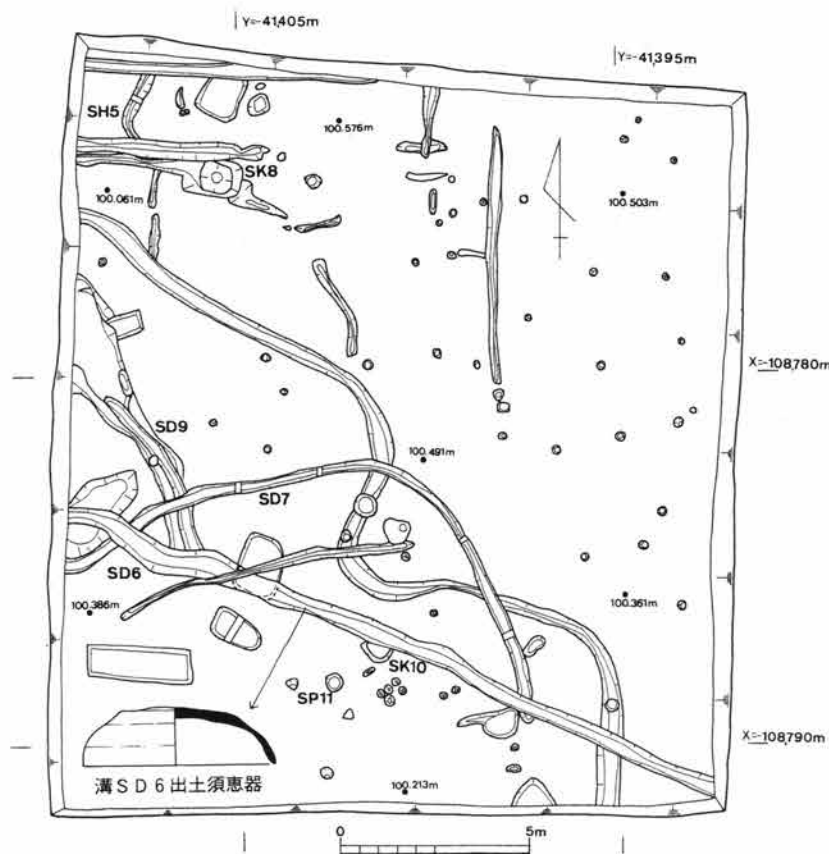


第111図 第1トレンチ南壁土層柱状図

色粘土層が互層に堆積しており、偶蹄類目の踏み込み跡が多数みられる。溝内から第112図に図示した須恵器の蓋が出土しており、陶邑編年TK209型式に比定できる。なお、掘立柱建物跡としては復原し得ないが、鎌倉時代に比定できる直径0.2~0.3mのピット群を検出している。

②第15次第2トレンチ(第113図、図版第62-(1)・63-

(1)) 第2トレンチでは、弥生時代の埋葬施設と鎌倉時代のピット群、時期不詳の耕作溝群を検出した。確認した埋葬施設は、総計3基であるが、周囲にそれらを圍繞する溝は検出していない。また、埋葬施設から時期を決める遺物は出土していないが、それらを覆う遺物包含層中から弥生時代末期の土器が出土している。埋葬施設SX1(第114図、図版第63-(2))は、隅丸長方形の平面プランを呈



第112図 15-1トレンチ遺構実測図

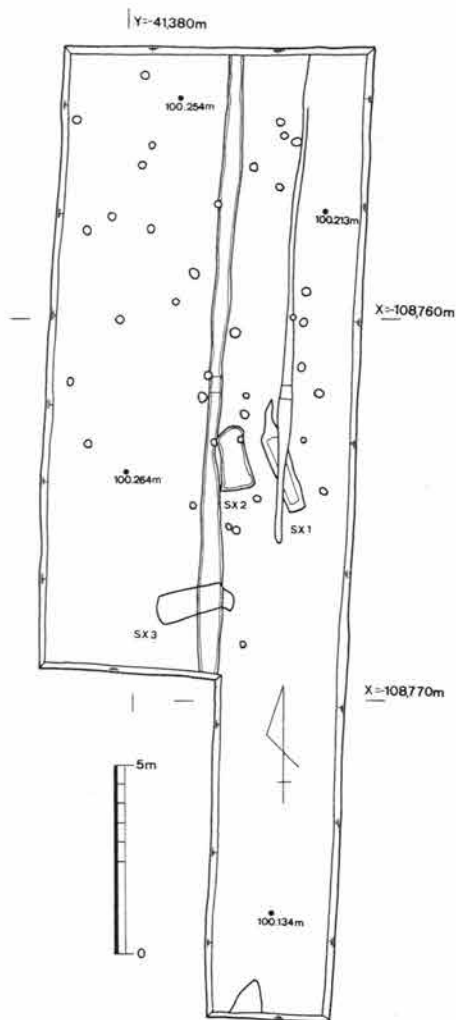
し、全長が2.2m、幅が0.5mを測る。墓壙南端部では木棺木口板の痕跡が確認でき、木棺の規模は、全長1.9m、幅0.4mである。墓壙内の堆積土は暗茶褐色土の単一層である。埋葬施設SX2(第115図)は平面形が隅丸長方形であり、全長が1.7m、幅が0.8mの規模である。埋葬施設SX3(第116図)は平面形が隅丸長方形であり、全長が1.8m、幅が0.8mの規模である。

③第15次第3トレンチ(第117図、図版第62-(2)・63-(3)) 第3トレンチでは、弥生時代末期の竪穴式住居跡SH4と時期不詳の耕作溝群を検出した。竪穴式住居跡SH4(第118図)は、一辺5.7mを測る方形の竪穴式住居跡であり、南辺から壺、甕、高杯、器台などの弥生時代後期の土器が良好な状況で出土している(図版第63-(3))。また、北西辺付近から平坦面を有する花崗岩の台石(第120図119)を検出した。

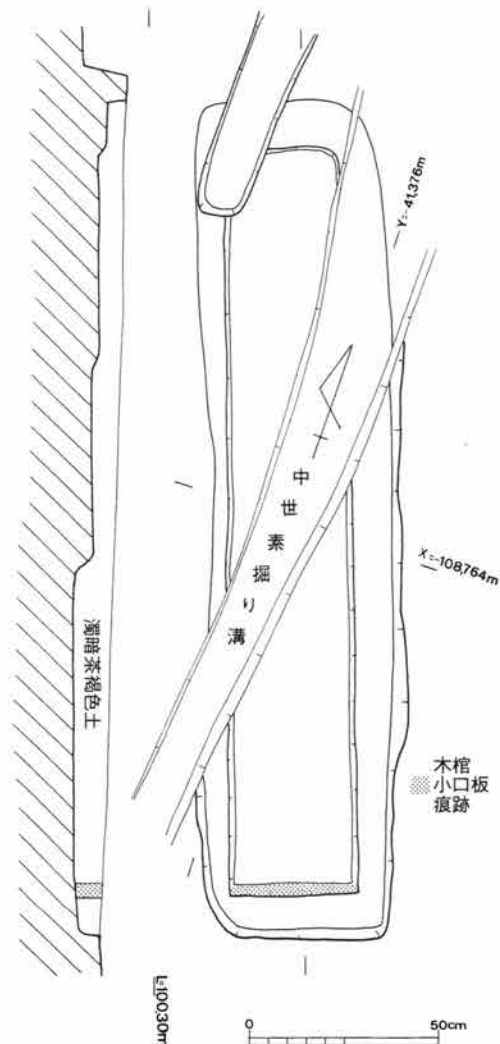
(4)第15次調査出土遺物

①第15次3トレンチ出土遺物

竪穴式住居跡SH4出土遺物(第119・120図) 竪穴式住居跡SH4からは壺・甕・高杯・鉢・器台などの弥生土器が出土している。これらの土器群は、竪穴式住居跡の南辺から集中して出土

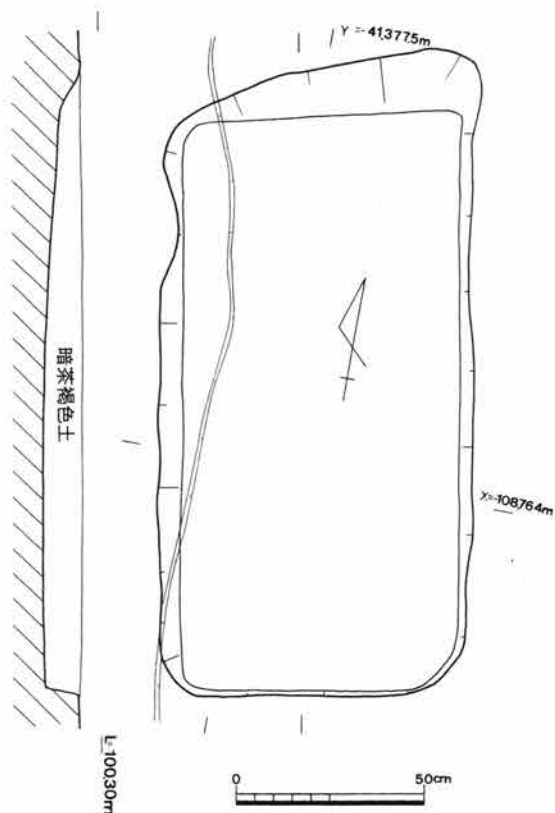


第113図 15-2 トレンチ遺構実測図

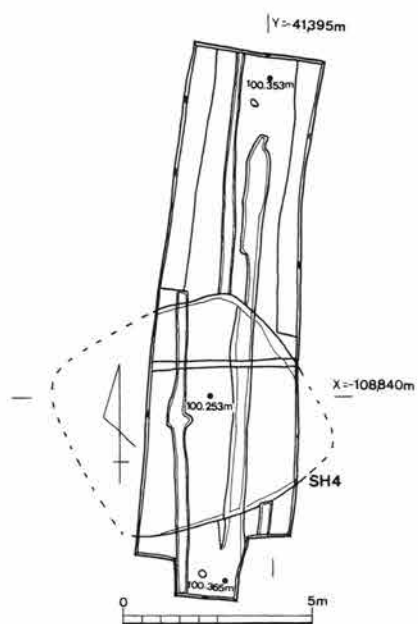


第114図 15-2 トレンチ埋葬施設SX1実測図

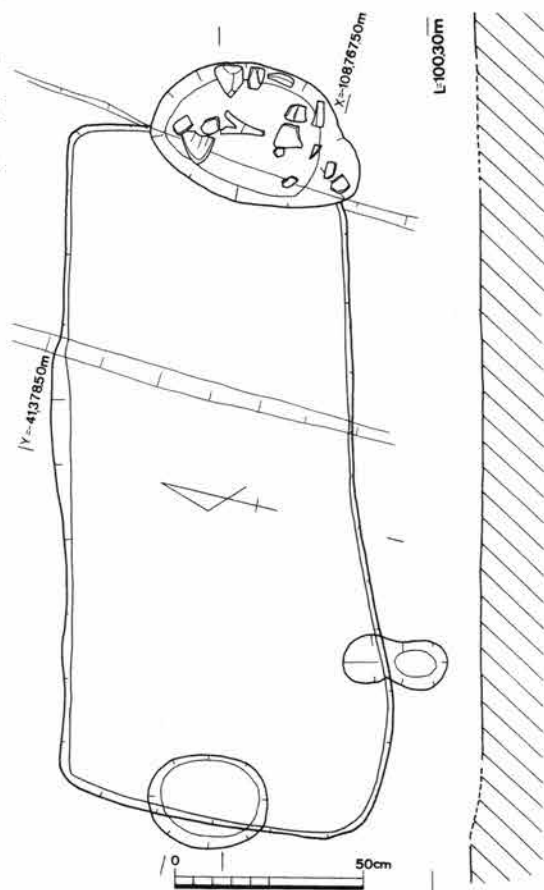
しており、一括性の高い資料である。94は、口径7.4cm、器高8.8cmを測り、内外面はていねいなヘラミガキによって調整している。胎土は緻密であり、焼成は堅緻、色調は暗黄茶褐色を呈



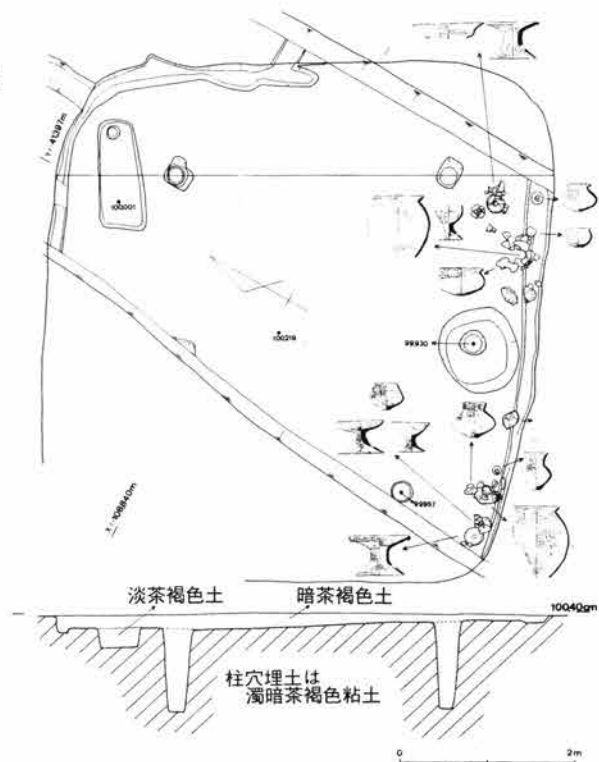
第115図 15-2 トレンチ埋葬施設 S X 2 実測図



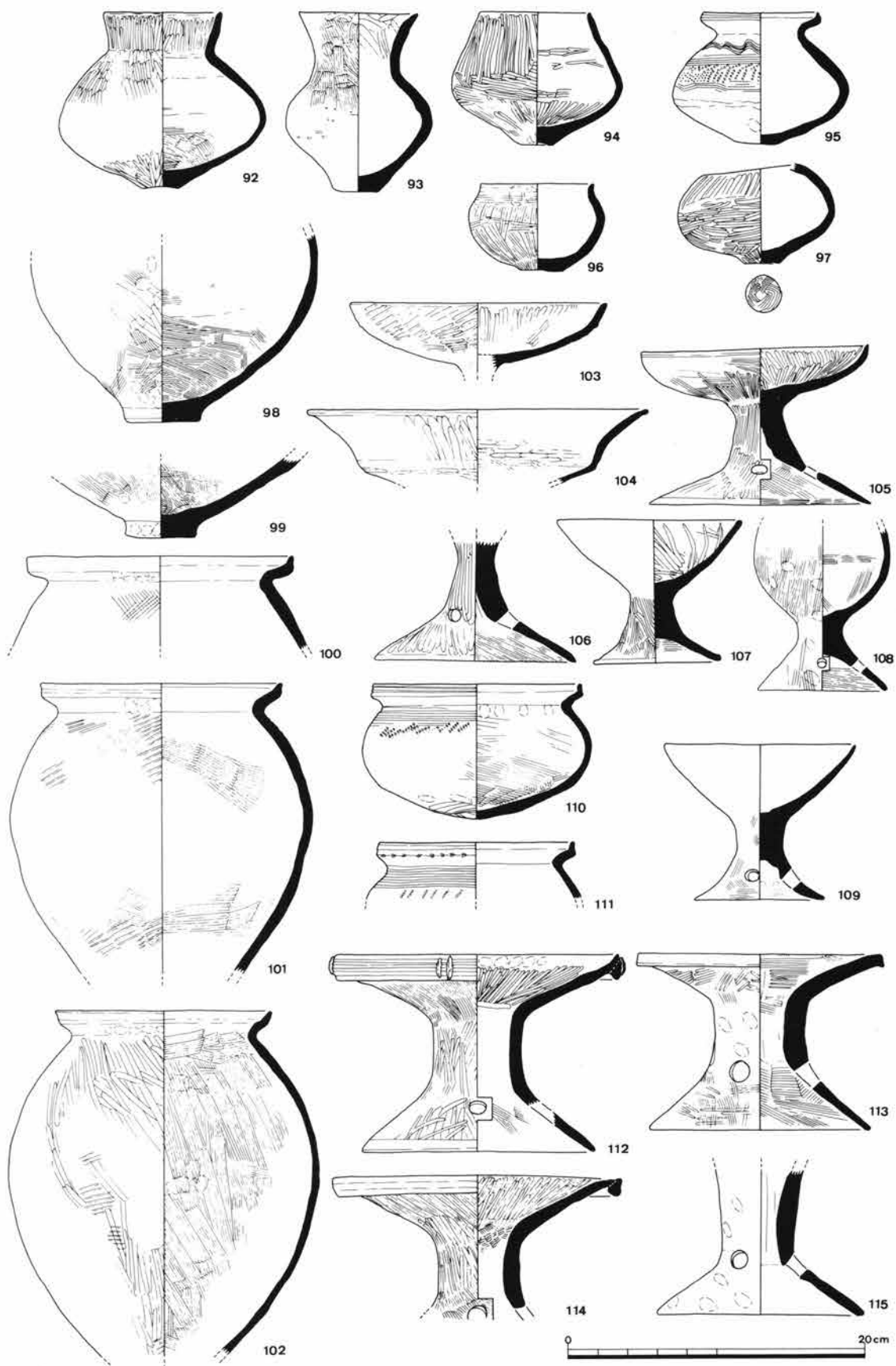
第117図 15-3 トレンチ遺構実測図



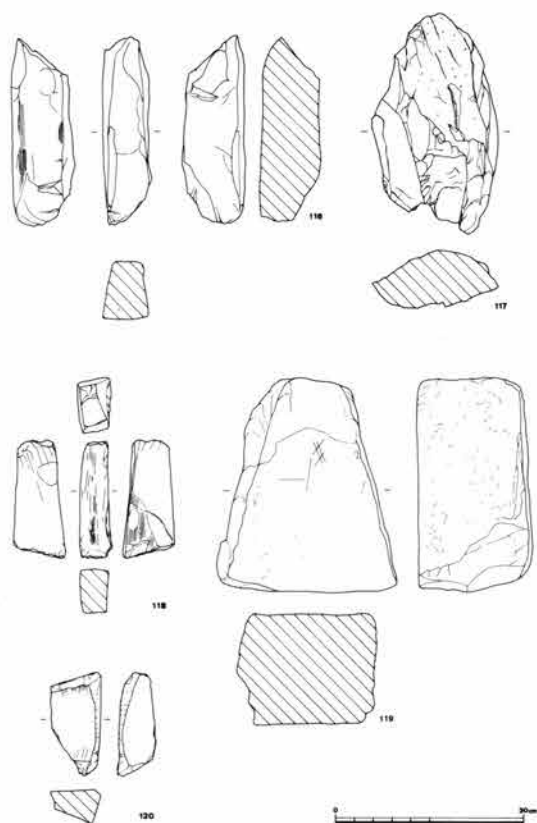
第116図 15-2 トレンチ埋葬施設 S X 3 実測図



第118図 15-3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 4 実測図



第119図 15-3 トレンチ縦穴式住居跡SH4 出土遺物実測図(1)



第120図 15-3 トレンチ堅穴式住居跡SH4
出土遺物実測図(2)

るうえで重要な調査成果である。特に、第14次第1トレンチ溝SD48、土坑SK4、第14次第5トレンチ溝SD98、第15次第3トレンチ堅穴式住居跡SH4出土の一括性の高い弥生時代後期の土器群は、亀岡市北金岐遺跡検出のSD4、SB3・15、SK9などから出土した土器群と共通の要素を有していることから、畿内第V様式最終段階に併行する時期に比定できる土器群である。また、北近畿などの他地域の土器の出土は、当時の地域間交流を考察するうえで基礎となる資料である。今後は、周辺に位置する遺跡から出土した土器群と比較検討を行い、編年的研究を深める必要がある。

最後に、府営ほ場整備事業に係わる太田遺跡の発掘調査は、当該調査をもって終了するが、各調査を総合的に捉え、あらためて太田遺跡が有する歴史的な位置付けについて考察したいと思う。また、発掘調査をすすめるにあたり、多くの方々のご協力を得た。御礼を申し上げたい。

(小池 寛)

しており、北陸地方を中心とする北近畿からの搬入土器と考えられる。また、95は、口径7.6cm、器高8.6cmを測り、肩部外面には、波状文や列点文などがていねいに施文されている。口縁端部が鋭く直立することと胎土が緻密であり、焼成は堅緻、色調は暗茶褐色を呈していることから近江系の土器である。一方、116・118・120はおのの形状が異なる砥石であり、117は、石器素材の粘板岩である。また、119は、住居跡床面に据えられた状態で出土した花崗岩の台石である。最大長22.4cm、厚み12cmを測る。

4. まとめ

太田遺跡第14・15次発掘調査では、弥生時代後期の堅穴式住居跡や埋葬施設をはじめ、池沼や溝、流路などを検出した。これらは、太田遺跡地内における土地利用の変遷を考え

注1 調査参加者(順不同・敬称略) 竹岡美恵子・村嶋みよ子・大石ふゆ子・大西芳美・原野実子・竹岡弘子・東前愛子・原野秀司・石田百合子・原野恭治・西田恭三・竹岡春雄・前田幸枝・美馬如子・原田勝美・美馬幸夫・出畑タツ子・大西須美江・石田昭・東前佐和子・西村治郎・川口庸史・天池佐栄子・陸田初代・荻野富紗子・森川敦子・高田真由美・井上聡・長尾美恵子・柿谷悦子・安田裕貴子・古賀友佳子・山岡匠平・倉谷和子・作山美智子

8. ^{ながおかきょう}長岡京跡右京第753次(7ANGHD-5地区)・ ^{いのうち}井ノ内遺跡・^{かみざと}上里遺跡発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、主要地方道大山崎大枝線緊急地方道整備事業に伴う調査である。井ノ内遺跡・上里遺跡は、小畑川右岸の善峰川により形成された沖積地南側の低位段丘上に位置する。長岡京の条坊復原推定によると、右京二条四坊一町(新条坊：右京二条四坊三町)にあたる。調査地東側に平行して走る道路では、桂川右岸流域下水道建設工事に伴い、昭和53・54年度に調査が実施されており、弥生・古墳時代から奈良・平安時代、さらに中・近世に至る多くの遺構が検出されている(第122図)。また周辺では多くの調査が実施され、弥生時代～中世にかけての複合遺跡であることがわかっている。

現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎・同調査第3係主任調査員増田孝彦が行った。調査期間は、平成14年12月11日～平成15年2月21日まで実施した。調査面積は、約400㎡である。調査に際しては、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・京都府乙訓土木事務所をはじめとする関係諸機関の協力を得た。また、現地作業・整理作業については調査補助員・整理員の協力を得た。記して感謝する。^(注1)

なお、調査に係る費用は、全額、京都府土木建築部が負担した。

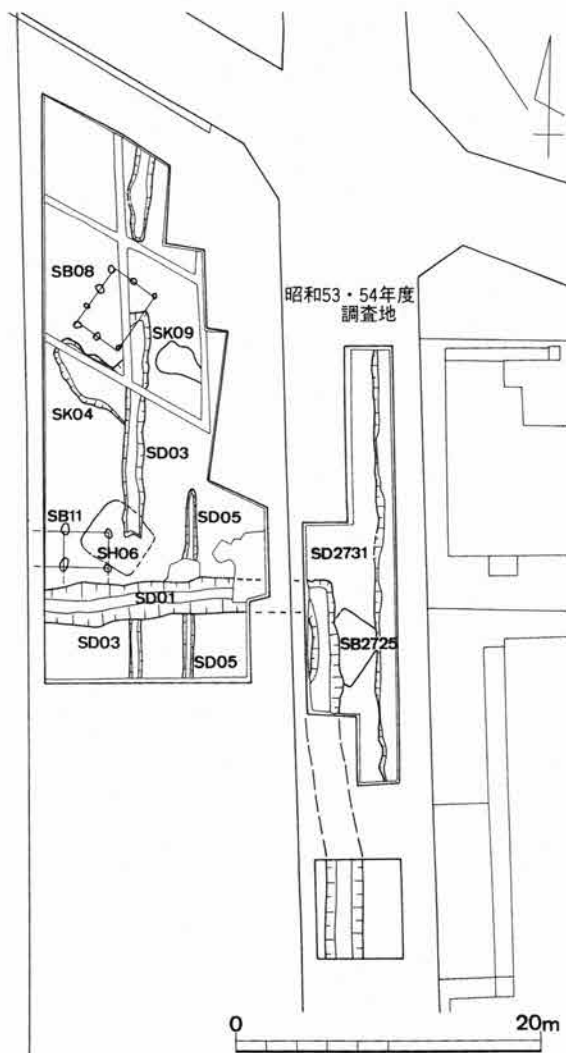
2. 調査概要

調査地の東側半分がコンクリート・アスファルト敷き、西側が竹藪となっており、重機により表土を除去し、中世の包含層確認後人力掘削を行った。東側の道路に沿う部分では、現代の攪乱が多く見られた。遺構検出面はトレンチ北端で表土下0.4m、南端で0.6mであり、北から南に向かってゆるい傾斜を持っている。

層序(第123図)は、良好な堆積状況を示すトレンチ南端の溝SD01付近で、第1層が竹藪の表土であり、第2層が中世の遺物包含層、その下が地山面である黄褐色粘土(礫



第121図 調査地位置図(国土地理院1/25,000京都西南部)



第122図 トレンチ配置図

53・54年度調査地でも、柱穴を有さない竪穴式住居跡が検出されている。床面から須恵器・土師器片が出土した。古墳時代後期後半と推定される。

土坑 S K 04 (第126図) 掘立柱建物跡 S B 08 の南西側に平行して検出したものである。北西—南東方向のもので、南東側は中世溝 S D 03 に切られるが、北側ではほぼ直角に曲がる部分が検出されていることから、掘立柱建物跡 S B 08 の南・東辺に沿ったような「L」字状の土坑と考えられる。検出長約6.5m、幅約2.0m、深さ35cmを測る。北西側が浅く、南東に向かいゆるやかに深くなる。埋土は、北西方向から3度にわたり埋まったような状況を呈する。基本的には焼土粒・炭

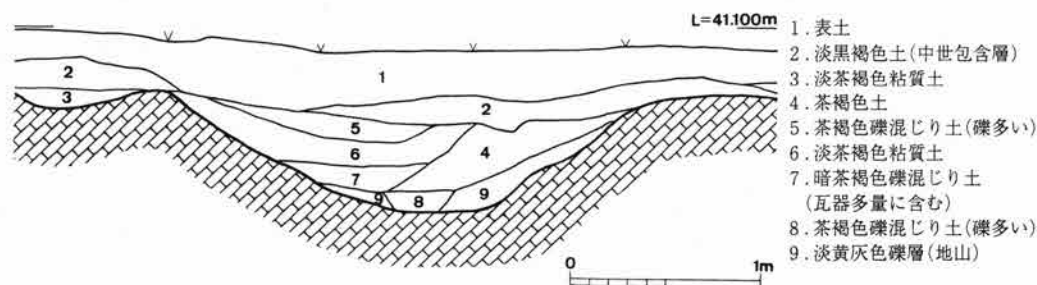
含む)の遺構検出面となるが、南に向かうほど礫が多く含まれる。

なお、調査面積は当初300㎡を予定し掘削を行ったが、南端で溝 S D 01 を一部検出したため全体を把握できるように、南側にトレンチを拡張した。そのため調査面積は合計約400㎡となった。

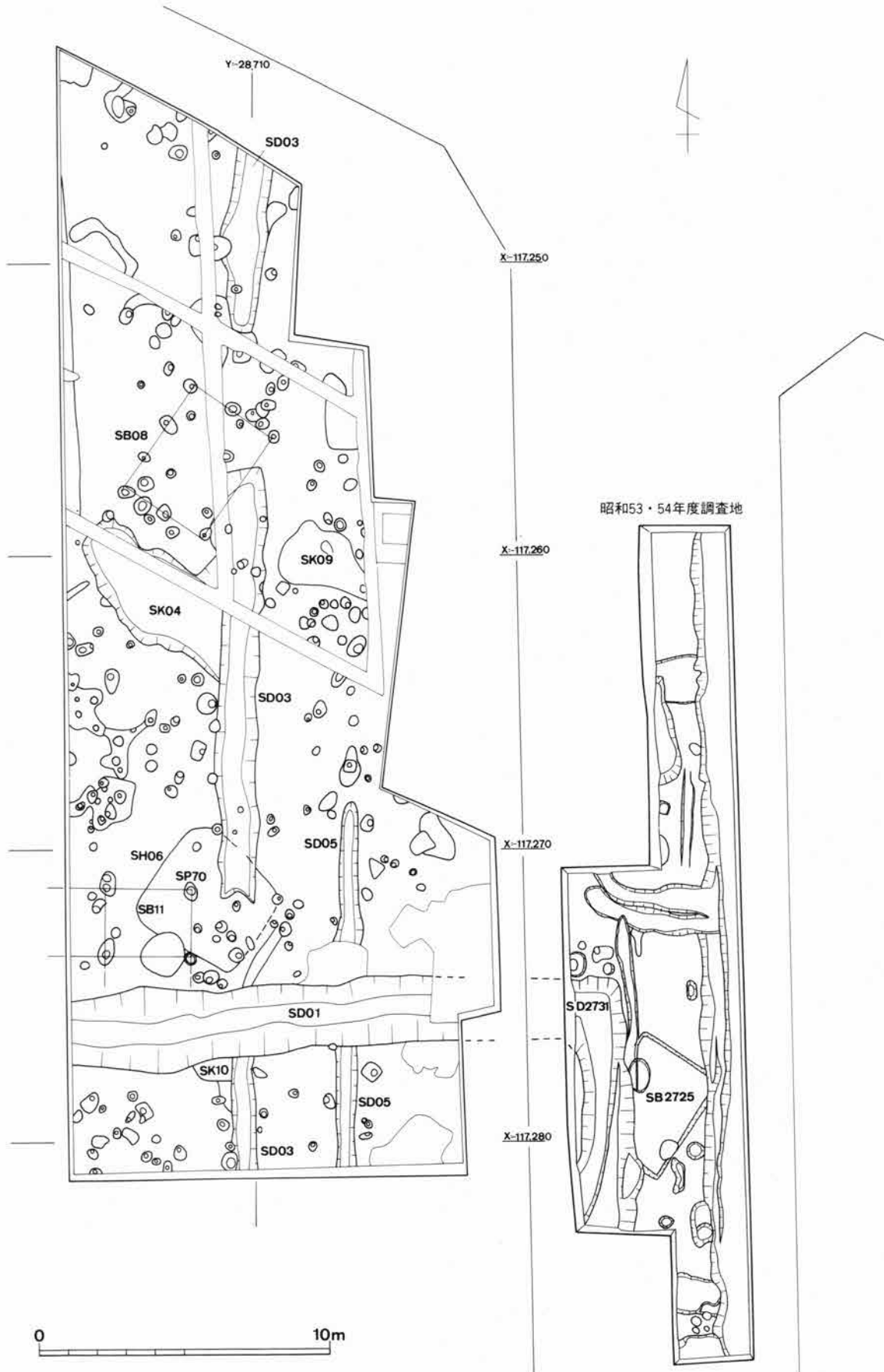
3. 検出遺構

検出された遺構は、主に古墳時代後期と中世であり、主要な遺構についてその概要を記す。古墳時代の遺構としては、竪穴式住居跡・土坑・柱穴などがある(第124図)。

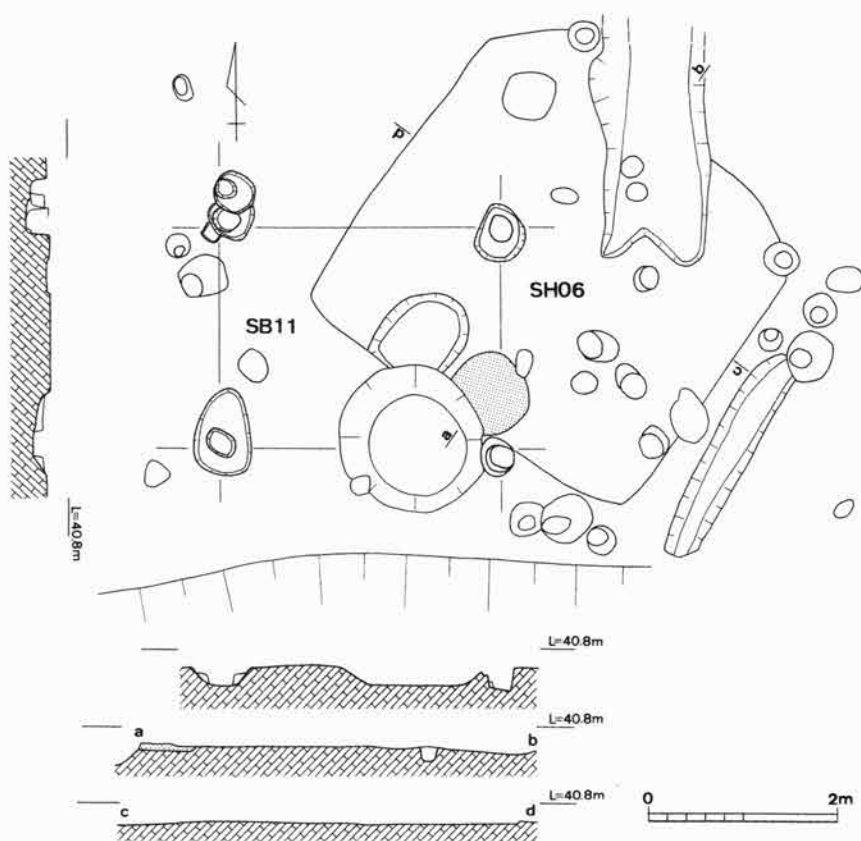
竪穴式住居跡 S H 06 (第125図) 溝 S D 01 北側で検出したもので、主軸は N 35° E、後世の削平を受けており床面の約半分を検出した。一辺約 4 × 3 m の住居が復原され南東側がやや狭い。南西壁中央部分に竈が設けられているが、前面を後世の土坑により削平される。残存する掘り込み側壁の深さ 8 cm を測る。柱穴などは検出されなかった。隣接する昭和



第123図 溝 S D 01 西壁土層図



第124図 遺構配置図



第125図 竪穴式住居跡SH06、掘立柱建物跡SB11実測図

混じりの暗茶褐色粘質土であり、上層の北西端は焼土粒・炭を多く含み、中央部から溝SD01までは、炭混じりの淡黒褐色粘質土である。各層から多くの須恵器・土師器が出土した。土坑内から出土した遺物は、完形のもがなく、また接合しても完形にならないものが大半で、部分的な残存状況である。個体数はかなり認められるが、現状では、須恵器杯蓋9点・杯身8点、どちらも言えない天

井部の破片からみた個体数16点・甕4点・壺2点・高杯6点・甕4点で、土師器甕5点・高杯3点、総数約57点が出土した。竪穴式住居跡SH06同様、古墳時代後期後半のものである。

土坑SK10(第124図) 北側を溝SD01、東側を溝SD03に削られたもので、残存長約1.4m、同幅約0.8m、深さ25cmを測る。埋土から須恵器壺が出土した。平安時代初頭と推定される。

中世の遺構は、溝・土坑などがある。

溝SD01(第122・124図) 調査地南端で検出したもので、昭和53・54年度に調査されたEトレンチSD2731の延長部分である。検出長約13m、幅約2.3m、深さ最大で0.7mを測る。西側から東に向かい傾斜している。東側の道路付近は、現代の攪乱により大きく削平を受ける。黄褐色粘土の地山面より掘り込まれ、断面は「U」字状を成す。埋土は暗茶褐色粘質土を中心とする6層からなり、4層より多量の土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿とともに滑石製鍋や鍛冶滓、鉄釘・飾り金具などの鉄製品が出土した。中世居館跡の外郭施設と考えられる。

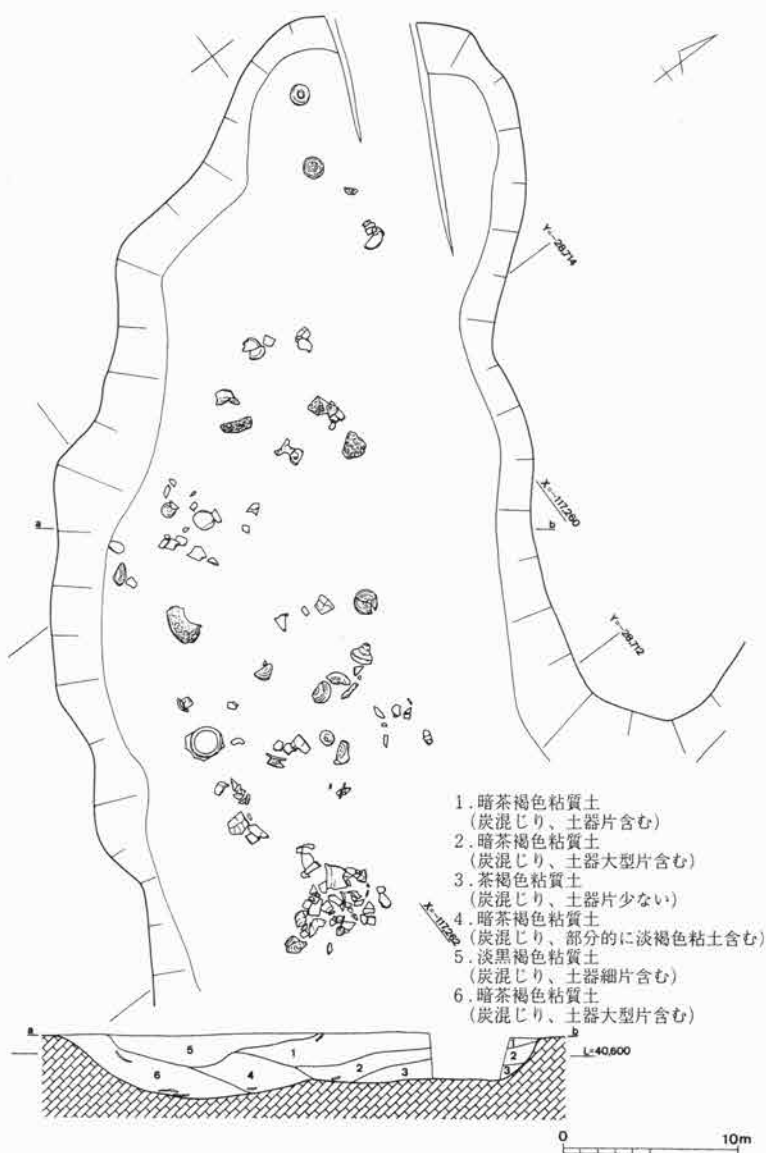
土坑SK09(第124図) 溝SD03の北端の東側で近接して検出した。ややいびつな楕円形を呈する。検出長約3m、幅約1.8m、深さ0.2mを測る。瓦器碗・皿、土師器皿が出土した。溝SD01と同時期のものである。

そのほか、出土遺物が少なく、時期を特定できないものとして以下の遺構がある。

掘立柱建物跡SB08(第127図) 竪穴式住居跡SH06とほぼ同方向で、土坑SK04に直交する。東西2間(3.3m)×南北3間(4.3m)の北東から南西方向の建物跡と考えられる。主軸はN32°E

である。柱穴は直径40～70cm、深さ14～22cmを測る。掘立柱建物跡S H06、土坑S K04とほぼ同じ方向を持つ。南東角の柱穴は、土坑S K04の埋土上に設けられているため、これよりは新しいものである。

掘立柱建物跡S B11(第125図) トレンチ南寄りで検出したもので、東西1間(2.9m)×南北1間(2.3m)分である。柱穴の直径40～60cm、深さ21～37cmを測る。溝S D03に直交する方向をもつ。東側が調査地外に延びていく可能性があり、南側は溝S D01に削平されていると考えられる。南北2間×東西2間以上の東西棟の総柱建物跡が推定される。北東角の柱穴より重郭文軒平瓦が出土した。柱穴内から細片化した須恵器・土師器が出土したが時期を特定できない。

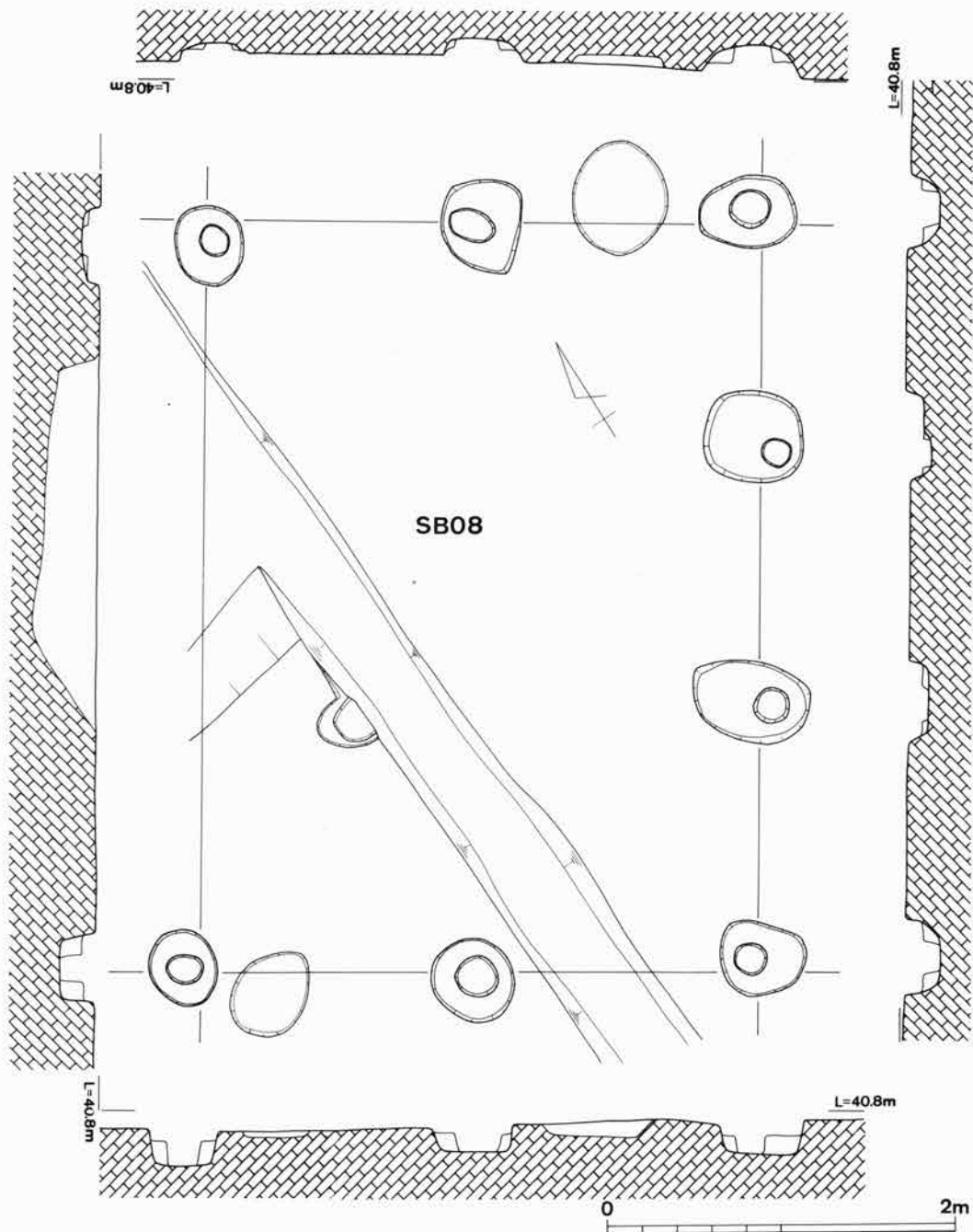


第126図 土坑S K04遺物出土状況図

溝S D03(第124図) トレンチ中央で検出した南北溝で、溝S D01に直交し先行する。溝S D01北側では徐々に浅くなり途切れる。トレンチ北端付近では、掘削されない部分が約4.5m認められる。この部分より北側に延びる溝はやや東側に傾く。検出長約25.2m、最大幅約1.4m、土坑S K04と切り合う付近が最も深く約0.28mを測る。全体的に北から南に向かってゆるやかな傾斜をもつ。少量ではあるが埋土中より須恵器、土師器皿、瓦器碗・皿、瓦が出土した。

溝S D05(第124図) 溝S D03の東側に平行して延びるもので、溝S D01に直交し先行する。溝S D01の北側は現代の攪乱により削られる。溝S D01の北側6mで徐々に浅くなりなくなる。検出長約8.2m、最大幅約0.7m、深さ約0.2mを測る。北から南に向かってゆるやかな傾斜をもつ。この部分での新旧関係は、古い順に土坑S K10、溝S D05、溝S D01となり、平安時代以降の溝と推定される。溝S D03同様、少量の須恵器、土師器皿、瓦器碗・皿が出土した。

溝S D03・05は平行して延びることから道路状遺構に伴う両側溝の可能性が考えられる。

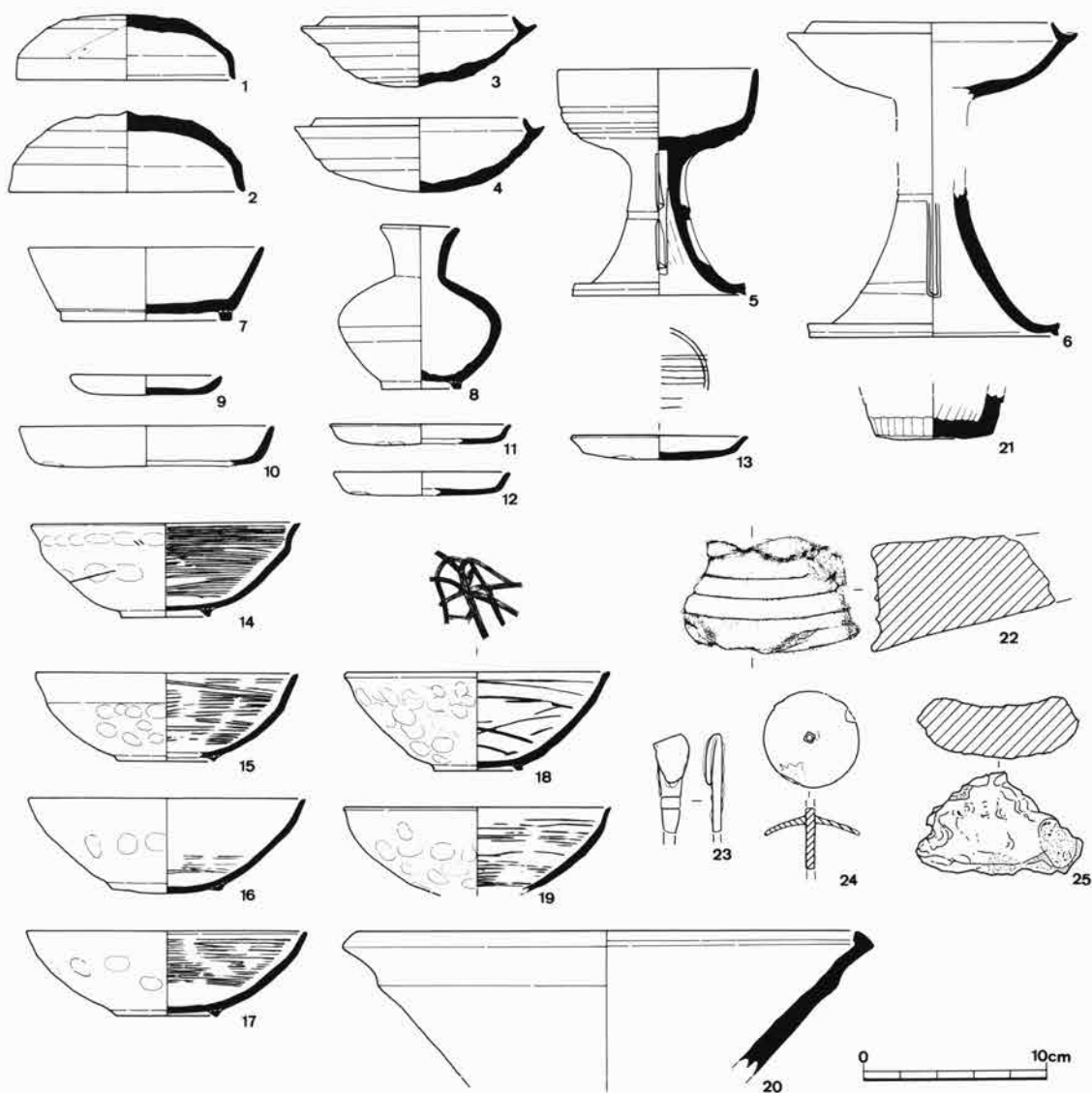


第127図 掘立柱建物跡 S B08実測図

4. 出土遺物 (第128図)

土師器・須恵器・瓦器・白磁などの土器類、滑石製模造品、瓦、鉄釘・飾り金具などの鉄製品、鍛冶滓といった鍛冶関連遺物などが出土した。

1～6は土坑S K04から出土したものである。1・2は杯蓋で丸い天井部をもち、口縁端部は尖る。3・4は杯身で立ち上がりが内傾し、杯部の浅いものである。5・6は高杯である。高杯の杯部底部は、回転ヘラケズリ調整している。6は、二方向に貫通しない方形の透かしが穿たれる。土坑S K04より出土した多くの遺物は、概ね6世紀末から7世紀前半に比定される。7は杯身である。溝S D03内より瓦器片とともに出土した。口径13cm、器高4.1cmを測る。色調は暗灰色



第128図 出土遺物実測図

である。8は須恵器壺で、土坑S K10より出土した。小型で丸い胴部の器形を持ち、口径4.2cm、高さ9cmを測る。9・10は溝S D01より出土した土師皿で、器壁が厚く器高の浅い小型のものと、器壁が薄く器高が高いものの2種がみられる。11～13は溝S D01より出土した瓦器皿である。口径10cm前後のもので、13は底部内面に平行暗文を施す。14～19は瓦器碗で15～19は溝S D01、14は土坑S K09から出土した。高台は断面三角形を呈し、口縁部に段ないし沈線をめぐらすもので、内外面とも磨滅が著しく暗文が部分的にしか観察できないが、体部外面には指オサエ痕を残すものが多い。溝S D01出土遺物は12世紀後半を中心とする13世紀中頃までのもので、18は溝の埋没時期を示すものである。20は須恵器鉢である。東播系で、細かな白色砂を多く含む。色調は灰褐色である。21は、滑石製のミニチュア釜で溝S D01より出土した。底部付近のみの破片である。同一個体と考えられる破片が土坑S K10からも出土している。22は重郭文軒平瓦でS P70より出土した。瓦当部分の幅5.7cm、長さは11cmを測る。胎土は精良で、色調は淡灰褐色をなす。23・24は溝S D01より出土した。釘の個体数は約6点あるがすべて頭部が欠損したもので、23は唯一

頭部が残存するもので、頭部を扁平に広げ折り曲げるものである。長さ5.4cm、幅1cm、厚さ0.6cmを測る。24は笠型の飾り部分と中央部に打ち込まれた釘からなる。笠の直径5.3cm、高さ1cm、釘部分の長さ3.4cm、厚さ幅とも0.5cmを測り両端を欠損する。25は、鍛冶滓である。重量187.7gを量る。

5. ま と め

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴式住居跡・土坑、中世の溝・土坑を検出した。

竪穴式住居跡については、後世の削平により約半分の検出になったが、周辺に散在する柱穴に古墳時代の遺物が含まれており、削平された竪穴式住居跡、掘立柱建物跡などが存在する可能性がある。

長岡京期の遺物は少量出土しているが、遺構は検出されなかった。近辺の調査でも同期の遺構はほとんど検出されないという結果が出ている。調査地は、条坊推定では西三坊大路路面上となり、遺構が検出されないことを裏付けるものかも知れないが、その理由については今後検討を要する。出土遺物の大半が磨滅・細片化してしていることから、中世の土地利用に伴い消滅したという可能性も考えられる。

また、トレンチ中央部で検出した道路状遺構の両側溝は、時期を特定することはできなかったが、溝S D03の掘削されていない約4.5mは道路の交差点と仮定することもできる。ここより南200mの右京第704次調査では検出されていないことから、何らかの境界線となるようなものかもしれないが、条里・条坊制の地割りを踏襲している可能性がある。

中世の遺構では、昭和53・54年度調査成果と合わすと、溝S D01は、南北23m以上、東西19m以上の方形に区画される溝を確認したことになる。これは、施設をとり囲む外郭施設と考えられ、出土した多量の12世紀後半を中心とする瓦器碗から、12世紀後半に存在した中世居館跡の存在を示唆するものといえる。この溝は、13世紀中頃には埋没したものと思われる。

この付近は、富坂荘・長岡荘の荘園が存在していたことが文献からも知られており、関連が問われるところでもある。区画溝の西・南限および内部の建物配置については、今後の調査成果に期待したい。また、出土遺物に鍛冶滓、飾金具・釘などの鉄製品も出土していることから、ここで生産された製品であるとはいえないが、周辺の調査でも同様の遺物が出土しており、鍛冶工房が近辺に存在したことは確実である。居館と鍛冶工房の関係など、中世の復原を試みる上で今回の調査は重要な資料を提供したといえる。

(増田孝彦)

注1 調査補助員および整理員 大歳浩史・兵頭真千・稲垣あや子・藤井矢壽子

9. ^{ながおかきょう}長岡京跡右京第750次(7ANMHK-6地区)・ ^{こうたり}神足遺跡発掘調査概要

1. はじめに

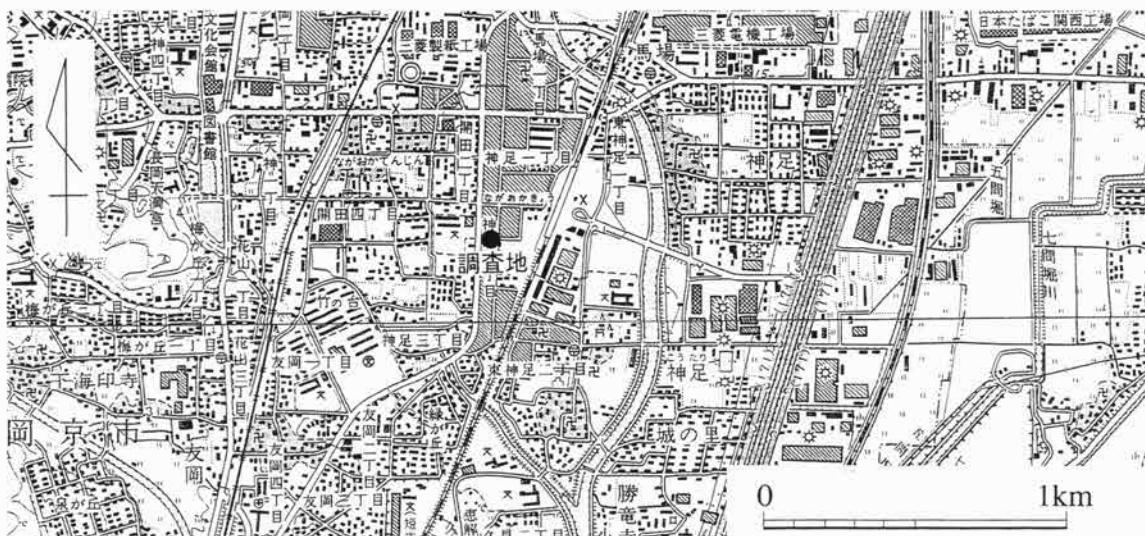
この調査は、御陵山崎線住宅宅地関連総合整備事業に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京市神足2丁目^(注1)で、長岡京跡右京六条一坊十三町(新条坊では右京六条一坊十五町)にあたり、神足遺跡の範囲内でもある。隣接する調査区(長岡京跡右京第638次・同664次)^(注2)では、弥生から中世・江戸時代に至る遺構が多く検出されており、当調査区でも遺構が検出される可能性が高いと判断された。

現地では、配管類を避ける形で約200m²のトレンチを設定し、平成14年10月29日から12月13日まで調査を行った。調査は、当調査研究センター調査第2課第1係長石井清司、同調査員藤井整が担当した。調査期間中、発掘調査・整理業務に従事していただいた作業員・調査補助員・整理員の方々に心からお礼申し上げます。^(注3)また、調査に当たっては、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・京都府乙訓土木事務所をはじめ、関係諸機関よりご指導・ご協力をいただいた。厚くお礼申し上げます。なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

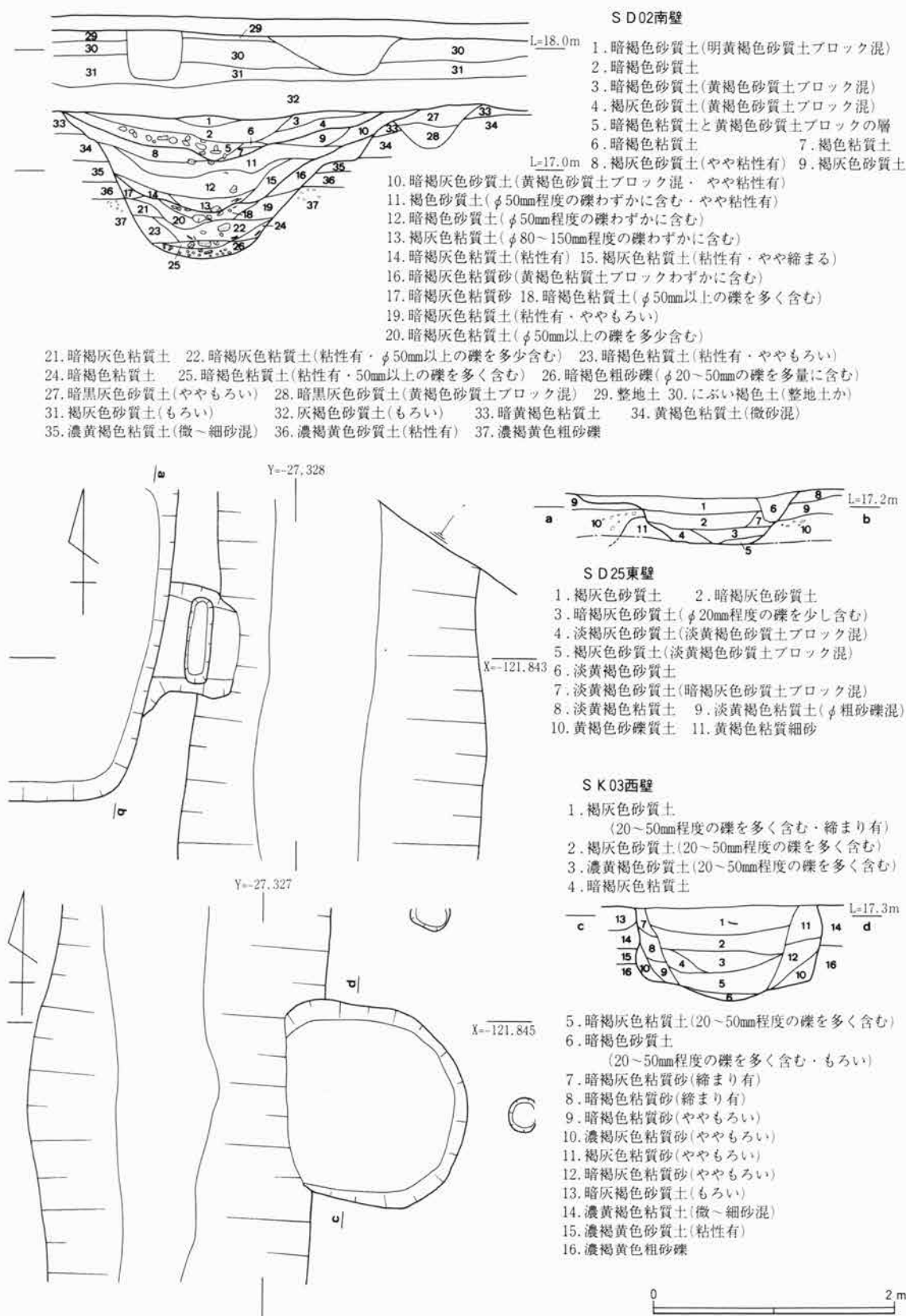
2. 調査概要

(1) 基本層序

調査区は、小畑川右岸の低位段丘上に立地しており、周辺はゆるやかに北西から南東方向へと



第129図 調査地位置図(国土地理院1/25,000京都西南部・淀)



第131図 堀状遺構S D02、溝S D25、土坑S K03平・断面図

土は黄褐色粘質土と黒灰色粘質土の互層をなす。遺物は出土していないが、溝 S D 25 を切る。

中世の遺構としては、堀状遺構 S D 02 とそれに附属する溝と考えられる溝 S D 25、さらにピットなどがある。

堀状遺構 S D 02 調査区西半を南北に延びる幅約 3 m、深さ 1.2 m の「V」字状の溝である。調査区の北端に及ばずに途切れることなどから、堀である可能性が高い。

堀状遺構 S D 02 の南端と北端では埋没の状況に加え、遺物の出土状況も若干異なる。南半では、下層・最下層から、拳大の礫と瓦器碗、羽釜などが多量に廃棄された状態で出土した。この拳大の礫は、基本層序の第 9 層(第 131 図 37 層)に含まれる礫と比較しても大きく、ベース以下の層からの混入とは考えがたい。遺物と礫は折り重なるようにして出土すること、また、第 6・7 層(第 131 図 34・35 層)に近い黄褐色粘質土ブロックも遺物と混在することから、礫が含まれる下層・最下層(第 131 図 17～26 層)は人為的に埋め戻されたものである可能性が高い。中層(8～16 層)から上層(1～7 層)にかけては遺物・礫ともにほとんど含まず、下層以下とは様相が異なる。特に、南端の断面では再掘削の痕跡も認められるため、この堀状遺構 S D 02 は一旦埋め戻されたが、後に再掘削されたものと考えられる。

堀状遺構 S D 02 の北半では、下層から上層にかけて多くの遺物が出土した。特に北端へ向かうにつれ上層の遺物含有量は増加した。南半では最下層から完形に復原することが可能な遺物が多量に出土したが、北半ではまとまった形ではなく、いずれの層からも細かい土器片が出土し、特に炉壁・滓といった遺物の出土が目立った。遺物は 13 世紀前葉のものが、再掘削前の埋土から出土している。

溝 S D 25 堀状遺構 S D 02 の北端から 7.5 m の位置で西へ延びる溝 S D 25 を検出した。この溝は西半を土坑 S K 11 によって壊されているため、延びていく正確な方向やその性格は不明であるが、埋土の状況などから、堀状遺構 S D 02 と同時に機能していた可能性が高い。この溝 S D 25 が堀状遺構 S D 02 と交わる地点では、溝 S D 25 と直交する深さ 0.1 m の小口状の窪みを検出した(第 131 図中)。この小口状窪みの性格もまた不明であるが、溝 S D 25 が地形の高い方へと延びることから、簡易な堰や水門のような施設を想定できるかもしれない。ただし、堀状遺構 S D 02 は下層の砂礫層を掘り込んで掘削されているため、堀が常時水を湛えられたかは水量次第である。

溝 S D 15 調査区北半で検出した溝で、瓦器碗の細片が出土したが図化できるものはない。

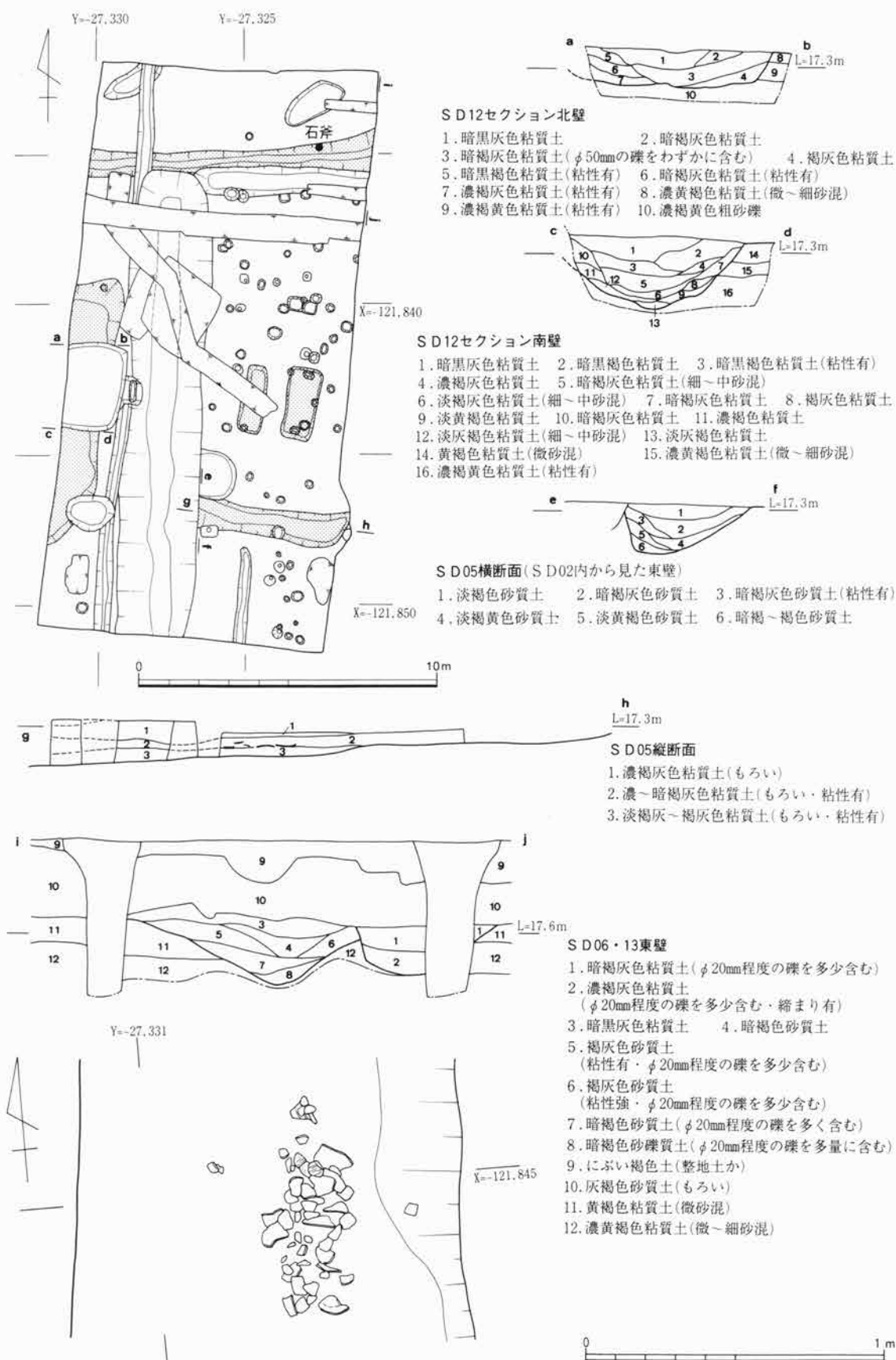
ピット S P 14 木棺墓 S X 08 の北側で検出されたピットで、上層からは瓦器皿が 1 点出土した。周辺では多くのピットが検出されたが、埋土の違いなどを考慮すると、建物の復原は難しい。

中世以前の遺構には、溝 S D 13 や土坑 S K 03・ピットなどがある。

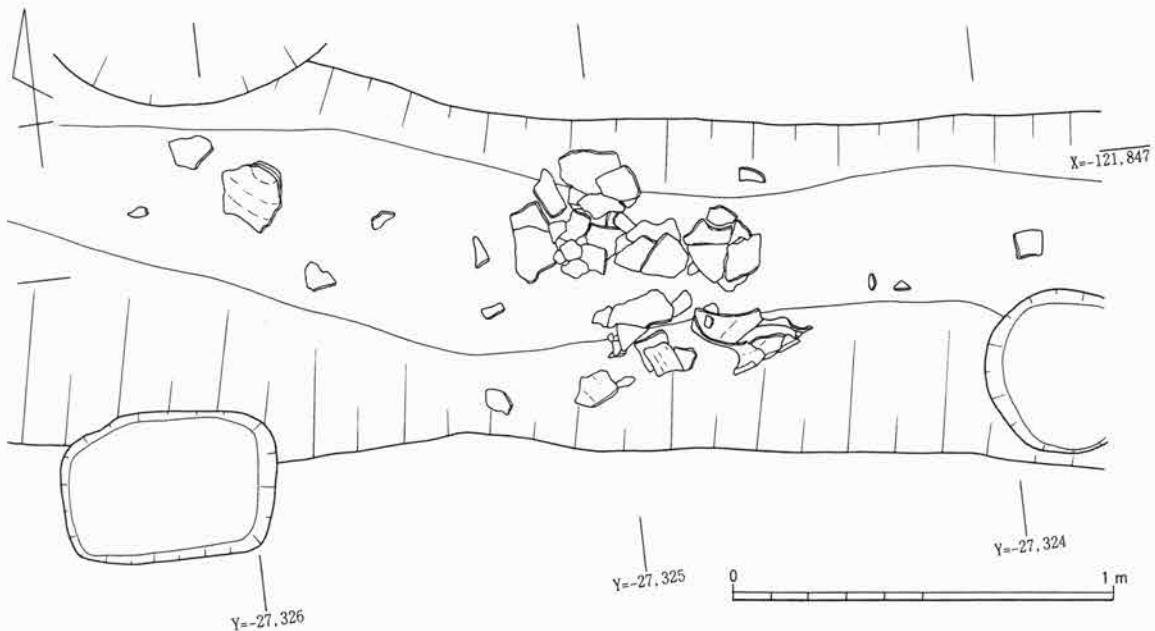
溝 S D 13 調査区西半を南北に貫く溝で、堀状遺構 S D 02 に切られる。遺物は出土していない。

土坑 S K 03 調査区南半で検出した円形の土坑である(第 131 図下)。西半を堀状遺構 S D 02 に切られる。遺物は出土していない。

弥生時代の遺構としては、方形周溝墓の周溝と考えられる溝と主体部 2 基を検出した。復原すると 2 基の方形周溝墓になるものと考えられる(第 132 図上トーン部分)。



第132図 弥生時代遺構実測図

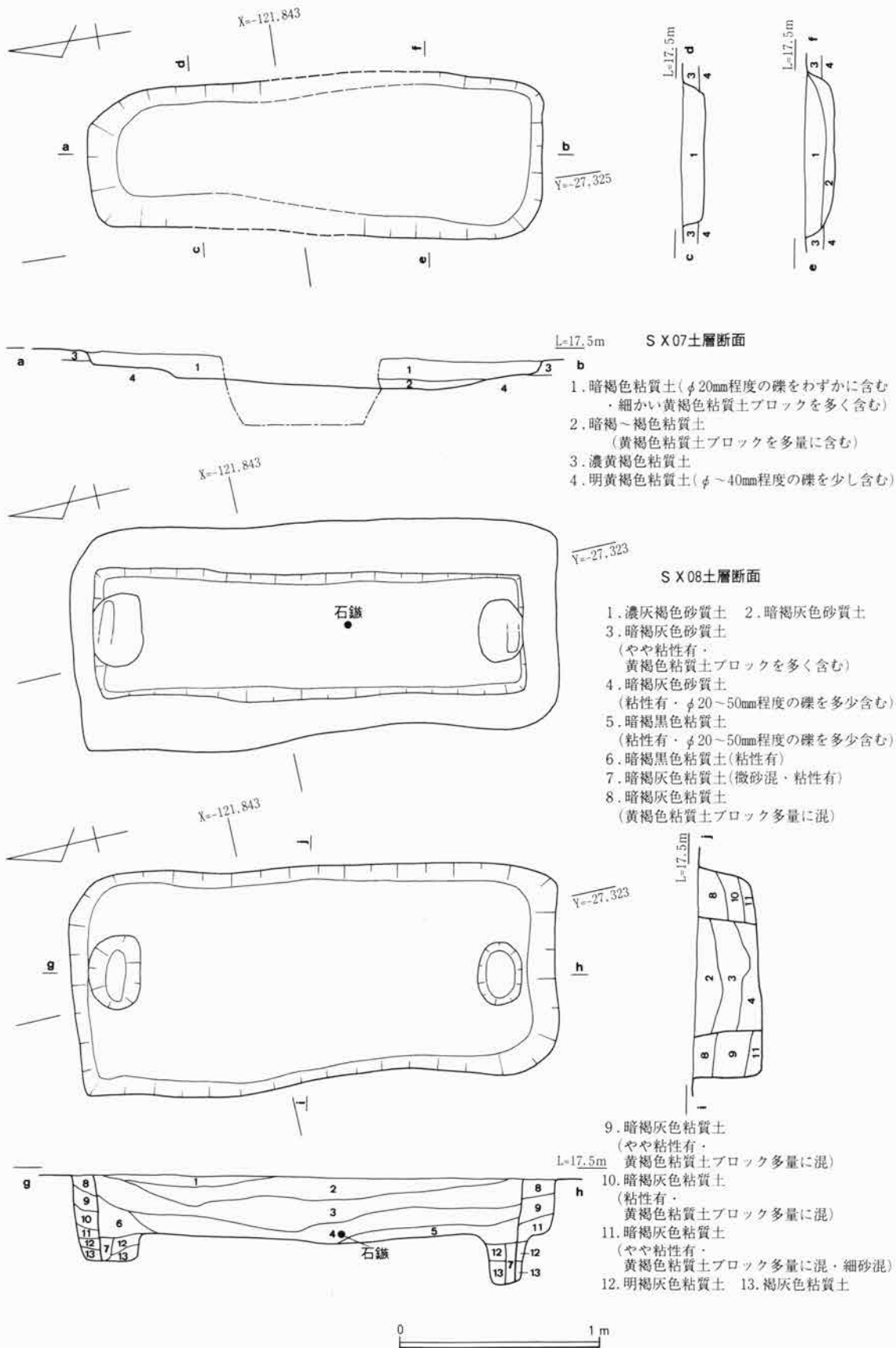


第133図 溝 S D05遺物出土状況図

方形周溝墓 S X05 溝 S D05を南溝とする方形周溝墓で、西溝は堀状遺構 S D02に壊されている。溝 S D05は調査区東端で浅く細くなっており、途切れているか、コーナー部が浅くなっている可能性が高い。北溝は見つからなかったが、後述するとおり墳丘の存在が想定されることから、溝 S D05より北に位置する主体部2基も含めて方形周溝墓 S X05と認識できると考えている。この想定が許されれば、東西に延びる溝 S D06がその候補となる。ただし、周辺調査で確認されている同時期の方形周溝墓でも、必ずしも溝は全周するものではないため、当初から掘削されていなかった可能性も考えておく必要がある。隣接調査区である長岡京跡右京第638次調査で検出された、弥生時代の溝 S D13が東溝になる可能性もある。

南溝と考えられる溝 S D05からは、広口壺(第136図10)が押しつぶされた形で出土した。溝 S D05は、調査区東壁でその深さは0.5mであるが、壺が出土した地点では0.4mと深い。このため、調査時に周溝内埋葬の可能性があると考え、この地点については周溝の縦断面を図化した(第132図中、図版第77-(1))。観察の結果、溝は東から西へゆるやかに落ちる形状であり、まず木棺墓ではないことが判断できた。また、土器は、ほぼ溝底の形状にあわせた形で出土していることから、土壙墓の可能性も考えられないと判断した。周溝の一部が深いことを根拠にして埋葬施設と評価することはできないという事例である。

この方形周溝墓からは、並列する2基の主体部 S X07・08を検出した。埋土は明瞭な暗褐灰色系で、ベース面の暗黄褐色粘質土と比べ平面形もはっきりと認識できた。西側に位置する土壙墓 S X07(第134図上)は長軸2.28m、短軸は北側で0.70m、南側で0.80mの規模である。中央部では約0.15mの深さがあり、断面形も箱型を呈しているが、墓壙長軸の両端に向かって浅くなる。墓壙としてはやや奇異な断面形状とも言えるが、隣接する木棺墓 S X08と並列して検出されていること、木棺墓 S X08の掘形と埋土も酷似することから、土壙墓と判断した。この墓壙の埋土は



第134図 土壙墓 S X07・木棺墓 S X08平・断面図

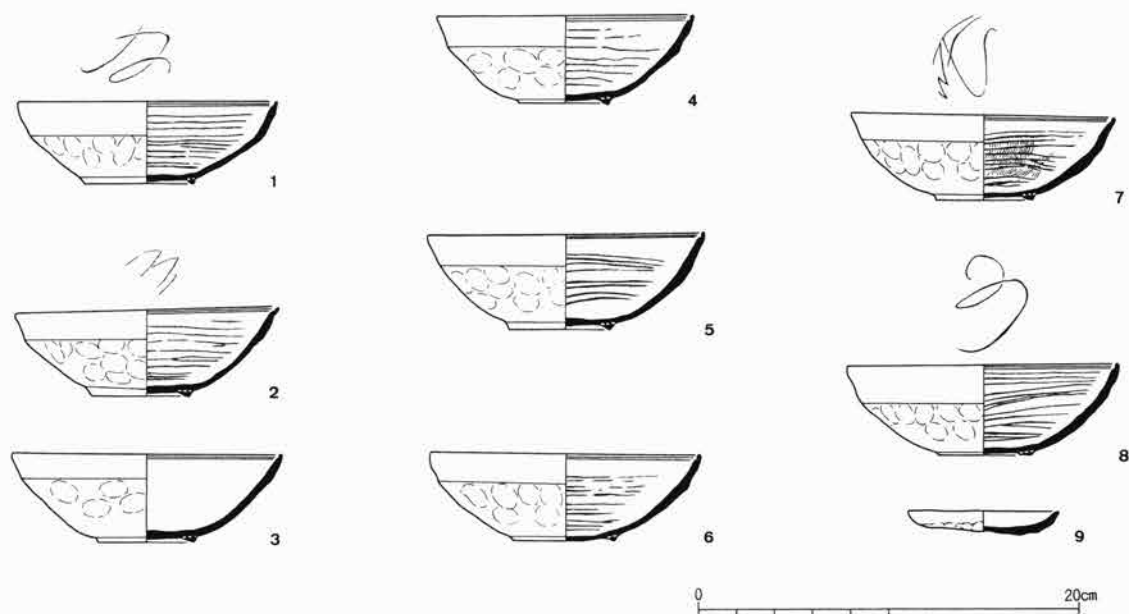
全て採取し、全量洗浄を行ったが、この主体部からは、石鏃や剥片などは出土しなかった。

東側に位置する木棺墓 S X08(第134図下)は、墓壙掘形の長軸2.43m、短軸は北側で1.12m、南側で1.05m、木棺痕跡の長軸2.16m、短軸は北側で0.64m、南側で0.60mである。木棺は小口穴をもつ型式の木棺で、検出面からの深さは約0.30mである。なお、木棺痕跡は棺材の厚さを認識できるほどには明確ではなかった。木棺の南半からは石鏃(第136図13)が1点出土した。石鏃は、墓壙底から約1.5cm高い位置で出土した(第134図ドット位置)。石鏃の正確な方向、裏表、角度などについては、ヘラで起こした際に圧痕が残らなかったため不明である。ただし、検出時の状況から高さの誤差は多くても1cm内外と特定しうる。なお、これらの墓壙埋土は全て採取し、中層以下(第134図下段3～5層)については洗浄を行ったが、調査時に確認することができた1点以外には、石鏃や剥片などは出土しなかった。

墳丘は完全に削平されており盛土も確認できなかったが、墳丘は存在したと考えられる。方形周溝墓 S X08の墓壙は、下層の砂礫層にまでは達していない。にもかかわらず、木棺内の埋土には、黄褐色粘質土ブロックや直径3～5cm程度の礫が含まれていた。これらの礫は、周溝掘削の際に、墳丘として区画内に盛られた土に含まれていたものが、棺内に落ち込んだと考えられる。

溝 S D06 調査区北半を東西に横断する溝である。溝からは弥生土器片とともに石斧が出土した(第132図上ドット位置)。埋土は溝 S D05に近く、方形周溝墓 S X05の北溝として機能していた可能性も考えられる。

方形周溝墓 S X12 調査区西端で検出したが、周溝は東溝(S D12)だけが調査区内にあり、そのほかは調査区西側の道路下に潜り込んでいる。東溝は中央部を土坑 S K11によって壊されており、両端を検出した格好となった。周溝は中央が深く両端が浅い、溝 S D05と類似した掘削方法をとっている。供献土器が出土したのは、溝 S D12の南半である。壺(第136図11)は、口縁部を北に、底部を南にして本来の形状をほぼ保ってつぶれていた。この甕の破片にまぎれて別個体の



第135図 堀状遺構 S D02出土遺物実測図

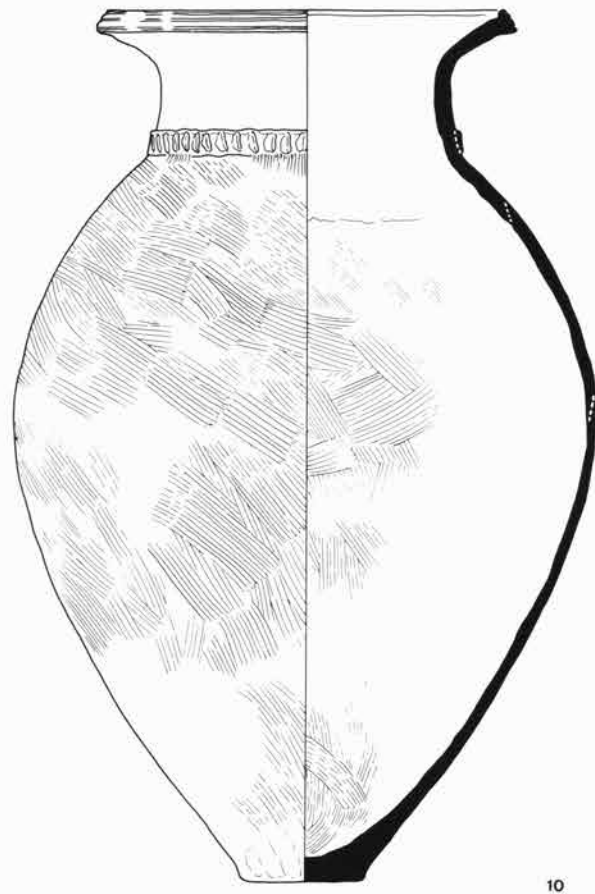
壺頸部片1点が出土している。

弥生時代以前の遺構・遺物については、調査終了段階で下層の掘削も行ったが、今回の調査では確認できなかった。

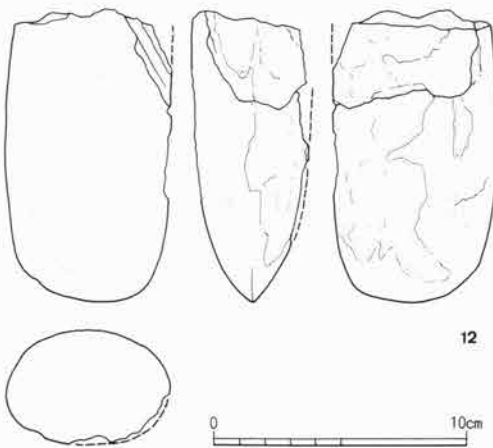
3. 出土遺物 (第135図)

堀状遺構S D02からは多量の瓦器・土師器などとともに炉壁・羽口などが出土した。このうちの一部を図化した。1～8は瓦器碗、9は土師皿である。瓦器碗は口縁部に沈線がめぐるが、内面のヘラミガキの間隔は開いていることなどから、13世紀前半の年代が与えられる。

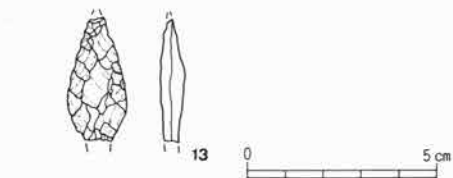
これらの土器とともに多量の炉壁が出土した(図版第80-16・17)。炉壁はコンテナにして2箱分出土したが、その大部分が堀の北半から出土したものである。また、1点のみであるが、羽口も出土した(図版第80-15)。羽口はゆるやかに屈曲する型式の



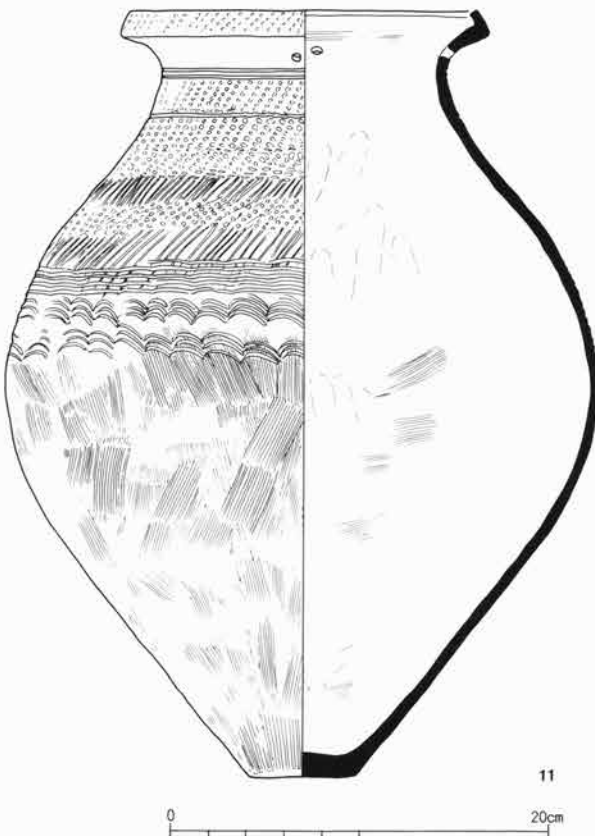
10



12



13



11

第136図 溝S D05・06・12、方形周溝墓S X08出土遺物実測図

もので、多量の炉壁が出土した堀の北半セクション(図版第74-(2))から、混在する形で出土した。また、同じ地点で滑石製石鍋の未製品(図版第80-14)が出土した。石鍋は台形鐙のもので、内外面ともに未整形の破片である。消費地での転用品ではない可能性がある。

弥生時代の遺物は、方形周溝墓と考えられる溝から出土した弥生土器2点を図化した。10は溝S D05から出土した壺で頸部に指づくね突帯をめぐらせ、口縁端部に凹線紋を施す。胴部外面はハケ調整で仕上げ、胴部下半は底部に近い部分だけヨコナデを施している。11は溝S D12から出土した、いわゆる近江系の受口口縁壺である。胴部外面の下半は粗いハケ調整で、ケズリの痕跡は認められない。12は溝S D06から出土した太型蛤刃石斧で、基部が破損している。刃部は丸味を持ち、全体に磨滅があり、両面に敲打痕があり、再利用されている。13は木棺墓S X08棺内から出土した凸基無茎式の打製石鏃で、先端と基部が折損している。

4. ま と め

今回の調査では、これまで確認されていなかった13世紀前葉に比定される堀状遺構S D02が検出された。堀状遺構は、検出面からの深さは1.2mで、下層の礫層も掘削する作業を伴う大規模なものである。この遺構がどのような性格のものであるかは、今後の成果を待たねばならないが、建物となる可能性のあるピット類が東側に集中すること、また、長岡京跡右京第638次調査では中世と考えられる柵S A02が検出されていることなどから、東側を区画する堀状遺構となる可能性を指摘できよう。

また、堀状遺構の埋土からは、多量の土器類とともに、炉壁やフイゴの羽口など铸造関連遺物も出土した。特に、未製品の可能性がある滑石製石鍋の存在は、石鍋の生産と流通を考える上で重要である。この堀の性格としては土豪の居館などが想定されよう。

長岡京期と考えられる遺構としては数基のピットがあるが、埋土なども考慮すると建物として復原することはためられる。また、条坊側溝は今回の調査区では確認できず、より北に位置しているものと考えられる。中世の堀がどの方向へと延びるかも含め、周辺調査の課題となろう。

弥生時代の遺構については、方形周溝墓を2基確認し、神足遺跡における中期後葉の墓域がさらに西へと広がりを見せることも明らかとなった。今回の調査では、特に土壙墓と木棺墓が並列して検出され、木棺墓の棺内からは石鏃が1点出土した。

(藤井 整)

注1 中島皆夫・小畑佳子「長岡京跡右京第638次調査」(『長岡京跡右京第638次神足遺跡発掘調査概報』(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1999

注2 原秀樹『長岡京跡右京第664次 神足遺跡発掘調査報告』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 2000

注3 補助員 尾上忍・村上奈弥・山内彩子 整理員 鈴木浩子・田中美恵子・村上優美子

注4 岩崎誠・木村泰彦・山本輝雄『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第26集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 2002

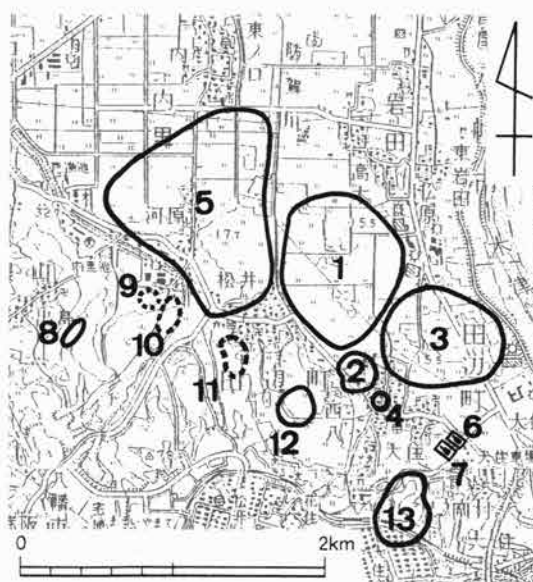
10. 大住地区府営ほ場整備事業関係遺跡 発掘調査概要

1. はじめに

魚田遺跡・西村遺跡・門田遺跡は、京田辺市北部、木津川左岸の沖積平野上に立地する集落跡・遺物散布地である。現在の行政区画では、いずれも京田辺市大住地内に所在する。これら3遺跡の西方には弥生～平安時代の集落遺跡である新田遺跡や女谷・荒坂・松井の各横穴群が、南方には古墳時代前期の前方後方墳である大住車塚古墳・大住南塚古墳が存在する(第137図)。3遺跡のうち、魚田遺跡はこれまで京田辺市教育委員会により4次の調査が行われ(第138図)、平安時代・中世・近世の遺物の存在が確認されているが、西村・門田両遺跡は散布地として認識されているものの遺跡の性格は不明であった。

今回の発掘調査は、大住地区府営ほ場整備事業に伴う試掘調査で、京都府山城土地改良事務所の依頼を受け、各遺跡における遺構・遺物の分布状況ならびに埋没深度などを確認することを主たる目的として実施した。調査方法は、2m四方の試掘坑を3遺跡で合計75か所設定し、これを人力で地表下1.0mまで掘削した。土層断面図・写真などの記録作成後は転圧機などを用いて埋め戻し、原状復旧した。調査面積は約300㎡で、調査期間は平成14年12月5日から平成15年2月13日までをあてた。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、同調査員中村周平が担当し、本概要の執筆は中村が行った。また、調査に際しては、京都府教育委員会・京田辺市教育委員会の指導を得たほか、多くの整理員の参加協力を得た。記して感謝したい。なお、調査に係る経費は、全額、京都府山城土地改良事務所が負担した。



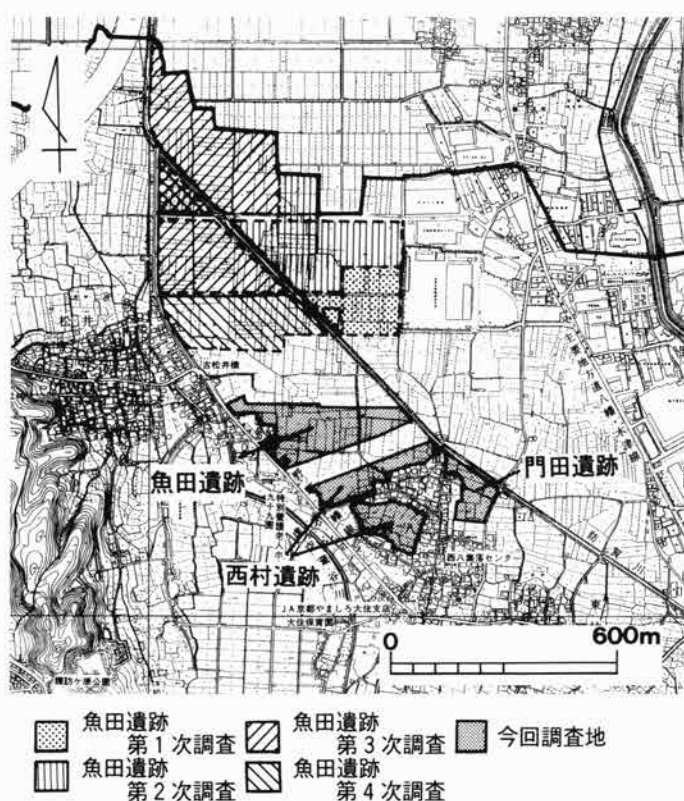
第137図 調査地周辺遺跡分布図(国土地理院
1/50,000京田辺市・大住地区・宇治・奈良)

2. 調査経過

(1) 魚田遺跡(第6次)

遺跡の南域に37か所のトレンチを設定した(第139図)。各トレンチの地表高は概ね14mを測る。土層断面から見る堆積状況では(第141図)、各ト

- | | | |
|-----------|-----------|---------|
| 1. 魚田遺跡 | 2. 西村遺跡 | 3. 門田遺跡 |
| 4. 八河原遺跡 | 5. 新田遺跡 | |
| 6. 大住車塚古墳 | 7. 大住南塚古墳 | |
| 8. 美濃山廃寺 | 9. 女谷横穴群 | |
| 10. 荒坂横穴群 | 11. 松井横穴群 | |
| 12. 向谷遺跡 | 13. 大住城跡 | |



第138図 調査地位置図

レンチとも地表下約30cmまでは暗茶色土(耕作土)の分布をみるが、以下、東半部では、灰色～灰茶色の砂層、西半部では灰褐色～暗灰褐色土・砂質土層がほぼ水平に堆積する。それ以下は東半部で濁灰緑色粘質土の、西半部では橙灰色～青灰色粘質土の堆積である。以上の堆積層のうち、東半部で認めた灰色～灰茶色砂については洪水堆積層と判断する。一方、北西域で設定したU(魚田)17・18・24トレンチにおいては地表下約40～60cm、標高13.6m以下で灰茶色～黄灰色微砂・砂の堆積となる。同様の堆積は付近のU31トレンチ、以南のU8・19・28・30トレンチでも見られ、標高で約13.1～13.3mおよび

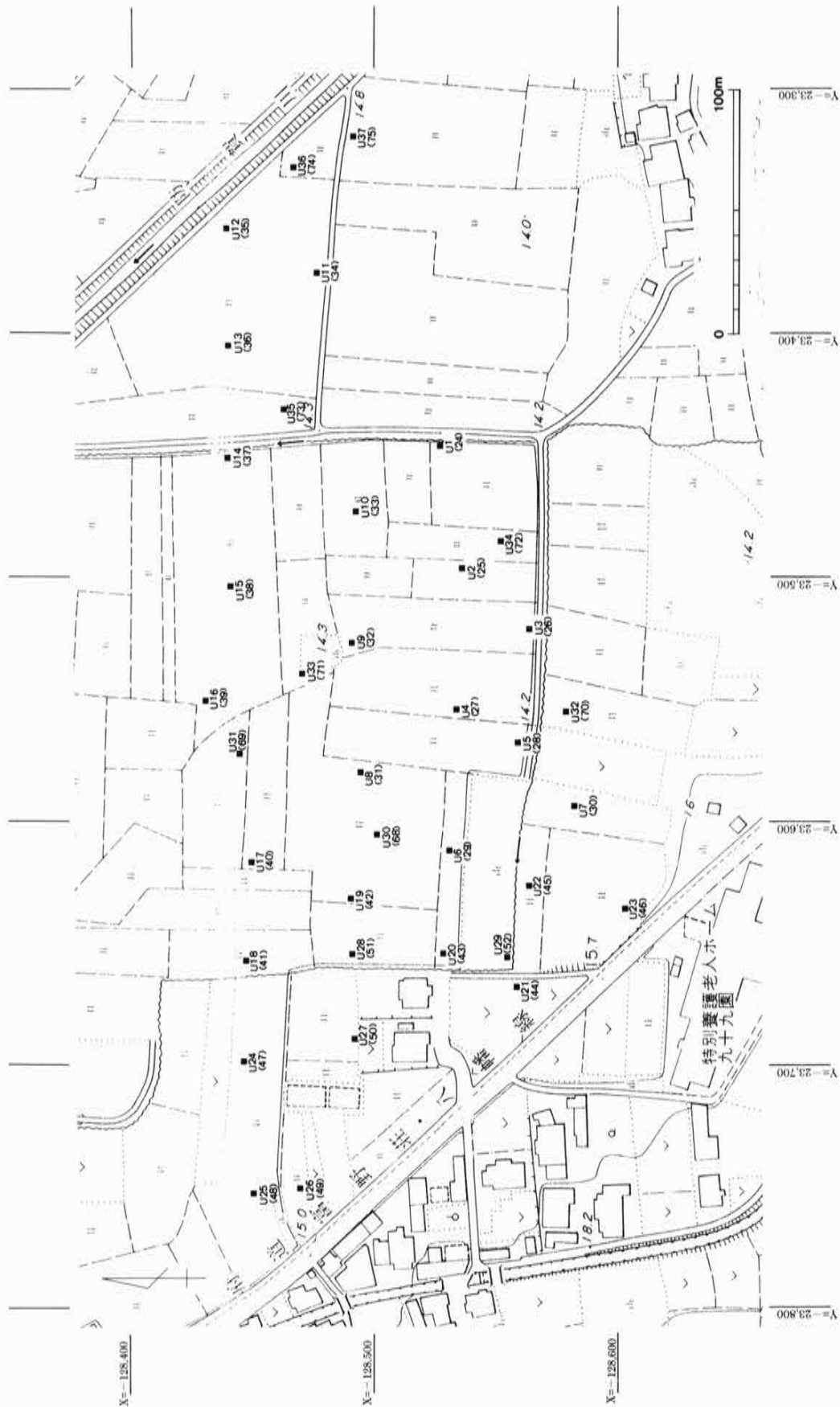
13.5m付近に分布する。これら砂層は上記のトレンチのみに見られ、そのほかのトレンチではその掘削深度に限っては見られない。なお、U18トレンチではこの砂層が上層の灰褐色砂質土まで貫入して止まる噴砂の痕跡を認めた。遺構はU12トレンチ北壁で落ち込みの痕跡を、U6トレンチ東壁で淡灰褐色土層をベースとする落ち込みの痕跡を認めた。

(2) 西村遺跡

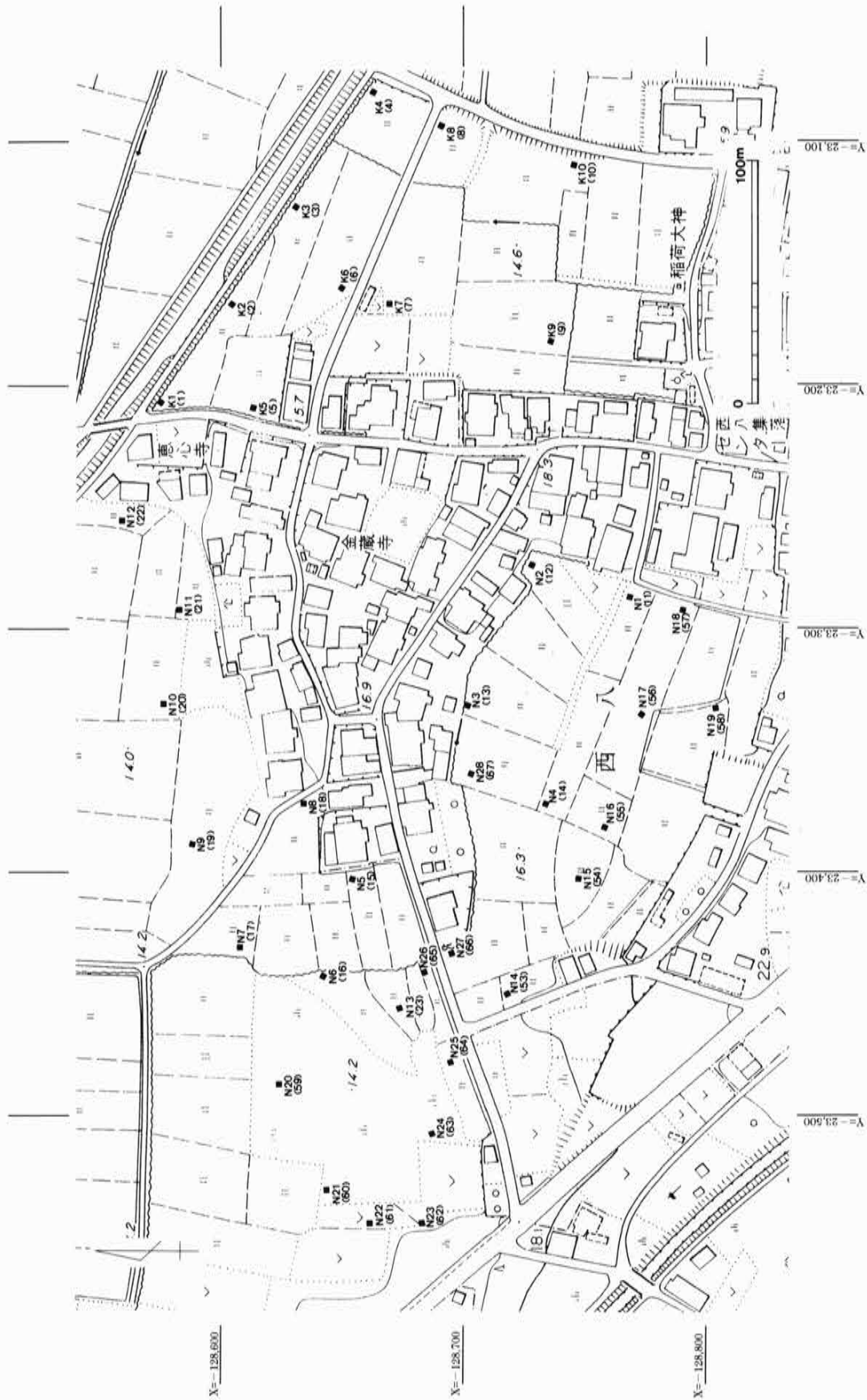
遺跡の北域に16か所、南域に12か所、計28か所のトレンチを設定した(第140図)。北域では各トレンチの地表高は約14mと地形は比較的フラットであるが、南域は以南の虚空蔵谷川の自然堤防上に立地する耕作地であるため、標高は南に進むにつれ高度を増す。土層堆積は北域では耕作土以下、暗灰褐色土・砂質土層や青灰色～灰緑色の粘質土の堆積であるが、N(西村)7・10トレンチでは灰色・暗灰色・青灰色の砂層が中間層を成す。一方、南域では耕作土以下、灰褐色砂質土と灰緑色粘質土の間に灰茶～青灰茶・灰白色の砂層が堆積する(第141図)。これら灰色系砂層については洪水堆積層と判断する。遺構は、N17トレンチ北壁・N18トレンチ東壁に落ち込みの痕跡を認めたが、いずれもラミナ状の堆積をなす洪水痕跡である。ほかに遺構の兆候は確認できなかった。

(3) 門田遺跡

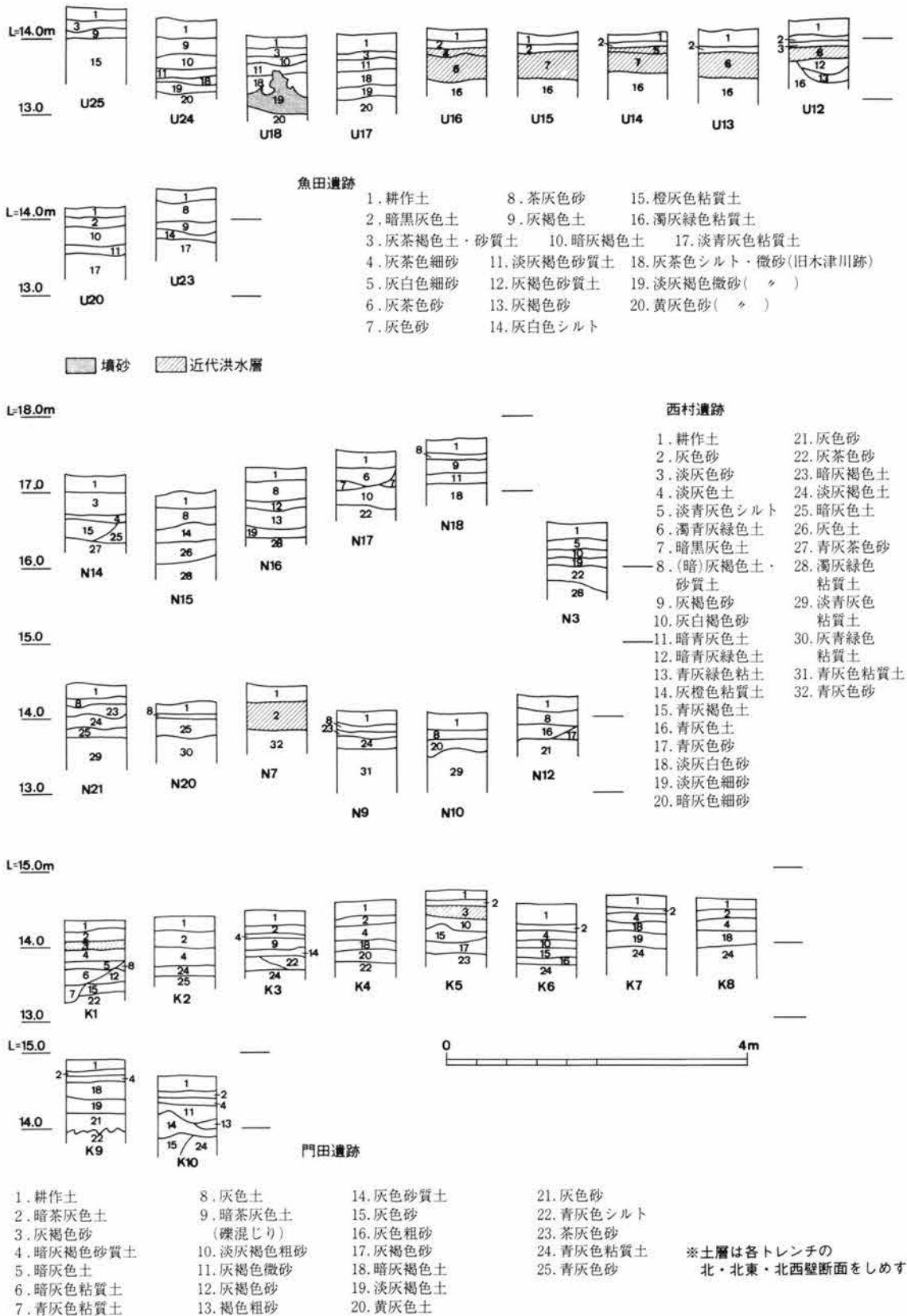
遺跡の南西域に10か所のトレンチを設定した(第140図)。トレンチの地表高は北側で約14.5m、南側で約14.7mを測る。土層は各トレンチで耕作土以下、暗茶灰色土・暗灰褐色砂質土が堆積するが、以下のレベルでは、南側のK(門田)7～9トレンチで暗灰褐色～淡灰褐色の土が、北側の



第139図 魚田遺跡トレンチ配置図 (アルファベットは遺跡名の略、()の数字はトレンチ仮番号)

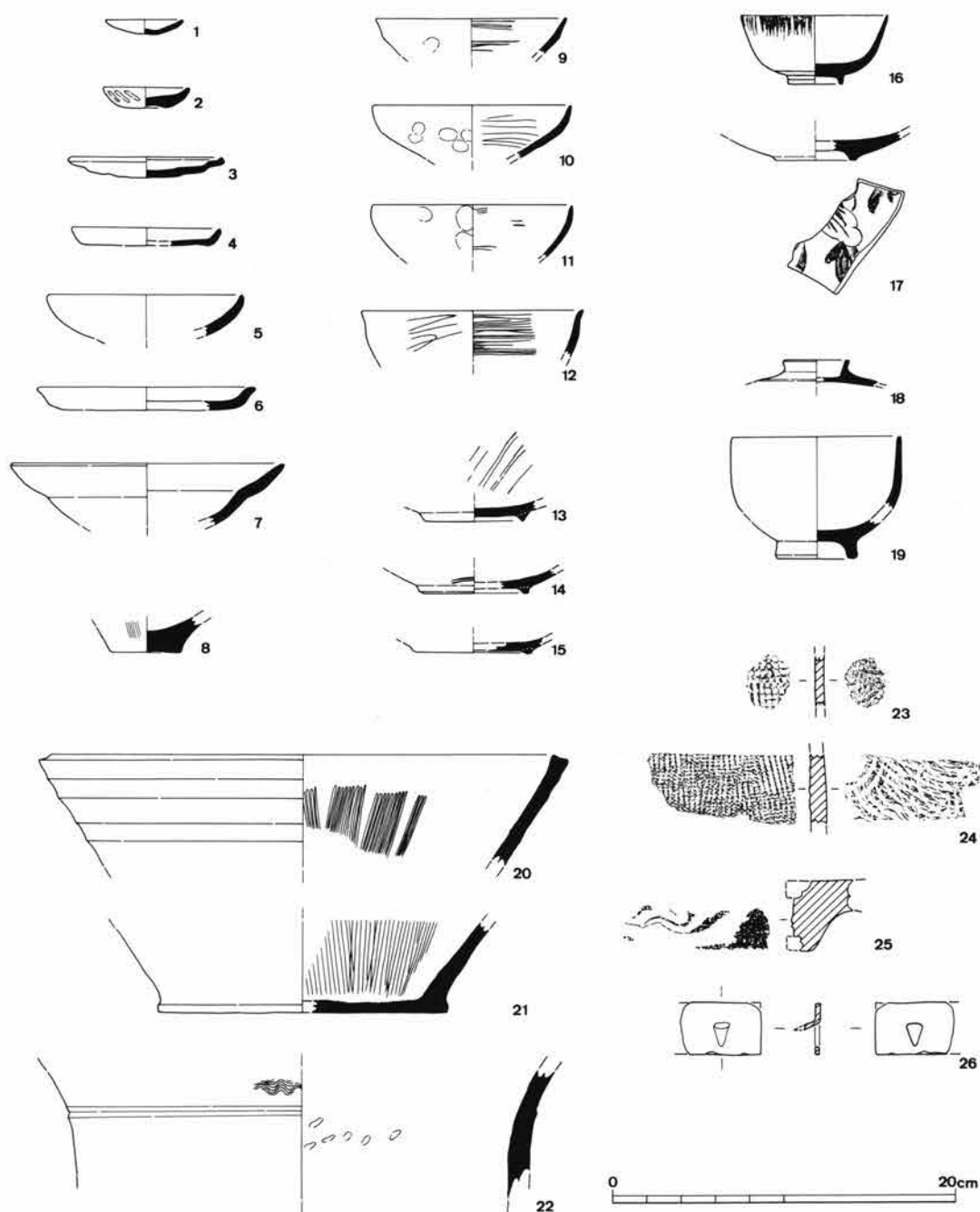


第140図 西村・門田遺跡トレンチ配置図 (アルファベットは遺跡名の略、()の数字はトレンチ仮番号)



第141図 魚田・西村・門田遺跡土層柱状断面図(アルファベットは遺跡名の略)

K3・5・6トレンチでは茶灰～灰褐色の砂が見られ、底部付近では青灰色の粘質土・シルト・砂の堆積となる。また、南東のK10トレンチでは中間深度で灰色系砂・砂質土が折り重なる堆積



第142図 魚田・西村・門田遺跡出土遺物実測図

- | | |
|--------------------------------|---------------------------|
| 1. 魚田1トレンチ2層暗黒灰色土 | 8. 魚田17トレンチ20層黄灰色砂 |
| 5. 魚田14トレンチ5層灰白色細砂 | 2・25・19. 西村3トレンチ5層淡青灰色シルト |
| 24. 西村7トレンチ32層青灰色砂 | 3・12・13. 西村9トレンチ31層青灰色粘質土 |
| 23. 西村20トレンチ30層灰青緑色粘質土 | 26. 門田4トレンチ4層暗灰褐色砂質土 |
| 18. 門田6トレンチ2層暗灰褐色土 | 4・10・11. 門田6トレンチ10層淡灰褐色粗砂 |
| 6・9・14・15. 門田8トレンチ24層青灰色粘質土 | |
| 16・17・20・21. 門田10トレンチ4層暗灰褐色砂質土 | |
| 7・22. 門田10トレンチ24層青灰色粘質土 | (土層番号・土色名は第141図に準拠する) |

様相を示す(第141図)。K 3・5・6・10トレンチの砂・粗砂・微砂についてはいずれも洪水堆積層と判断する。遺構はK 1トレンチ北壁面で落ち込みの様相を認めたのみで、ほかに遺構の痕跡は認められなかった。

3. 出土遺物(第142図、図版第86)

遺物はコンテナにして約7箱ある。いずれも包含層出土である。図化し得る26点を示した。1～6は土師皿である。1は灯明皿である。手づくねで成形し内外面ともナデを施す。完形品。2は厚手で外面に規則的なユビオサエの痕跡をのこす。3は「て」の字口縁の皿である。器壁は4mmを測る。内外面ナデ、外面下半にユビオサエ。4は底部は平坦で、口縁は斜め上方に短く立ち上がる。内外面ナデ、底部外面にユビオサエ。5は内外面ともナデを施し、口縁端部を丸くおさめる。6は強い一段ナデを施し、口縁を外反させる。7は深身の杯と考える。内外面に横ナデを施す。底部・口縁部間に稜をもち口縁は斜め外方に立ち上がる。8は弥生土器底部。磨耗が著しいが、内面ナデ、外面にハケの痕跡を残す。9～13は瓦器碗である。9～11はともに口縁端部が尖り気味におわるもので、内面に圈線ミガキ、外面にユビオサエを施す。口径は9で11.2cm、10で11.6cm、11で11.8cmを測る。12は口縁端部内面に段をもつもので、内面に圈線ミガキ、外面にミガキを施す。13は瓦器碗底部である。断面三角形の高台を貼り付け、見込みに平行線状のミガキを施す。高台径5.8cmを測る。14・15は黒色土器底部である。14は台形の高台を貼り付け、内外面にヘラミガキを施す。高台径5.8cmを測る。15は台形の高台を貼り付ける。高台径6.5cmを測る。16は肥前系磁器である。染付で外面に「雨降り文」を描く。17は磁器である。染付で見込みに草花文を描く。畳付に重ね焼きの際の砂が付着する。18は陶器の蓋である。内外面に施釉し色調は緑灰色を呈する。19は肥前陶器の碗である。内外面に施釉し色調は緑灰褐色を呈する。20・21は播鉢である。ともに外面に鉄釉を施す。20は内面に9条1単位の播目をもつ。21は内面にあらい播目をもつ。22は須恵器の甕である。内外面はロクロナデ、内面に工具による刺突痕が残る。外面中央に稜をもち、その上方にくし描き波状文を施す。23は韓式土器である。外面に格子目タタキ、内面に円形のあて具痕跡がのこる。24は須恵器の甕である。外面に格子目タタキ、内面に青灰波のあて具痕跡がのこる。25は軒平瓦である。瓦当面に唐草文を配し、凹面に布目痕が残る。26は不明鉄製品である。長方形の鉄板中央に「V」字形に切り込みを入れ、片側に折り曲げている。なお、6・12については僅少な残存部からの推定復原である。

4. ま と め

今回の調査においては魚田・西村・門田遺跡でいずれも、広範に堆積する洪水堆積層を認めた。調査地周辺は頻繁に洪水の影響下におかれており、掘削深度に限っては、遺構の兆候も概して希薄である。特に魚田遺跡では東半部で耕作土直下に灰色砂層が分布しており、この層は周辺の京田辺市教育委員会の調査において確認されている「明治29年の洪水砂層」に同定しうるものと考ええる(第141図)。京田辺市の調査成果ともあわせれば、灰色砂は遺跡の北半と東半のほぼ全域に

分布しており、その分布域も以東の木津川からの洪水であるという事実と符合する。また、西村遺跡の場合、南域N14・17トレンチなどに見られる洪水堆積層は堆積レベルがほかのトレンチよりも高い。上記の洪水堆積とは異なり、背後の虚空蔵谷川の天井川化に伴う氾濫堆積と推察する。

魚田遺跡では、調査地の北西部で洪水砂とはタイプの異なる灰茶・黄灰色の砂・微砂や噴砂を検出した。これらは京田辺市の第3・4次調査で検出された旧木津川の河原跡や、噴砂にそれぞれ対応するものとする。遺跡周辺を流れる木津川は、かつては調査地の北東方から西流し、松井集落以東を北流する川と合流し、のち北流して戸津集落に流れていたと推察されている^(注4)。位置的に見ても本調査で検出した砂・微砂は、京田辺市の調査の河原跡とともに、これら旧河道の一部をなすと考えられる。京田辺市の調査地点と当該トレンチは距離にしてやや離れているが、周辺の地勢からも旧河道はほぼこの付近で北西流していた可能性を指摘しておきたい。なお、U28・31トレンチでは、この川砂層直上で暗灰～濁灰緑色粘質土層の堆積を確認した。この層は後述する古墳～鎌倉時代の遺物包含層である。また、噴砂については京田辺市の報告によれば、伏見地震(1596年)によるものと指摘されている。当該トレンチにおいては、この砂が灰褐色砂質土を貫入しており、今後の周辺調査における地層年代の決定上での手がかりを与えると考える。

調査地の堆積層のうち、上層の暗灰褐色系の砂質土層(第141図：西村遺跡第8層・門田遺跡第4層)および、下層の青灰～緑灰色系の粘質土層(第141図：魚田遺跡第15～17層・西村遺跡第28～31層・門田遺跡第24層)は、出土遺物が江戸時代後期を主体とするもの、古墳～鎌倉時代に帰属するもので、それぞれが当該期の遺物包含層と考えられる。出土遺物は西村・門田遺跡のものが圧倒的多数を占め、魚田遺跡については少ない。このこと背景として、西村・門田遺跡に比しての、魚田遺跡調査地周辺における、洪水や低湿地による滞水などを原因とする、近世後半以降における開発の遅延などが指摘できる。ただ、下層の包含層遺物については時代幅がありその多くが磨滅したものであり、下層の包含層についても洪水に伴う可能性は否定できない。限られた掘削深度での調査であり、詳細は不明であるが、西村・門田両遺跡については、包含層遺物の流動的な側面からも、今回調査地の周辺に遺跡本体が存在する可能性を考えておきたい。

(中村周平)

注1 本概要の京田辺市の調査成果について述べた箇所については以下の文献を参照した。

田辺町教育委員会『魚田遺跡第1次・第2次発掘調査概報』 1997

京田辺市教育委員会『魚田遺跡第3次発掘調査概報』 1998

京田辺市教育委員会『向谷遺跡・魚田遺跡第4次発掘調査概報』 2002

注2 各試掘坑については、当初、調査を終了した順に仮番号を付し、遺構の記録にあたったが、後に遺跡ごとに1番から始まるトレンチ名に改めた。名称の混乱を避けるため第139・140図に両トレンチを併記した。なお、数字の前のアルファベットは遺跡名の略号である。

注3 整理員 荒川仁佳子・稲垣あや子・川村真由美・永井裕美・野仲乃里子

注4 谷岡武雄『平野の開発』古今書院 1964、ほか

図

版

図版第1 大成古墳群・イリ遺跡



(1)調査前全景(南西上空から)



(2)1次調査調査後全景
(南西上空から)



(1) 2次調査調査後全景
(西から)



(2) 大成18号墳全景
(上空から、上が南)

図版第3 大成古墳群・イリ遺跡

(1) 1次調査地作業風景近景
(西から)

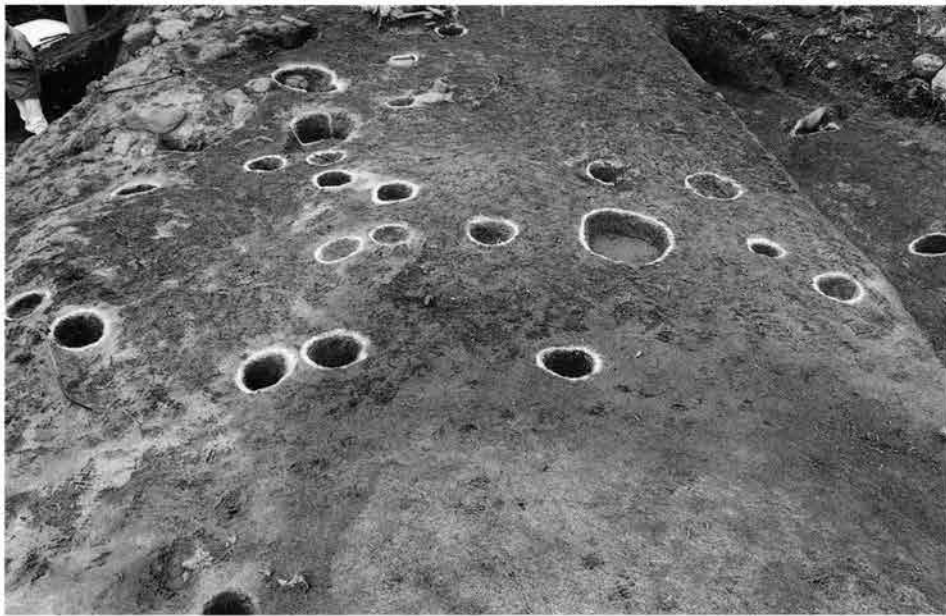


(2) 大成17号墳調査前全景
(西から)



(3) 愛宕神社基壇(北から)





(1) 1次調査地ピット群検出
状況(南から)



(2) テラス2 全景(北から)



(3) テラス1(上層)北半石造物
検出状況(南から)



(1)テラス1(上層)南端石造物
検出状況(1)(西から)



(2)テラス1(上層)南端石造物
検出状況(2)(西から)



(3)テラス1(上層)石垣状遺構
2および石造物検出状況
(西から)



(1)テラス 2 石造物検出状況
(東から)

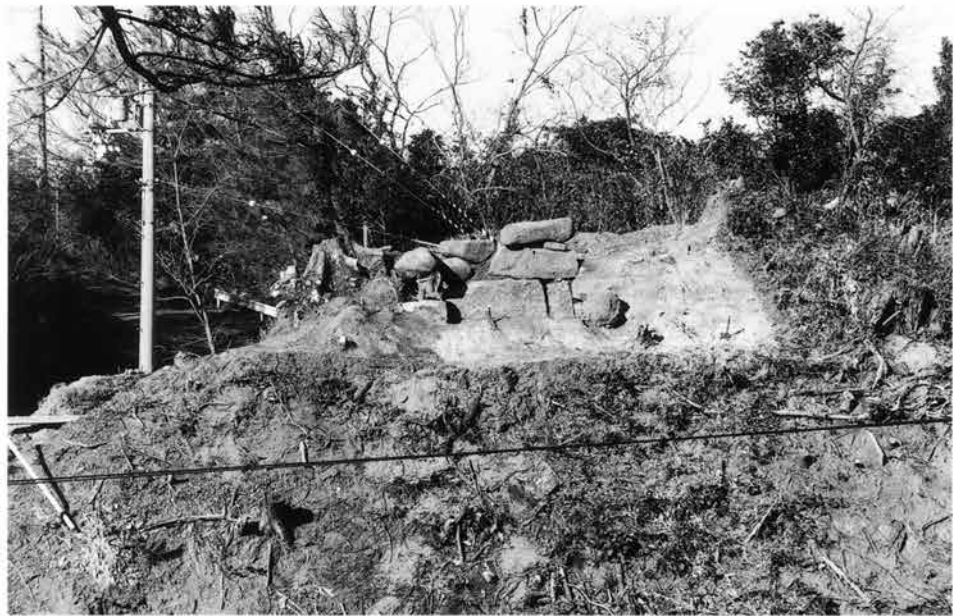


(2)テラス 1 (下層)全景
(北から)



(3)テラス 1 (下層)石造物検出
状況(南西から)

(1)大成17号墳石室全景
(南から)



(2)大成17号墳奥壁(南から)

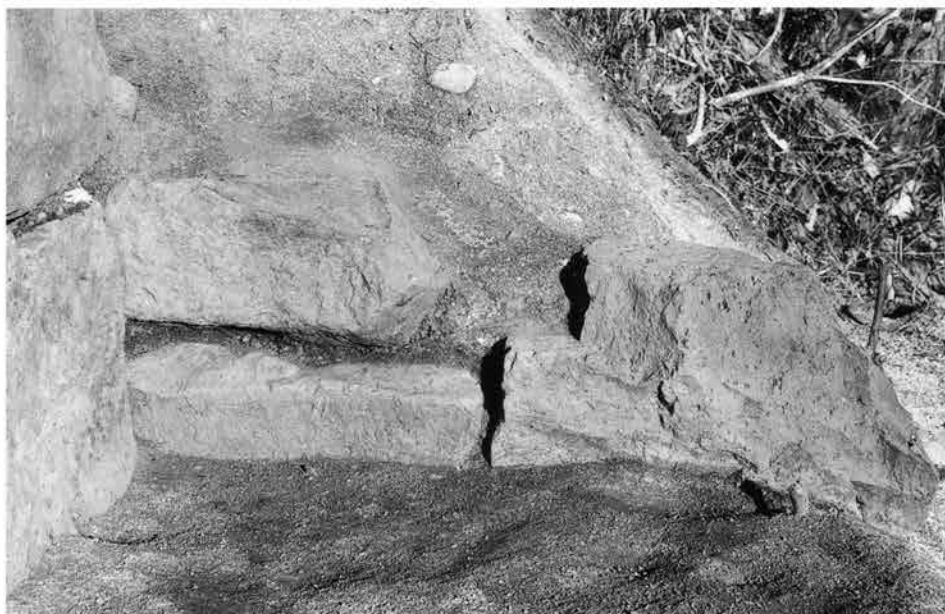


(3)大成17号墳西側壁(東から)





(1)大成17号墳西側壁(東から)



(2)大成17号墳東側壁(西から)



(3)大成17号墳奥壁裏面の状況
(北から)



(1)大成17号墳玄室内遺物検出
状況(北から)



(2)大成17号墳玄室内遺物検出
状況(東から)



(3)大成17号墳玄室内鉄刀・勾玉
検出状況(南東から)



(1)大成17号墳初葬面調査状況
(南西から)



(2)大成17号墳基底石全景
(南から)



(3)大成16号墳周溝、S D01・02
検出状況(南から)



(1)大成16号墳周溝平安遺構面
(南から)



(2)土坑1 検出状況(南から)



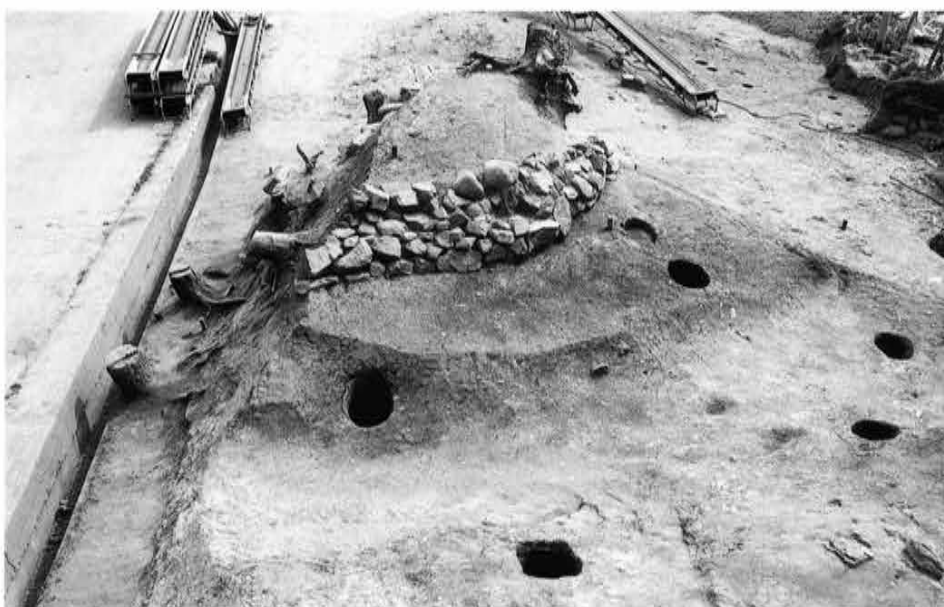
(3)土坑1 蓋除去後全景
(南から)



(1)大成18号墳東側崖面精査
状況(東から)



(2)大成18号墳完掘後全景
(東から)



(3)大成18号墳完掘後全景
(北から)



(1)大成18号墳外護列石全景
(西から)



(2)大成18号墳外護列石全景
(北から)



(3)大成18号墳周溝内転落石
検出状況(北から)



(1)大成18号墳石室全景
(東から)

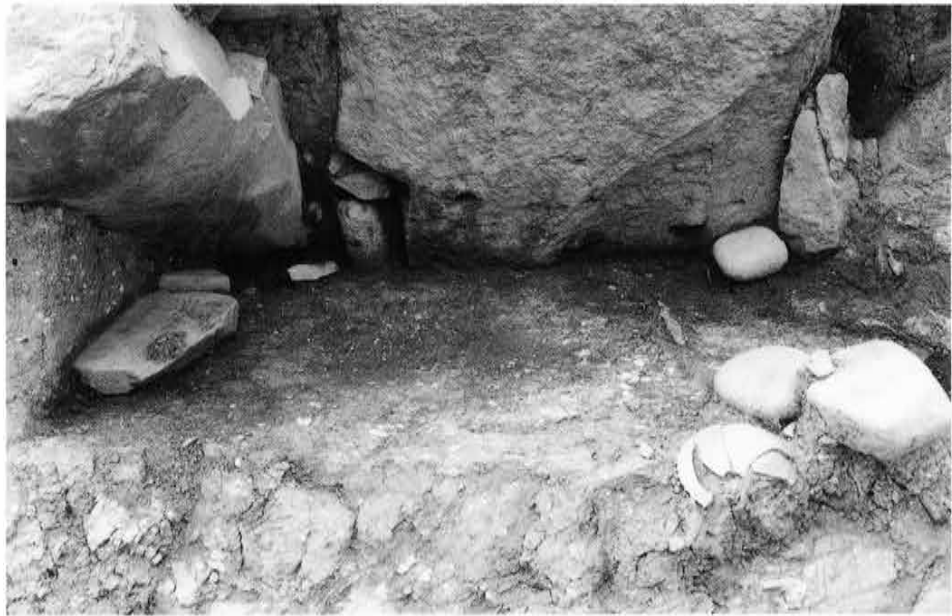


(2)大成18号墳石室全景
(南から)



(3)大成18号墳墳丘内列石
(西から)

(1)大成18号墳玄室内遺物出土
状況(東から)



(2)大成18号墳墳丘および墓壙
埋土断面(南から)



(3)大成18号墳基底石裏面の
状況(西から)





(1) テラス 4、S B01 検出状況
(北から)



(2) S X03 検出状況 (南から)



(3) 西谷部、S A01・02 など
検出状況 (北から)



42



43



44



45



46



47



53



52



54



55



56



50



49



51



57



99



41



98



40



58



59



72



100



38



101



39



105



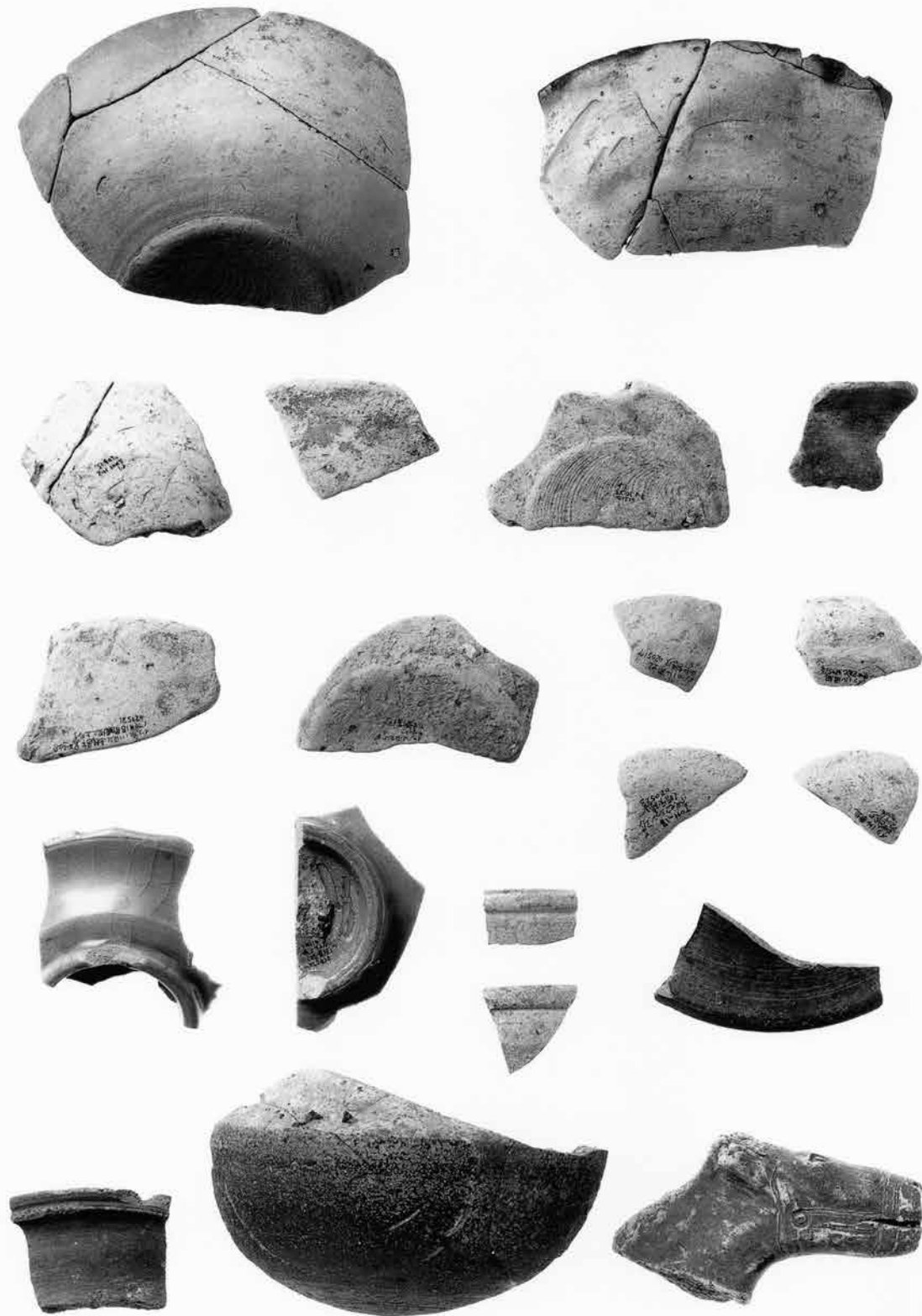
102

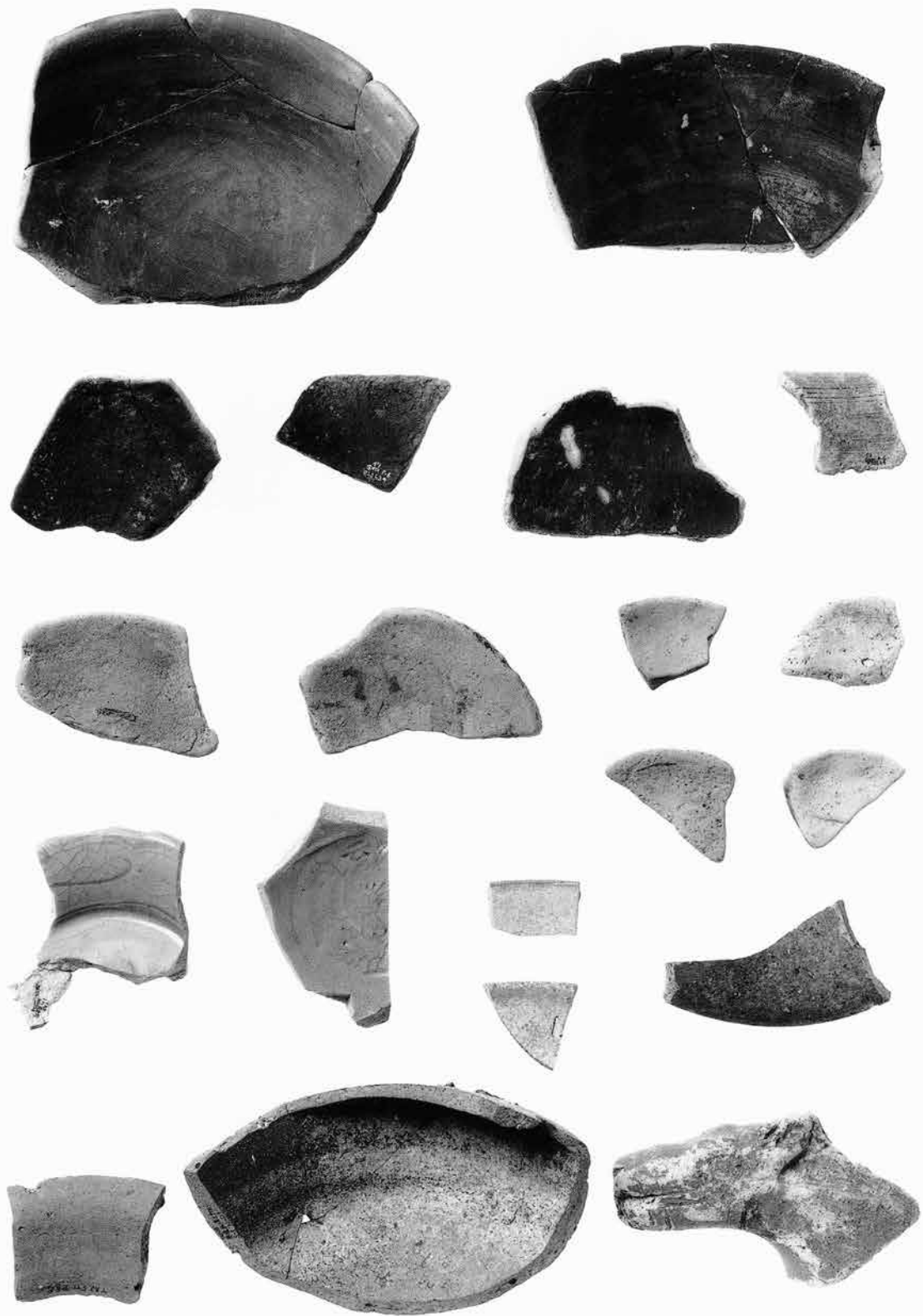


106



104







(1)竹野遺跡(A地区)全景(南から)



(2)宮遺跡(B地区)全景(南から)



(3)宮遺跡(B地区)検出遺構
(上が南東)



(1)竹野遺跡第2トレンチ全景
(西から)



(2)竹野遺跡第2トレンチ全景
(南西から)



(3)竹野遺跡第2トレンチ全景
(北西から)

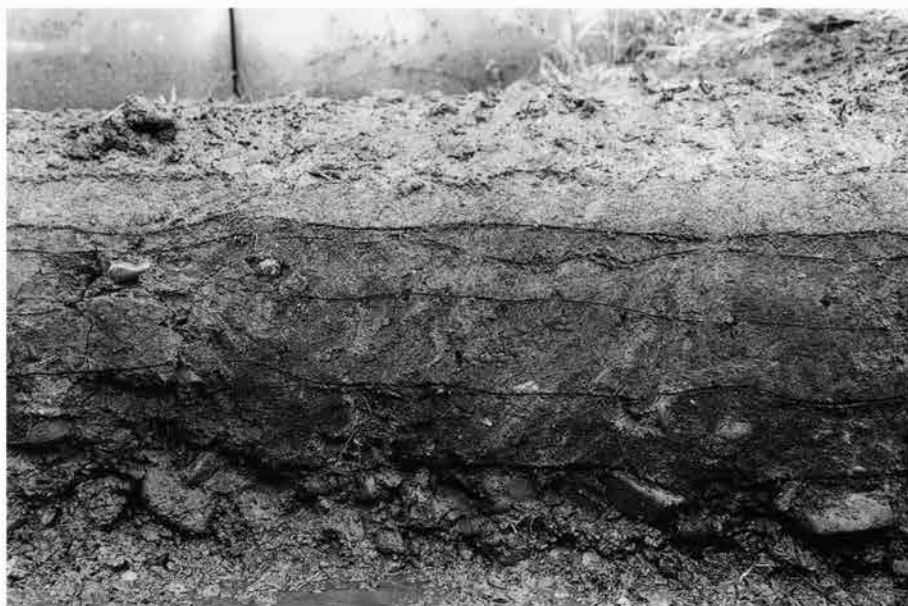
(1)竹野遺跡第2トレンチ全景
(西から)



(2)竹野遺跡第1トレンチ礫面
検出状況(南西から)

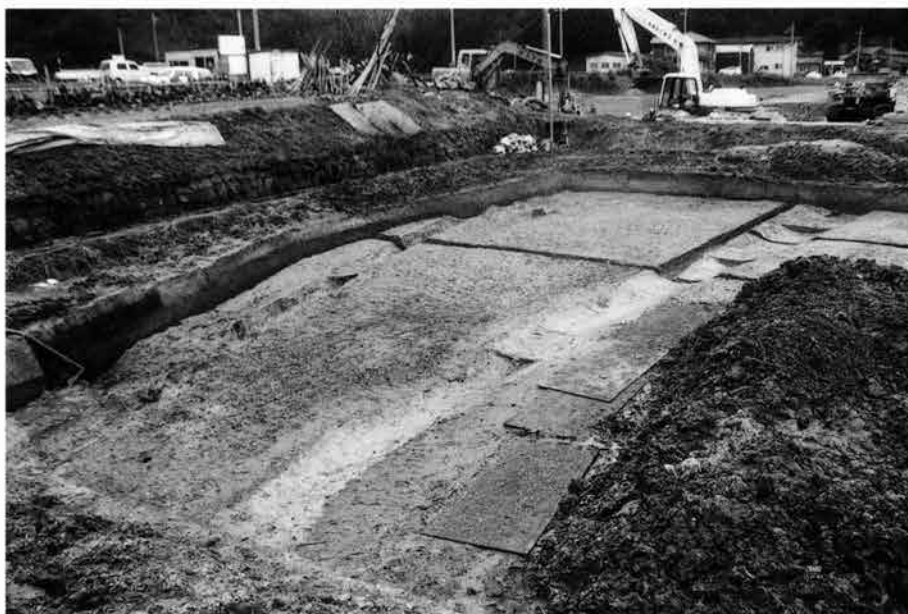


(3)竹野遺跡第1トレンチ北壁土層
堆積状況(南から)





(1)宮遺跡溝検出状況(東から)



(2)宮遺跡溝検出状況(北から)



(3)宮遺跡溝検出状況(南から)

(1)宮遺跡溝S D02遺物出土状況
(北西から)



(2)宮遺跡溝S D02遺物出土状況
(北から)



(3)宮遺跡溝S D02遺物出土状況
(上が北)





(1)宮遺跡溝 S D02遺物出土状況
(西から)



(2)宮遺跡溝 S D02遺物出土状況
(東から)



(3)宮遺跡土層堆積状況・北壁
(南から)



(1)調査地遠景(北から)



(2)調査地遠景(南から)



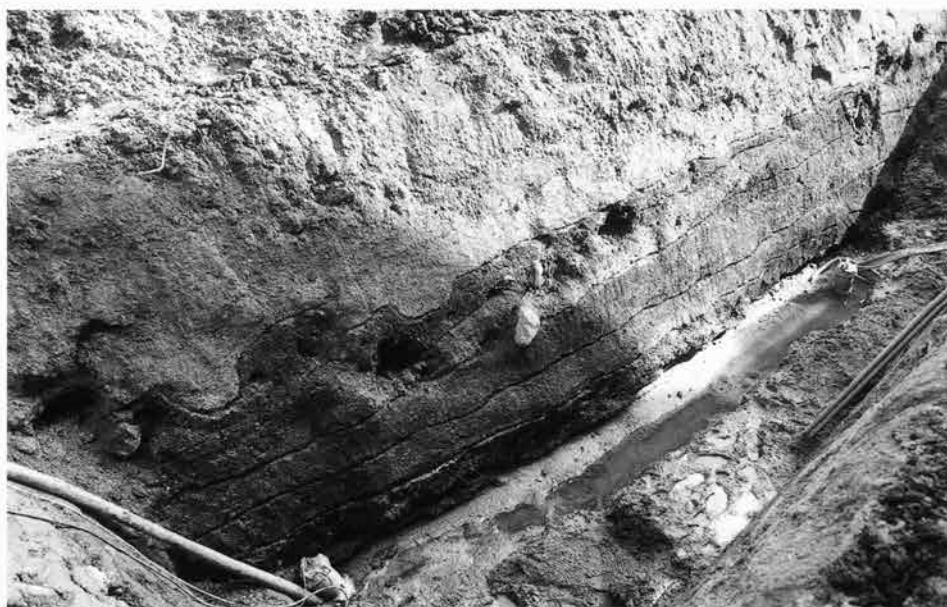
(3)調査地近景(西から)



(1) 4 トレンチ南壁(北から)



(2) 5 トレンチ北壁(南から)



(3) 6 トレンチ北壁(南西から)

(1) 7 トレンチ西壁(東から)



(2) 9 トレンチ近世溝群検出
状況(南から)



(3) 10 トレンチ上層ピット群
検出状況(北から)





(1)12トレンチ南壁(北から)



(2)13トレンチ北半部全景
(南東から)



(3)13トレンチ木製品検出状況
(南から)



(1)14トレンチ全景(西から)



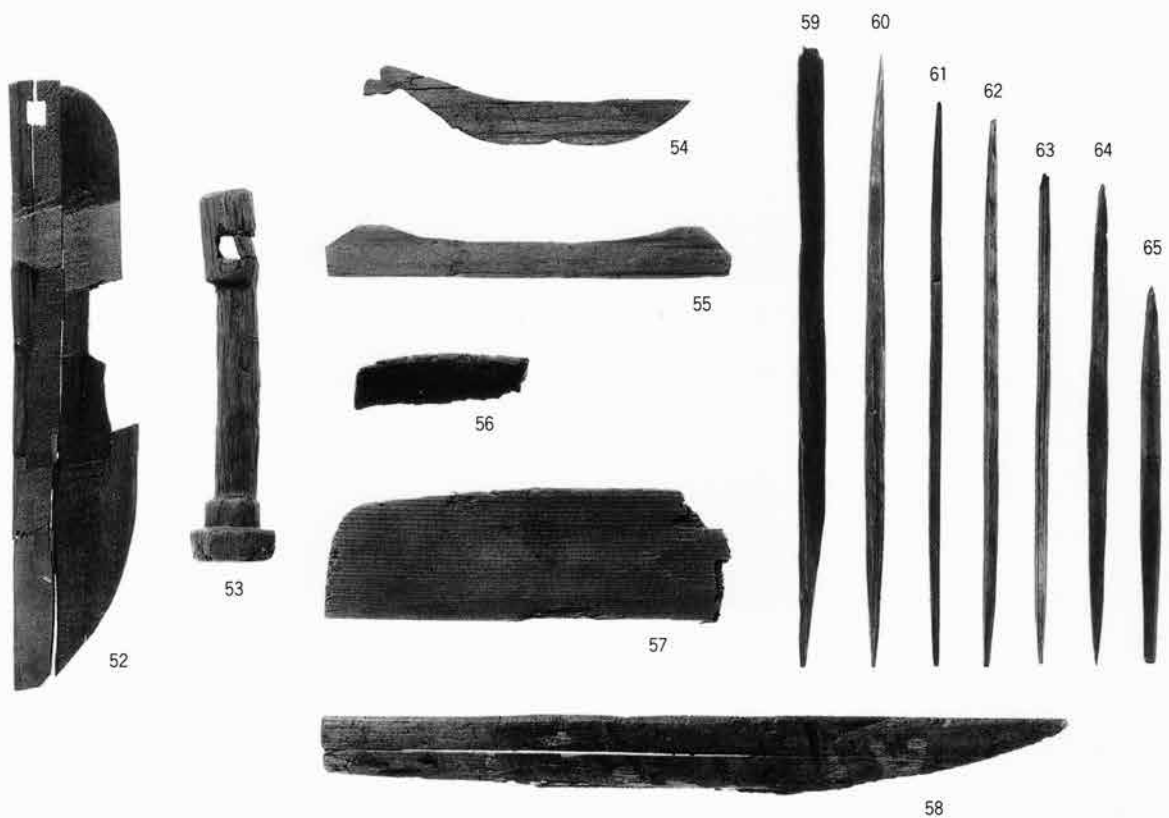
(2)15トレンチ東壁(西から)



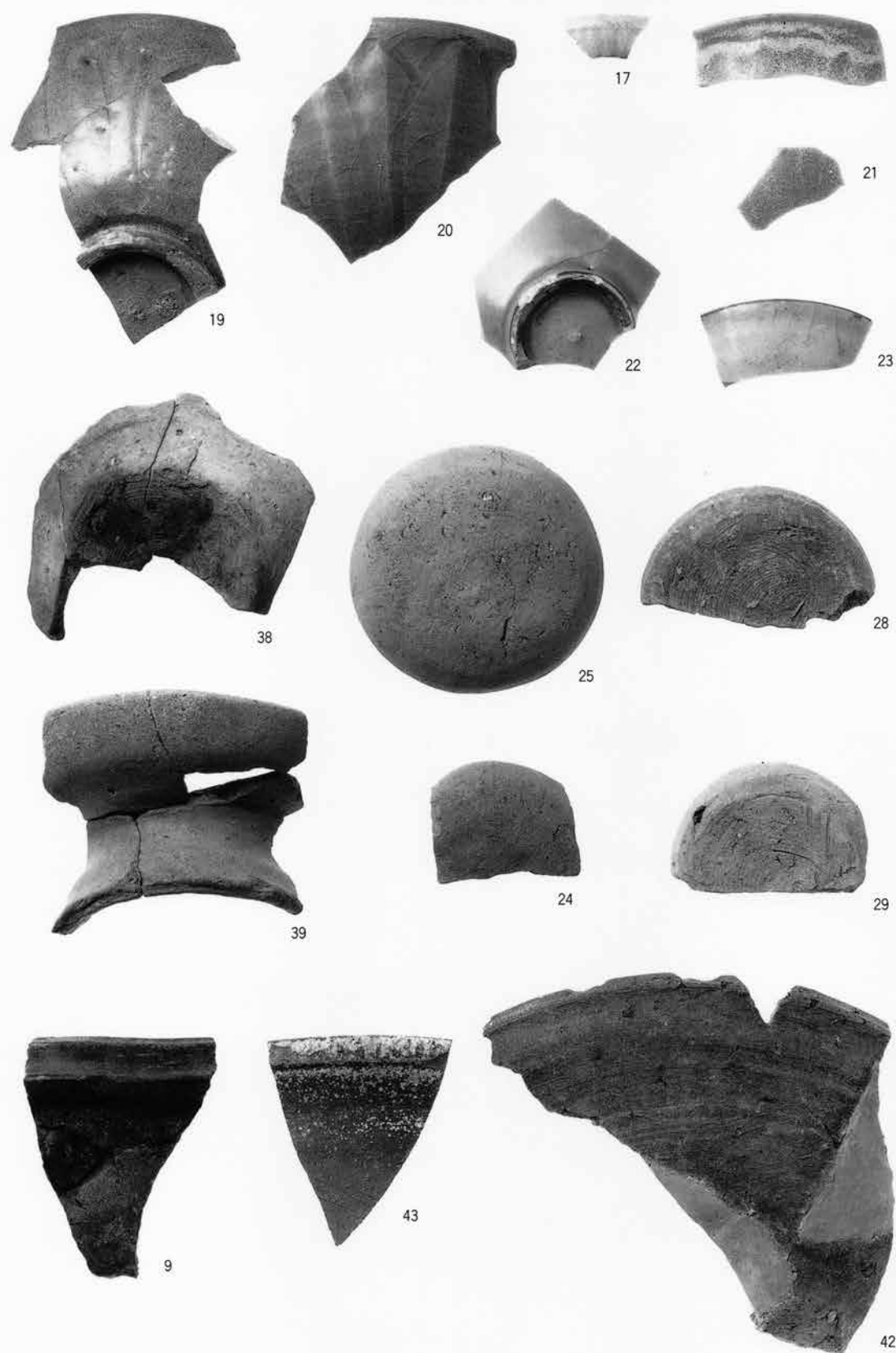
(3)15トレンチ足跡検出状況
(南から)

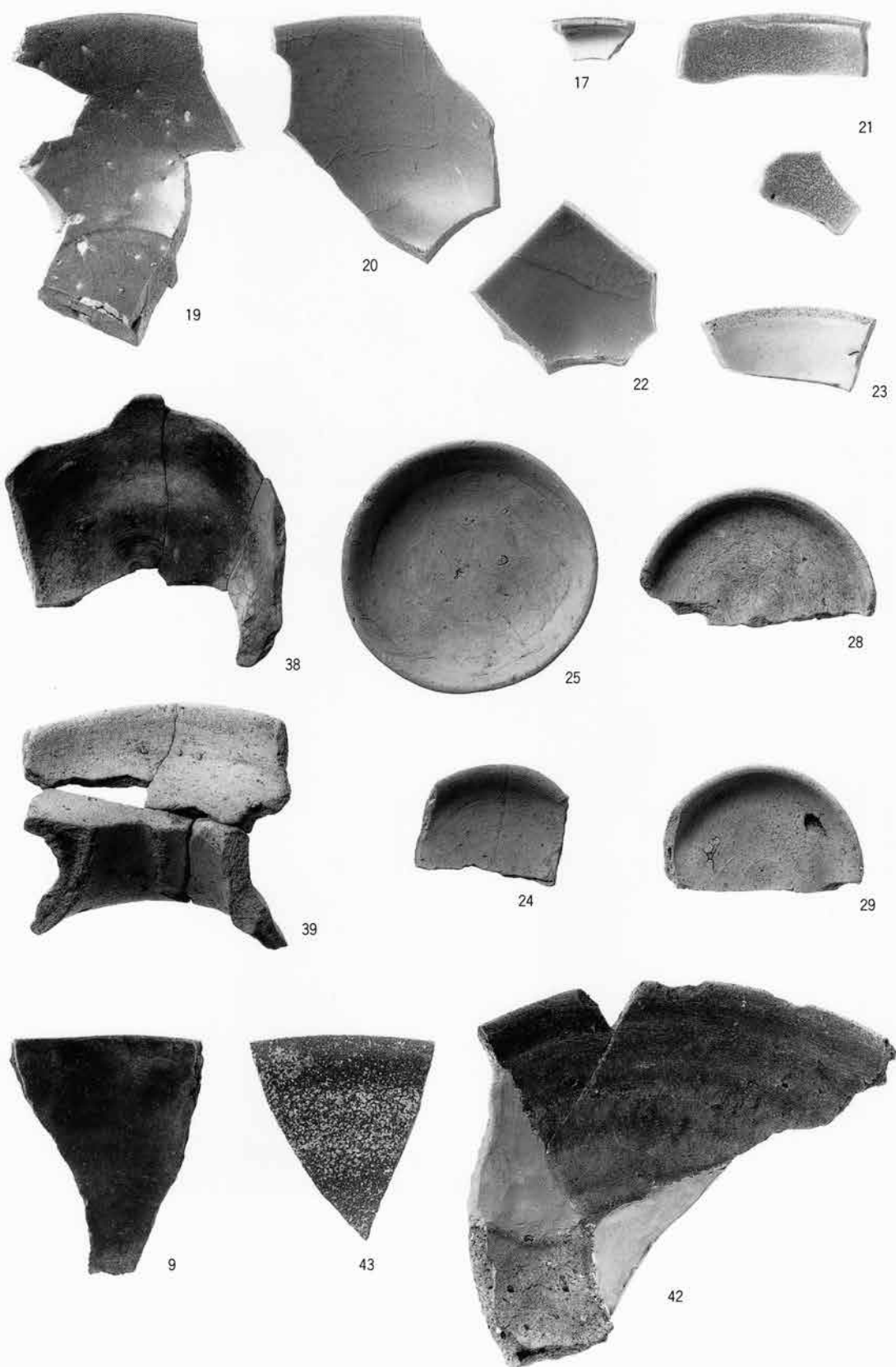


(1)13トレンチ作業風景(北から)



(2)出土遺物 木製品







(1)調査地全景(西から)



(2)調査前全景(西から)



(1)柱穴P08・09検出状況(西から)



(2)柱穴P08・09検出状況(南東から)



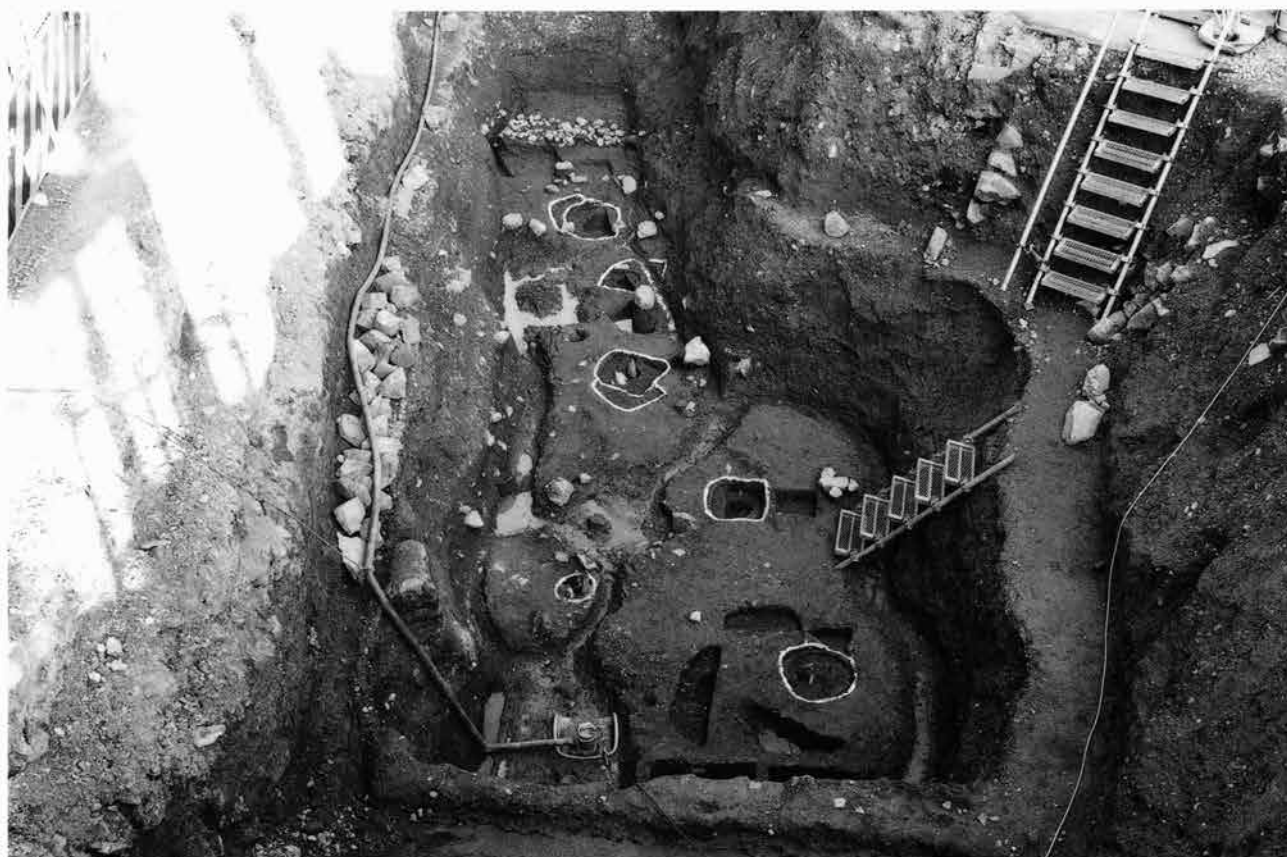
(1)柱穴・礎石群(北から)



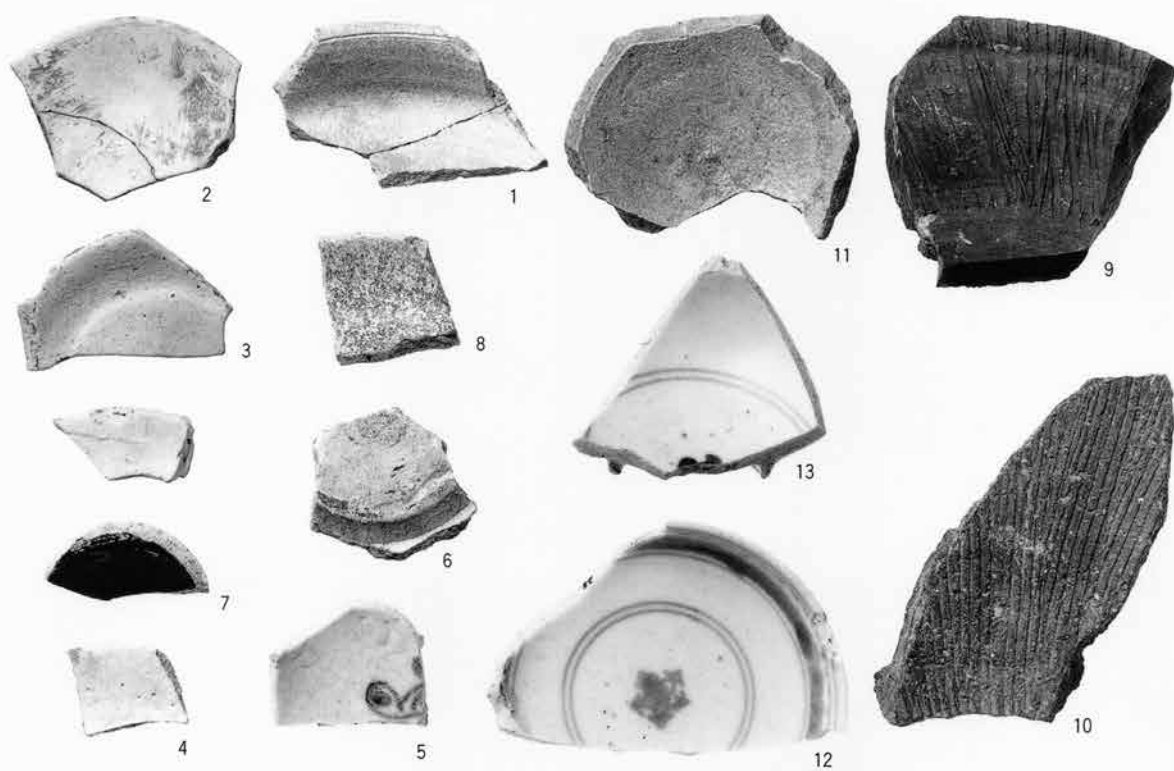
(2)礎敷遺構 S X 14(北から)



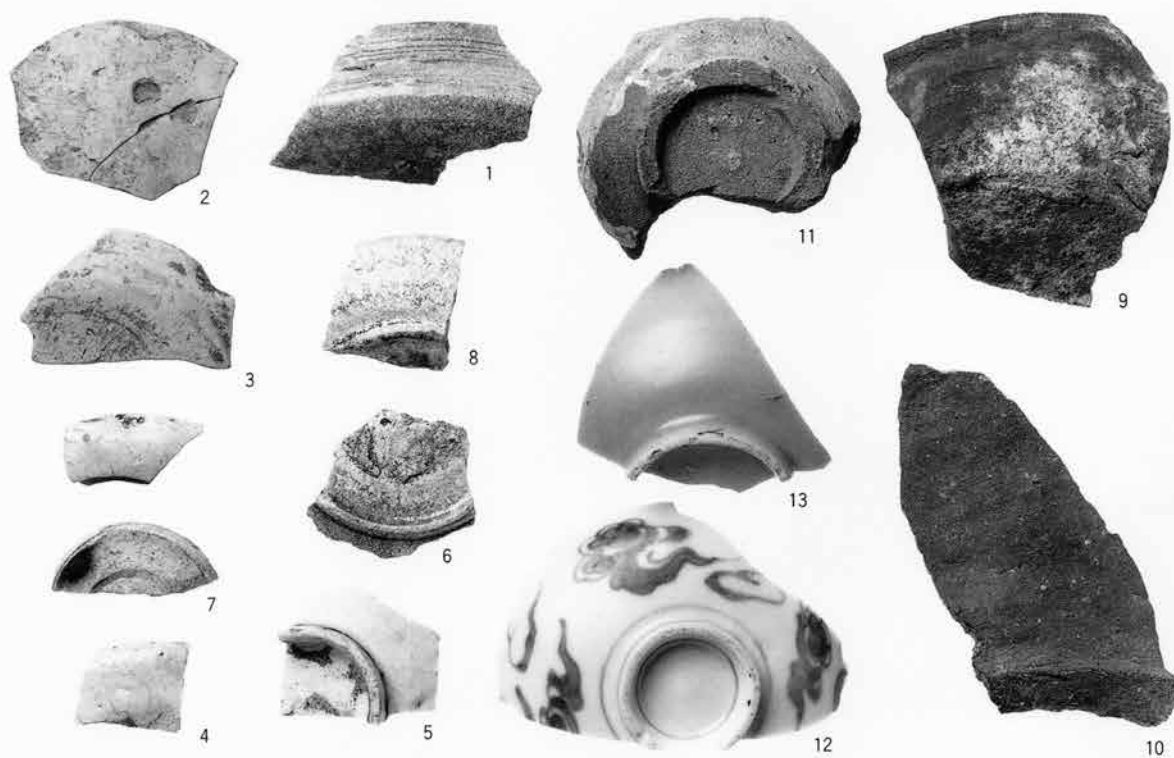
(1)西壁断面(東から)



(2)調査地完掘状況(西から)



(1)出土遺物(土器・陶磁器、内面)



(2)出土遺物(土器・陶磁器、外面)



15



16



18



17



19



20

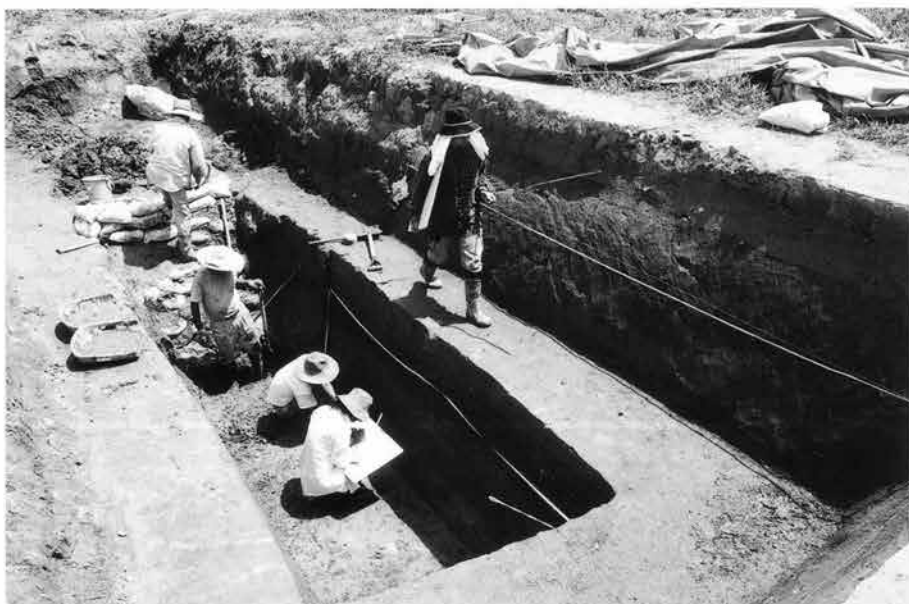
(1)調査前風景(西から)
(北東丘陵上に私市円山古墳)

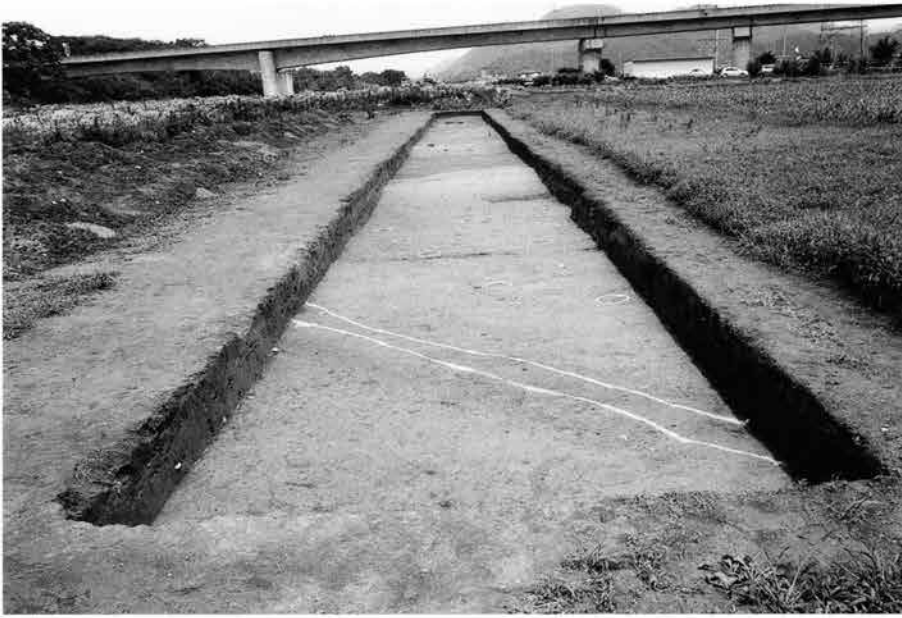


(2)第6トレンチ掘削状況(西から)

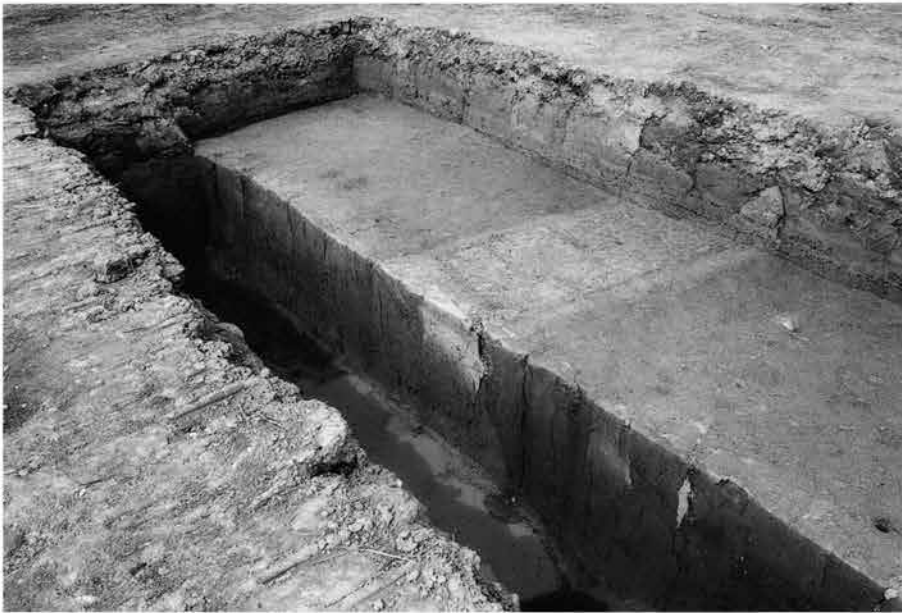


(3)第7トレンチ作業風景
(南西から)





(1)第2トレンチ遺構検出状況
(西から)



(2)第3トレンチ溝検出状況
(南西から)



(3)第4トレンチ集石遺構検出
状況(東から)



(1)第7トレンチ全景(北から)



(2)第7トレンチ土層堆積状況
(北から)



(3)第8トレンチB壁面土層
(北西から)



(1)調査地全景(空中写真、東から)



(2)A地区全景(空中写真、下が北)



(1)調査地全景(空中写真、南から)
(右上に私市円山古墳)



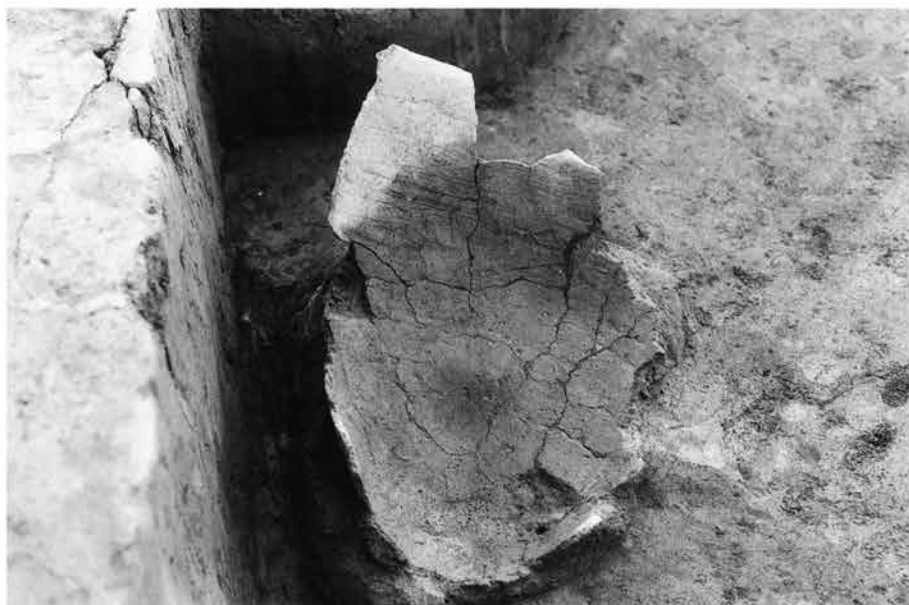
(2)土坑 S K 42検出状況(北西から)



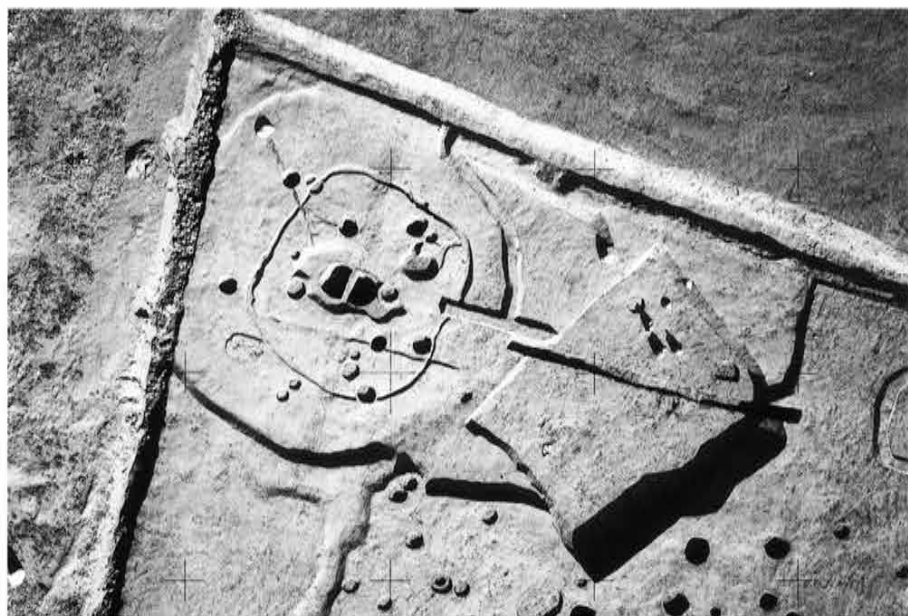
(1) 突帯文土器・打製石斧
(土坑S K42内、北東から)



(2) 突帯文土器外面(南西から)



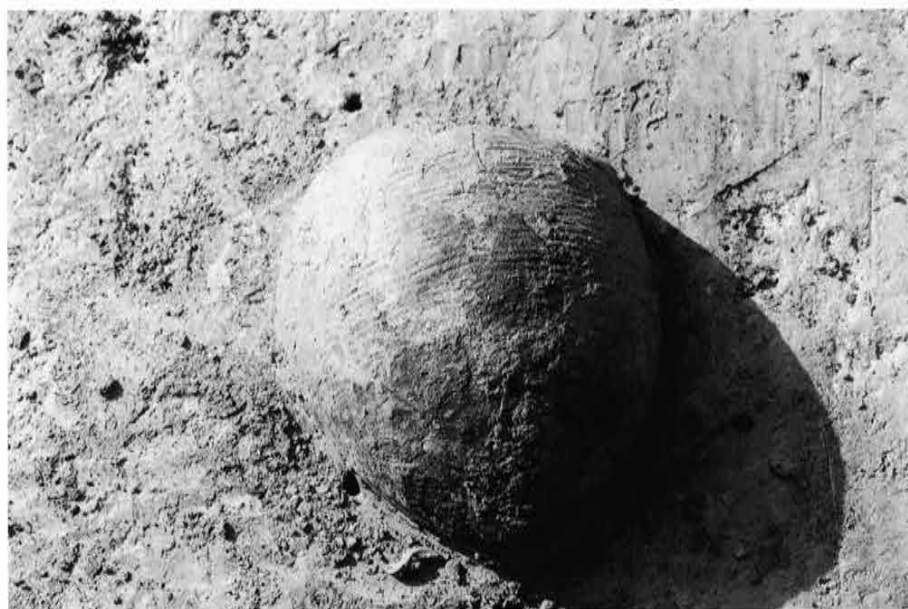
(3) 突帯文土器内面(北東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H84・150 検出
状況(空中写真、上が北)



(2) 竪穴式住居跡 S H84
床面出土土器(南から)



(3) 竪穴式住居跡 S H150
床面出土土器(北東から)



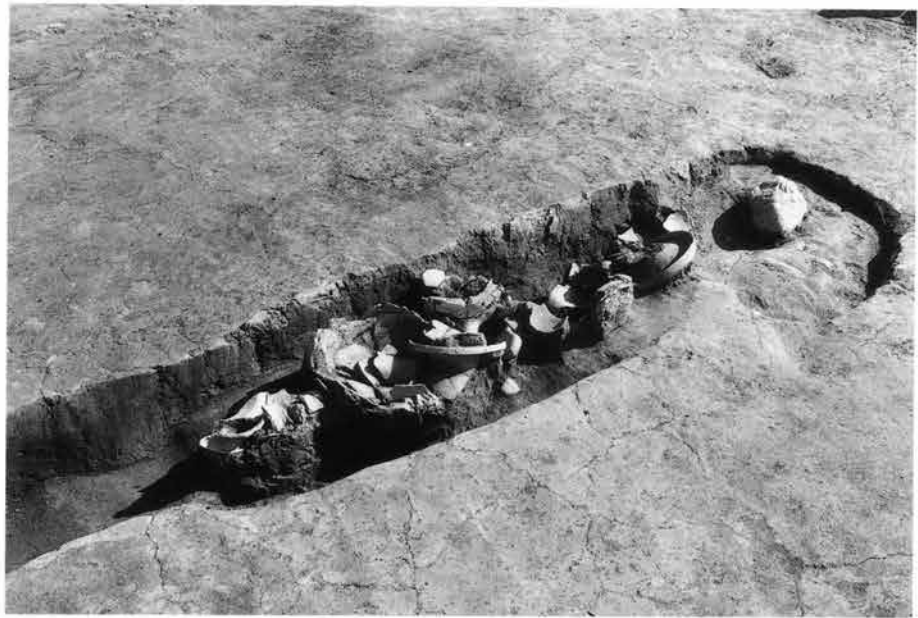
(1)土坑 S K108(南西から)



(2)土坑 S K119(西から)



(3)土坑 S K111(西から)



(1) 溝 S D87(北西から)



(2) 溝 S D87内土器・石器出土状況
(南東から)



(3) 溝 S D88(南西から)



(1) 竪穴式住居跡 S H85・86・101・41 検出状況 (空中写真、下が北)



(2) 竪穴式住居跡 S H85 床面
出土土器 (南西から)



(3) 溝 S D97 (東から)



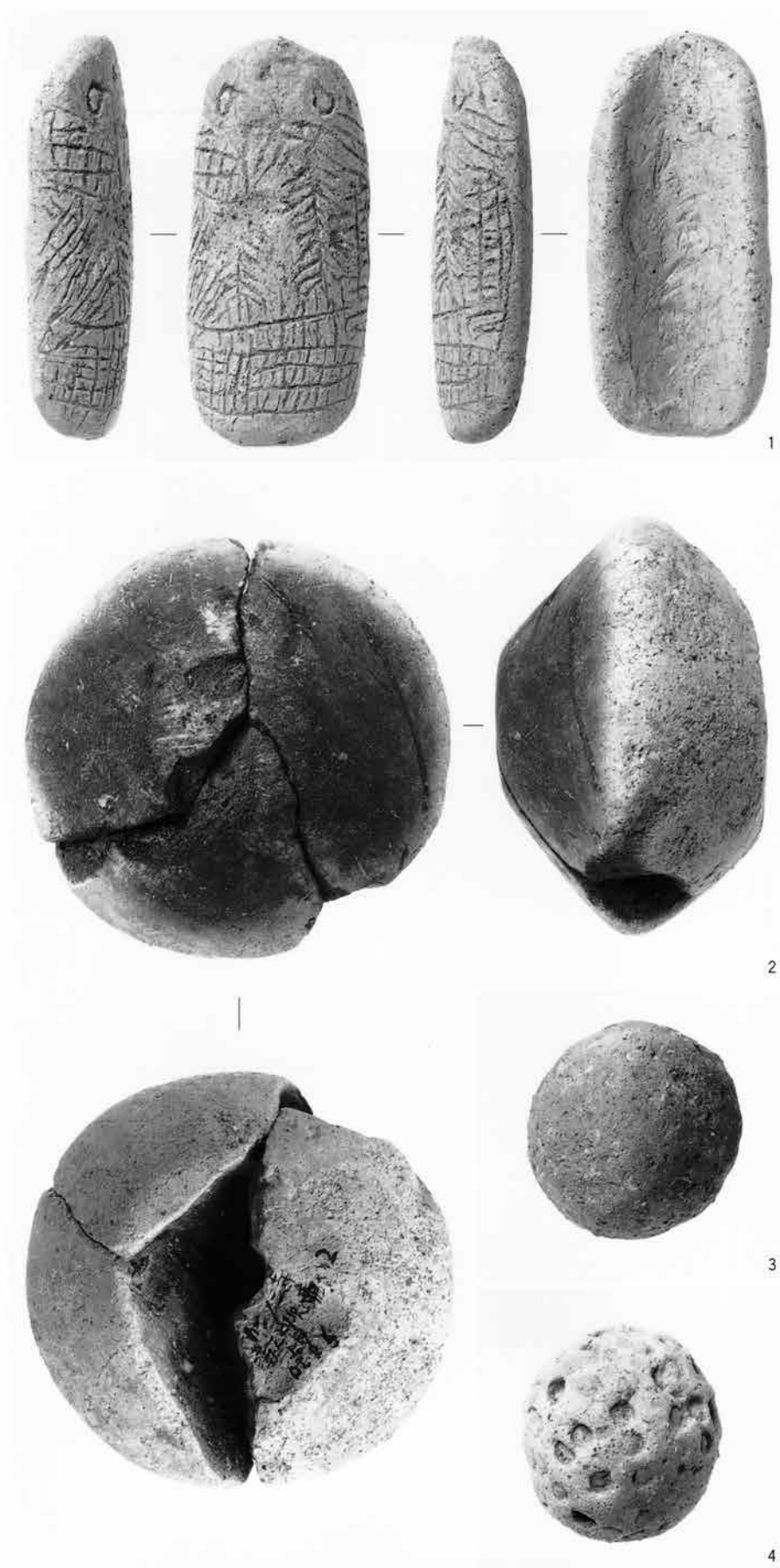
(1) 竪穴式住居跡 S H41 (北から)



(2) 溝 S D02・149 (南東から)



(3) 現地説明会風景 (北から)



土製品(番号は第72図に対応)



(1)第1トレンチ全景(北から)



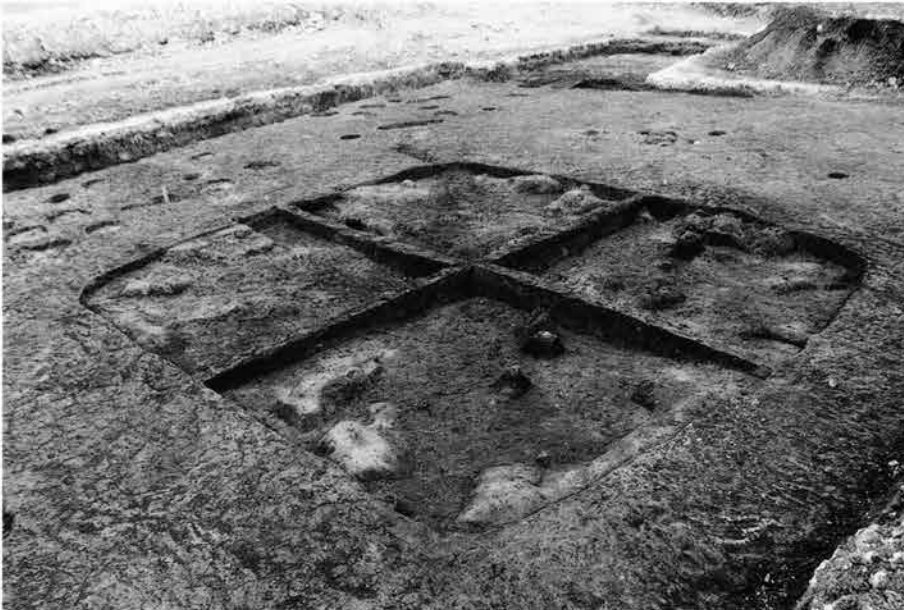
(2)土坑 S K01検出状況(北から)



(3)第2トレンチ調査風景(北から)



(1)第2トレンチ全景(南から)

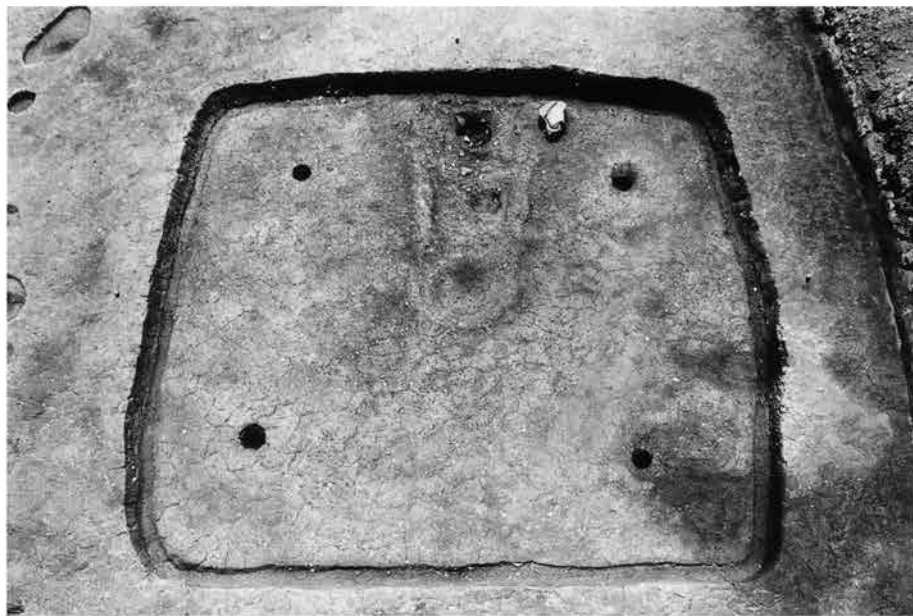


(2)竪穴式住居跡 S H01検出状況
(南西から)



(3)竪穴式住居跡 S H01遺物検出
状況(東から)

(1) 竪穴式住居跡 S H01 完掘状況
(北から)



(2) 竪穴式住居跡 S H01 炉跡検出
状況(南から)



(3) 竪穴式住居跡 S H01 炉跡検出
状況(西から)





(1) 竪穴式住居跡 S H01 遺物出土状況(上が南)



(2) 竪穴式住居跡 S H01 手埴り形土器出土状況(上が北)



(3) 竪穴式住居跡 S H01 炉跡検出状況(北から)



(1)調査地全景(第15次調査空中写真、東から)



(2)第14次調査地全景(上方が北)



(1)第14次1 トレンチ全景(上方が北)



(2)第14次2 トレンチ全景(上方が西)



(1)第14次3 トレンチ全景(上方が西)



(2)第14次4 トレンチ全景(上方が西)



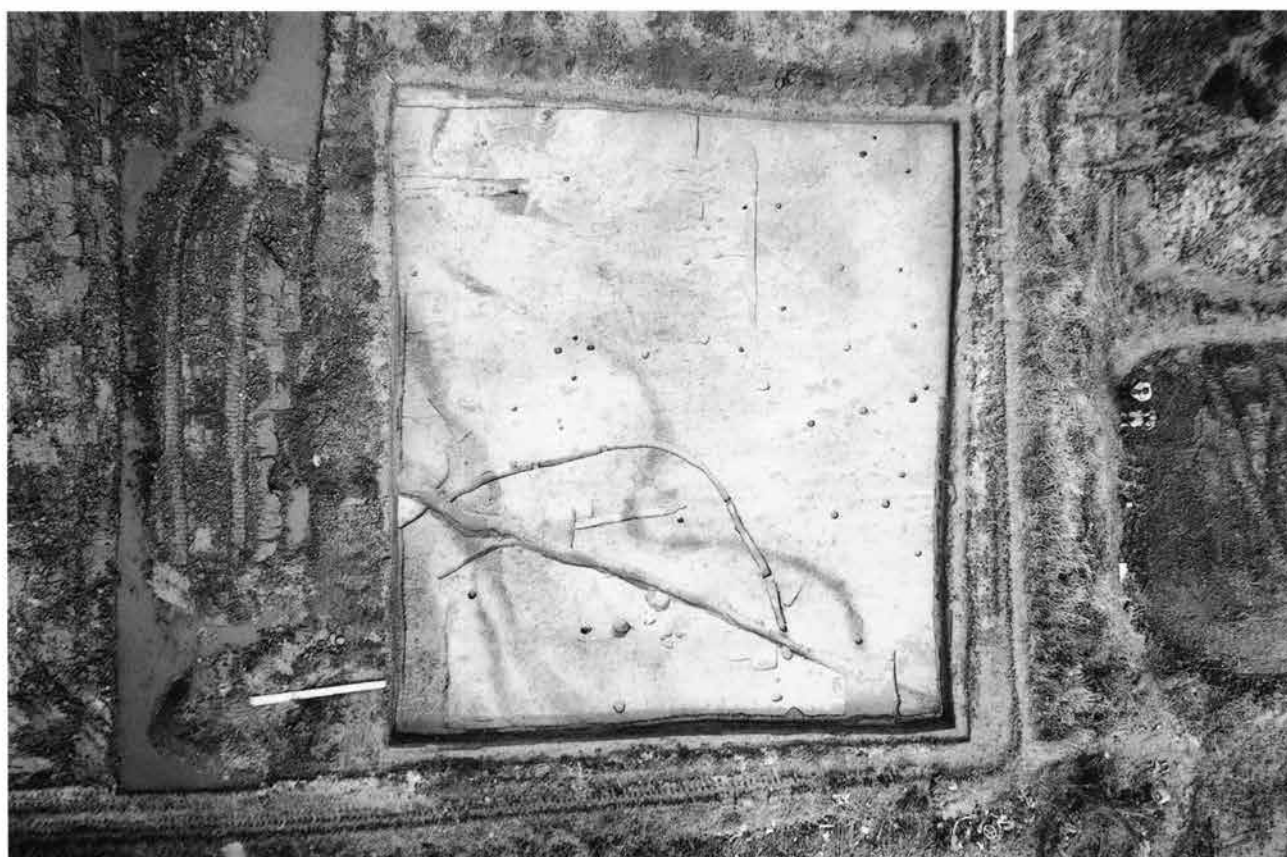
(1)第14次5 トレンチ全景(上方が西)



(2)第14次6 トレンチ全景(上方が西)



(1)第15次調査地全景(上方が西)



(2)第15次1トレンチ全景(上方が北)



(1)第15次2トレンチ全景(上方が北)

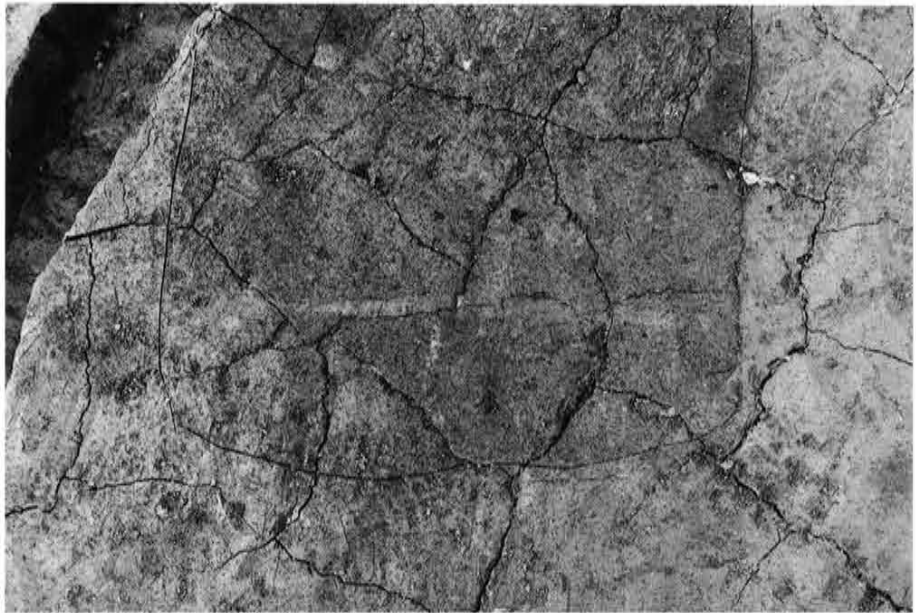


(2)第15次3トレンチ竪穴式住居跡SH4全景(上方が西)

(1)第15次2トレンチ
埋葬施設S X 1・2 検出状況
(南から)



(2)第15次2トレンチ
埋葬施設S X 1 小口板痕跡検出
状況(南から)



(3)第15次3トレンチ
竪穴式住居跡S H 4 遺物出土
状況(北東から)





1



3



9



11



5



12



15



20



23



29



59



86



66



74



78



87





(1)調査前の状況(北から)



(2)トレンチ全景(南東から)



(1)調査地全景(上が南)



(2)調査地全景(上が東)



(1)土坑 S K04遺物出土状況(南から)



(2)土坑 S K04完掘後(北西から)



(1) 竖穴式住居跡 S H06、掘立柱建物跡 S B11 検出状況(南から)



(2) 掘立柱建物跡 S B08 検出状況(北西から)



(1) トレンチ近景(南から)



(2) 溝S D01全景(東から)



(1)道路状遺構溝 S D03・05全景(北から)



(2)土坑 S K09完掘後(西から)



(1) トレンチ南半完掘状況(北から)



(2) 堀状遺構 S D02(南から)



(1)調査前全景(東西から)



(2)堀状遺構 S D02セクション
(南から)



(3)溝 S D25小口状遺構検出状況
(西から)



(1)完掘状況(北から)



(2)土壙墓 S X07、木棺墓 S X08
検出状況(南から)



(3)土壙墓 S X07検出状況(南から)



(1)木棺墓 S X08検出状況(南から)



(2)木棺墓 S X08棺内完掘状況
(北から)



(3)主体部完掘状況(南から)



(1)方形周溝墓 S X05南溝縦断面
(北から)



(2)方形周溝墓 S X05遺物出土状況
(北から)



(3)現地説明会風景(北から)



(1)方形周溝墓 S X12北セクション
(南から)



(2)方形周溝墓 S X12南セクション
(北から)



(3)方形周溝墓 S X12遺物出土状況
(東から)



2



4



5



6



7



8



9



10



11



13



12



12



14



14



15



15



16



16



17



17

(1)魚田遺跡調査風景(東から)



(2)魚田12トレンチ全景(南から)



(3)魚田18トレンチ北壁噴砂検出状況(南から)





(1)魚田25トレンチ全景(南から)



(2)魚田9トレンチ実測風景
(南西から)



(3)門田4トレンチ埋め戻し
転圧作業(西から)



(1)西村3トレンチ全景(南西から)



(2)西村4トレンチ北東壁土層断面
(南西から)



(3)西村9トレンチ北東壁土層断面
(南西から)



(1)門田6トレンチ全景(南西から)



(2)門田8トレンチ北東壁土層断面
(南西から)



(3)門田10トレンチ全景(南西から)



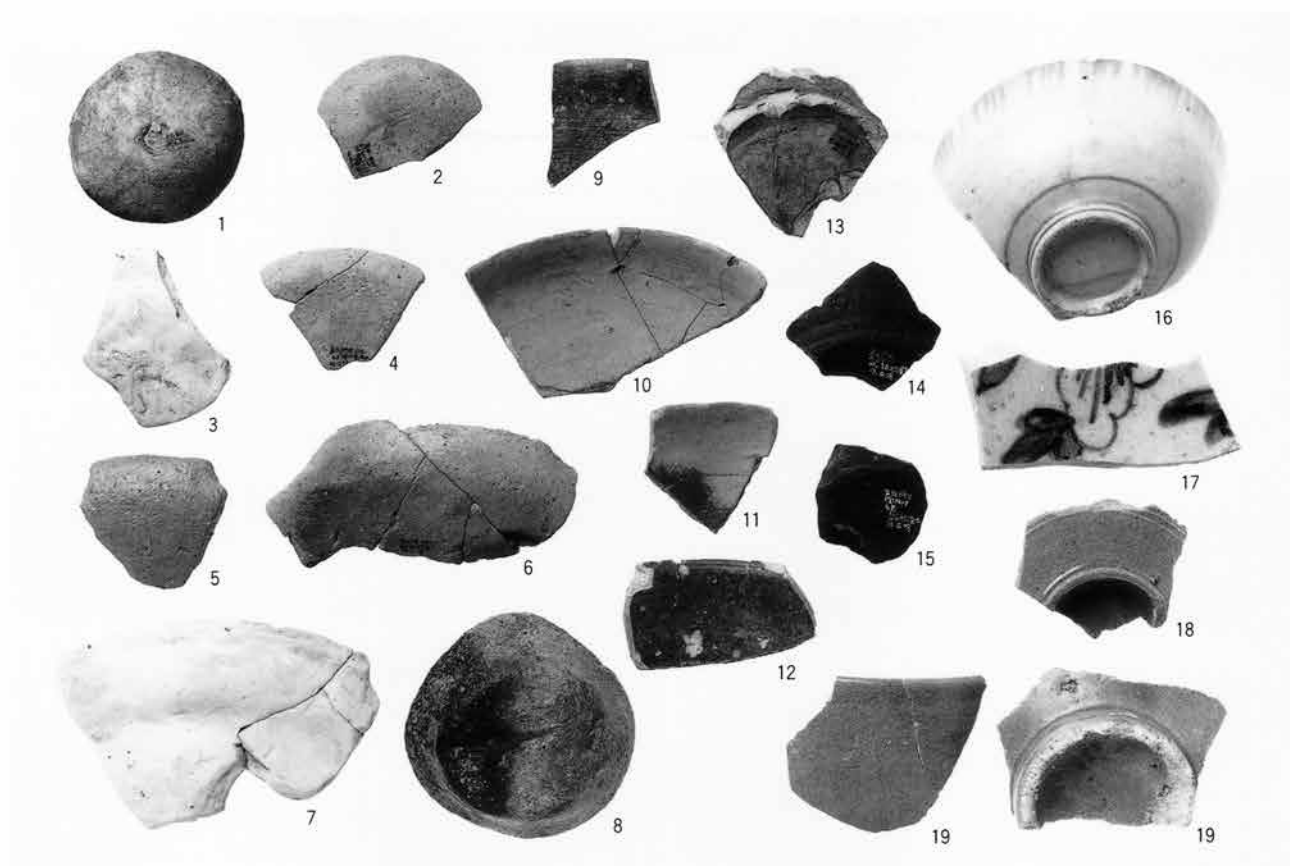
(1)魚田9トレンチ埋め戻し状況
(北西から)



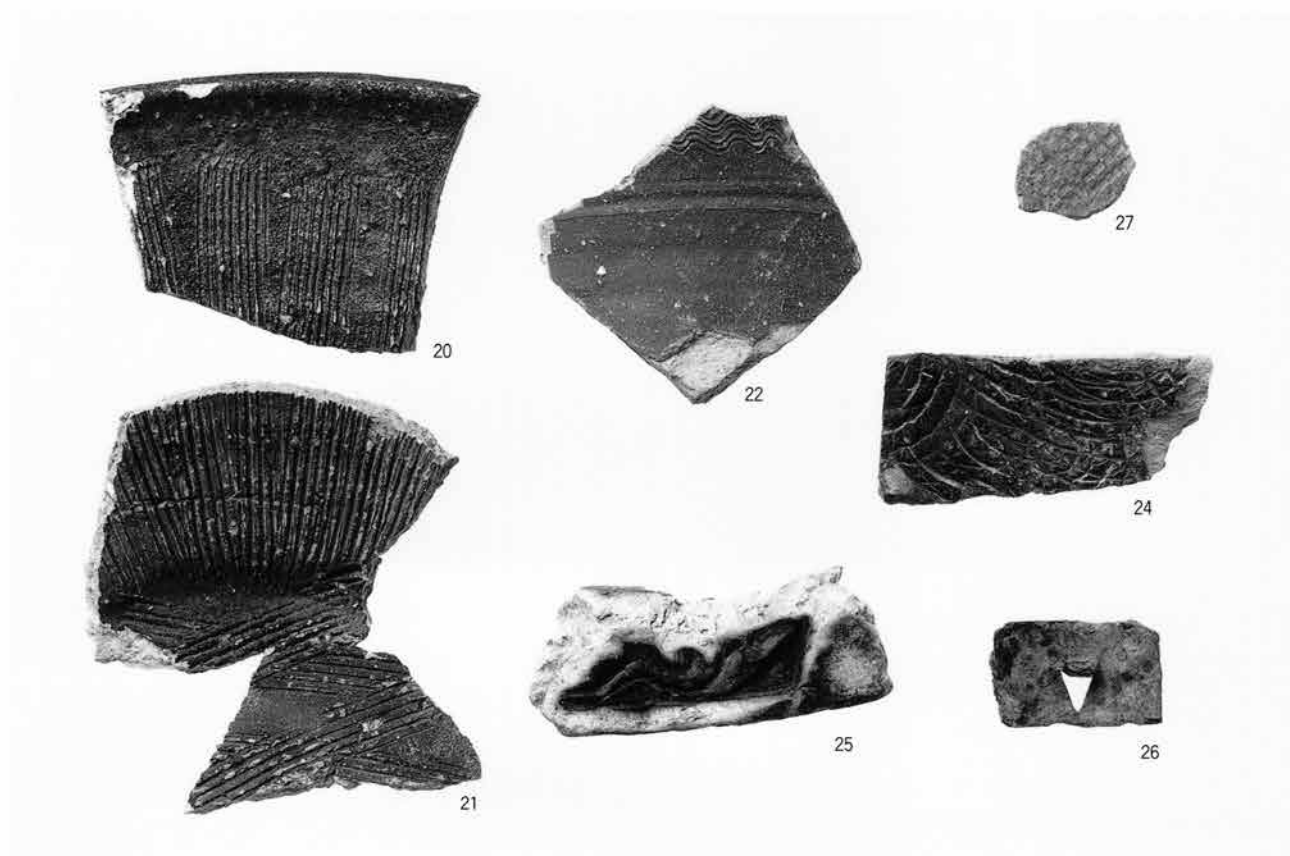
(2)西村13トレンチ北西壁土層断面
(南東から)



(3)門田3トレンチ北東壁土層断面
(南西から)



(1)出土遺物(1)



(2)出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな								
書 名								
副書名								
巻 次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第107冊							
編著者名	引原茂治・石崎善久・田代弘・伊野近富・黒坪一樹・小池寛・増田孝彦・藤井整・中村周平							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone	075(933)3877		
発行年月日	西暦 2003 年 3 月 28 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおなるこふんぐん・いりいせき	たけのぐんたんごちょうあざたかのこあざいり							
大成古墳群・イリ遺跡	竹野郡丹後町大字竹野小字イリ	26502	4	35° 44' 19"	135° 6' 50"	20020415 ～ 20020730	800	道路建設
たかのいせき・みやいせき	たけのぐんたんごちょうおおあざたけのこあざふるばばほか							
竹野遺跡・宮遺跡	竹野郡丹後町大字竹野小字古馬々ほか	26502	8・10	35° 43' 54"	135° 6' 43"	20021022 ～ 20021220	600	土地改良
おおがきいせき・いちのみやいせき・なんばのじょうりせいせき	みやづしおおあざおおがきこあざだいしょういん・いけのもとほか							
大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡	宮津市大字大垣小字大正院・池の本ほか	26205	89・11・90	35° 34' 43"	135° 11' 55"	20020918 ～ 20021220	600	道路建設
ふくちやまじょうあと	ふくちやましおかのにまち							
福知山城跡	福知山市岡ノ二町	26201	101	35° 17' 30"	135° 7' 49"	20020910 ～ 20021030	130	道路建設
かんのんじいせき	ふくちやましかんのんじちない							
観音寺遺跡	福知山市観音寺地内	26201	82	35° 18' 20"	135° 11' 40"	20020521 ～ 20021206	2,000	河川改修
のじょういせき	やぎちょうおおあざのじょう							
野条遺跡	八木町大字野条	26402		35° 5' 24"	135° 32' 13"	20020521 ～ 20021015	450	道路建設

おおいせき だいじゅうよ じ・じゅうご じ 太田遺跡第 14・15次	かめおかしひえだの ちょうおおた 亀岡市禰田野町太 田	26206	108	35° 1' 9"	135° 32' 50"	20011108 ～ 20020212 20020920 ～ 20021108	1200 500	ほ場整備
ながおかしよ うあとうきよ うだいなな ひやくごじゅ うさんじ・い のうちいせ き・かみざと いせき 長岡京跡右 京第753 次・井ノ内 遺跡・上里 遺跡	ながおかしようしい のうちひろかいどう 長岡京市井ノ内広 海道	26209	91・10・ 51	34° 56' 21"	135° 41' 18"	20021211 ～ 20030221	300	道路建設
ながおかしよ うあとうきよ うだいなな ひやくごじゅ うじ・こうた りいせき 長岡京跡右 京第750 次・神足遺 跡	ながおかしようし こうたりにちょうめ 長岡京市神足2丁 目	26209	91・35	34° 55' 9"	135° 42' 3"	20021029 ～ 20021213	200	道路建設
うおたいせき だいりくじ・ にしむらいせ き・かどたい せき 魚田遺跡第 6次・西村 遺跡・門田 遺跡	きょうたなべしおお すみこまつばら・に しむら・だいじょう りょうほか 京田辺市大住小松 原・西村・大嘗料 ほか	26211	87	34° 50' 31"	135° 44' 30"	20021205 ～ 20030213	300	ほ場整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大成古墳 群・イリ遺 跡	古墳 集落 墓	古墳後期 平安後期		横穴式石室 掘立柱建物跡		須恵器・土師器・玉 類・鉄器 須恵器・黒色土器・ 青磁・白磁 石仏・板碑・一石五 輪塔		
竹野遺跡・ 宮遺跡	集落	弥生前・後期		溝		弥生土器		
大垣遺跡・ 一の宮遺 跡・難波野 条里制遺跡	集落 条里制遺構	中世		溝・柱穴		木器・漆器・土師 器・青磁・白磁		試掘
福知山城跡	城館跡	江戸		掘立柱跡・礎石・礎敷遺構・ 溝		瓦・陶磁器・瓦質埴		
観音寺遺跡	集落	縄文 弥生 古墳 奈良・平安 鎌倉		土坑 竪穴式住居跡・土坑・溝 竪穴式住居跡・土坑・溝 柱穴・土坑 柱穴・溝		縄文土器・石器 弥生土器・石器・土 製品 土師器・須恵器 土師器・瓦器		

野条遺跡	集落	弥生	竪穴式住居跡・土坑	弥生土器	試掘
太田遺跡第14・15次	集落墓 集落	弥生 平安・鎌倉 室町	竪穴式住居跡・埋葬施設・ 溝・池沼・土坑・ピット 井戸・土坑・ピット 耕作溝	弥生土器・石器 須恵器・土師器・瓦 器	
長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡	集落 居館	古墳 平安 中世	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡・土坑・溝	須恵器 軒瓦・須恵器 土師器・瓦器・石 鍋・鉄器・鍛冶滓	
長岡京跡右京第750次・神足遺跡	集落墓 居館	弥生 中世	方形周溝墓 堀状遺構	弥生土器・石器 瓦器・土師器・フイ ゴ羽口	
魚田遺跡第6次・西村遺跡・門田遺跡	集落 散布地	古墳・平安・鎌倉 江戸	河道跡・噴砂	土師器・須恵器・瓦 器・黒色土器 陶磁器	試掘

京都府遺跡調査概報 第107冊

平成15年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)